THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年　第二號

第二百七十五號

慶應大學講師 戸川秋骨先生譯

總クロース金字入高雅美本

エマーソン論文集

下卷出來

十九世紀に於ける論文家を擧げば誰か先づ指をエマーソンに屈せざらんや。彼の思想は高遠なり、彼は體系を備へざる一大哲學者也。彼の文學は金玉也、彼を韻律を押さざる一大詩人といふも亦可、エマーソンの論文は洵に近代思想界の一大産物にして、之を知らざる者は以て文學を語るの權利なき者也。本書はエマーソンの心醉家を以て自任する戸川先生の譯に係る、其譯文の的確にして能くエマーソンの神髓を得たるものなること言を待たず、彼の曠世の哲人の風神に接し其の敎訓に聽かんと欲する者は須く一本を座右に備へよ。

下卷 正價一圓廿錢 郵税十二錢

上卷 正價一圓四十錢 郵税十四錢

下卷目次

上卷目次

發行所 東京神田雉子町 振替東京第七九九五 玄黃社 ●全國書店取次

(前付の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

嶷然拔一頭地

中學世界

二月一日發行 第二號 正價貳拾錢 郵税二錢 ●前金十六冊一ケ年三圓十二錢

▽書生時代の冒險……比志島中將

▽道德と經濟……戶田博士

▽歷史小説 茶磨山……塚原澁柿

▽西藏の奇怪動物……飯塚博士

▽藥學の話……上島博士

◎起てよ青年諸君……建部博士

鑛物の採集と鑑定……神保小虎

◎望遠寫眞の話……鴨居博士

▽千曲川のスケッチ……島崎藤村

▽時評……笹川臨風

△英吉利の自然美……内ヶ崎作三郎

▽野球界戰士月旦……記者

▽大懸賞披露並新題提出……

東京本町 博文館

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文壇隨一の花形

文藝倶樂部

二月一日發行 第十八卷 第三號 正價 廿五錢 郵稅二錢五厘 ●前金十六冊分三圓九十錢

新講談 **龜屋忠兵衞** 清草舍英昌

小說 **三島の會見** 後藤宙外

小說 **睡蓮** 生田蝶介

◎演藝界 ◎活社會 ◎流行界
◎長廣舌 ◎忙中閑 ◎百花欄
以上諸欄愈々振ふ

脚本 **日の出** 佐藤紅綠

喜劇 **陽氣な女房** 松居松葉

前揭の脚本は（東京）帝國劇場の二月狂言にして結構の妙、脚色の巧、近時脚本界の二大双璧

東京市本町 **博文館** 振替東京二四〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

池邊義象閲 市原隆作著 四六判美本 正價八拾錢 送料拾錢 忽八版

悲壯史蹟 **屋嶋と壇の浦**

平家の末路！之れ實に自然美と人間美との結合して作り出せる一大悲劇也。この光景を讀者の眼前に躍如たらしむ。

文學士 水島耕一郎譯 四六判美製函入 正價壹圓廿錢 送料十二錢 忽九版

森林生活

本書は簡易生活を實行せし哲學者の感想錄也

文學士 内海月杖著 美本類函入 正價八拾錢 送料十錢 最新刊

戰記文評釋

本書は保元平治物語、平家物語、太平記等戰記物語の傑作中より其最も面白き箇所を拔粹し之れに著者が得意の評釋を加へられたるものなれば單に讀み物としても最も佳ならん。若夫れ文章の模範として研究せんには更に佳ならん。

稻川雲谿書編 價四拾錢 送料四錢

手紙と葉書

拾五版本書は作文兼用無二の習字帖也

大野洒竹、沼波瓊音校（好評嘖々）

芭蕉句選年考

上下各巻正價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

野上、野村、水島三學士共編

和英作文辭典

好評三版正價六拾五錢 送料八錢

本書があれば英文は自由自在に作られる

岡谷繁美著 全拾册各册價六拾錢 送料六錢

袖珍 **名將言行錄**

天覽臺覽 本書は萬世不朽の名著也

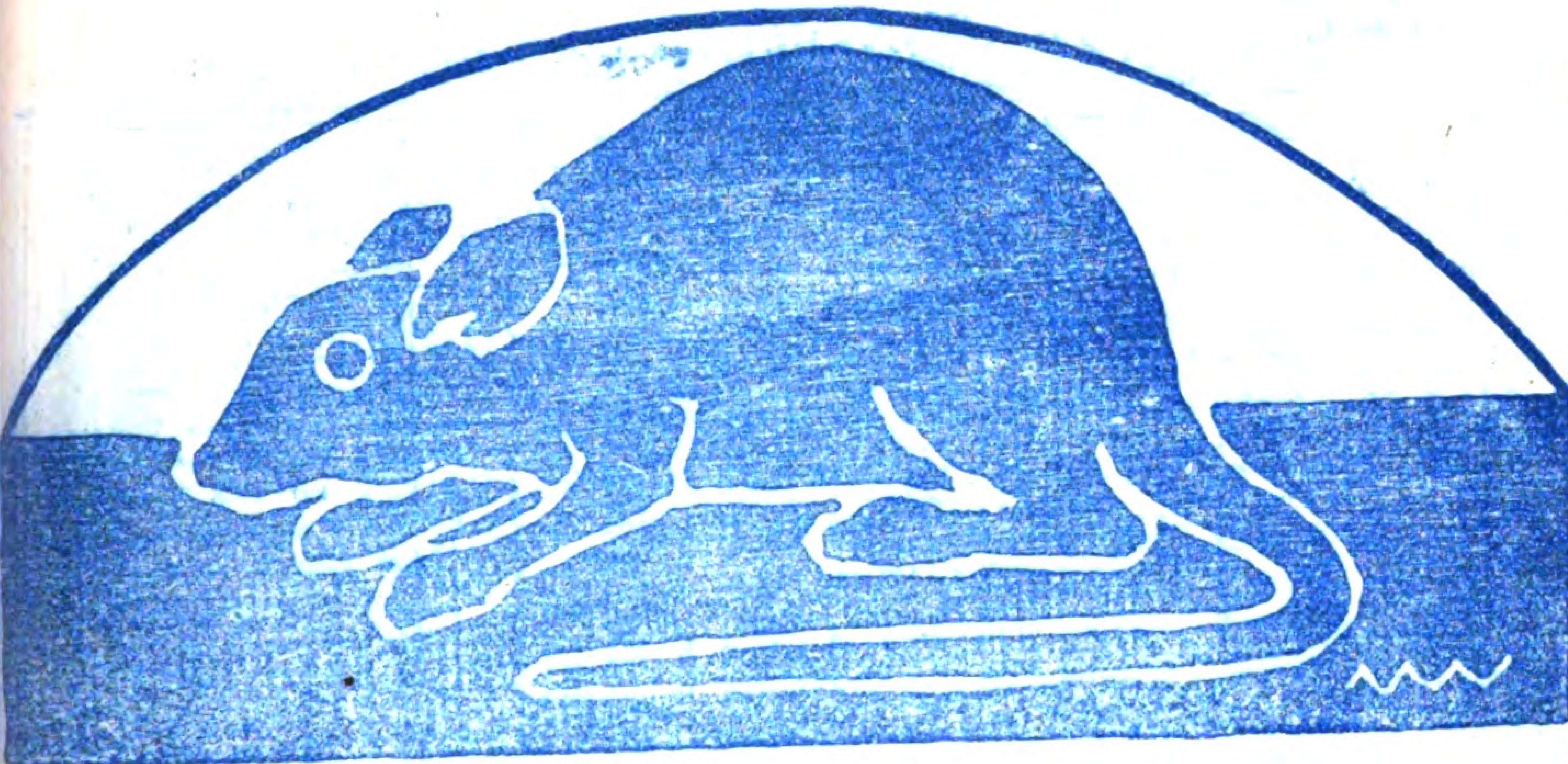
内海文學士著正價壹圓廿錢 送料十二錢

增補七版 **文章十講**

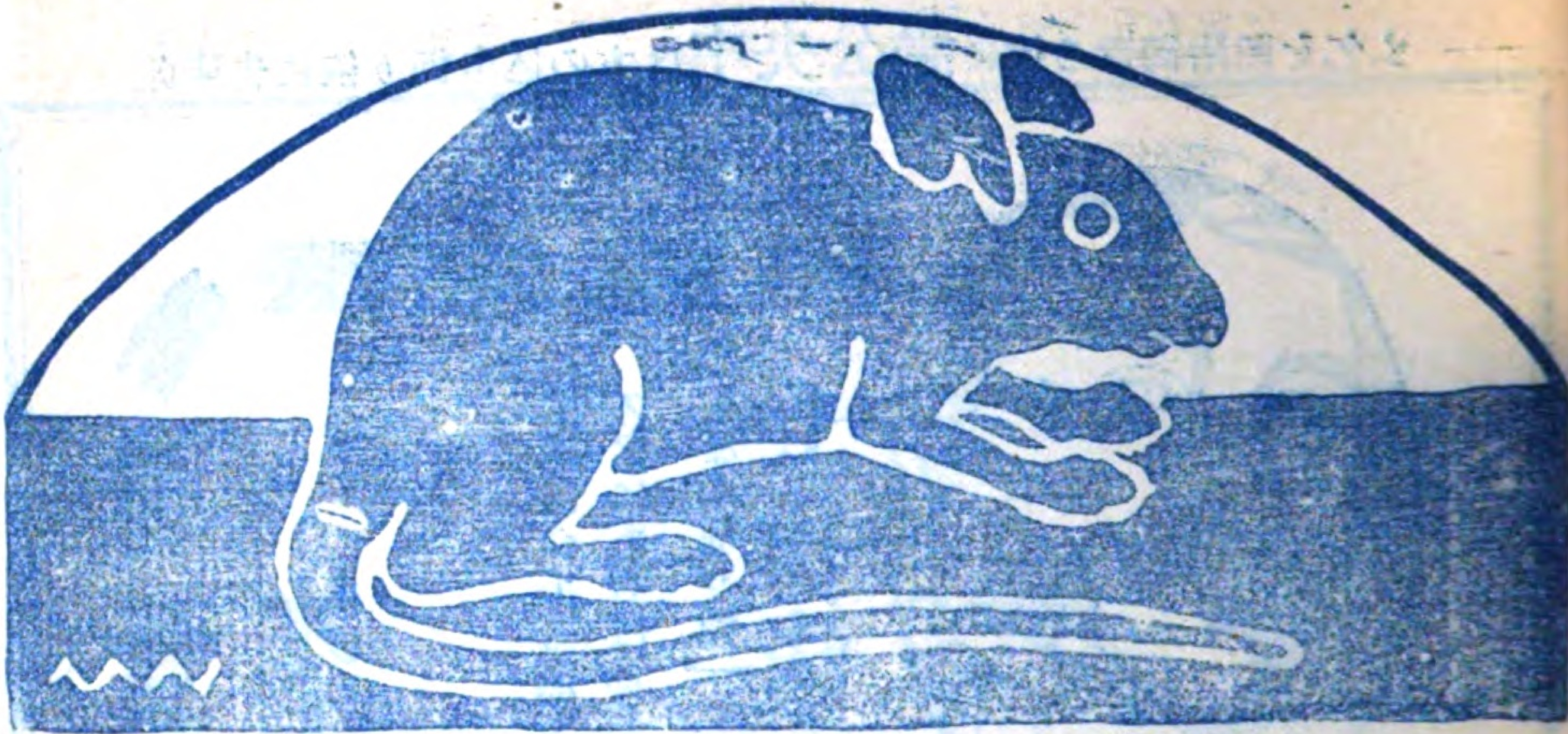
文章學は本書に依て始めて大成せり

東京本郷區森川町
振替壹九四六番
文成社
圖書目錄は往復はがき進呈

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



中央公論第二十七年第二號目次



Hamlet and Horatio



By DELACROIX

中央公論



第二十七年
第二號
第二百七十五號

清國に義人無し

（一）

孟子梁ノ惠王ニ見ユ、王曰、叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎、孟子對曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣、王曰何以利吾國、大夫曰何以利吾家、士庶人曰何以利吾身、上下交征利、而國危矣、萬乘之國、弑其君者、必千乘之家、千乘之國、弑其君者、必百乘之家、萬取千焉、千取百焉、不爲不多矣、苟爲後義而先利、不奪不饜、未有仁而遺其親者也、未有義而後其君者也、王亦曰仁義而已矣、何必曰利、支那人が利を先にして義を後にするは古より然り、然れども其の今日の如く甚だしきは曾て之あらざるべし。

安祿山の叛するや、唐の玄宗蒙塵し、嘆じて曰く、二十四郡一人の義士なきかと、然れども顔眞卿起るに及びて、玄宗實に暢然たらざるを得ざりしならん、今や淸朝二百七十年の社稷亡びんとす、而して一人の起て忠義のためにするものあるを聞かず、實に驚ろき且つ呆れざるを得ざる也、吾人は素より西隣の老大國が共和政體國となるがために、我が立憲君主制に影響ありといふが如き、愚論を爲すものに非ず、然れども四百餘州一人の忠臣義士なく、而して擧世滔々唯だ其の利害を視て仁義を言はざるを見て、私に長大息に堪へず、夫れ西隣の大國に一大政變あるに方つて、唯だ利害のみを視るに止まらば、其の風化の及ぼす所果して如何とするぞ、吾人實に杞憂なき能はざる也、乃ち茲に袁世凱を捉へて一評論を試む。

（二）

袁世凱の出づるや、實に謝安出でずんば蒼生を奈何の概ありき、然れども彼れは兵を進めて革軍と決戰せず、幸ひにして漢陽を陥れたれども、一氣に武昌を屠らず、又津浦鐵道を利用して軍隊を南下せしめ、上海を威嚇して兼ねて南京を攻んとする革軍を牽制することをも爲さず、空しく金城を敵手に委して、漢陽の大勝をして殆んど價値を喪はしむ、然かも是れ皆資給せず、兵器足らざるの致す所として、多少恕せらるゝ所なきに非ず。

然れども始め君主立憲を支持すと誓ひて、日英兩國の援助を求めながら、南方革軍の氣鋒旺んにして、十八省中聲を大にして共和を叫ぶもの多きや、乃ち服心の唐紹怡を上海に派して革命軍と媾和せし

む、當時の袁の心事を忖度するに、媾和の交渉に曠日彌久せば、革軍の領袖内に反目し、軍情和せず、資財給せずして勢ひ自から潰ゆべし、乃ち乘じて以て之を屈伏すべしと做せしならん、然るに敵の領袖未だ内訌を生せず、敵情未だ甚だ非ならざるに、袁の政府却つて大に窮し、借款總て成らずして、殆んど自から支ふると能はざらんとす、乃ち和議を早めて自から共和國を立て、其の大統領たらんとせり、然れども孫文歸りて忽ち大統領に撰ばるゝや、唐紹怡が革軍の代表者伍廷芳と調印せる條約を破棄して殆んど媾和を斷念するが如き態度を示しながら、一方には休戰期間を延長し、電文を以て交渉を進むといふが如き、有史以來絶無の滑稽的脚色を爲し、一方には清廷の鰥婦孤兒を脅かし、頻りに内帑の寶物を沽て以て軍資を作らしめ、之を以て自から支ふるの資とす、既にして革命軍が力窮して媾和を速かならしむるの意あるを看るや、媾和使節たることを罷められて後、依然上海にありし唐紹怡に旨を含め、自から大統領となり、而して孫文を副統領とするの條件を以て、竟に清帝を退讓せしめんとす。

是れ實に十二月上旬より、一月中旬に涉る僅々四旬内外の徑路也、之を漢陽の陷れる十一月二十七日より起算するも、未だ五旬に及ばざる間の事也、袁や清朝の總理大臣として一代を御せんとすれば、乃ち君主立憲制を標榜して義を北方に唱へ、更に共和國の大統領たらんとすれば、乃ち清帝を賣りて曾て相爭へる革命軍と一致せんとす、其の行藏一に自家の勢利のためにして、曾て他の君國のためにし、生民のためにする形跡なし、甚だしい哉袁の利己主義の到らざる莫きや。

勝海舟は德川氏の譜代なりき、然かも官軍の使節たりし西郷南洲に江戸城を明渡して、毫も逡巡の色なかりき、其の志蓋し幕府の到底、成すに足らざるを看破し、德川氏の宗廟を亡さずして、而して日本の國家を統一するに存せし也、淸廷の威信既に地を拂ふて、竟に成すに足らざるや、德川氏と異ならずとする、吾人必らずしも異言なし、如何なる政體を以てするにせよ、支那を統一せざる可らざる、また論なしとす、即ち袁たるもの我が勝海舟たらんとする乎、洵に然らば、吾人また其の志を憐まざるに非ず。

然れども袁果して海舟たるや否や、海舟は曾て幕府の老中たるを欲せざりき、又明治政府の高閣に主たるを希はざりき、其の僅かに海軍卿となれるも、素より已むを得ざるのみ、彼れは終身德川の遺臣と稱し、事實に於て家を提けて德川氏に捧げたりき、然かも福澤先生の如き峻嚴なる批許家は『瘦我慢の說』を著はして海舟の臣節なきを彈劾して寸毫も寬假する所なかりき。

袁や、巧みに淸廷を操縱して退讓せしめ、以て其の血食を斷たざらしむる乎、倘ほ一片耿々の志を存すと謂べし、然れども之を一種の犧牲として、新共和國の大統領たらんとするに至ては、何の忠義か之あらんや、袁にして若し支那の氣運支ふべからずと做し、偏へに淸廷をして終を全ふせしめ、兼て支那の統一を圖らんと欲せば、淸帝を退讓せしむるまた一策也、然れども身は少くも海舟の如く、前朝の遺臣として、深く韜晦するを當然とす、自から進んで大統領たるが如きは、斷じて臣子の節に非ず、素より仁義に非ざる也。

袁をして謂はしむれば、總てに辨解の辭あるべし、進んで革命軍を討たざりしは軍資給せざれば也、淸廷をして內帑の實物をも沽らしめしは、以て一時を支へんがためのみ、淸帝をして退讓せしむるは、其の終を全ふせしむる所以也、若し淸帝にして自ら退讓せず、人民の悉く敵となり、大勢全く去るに及ぶまで逡巡せん乎、或は九族夷滅せらるゝなきを保せず、今にして早く自から退讓するは、其血統と、若干の尊號と、數百萬の年金とを得る所以なれば也、而して又兎も角も、支那を統一する所以なればも、或は南北に分れて官革相爭はん乎、列國をして漸く支那を分割せしむるの虞なきを保せず、現に露國が蒙古を獨立國として以て竟に其の有に歸せしめんとするは、實に其の端を啓く也、此がため皇室を犧牲にするも、尙必らず時局を平定せざる可らずと言はゞ言ひ得べし、吾人は此の辨疏の總てを否認せざらんと欲す、然かも竟に袁に許すと能はざるは他なし、袁や、實に自己を本位として一切を打算し、自己のためには、其の皇帝をも、國をも生民をも犧牲として憚かる所なきを以てのみ。

人の貴ぶべきは、自己のためにせずして他のためにするにあり、殊に宗敎家、軍人、政事家等の貴きは、己れを犧牲として人類のためにし、君國のためにし、國民のためにするが故也、逆まに己れのためのみに計り、此がため君國をも、生民をも犧牲とするに至ては、是れ人にして人に非ざる也、如何に仁義を捨てゝ、單に利害にのみ急なる支那人としても、袁の如きは人外也。

豈啻袁のみならんや。彼の俊傑と稱せらるゝ岑春煊を看よ、瞿鴻機を看よ、而して又康有爲、梁啓超の徒を看よ、端方は四川に殺されたるを以て知るを得ざるも、他は、一として節に殉する氣慨あるとなし、嗚呼四百餘州、今や一人の義士なき乎。

昔者周の粟を食はざりし伯夷と叔齊とありき、近く明末には臺灣に據りて孤節を守れる鄭成功ありき、鄭成功日本人の血を享けしが故に然りとのみ做すと勿れ、支那古來實に忠節の士少からざりし也、唯々今日清朝の亡ぶるに方つて、一人の節に殉する莫きは、風氣全く地に墮ちし乎、思ふに利害のみに急なる、今日の支那人の如きは尠からん、夫れ既に利害にのみ急也、仁義なき素より其の處のみ、我が國近時智者才人多く、利害に聰明なる倫を絕つもの多し、而して仁義を迂として嘲けるなきや否や、若し然らば徒らに支那人のみを嗤ふと能はざらんとす、是れ吾人の深憂とする所、敢て此の論を爲す所以也。

* * * * * * * * * * *

倫敦タイムスは、盛んに袁世凱が時局を濟するの技倆を稱して、益々其の政事家的價値を認知すと論じたり、嗚呼技倆乎、技倆乎、利害に敏なる英人は實に斯く感ずるなるべし、袁や洵に政略家也、然かり、詭略家也、眞の政事家には非ず、政事家は時を濟ひ民を助くる耿々の志氣を存すべきものなれば也、若し夫れ經世家（ステーツマン）に至ては、袁と相距る萬億里も啻ならざる也、當世の我が政事家諸公以て如何と爲すや。

東京市の二大問題

（一）

我が東京市は、今や、二個の大問題を有す、苟も血性ある市民ならば、當さに大に叫聲を擧ぐべきに、杳として殆んど聞ゆるなきは、吾人の私に疑訝に堪えざる所とす。

二大問題とは何ぞや、一は舊臘末日より元旦に渉れる電車の同盟罷業事件にして、一は所謂電燈市營問題是れ也。

（二）

同盟罷業なるものは、勞働者及び被傭者が資本主雇主に對する唯一の武器也、資本主雇主の横暴、酷虐、壓制に對する自衛、攻撃の唯一武器也、夫れ兵は凶器なるが如く、同盟罷業もまた一種の凶器也、然り、極めて重大なる凶器也、之を用ゆるときは、社會の公安を害するに止まらず、社會共同生活の必要機關を傷害し阻止し、延きて國家社會に大なる損失を蒙らしむれば也。

然れども勞働者に此の凶器あるとは、猶ほ國家が武力を有するが如し、凶器は則ち凶器なりと雖も、之を承認せざる能はざる也、吾人は勞働者被傭者等が其の勞働に對する賃銀又は時間に就て要望を貫くがために、此が凶器を用ゆるに多く反對せず、寧ろ大なる同情を以て之を援助せんと欲す、是れ吾人の原則として抱持する一の主義也、必らずしも弱を扶けて强を挫かんとする國民性のみにあらざる也。

然れども去年臘末より今年元旦に渉れる電車の同盟罷業なるものは、吾人の主義に合せりや否や、吾人の見を以てすれば、相距る啻だに千萬里なるのみならず、彼の種の罷業の如きは、寧ろ日本國民の品性と名譽とを侮辱したるものにして、苟くも正義の志ある人は、必らず鼓を鳴らして之を責めざるを得ざる也。

彼等電車の從業者は、曾て其の雇主たりし舊東京鐵道會社が解散するに方て、己等に分配せる慰勞金少きを憤ふり、更に若干の贈與を受けざる可らずと稱して、突然罷業したりしもの也、彼等の現に從業する電車は、去年既に舊會社の手を離れて、今や全く東京市の手にありて、市と舊會社とは何等關係あるとなし、彼等の要求にして若し東京市に對するものならしめば、罷工また聊か理なきにあらざれども、全然無關係なる市に對して同盟罷工を敢てす、喩へば舊主人に對する不平のために、新主人家に於て其の職を廢するが如し、暴もまた太だし、殊に此がために臘末元旦の如き、市中の往返太だ忙はしくして、交通機關の最も必要なりし時、之を妨害し阻止したるは、其の罪殊に重しとす。

且つ彼等の不平や甚だ醜也、彼等は舊會社解散と共に其の職を失ひ、其の身分に動搖を生じたるに非ず、僅かに會社と市と其の雇主を異にせるのみ、待遇と所得とに於て素より上下厚薄あるなき也、故に會社解散のために、慰勞金の分配に與かるは、實は思ひも寄らざる僥倖にして、理に於て其の多寡を言ふ謂れなし、抑も熨斗附きの贈物に對し、心中假令多少の不平ありとも、之を口にするは日本人の耻づる所とす、况んや之を公言し、其の增加を得るがために、唯一の武器にして又凶器なる同盟罷業を

行ふが如きをや、「お貰ひ」の少きを囂々す、是れ乞食根性のみ、乞食にして白日公然同盟罷業を行ふ、醜に非ずして何ぞ。

殊に彼の罷業連は、既に分配慰勞金を懐にしたるもの也、徒手坐食するも、以て一二ヶ月を支ふるに足るもの也、而して更に慰勞金即ち「お貰ひ」を多からしむるに非ざれば從業せずといふ、其の心事の卑しくして而して穢き、洵に言に絶せずや。

若し東京市に人あり、電氣局また人あらば、斯の如き同盟罷業に對しては、寸歩も讓ることなく、彼等が市に對して罷業するの不正なること、及び其の心事の卑陋醜穢なることを指摘して嚴峻なる訓戒を與へ、尚ほ從はずして罷業せば、直ちに之を解雇すべきのみ、此がため假令一週二週乃至一ヶ月間全然電車の運轉を休止するも可也、市及び電氣局は宜しく別に新たに車掌運轉手を募集し、之を訓練して然る後電車を開通すれば可也、然るに彼の囂々擾々たる罷業を怖るゝの餘り、一歩二歩數歩を讓り、舊會社重役の一部をして出金せしむるを條件として僅かに罷業を止めしめ、以て彼等をして十二分の成功を謳歌せしむ、若し同盟罷業の速かに治まれる點のみより言はゞ、市及び電氣局の措置は賞讚に餘りあるべし、苟くも正義を重んじ、不正不理にして且つ卑陋醜穢を憎む常識よりいはゞ、市及び電氣局は實に失體を極めたり、極言すれば、三百萬の東京市民をして、不正不理に屈伏せしめたる也、堂々たる日本の首都に於て、天子の在す宮城の下に於て、卑陋醜穢なる運動をして、公然凱歌を奏せしめたる也、單に衆を恃みて囂々すれば、如何に不正非理なるも、如何に卑陋醜穢なるも、結局奏功せしむることを保證したる

也、是れ國家の正義を辱かしめ、東京市民の面上に一斗の汚泥を塗りし也、市民にして今尙ほ其の洗雪を爲さず、市會にして又片言隻語の彈劾なきは何ぞ、嗚呼果して何の故ぞ。

（三）

東京市は既に電車市有を實行せり、最早其の利害得失を論ずべき餘地あるなし、乃ち今日以後の要は、市をして電車市有の好果を收めしむるに在るのみ。

吾人の曾て詳論したりしが如く（第廿六年第八號參看）電車買收費及び未成線建設費を合算したる八千三百五十四萬圓の市債を五分利にて成立するものとするも、此がため市が年々支出する利子のみも四百十七萬七千圓に達す、然るに現在電車の純益は一年三百四十萬圓に過ぎずして、市債の利子をも支拂ふに足らざる也、唯だ未成線完成の曉所期通りの收入ありとするも、尙ほ五百二十萬圓の純益を擧ぐるに過ぎず、即ち利子を支拂ふも殘る所僅かに百二萬三千圓のみ、之を以て市債元金償却に充てば、多くの年數を要するや論なく、電車の改良費に至ては、全く得るに所なからんとす。

故に單に電車のみを經營するは、到底市の利益に非ざる也、電車の利益乏しくして、市營の不利なるは歐米の實例之を證して餘りあり、唯だ幸ひにして東京市は有利なる電燈兼營の特權を繼承し得たるを以て、之を經營して始めて利益を擧げ得べき也。

吾人の曾て計算せるが如く、市に於て大に電燈を經營せば、十燭（定額）を一ヶ月六十錢、五燭を四十錢の廉價に引下ぐるも、尙ほ一ヶ年優に二百餘萬圓の純益を擧げ得べく、市として税金を要せずとせ

ば、殆んど三百萬圓近くの純益を擧ぐるを得、即ち電燈資本として新たに要する一千六百萬圓と、既定の費額とを併せて二千一百萬圓と做し、之に五歩利を支拂ふも、尚ほ一百五萬圓を差引きて、約二百萬圓は電車の市債償却元金として全部充當するを得べく、市の經濟始めて完し。

市當局が電燈兼營の有利なるを認め、而して東京市會亦電燈經營を是認して其の收支豫算を可決せしも、實に此がためならずや。

然るに新聞紙の傳ふに所によれば、政府當局、殊に大藏、內務、遞信の三省は、市の電燈兼營を承認せず、第二期工事を認可せざる方針なるが如し、是れまた吾人の甚だしき恠事として、東京市民の大に奮起を促さんとする一大問題たり。

（四）

我が外債既に多きに失するがため、外國資本家容易に東京市の起債に應ずる色なし、然るに更に一千五六百萬圓の市債を追求す、是れ許す可らず、政府既に財政上に緊縮方針を執れり、市獨り之に反す可らず、且つ電燈經營のため正貨を海外に流出せしむるは不利也、市が電燈を經營して既設會社と競走するは是れ民業壓迫也、公共團體として斯の如きは愼まざる可らず。

是れ政府當局の口吻也、市の電燈經營を許さずといふ理由、恐らくは之に過ぎざるべし、然れども思へ、電燈經營費一千五六百萬圓の供給を外債に仰がず、電車買收費の株主に支拂はれて民間に放散されし時、之を內債とするも亦一の妙案ならずや、且つ外債の成ると成らざるとは、資本主の意向にあり、

政府が其の不成立を豫斷して承認を與へずといふは、寧ろ早計の嫌なきを得るや否や。

政府が財政緊縮したりといふも、官業は曾て緊縮さるゝとなし、看よ、國有鐵道は、依然として若干の擴張と改良とを實施し往くにあらずや、製鐵事業然り、專賣事業然り、蓋し財政に緊縮を要すとするも、營利事業、殊に生產事業は、毫も緊縮するの要なきのみ、假令政府の財政緊縮するも、此がため民間事業に制限を加ふるの必要は寸毫もあるとなし、今東京市が電燈を經營するは、既得の權利を既定通りに遂行せんと欲するのみ、然かも市の經濟上已む可らざる必要に出てし有利の事業たる以上、政府が自個の財政緊縮を口實として之に反對するは無意味也、況んや正貨流出を理由とする如きをや、如何に正貨を流失するも、其の事業の有利なる以上、素より寸毫も顧慮すべき謂れなし、之を顧慮する固陋なる舊式經濟論に囚はるゝのみ、時代後れの元老にして之れあるは怪むに足らざるも、政府として果して斯の如くならば、是れ一國の經濟を擔當する資格なき者也。

若し夫れ民業壓迫說に至ては、天下無比の愚論也、所謂民業なるものは、東京電燈會社に外ならざるべし、此の會社は東京市が電燈を經營して然かも廉價に之を供給すと聞くや、周章して其の妨害に努め、有らゆる運動を爲せるも蔽ふべからざるものあり、抑も此の會社は、其の資本の浪費甚だしくして、其の有價物件が決算報告と一致せざるは、苟くも眼ある者皆之を認む、然るに浪費せられし資本に對しても、尙ほ且つ一割以上の高步の配當を爲す、他なし、其の電燈料金の不廉なる、實に世界無比にして、而して日本第一なれば也、彼れ獨占の地位を利用(濫用)して、市民より不法の高價を貪ぼれば

也、前内閣が一方に東京市の電燈兼營を承認しつゝ、尙ほ且つ日本電燈會社の創立を特許せしも、實は彼の會社が獨占横暴を制限する意向に出でしに非ずや、既に競爭者の出づるを許す以上、壓迫は素より當然のみ、知らずや、市の電燈兼營のため、彼の會社の市民に對する態度漸く一變せんとするのみならず、會社自身も從來每月六千燈宛の注文を受けしに、今や五倍して三萬に上れりといふ事を、與に民業壓迫の虞ありとするも、現に電氣事業法其の他のあるあり、政府が之を取締るの容易なる、一擧手一投足の勞のみ、之に籍口して全然工事認可を與へずといふは、全く理なき也。

市上の風說によれば、電燈會社の佐竹某望月某は、政友會員たるがために、若干の出金を爲し、而して政友會内閣の事實首相たる原敬氏に取入り、以て市の電燈經營を妨害せんと欲するのみと、是れ斷じて齊東野人の語也、公明なる政府豈斯の如きとあるべけんや、唯だ政府の態度未だ明瞭を缺くがために、自然に斯る揣摩臆測說を生ぜしならんのみ。

（五）

今や東京市は、市會の決議を以て電燈經營を公定したり、若し區々行政官廳の措置を以て之を阻止されん乎、是れ東京市民の不面目也、啻だに東京市長、市參事會、市會のみの不名譽と屈辱とに非ざる也、東京市重き乎、一電燈會社重き乎、三百萬の東京市民重き乎、一會社株主重き乎。

電燈經營の成否は、斯の如く市の面目問題となり、啻だに電車市營を完くする利益問題たるに止まらざる也。

然かも市の新聞紙沈默し、市會區會沈默し、市民また沈默す、果して何が故ぞ、嗚呼果して何が故ぞ。

岩倉公を論ず（中）

池邊吉太郎

今ては相州の栗濱にペルリの紀念碑が建つて、嘉永六年の米國使節の要求は一も二もなく其時承知す可きものて有つた、といふ樣な事に日本國民何人も異論はない。が其時の攘夷論の方に今から理窟を付けて見ると。決して〳〵付かぬ事も有るまい。米國の其時の要求こそ明々白々な公義通義に出たもので、國書國使の形式を備へて、又使節も相當の官吏、立派な人物て、兎も角も日本を一國視して、國際的關係を開かうといふので有つたけれども、しかしあの頃の世界は今よりも尚一層油斷のならぬ世界であつて、殊に東洋方面が賊に物騒至極であつて、國といふものが一つも國として認められて居ない。所謂クリシチヤンドム以外の國は踏んでも蹴ても差支ないといふ樣な取扱ひて、國書も國使も何も有つたものでなく、西洋の個人や會社てがつて勝手に國や島の拾ひ物を漁つて鉢合ひをして廻るといふ事の流行がまだ〳〵收まらぬ時代て、——德川初期の開國はコンナ奴等に對して一寸開國して居たので——商館商人も中々商賣專門ては無かつた。所謂新航路新世界の發見で、國や島の拾物どころてなく、大々的な大陸の拾物をして、世界の地圖が始めて出來上つて、ヴスコドガマやらマゼランやらが世界一週をして、地球が始めて丸くなつて、金銀鑛などが澤山に見付

かつて、豪傑だか大山師だか分らない様な西班牙人や葡萄牙人が勝手次第に荒れ廻つて、やつとこさと大きな御土産の嚢を擔いで歸つて、歐羅巴の經濟と政治に大變動やら新變革やらが始まつて、其景氣のほとぼりがまだ〱中々炎々たる時代で、英國などでは、凡て人道公義に背いた國盜人島盜人に對し、議院では隨分やかましい非難をしながらも、東印度會社には印度を奪はせたり、それからして支那に阿片を强賣させたり其阿片を廣東總督が拒絕したといつては戰爭をしたり、其戰爭に勝つたといつては香港を取つたり、國も大山師の會社や個人を保護奬勵して世界に亂暴をさせる事が大流行の時代で、其亂暴會社、或は侵略會社泥棒會社といつてもよい、そんな會社などが主として東洋を荒し廻らふといふ恐ろしい時代が、其比までまだ續いて居たてはありませんか。で東洋諸國の外交といふものは、一體に國相手で無かつた會社相手だつた、個人相手だつた。其侵略會社や泥棒個人だつたら、少々攘夷してやつても好かつたらふ。といへば、徳川三代將軍はゼシユヰツトの惡僧敎會を追拂つて鎖國したのに不思議は無からふといふかも知れぬが……

又其頃は露西亞が隨分始末にいけぬ事をやり盛つて居た頃で、恰も嘉永年間だ。英佛聯合軍が北京に攻入つて、圓明園を焚て、寶物を分捕つて、淸帝を蒙塵させたのには、聊か其理由も有つたてせうが 其跡の講話談判の時露國の代表者は少々ばかり仲裁口を利いたからつて、其お禮に今の黑龍江州全部を恰も鳶が油揚を浚つた樣に引つ浚つて、浦鹽斯德といふ出口を明けた。これは其比東洋稼ぎの名人イグナチイフの仕事だ。日露戰爭前のアレキセエフなどが叶ふもので無い。其露國人は徳川九代か十代かゞ鎖國太平の夢を貪つて居る中に、一寸日本併呑の計畫を立てた事も有ります。時の露國の君主は例の女傑カタリン二世で、日本の漁民の蝦夷あたりから遠漁に出たのを生捕らせて日本の事情を彼等の口から聞いて、英佛に首肯させて、ニコライプスクで舟を作つて、キヤピテンドレエクを英國から借入れて航路の案内をさせて、日本を一ト攻めに

攻取らふとした處て、恰も普魯西のフレデリックや墺太利のマリイテレザと波蘭土三分の約束が出來て、其實行に忙殺されたから、波蘭土が日本の身代りに立つて、日本は却つて助かつた樣な事が、佛國外務省文庫の秘密文書の中に見へて、珍らしいといふので、佛國の外交家が調べて書いたのを見た事が有つて、薄々覺へて居ます。何でも露國人は餘程日本に涎を垂れ續けて居たものと見へて、慶應年間福澤諭吉先生が幕府の使節に随行して歐羅巴を廻つた時、聖彼得堡て恐ろしい氣の知れぬ誘惑に出逢つた、といふ事を福翁自傳に書いてある樣てすよ。其少し前の文久年間には、露國の軍艦が突然對馬島を占領した事もある。小栗上野介か何かが英國公使に頼んて、英國の競爭心を利用して、それを追拂つてもらつた。此文久慶應年間までも、歐州列國の外交官や軍艦は各その國の代表者てありながら、相變らず從前の會社的に個人的に、本國の命令が有るか無いか分らぬのに、勝手に動いて勝手に物騷な危險な事をやつた。コンナのに對しても少々攘夷したつて好かつたかも知れぬ。軍略的に此時代の形勢を一と口に言つても、通信機關は隔絶だしサ、蘇士の運河は未だ通つて居らぬ。太平洋の航路はマゼラン時代と同樣て、どちらに廻つても大迂廻線てあつて、舟は帆船に小さな蒸汽機關が据付けてあるばかりだつた。時の日本の兵制が封建的に區々に分れて居て、武士が腐つて居て、武器が火繩銃で有つたにしろ、やる氣でやる事になつて、二三ヶ國位の相手だつたら、丸で焦土にもなら無かつたかも知れぬ。

其時の米國にだつて全く申分が無いでも無い。タウンセントハルリスが日本の爲といふて造つて呉れた通商航海條約は、何といつても其後三十幾年間日本の官民を苦め抜いた治外法權の片務條約の先例を推し付けたものに相違はない。幕府の外交官吏に少しばかり國際法が分つて居て、關稅の稅率は貴國てはどうしてお極めになりますか、矢張りコンナ工合ひに條約て以てお極めになつて居ますか、と問ふたらハルリスは何と答へたてせう。先帝の朝廷てどうしても堀田備中

守の江戸條約を御許可にならぬのは、今の詞でいへば、批準が出來られ無いので有つて、同時に幕府に對する朝廷の批準權の爭ひで有つて、內政的に王權回復の大槓杆となつてますが、外政的にも理窟を付けて、若しか治外法權が認めてあるから許されぬとか、片務的規定だから批準す可らずとか、凡て近世式な國權主張論の形式により、國際法の敎科書通りな事を言張られたらば、どうてしたらう。そして其れて米國と衝突して、米國に對しても攘夷といふ段取りに成つたら、先帝の攘夷の御思召も理論の辻褄に合ひませう、

が、しかし是は固より皆跡から付くる理窟て有つて、今では私にも出來る事だが、當時の日本人は少しも個樣な理窟は考へなかつた。そして先帝の攘夷の叡慮も、其實をいへば德川の鎖國の祖法の中に日本を一任してあつた結果、因循的に慣習的に成立つた御意思に外ならぬので、根本的には結局御間違ひであつたと申さねばならぬ。さて又德川の祖法がどうして最初鎖國に定まつたかといへば、日本に儒敎佛敎といふものが先入主となつて居て、新來の客を嫌つたからの事と經世的には大觀す可きで、恰も今日北米合衆國に先入主となつてる歐洲諸國の移民が、日本移民を排斥するのと同樣て、素地の米國に罪の少いと共に、日本の素地は本來開國的で攝受的て同化的て、それをトラヂショナルな國本として居るのてある。それが又今ては日本の日本たる所以の一となつて居るのてある。一時的に部分的に國權主張的に攘夷の必要がある事も有つても、攘夷を國の根本法とす可きてないのは、日本に於て最も然りと言つても宜しからう。故に絕對な攘夷法は德川の專有物に讓らる可きてあるに拘らず、朝廷が主となつて、並に勤王諸藩が大に之を唱え且實行したのは、寧ろ大々的な佐幕的行爲てあるが、其佐幕的行爲が却つて幕府を倒す原動力となつたのは、これは本來德川の鎖國の祖法といふものが大間違ひに間違つて居た證據てあらう。

但先帝は御一生佐幕方針て在られた。御近侍に幼年から勤仕して善く御事蹟を心得てる東久世伯は、慶應

三年の討幕密勅も先帝の御代だつたら出なかつたらふ、といつて居る。堀田備中の跡て、井伊掃部が大に逆鱗に觸れたのは紛れもない事だが、井伊の死後萬延元年の秋からは、嘘にもせよ間に合せにもせよ、後見役の慶喜公が攘夷の御主旨に忤らはなかつたから、其れて先帝はやはり佐幕てお出てなさらなければならぬ譯ても有ります。朝廷の公卿達も所謂七卿の仲間を除いては皆大抵佐幕て有つたてせう、此一點になると岩倉は傑出して異なつた處がある。それは透明な洞達な識見を天品に備へて居て、攘夷一天張て無かつたからです。其事は今話しますが、先帝の御事を話し出したから、モ少し話しませう。已に御一生佐幕方針てあつて、どうして前に申した通り王政復古の半以上を既に仕遂げられたかといへば、それは勤王諸藩殊に薩長二藩を交る／＼引付けて――これが藩閥の濫觴であつて、實は藩閥は先帝の御代から出來かゝつてる――命令的に攘夷(長州)並に幕府の改革(薩州)を亦代る／＼强ひられたから、其命令の行はれただけ其だけ王政復古の階段が出來上つた譯です。然るにです、是も前に申した通り先帝はどうしても專制的獨裁的な御方で無かつた。で攘夷の叡慮も絕對的て無くて、安政五年以後の宸翰及其他の勅諭はいつでも國論々々と有る樣です。そして和も戰も德川幕府の役人だけては極めな三家一門、外樣譜代、大小名總ての意見を聞いた上て、國論を以て國是を定めよ、と有る樣です。遂にお嫌ひて／＼堪えられなかつた御膝元の兵庫開港も、慶應二年の秋にはとう／＼許さるゝ事になつて居て。御一新後の岩倉をして開國は先帝最終の遺旨といふ樣な事を叫ばしむるに至つた。そこであの時の日本の國論といふものを極む可き會議が開けて見たら、どうなつたてせう。安政六年の幕府の井伊內閣が先帝の御思召に從順して、あんな專斷暴斷をやらないて、京都に大會議を開いて、開鎖問題を議したら、どうなつたてせう。一寸面白い疑問てす。嘉永六年七月阿部伊勢守が江戸出府中の大小名を城中に呼集めて對米國要求問題を評議した時、一つとして聞く可く見る可き意見は出なか

つたが、其後一兩日して七月十日水戸前中納言即ち烈公が「海防愚存」といふものを伊勢守に送つてるが、其中には「公にも御話申候如く、戰は難く和は易し。戰を主として和に決し候ても其れ程の事はなし、和を主として萬々一戰に相成候へば何如とも遊ばされ難きこと明瞭に候、故に公と御話し致し候和の一字は海防係に封じ込めたく、此本文には認め不申候」といふ樣な事がある。存外に開けた策略的な國權論です。尊王論の本家本元で、攘夷論の別本尊であつた水戸が此通り。薩摩は齊彬公以來開國下タ地の論で、島津三郎は文久二二年の上京以後一度も攘夷贊成の議を發して居ない樣だ。賢諸侯の一人とされた越前の春嶽公などは、始終開國論を抱いて渝らなかつた感心な人、と岩倉に稱されてる。長州がどうかと思ふが、これもすぐに開國になり易い處だつた、と思はるゝ節がある。國是に關する國論決定の總會議が開けたら、隨分其時はグシャグシャとした大悶着の幕を出現したには相違ないが、去りとて眞ッ黑暗に陷つたには限らぬ。存外に一道の光明が其中から赫と出て、想が昇る事となつたかも知れぬ。と同時に、會議體の輿論政治の新紀元がこゝに開けて、今日の憲法政治が見事な起源を持つ事となつて、德川幕府は或る形ちを以て姑く存續したかも知れぬが、其代り藩閥の薩長が獨りで大威張りするといふ事がなくなつて、明治の日本が今少し工合よく進化して出たかも知れません。先帝の朝には明治の前記として誠にいろ〳〵面白い研究問題が伏在してる樣です。

さて此先帝の御時代で岩倉が働き初めたのが前に申した安政五年堀田備中が江戸條約の勅許を得るため上洛した時ですが、こゝに至るまでの間に幕府がどんな事をしたか。長くなるけれども……先嘉永六年黑船破天荒の時、來年になつて返詞をするから、來年來いといつて一ト先返したから、ペルリは約束通りに其翌安政元年正月十一日にやつて來た。正直正銘なものだ。そして二十八日には神奈川へ乗り込んで來た。神奈川は江戸に近いから幕府は此處へ乗り込むのを一生懸命止めやうとした。まア哀れ至極の話サ。勿論今でも同

じ事て、外交手段として、こつちの要求を容れるか容れぬか、容れなければ斯うだと、力のあるものが嚇して出るのはもうお極りの事だ。此時はペルリも矢張りそれをやつた。大砲を乘せた黒船を三艘持つて來て居る。聽かなければ今にも火蓋を切るぞといふ勢を示さねでもない。斯うして嚇しては居るが、然し言ふ事は正論だ。幕府は國書を持つて來て居る國使に對して、外務省の一局長位にしか當らない奉行の下役輩に應待せしめて、大臣に當る老中先生は自ら應待しない。而も江戸に入れないで田舍の隅つこで話をしようとして居る。聽かないのは無理が無い。「それては國交際の慣例に違ひます。國書を持つた國使は其國の主權者に會はなくては國書を渡すものぢやありません。どこまでも江戸に乘り込みます」と斯ういふのだ。「ヤア待つた」というても仕方がない。今にも大砲の火蓋を切りさうな勢が見える。こつちは追拂ひを祖法的國是とする江戸幕府だ。實は本來ならばどうあつても浦賀あたりで此方から火蓋を切らなくてはならぬ。がそれは切る譯に行かぬ。扨止める譯にも行かぬ。どちらからか火蓋を切れば直ぐ戰爭だ。もう江戸中は上を下への大騷ぎで有つたさうだ。其時の將軍は十二代將軍家慶公だ。これは又非常に心配をされたといふ話だ。なんでも此時浦賀からずつと相摸、武藏の海岸は物見の人が出て居つた相だ。「黒船の頭が東へ向いた、それ注進」といふので早馬て江戸へ奔る。「それ錨を上げた」と又早馬だ。「いよ／＼動き出した」これも亦早馬。そして其早馬の注進を聞き／＼、將軍は飯も咽喉に入らないといふ有樣て有つた相だ。いよ／＼神奈川で錨を下ろしたと聞いた時に初めて、飯の二杯ばかりいけたかも知れない。こんな騷ぎは多分手に取るやうに京都に聞えてゐなくてはならぬ。間違つた感覺意思がこれて第一に先づ京都に成立つた。先帝の御間違ひの始りでせう。其お伴て岩倉も或程度まで間違つた。つまり幕府は黒船の兵威に屈して、異人の言ふ事を防ぐことが出來られないといふ。無理の無い言て無いでも無い。幕府が鎖國の國是を採る以上其れを貫くのが國權だ。攘夷を

するのは國權擴張だ。そこで京都で攘夷論と國權論と結び附くといふ道行である。

然るに幕吏は二月十日に横濱でいよ〳〵應待を初めた。三月の三日に一番初めの日米和親議定書の調印があつた。それが調印になつたからしてペルリは引上げて下田に行つた。そして五月二十二日に下田條約といふ十ヶ條か八ヶ條かの條約が出來上つた。これは通商條約ではない。いはゞ先づ修交條約、和親條約とても稱すべきもので、幕府の方から言へば、一時和親をして置いて其中に追拂はうといふ、どつち就かずの態度の下に出來上つたものだ。然しペルリの方は其れ丈けでも成功だ。元來鎖國を主義とする日本だから直ぐに埒の明くべき筈がないのを、兎も角も一應は埒を明けた。此成功を見たものだから亞米利加以外の國も續々其後をついて來た。其前年ペルリが來て三十日も經たぬ中に、七月の十七日には露國のプーチャチンが長崎に乘り込んで來た。而してこれもペルリが下田條約に調印した後を追ふて、矢張り成功して調印を得た。只ペルリは江戸灣に乘り込んだが他は皆長崎に來た。和蘭は十月一日。英吉利は十月十五日。皆條約に調印して了つた。これが安政元年甲寅の歳。サア此で一寸一段落は付いたが、幕府の極めは表面和親の皮を被ぶつて、裏面が祖法の鎖國主義遵奉だから又厄介だ。黒船の歸つた跡で却つて又大騷ぎ、品川灣に砲臺を築く、長崎にも臺場を作る、動くか動かぬか分らぬ大船を作る。水戸の烈公も旭丸といふ船を拵へた。諸國共に釣鐘を崩して大砲を鑄る。そんな大砲はどうなつたかと云ふに、一つも役に立つたのはない。たま〳〵馬關で役に立てた長州のなどは、奪はれて戰利品となつて巴里のアムバレッドの前に雨に曝されて居るのを見た事がある。一の字の下に三ッ星の毛利家の定紋が恨めしそうに默つて居る。ブリチッシム、ミューージアムにも轉がつて居る筈だ。いゝ耻ざらしサ。文久二年五月一日のあの馬關の攘夷實行も、つまり徳川の祖法實行に外ならぬから、やつぱり駄目だ。伊藤井上が驚いて英國から飛んで歸つて漸く目が覺める事になつた。

安政三年七月十九日、ペルリが歸つてから二年目に、合衆國の外交官タウンセント、ハルリスはペルリの後を承けて亞米利加の國書を以て通商條約の談判にやつて來た。此頃まで阿部伊勢守はまだ生きて居りませう。が、主としてハルリスと談判したのが即ち佐倉の殿樣の堀田備中守だ。佐藤顯理君の書いた傳記などを讀めば、此堀田といふ人は開國主義の政治家で有つたやうに思はれる。隨分蘭學者などを集めて說を聞いた人でせう。林董伯なども佐倉出身て、其の流れを引いてるのでせう。其頃、イヤ其以前からして、蘭學者の仲間からは微弱ながらも世界の大勢に通じて居るものが出た。鎖國は世界の大勢が許さない。日本の爲め開國然るべしといふ論も出て居ないてない。て堀田備中守もいよ〳〵阿部内閣の跡を引受くるに至つて、和親貿易を許す方針を示して、其年の十月廿日には通商條約取調係を拵へて居る。それには幕末の外交家の錚々たるものが皆入つて居る。岩瀨肥後守、水野筑後守、川路左衞門尉、或は堀織部正。此等は多くは漢學者て蘭學者てはない。けれども皆エラかつた人物と見えて、外交の事を一番早く呑込んて一番早く開國論になつた。それだからしてハルリスと出會つて間もなく條約の大體丈けは締結した。安政四年五月廿六日に議定書が出來た。さうしてハルリスが目的を達して國書捧呈の爲めに將軍に謁見することが出來た。尤もこれまでに隨分長くかゝつた。安政三年七月に來て十六ケ月を費して安政四年十月廿一日に登城となつた。二十二日には堀田備中守の官邸に乘り込んでそこて通商條約に關する大演說をやつた。其演說は實に六時間かゝつた相だ。此演說て以て幕府の外國係りは皆開國論の洗禮を受けた。極く〳〵簡單なものだが其時の日本文の筆記もある。ハルリスの傳記は持つてゐますが、まだ委しく讀みませんが、ハルリスといふ人は矢張り外交家であるからして嚇しもする。前に申した英佛聯合軍の北京征伐が恰も其頃の事だから、其事實が薄々日本に分つてるのを幸ひ、直に嚇の種に遣つた。これはキ、目が無くてはならぬ。「あの通りて御座るぞ!」とこうハ

ルザオがいふのだ。「歐羅巴の亂暴な强國の來ない前に私の言ふ事をお聽きなさい。私は決して御無理は申しません。私が日本の爲めによい例を開いて上げませう。遠からず英吉利も佛蘭西もやつて來ますぞ。私の言ふ通りにすれば亞米利加の利益でもあれば同時に日本の利益でもある。亞米利加が此通りにしましたといへば、それで英吉利をも佛蘭西をも押しつけることが出來る。其極くよい例を私が拵へて上げませう。私は決して日本の不爲めを致しません」斯ういふのだ。兎に角ハルリスは嚇しつゝ、賺しつゝ、又正義を主張しつゝ、幕府の外交係を開國宗に改宗させて了つた。六時間演說の後の談判は進行が非常に早い。もう二月經つか經たぬに條約が出來上つた。十一月二十五日には條約の草案が出來上つた。日本の外交官は幕府時代から支那式ではない。こうだと思ひ込めば其通りやる。西だ、東だ、擦つた揉んだとやらない。其事の善惡を別として、これも日本式といふんだらう。

そこで其時の幕府は一寸開國主義になつて居る。少くとも堀田備中守が阿部伊勢守の後を繼いで老中の筆頭で勢力を振うた時代には開國主義になつて居る。なつたは好いが、サテどうしても動けない。祖法の鎖國主義に縛られてるからだ。その繩の結目は、京都の攘夷論の國權論でしつかりと握られてる。氣の毒な話で、金輪際動き様がない。ナニ京都は何程の事も無からうといふ考で、十二月の條約が出來る頃に林大學頭、津田半三郎などを京都に遣はして條約の承認を得ようとした。いかにも京都は何程の事も無い筈だがドッコイさうは行かない。堀田自身に出て來いといふ命令だ。そこで安政五年正月二十二日に堀田が上京をして居る。岩倉が働く幕が即ち此處で開かれてるのだ。

時の關白は九條尙忠公だ。これは隨分幕府と話のつき易い人であつた。堀田も亦非常に盛んなお遣ひ物を持つて行つた。そして先づ公卿達を買收したのだ。そして兎も角も條約の一件については幕府に御委任になる。「幕府では決して惡くは取計らひません、海內の人心の動搖も幕府で請合ひます」といふので、「それでは

よろしいといふ事になつた。そして九條關白の骨折りて、幕府御委任の勅答が出來上つた。それを聞いて岩倉は憤慨し出した。堀田が京都へ來て、公卿達の間で遣つて居ることなどが多分あの鋭い眼の玉の中に入つて居りましたらう。怪しからぬ事をする奴だと思ふた心が最初の動機で有つたでせう、が其の動機は早速岩倉の腹の中で國權論と王權論を結合させてる。其時堀田は存外機敏に働いたものと見へて正月二十二日に上京して二月の末頃には勅答案が成立つた。此勅答案の事を岩倉が直ぐ洩れ聞いた。相談相手は是も公卿中で有力な壯年血氣の大原三位重德卿だ。堀田は怪しからぬ奴だ。彼奴に致されて今聞くやうな勅答が出ては大變な事である。が堀田は譯のない男と思はれる。あれにくつついて來た二人の男がある。あれ等をやつつけなくてはならぬといふのだ。二人の男とは誰だ。即ち岩瀨肥後守に川路左衞門尉だ。殊に岩瀨の才氣はすばらしいものであつて、前年十二月十五日に通商條約の出來上る前に大小名を江戸城に呼び集め、開國主義の演說をやつた。普通ならば堀田がやるのであるが岩瀨にやらせたのである。何れハルリスから聞いた理屈を繰り返したのだらうが、實に滔々とやつて除けて、列座の大小名一言も半句もなかつた。餘程の辯才であつたものと見える。其辯才で以て京都方をやつつけようといふのであつたらう。川路といふ人は思慮のある、沈着な人で幕吏中の評判男であつたらしい。此兩人が早速大原と岩倉の眼の中に映つて來て居る。そこで岩倉がいふには、先づ第一に此兩人をやつつけなくてはならぬ。お前は川路の方へ行け、オレは岩瀨に行く。其後に九條關白へ押しかけて、そして勅答案を改めさせようといふのだ。大原は最も一徹の利かぬ氣の人だから、よろしい、やらう。然し若し岩瀨川路の兩人が聽かぬ時はどうするか、短刀で一衝きにしようぢやないかといふ。岩倉もよろしい。斯う話が極つた。「岩倉公實記」にはそれは三月十一日の晩だとなつて居る。何れこれは岩倉さんの日記にでもあることだらうと思ふ。そこで岩倉さんは久我大納言の處へ行つた。久我

は岩倉の先輩て、矢張り何時も相談相手だつたらしい。只今大原と箇様〳〵の約束をしました。暴虎馮河の譏はありませうが、此場合致方がありません。後の事はよろしく頼みます。と斯ういつた、それは忠義のお志忝けない。がもう其暇が無い。勅答案は明日御決定の筈だ。處が主上もあの勅答案には御不安心であらせらる〻。内々お話するが富小路左馬頭を通じて自分に宸翰を賜つた。何とかして此勅答案を更へる工夫が無からうかといふ事がお上から出て居るんだ。さういふ切迫の狀態だ。だからお前達が岩瀨川路などを說破して居る暇が無いぞよといはれた。そこて岩倉も驚いて早速大原と協議して緊急運動を始めた。そして二人てもつて即夜堂上公卿の邸宅を叩き廻つた。中山大納言忠能卿、正親町三條實愛卿(嵯峨侯)を筆頭にして、百軒ばかりも叩き廻つたといふ事だ。京都は廣くない處で、殊に公卿達の邸宅は禁裏の周圍にかたまつて居たさうだから、足は棒にもならなかつたらうが、一々に事由を話して集まつて貰ふ事にしたのだから、舌は硬くこつて咽は乾上がつたらう。なんでも其夜の明くる迄、叩き廻つて叩き起しては說き〳〵して、其翌十四日禁裏の御番所といふ所に八十八人の堂上公卿を集めた。血の廻りの餘りに善くない方も有つたらうに、それを八十八人まで集めたのだから、岩倉大原二人の權幕が餘程烈しかつたてせうよ。今の貴族中にも三爵議員の選擧運動になら、こんな事をする人が有るかも知れぬ。

サテそこて一の書面が出來上つた。詰り關東に御委任といふ事はよろしくありません。關東に再考をお促しになつて然るべしといふ趣意である。其書面を拵へて、九條關白に出す積りてあつた。處が九條さんは翌日參內がない。それ九條關白の家へ押しかけよといふので、衣冠の人々八十八人、沓をはくのが面倒だと、禁裏の艸履をもらつて驅付けて、一同てどや〳〵と上り込んて座り込んで、其夜の夜半まで談判をした。さうすると始めは逃げて隱れて居た九條さんも兎も角も御申込の事は承知した、と其家來に挨拶させた。出來る丈けの盡力をしませうとも答へられたから、みんな引下つ

た。がどうもそれ丈けては心元ないと見えて、此同志は決して誓を變へぬといふ申合せを作つた。其第一箇條には今度列參の面々は今後一致誠忠を盡し奉るべきこと〻ある。それから血氣に任せて輕率の振舞なき事とか、此申合せは親戚と雖も洩らすなといふやうな事がある。これは非批準論若くは對幕批準權爭ひを主義とする京都公卿の連判帳とも云ふ可きものだ。其れに馳せ加はる人も追々に出て來た。東久世伯の名なども見へて來た。三條公は其頃まてゐない。多分實父の實萬公の方が心配されたものらしい。近衛忠熙卿などもあの勅答には反對てあつたけれども、之は又別途て働いた。然し矢張り岩倉、大原の二卿が成功して目的を達した。勅答案は大抵岩倉等の思ひ通りになつて堀田備中志を遂げずして引下つた。そして王權回復の一大横杆がはね上る事になつた。岩倉の政治運動は第一着に大成功だ。岩倉の傳記を古代風の繪卷物にしたら、衣冠の堂上八十八人が九條關白邸に詰懸けて壯士的論判をやる處は、土佐の名手に描せて、壓卷出色なものが出來ませう。

此時に岩倉公は「神州萬歲策」といふものを作つて居る。此時岩倉の役目は侍從であつたからして、矢張り先帝の御左右に普段出入するといふ機會を持つて居る。列參の面々の忠義の次第は無理ならぬ事と思召すといふ御沙汰があつたから、其れを機會として「神州萬歲策」を書いて、私の考は之れ〳〵て御坐ると申し上げて居る、隨分長い文章だ。がこれで岩倉公の卓拔優越の識見が充分に見えて居る。龍は上天せぬ中から矢ッ張り龍だ。これて見ると、明治になつてから岩倉公がエラクなつたのてはない。安政五年頃からして後に劣らぬ器量を持ち、思慮も策略も充分ある政治家てあることを示して居る。殊に其識見の點。之れは此時代には幕府にもなく、又諸藩を通じても有るか無いか疑問だ。文章もなか〳〵よい。勿論今日からいへば不充分の箇所もあるが、中には今日と雖も美事な見識が歷々としてあらはれて居る。それを摘み出してお話をすれば、ハルリスの作つた條約の中て、外國人の日本

人に對する罪人を向ふの國法で處分するといふ事は最も許すべからざる事だとある。詰り治外法權反對論だ。日本の近世式國權論で破天荒では有るまいか。そして斯ういふ事がある。「前の下田條約の方はまだ増しだ。此度の條約にはこういふ不都合な約束がある。今後いよ〳〵數ケ國と條約を結んで、數ケ所の港を開くことになれば、外國の商館も澤山に出來るだらう。さうすれば其商人等は日本の商人とも喧嘩口論をするだらう。又詐僞をする奴も入つて來るに違ひない。其他いろ〳〵の犯罪をするものがあるに定まつて居る。其場合に其異人を日本で裁判せずして、それを外國に任するといふ事は切齒扼腕すべき事で御坐います、」と斯ういふんだ。

そこで朝廷で只空論で以て無理をいふように取られてはよろしくない。どうすればよいかといふに、私には策があります。と出て居る。そして其策が亦政治的で、一種の國際的政治的で雄拔絶倫だ。大體の方針は兎も角も下田條約のまゝで今少し過したい。そこで今度の談判については改めて委員を選び、蘇張の辯を揮つてハルリスと折衝せしめる。其主旨は、合衆國の大統領が格別の誠意を以て特別の使節を日本に送られた親切に對しては、日本の天皇も深く感謝して居る。厚くお禮を申す。今や世界の形勢が大變革を起して居るといふ事はハルリスのいはるゝ所によつて御承知に相成つた。如何にも我日本も二百餘年の鎖國を變革すべき時機に際會して居ると思召さるゝ。（こゝを見ると開國論のやうだが、まだ全くはさうでもない）然るに今合衆國と此度の通商條約を結ぶとなれば、外の國から全じやうに望んで來るに違ひない。又日本でも亞米利加に許すからには外の國にも許すといふ意志を持つて居る。ついてはお前の國と條約を結ぶ前に日本の使節をお前の國へ遣りたい。又條約を結ばうとする外の國へもやりたい。そして通商條約を結ぶについて外國の制度文物風俗習慣も知りたい。産業の状態、經濟の實況も視察して、そして有無相通ずるの道を開きたい。日本にあるものと無いもの、外國に餘りあるものと不

足なもの、それ等の取調をした上で通商條約を結びたいのである。今深くも研究せずして輕率に條約を結んで、双方の禍を招ぐのは日本の好まざる所である。それて日本から使節を出して、御好意に對するお禮も述べ又前述の取調をしたいのである。どうぞ其手引をして貰ひたい。又お願がある。外ではない。船を貸して貰ひたい。斯ういふ談判をしようといふんだ。獨得獨創、オリヂナリチイが有つて面白いでせう。

そして無論幕府と仝じやうに其間に軍備を修めやうといふ事もあるが、其中に特に岩倉公の識見の特異を示す處がある。日本は島國である。そこて産物の運輸は船でやる。若し戰爭で以て其船を衝き毀されると日本は立往生をする。それで造船に關する意見も書いてある。それから後の公武一致論の端緒も其中に見えて居る。徳川幕府の遣り方はいよ〳〵不屆千萬だ。堀田の不都合だばかりでない。幕府の書面の口上も一々不都合である。然しながら只今幕府と敵手になるのはよろしくない。幕府に對しても勅使をお出しになるがよろしからうと思ふ。懇々とお說きになつて、幕府に奉公させなくてはならぬ。且つ三家三卿などにも幕府を輔佐する方針をお示しになるがよろしい。何故幕府を守り立てなくてはならぬかといへば、東國には伊達上杉がある。西國には毛利島津がある。四國には山内、蜂須賀がある。北陸には前田がある。此等をお賴みになつて、我手足にして幕府をやつつけて了ふことも容易なやうにも思はれる。然し朝廷に確固たる主義方針が定まらずして徒らに幕府に對して爭の端緒を開けば、どうかすると又承久元弘の例に陷る恐があるのみならず、諸大藩の中には朝廷のお爲めを計らずして徳川に取つて代らうとする野心を抱くものが必らず出て來る。第一の徳川を倒して更らに第二の徳川を作り出すことは不得策である。徳川は憎いが大事の前の小事ですから、只今徳川を敵手にするのはよろしくありません。今日の事は朝廷の大事でもあれば、又徳川の大事でもある。徳川でも其事は分つて居らぬ事はありませんとも書いてある。

若し前に擧げた方針でやつて、亞米利加と談判が破裂したならば戰爭をやりませう。戰爭も辭しない。日本は小國には候へ共、楠正成が千早城に立籠つて六十餘州の大兵を引受けて建武の中興をやつた例もあります。北條の軍中から足利も新田も出てまゐりました。世界は亞米利加のみには限りません。外の國もありませう。其中には亞米利加と一所になる敵も出て來ませうが又味方も出て來る。日本は火器に於ては外國に劣るけれども、短兵戰に於ては決して劣りません。隨分四五年は戰爭をすることが出來やうと思はれる。そして亞米利加の獨立戰爭の話が引いてある。亞米利加といふ國も其獨立の爲めに英吉利に抵抗して、其抗抵を五年間も續けた。楠正成に味方が出て來たやうに亞米利加にも味方が出て來た。そしてとう〳〵英吉利に勝ちました。日本も止むを得ない時は戰爭をしませう。斯ういふ論もある。アルチメタムで機先を制せられぬ様との用意は、議論だけでも堂々と具はつてる。それからもう一つ其時の人にしてはエライと思ふ事は財政上の議論が書いてある。國威宣揚の爲めに戰をするについては貨財の融通といふ事が至極大事である。これについては諸藩の紙幣を禁じて朝廷で金銀紙幣を發行する。それを幕府にも諸藩にも貸す。流通が若しわるくなれば、金銀の硬貨の通用を總て禁じて了ふ。そして其間に佐渡なり但馬なりの金銀鑛をあらん限り堀り出して、三十年なり五十年なりの中に兌換の準備をする。紙幣の流通高といふものは一寸調査の六つかしいもので、多くなれば價が安くなるものださうですから、之は卓識の人に相談をして其高を定めませう。斯ういふ事も書いてある。徹頭徹尾政治家的だ。兎も角經濟財政家的だ。こういふ意見は維新の三傑といはれた人にもありますまい。西鄕は岩倉公とは仝年位だが、無論こういふ意見が立たない。大久保も御維新前後なら格別、此時迄は矢張り立て得まい。木戸も無論駄目だ。其外幕府諸藩の大小名、役人を見渡した所で之に匹敵する意見が立つか立たぬか。私は疑問だと思ふ。

經濟財政上の意見となると、日本の古い處では近世の歐羅巴の經濟財政上の知識に對しては無論いけない。けれども岩倉さんの此意見は十七世紀末十八世紀の初まり頃なら比較になる。名宰相チュルゴーあたりの意見には追つくかも知れない。岩倉公が斯ういふ事を言ふたり書いたりしたものだから其時の朝廷に嶄然頭角を顯はしたのは不思議はない。先帝も餘程其器局を信用されたやうに見える。其後引續いて和宮御降嫁――即ち和宮を十四代將軍の御專所に賜はるといふ事について、岩倉が殆ど一人で又大に盡力されたやうに見える。

然るに和宮御降嫁の始まる前に、岩倉が奸物といはれて、其爲めに其後譴責を受くることになつた事件の芽が吹き出して居る。堀田備中は追ひ歸された。追ひ歸したものゝ、岩倉の腹の中には無論德川を使はうといふ巧みがある。だものだから和宮御降嫁の事にも骨を折つて、幕府に近づかうとして居る。て幕府の全權公使にも當る京都の所司代にも折入つて交際をした。時の所司代は若州小濱の城主酒井若狹守だ。恰度安政五年中の事だ。此人に自分で面會をして、朝廷で堀田を追歸した理由をも述べ、又それに對する幕府の感情をも訊いて居る。仝時に禁裏の御不自由な事を盛んに訴へて、そして大膳の方から差上る召上り物を持つて來て若狹守に食はせてまで見た。肴などは腐つて居るし、酒は水七分酒三分であつたといふ事だ。之には酒井も驚いて、私の用ひて居る粗酒を差上げて吳れといふて其瓶に酒を差上けたといふ事だ。此酒井若狹守は井伊掃部頭の手下であるが、岩倉公はそれを使ふ氣だ。そして殊に和宮御降嫁の事に骨を折らせた。之が岩倉は奸物だといふ嫌疑を蒙つた元になつて居る。

それから岩倉公の黜けられた理由が今一つある樣だ。水戸に密勅が下つた。岩倉公は其密勅に反對して居る。密勅の下つたのは安政五年八月三日だ。卽ち先帝御逆鱗で退位の御沙汰があつた善後の一案といつても好いもので、此密勅の主張者は近衞忠煕卿、三條實萬卿であつて、井伊掃部頭が安政五年四月二十五日に

大老職に就任した四ヶ月後の事だ。話が少し脇道へ外れるやうだが、此井伊といふ人が亦研究物だ。井伊の内閣で徳川幕府は終焉を告げたといつて差支へ無からふ。とかく何人も勝ち氣でもつて、却つて大敗の因縁を造り出すもので、井伊も其れでせう。恰かも此時史家のよく言ふ幕府の繼嗣問題ぞ持上つて居た。十二代將軍家慶公に次いで十三代將軍になつたのは家定公。此家定公は人並の人で無かつた。生理上に故障があつて子供が出來ない。又非常に癇癖が強い。そこで安政三年の頃から、將軍がまだ三十を越してそこ〳〵になると、後繼が必要だといふ問題が起つて居る。其後繼に擬せられたのが慶喜公だ。慶喜公は後に十五代將軍になられたがあれは十四代になり損なつて十五代になつたのだ。此れを最も推したのは薩摩の島津齊彬公だ。西郷なども齊彬公の手先になつて熱心に運動した。又越前の松平春嶽公も橋本左内を手先に使つて同じく運動した。年長賢明の人を立てなくてはならぬといふ論だ。そして之には薩摩の手が最も深く入つて居る。といふのは十三代將軍の御臺所――即ち天璋院といふた人は齊彬公の養女である。薩摩は此天璋院を通じて將軍を動かさうとして居る。十二代の家慶公は家定公に子の出來ぬ事を知つて内々水戸に望を囑して居た。慶喜公は烈公の九番目の子、九郎丸だ。十一代將軍も一橋家から出た人で、一橋家は三家三卿の一つで幕府で子のない時は入つて後嗣になる資格がある。水戸から出て、此一橋家に入つてる慶喜公が養君として呼聲の高いのを幕府の後宮で分つて居る。處が大奥では一橋が非常に不評判だ。一體幕府の後宮といふものはなか〳〵手に負ひないものであつた相で、阿部伊勢守などは壯年美男子の宰相で大いに後宮にモテたに拘らず此人が廊下を通る時に、其處に女中などが出て居ると、其機嫌を取る爲めに金や何か撒き散らして拾はせて歩いたといふ事がある程、後宮の歡心を得るに苦心したものと見へる。處が一橋はどうも大奥の受けがよくない。水戸の御隱居樣は最もわるい。其息子も水戸式に育つて居るんだからよい筈がない。それに況んや

薩摩隼人の尻押しだ。大奥の氣に入る筈が無い。然し一橋を推すものはなか／＼多い。薩摩、越前の外に宇和島の伊達公、土佐の山内公。まア其時の强藩では皆一橋を推した。そこで其時に乘り込んで來たのは井伊だ。井伊掃部頭を世間では開國の本尊といふが、私にはどうもさう見えない。横濱に建てられた銅像も若し正直だつたら腹の中で少々極りがわるくないかと思つて居る。彦根あたりの人は怒るかも知れぬが、私は福地櫻痴の說に同意で、井伊が大老になつたのは本來一橋排斥を行はうとする後宮の代表者としてゞあつたと思ふ外はない。開國といふ大政綱のためでは無かつた。阿部伊勢守が後宮の人望によつて長く地位を維持した如く、井伊は一橋排斥の爲めに後宮から推されて大老になつたものらしい。十三代將軍自身も一橋を好まれない。天璋院の勸めに對しても頭を横に振らるゝ。將軍家の思召もさうだといふので後宮では何んとしても一橋を排斥する。それに紀州の河野土佐守とかいふ家老が大奥に運動して紀州家を押し立てから堪らない。大奥ではそれを迎へて藥師寺何の守を以て内々で井伊に說き立てた。井伊がそれを引受けて、一橋排斥をやらんが爲めに大老になつたものと云ふのです。さうして大老に立つて二月經つか經たぬに——即ち六月二十五日に紀州家から御養君を迎へる事を公然發表した。やがて一橋を推した藩々に皆譴責を喰はした。水戸の烈公は再たび押籠められた。松平春嶽公も隱居、山内容堂公も隱居。其下に使はれた者も皆捕へられた。西鄕が逃げて海に飛込んだ。橋本左内に殺された。所謂安政の大獄。幕府の開國論の外交家たる堀田一派が一橋に傾いたのを見て、皆之も廢めさせた。是などは開國大老のする事としては、どうも變だ。岩瀨肥後も閉門、川路左衞門も隱居。幕府の有力な開國主義者は殆んど皆追拂はれた。開國論の本尊が其手足を自ら喰ふ蛸坊主をやつた。こんな事をやるからには井伊の開國論はどうも當てにならない。が岩瀨等が堀田の差圖で拵へた開國通商條約には、目的の紀州擁立以前、勅許不用論でもつて、安政五年六月十九日に調印して仕舞

つたには相違ない。それを京都に向つては所謂宿次奉書て屆ッ放しにした。開國大老と言はるゝのは此に起つた譯てせうが、私に言はすれば是は開國のために條約締結をやつたといふよりも、寧ろ京都の批準權無視を事實て示すためにやつたと謂ふ可しだ。前者が三分の因由て、後者が七分だらう。爲に先帝の御逆鱗が甚しくて退位といふ事まて仰せられたのが、何よりの證據だ。退位の御決心は主として王權が蔑如せられたからといふのて起つたものてある。其事は井伊の條約專斷後十日の事てあつて、六月二十八日てある。これはモー實に危險な事て、皇室のため大危險、日本のためにも同樣、德川の命脈は勿論こゝに極まつた。御一新前後に渉つて、何が危險といつても、此時の此事くらい危險な事が有つたか無かつたか。「岩倉公實記」を見れば、六月二十八日に九條、近衞、鷹司、二條、久我、德大寺、中山、三條などの公卿を急に御前に召されて、御宸筆の勅書を賜はつた。其勅書の御趣意は位を避ける、御本心に違つた所置を幕府が行ふのを止め得ないのは歷代の皇祖皇宗に對しこ申譯がない。朕の進退は茲に谷まつた。それて讓位をする。其旨を幕府に申聞けよ。と縮めていへばさういふ御趣意てある。これを此儘關白以下が直に取次いて幕府に申聞けたら、さてどう成つたらう。井伊は強情我慢の最も烈しい人だ。却つて之を勿怪の幸ひとして、承久建武の例を平和て行つて、幕府に都合のよい天子を北朝――或は江戶朝として押出したらう。さて天下がそれて治まつたか何うか。無論治まる處てなく、水戶始め親藩さへ叛き出して、勤王藩々が皆德川を攻めかゝつて、幕府は結局往生したらう。三河武士の子孫の旗本八萬騎は腐れ切つて居たぢやないか。幕府の往生はどうせ極まつた事だが、さて日本は何うなつたらう。兵亂が永引く中に、いよ／＼拿破崙三世などに引懸けられて、他の列國にも分前を取られて、或は本州九州四國とそれ／＼分割されて、參つたかも知れぬ。一寸思つたゞけても銷魂せざるを得ぬ。處が幸ひ關白以下が恐惶しながら諫言をして、如何にも御最もて御座います。然し御讓位と

いふ事では根本が崩れますから、どうか其事丈けは思召返されて、今一應幕府の三家或は大老を京都に召出されて、御詰問あつては如何て御座いませうかと言上した。そこでそれでもよろしいと其議をお容れになる。然るに三家などの上京のしやうがない。其時にはもう譴責を喰らつて隱居或は蟄居させられて居る。水戸が第一、尾張や越前もさうてある。紀州はどうなつて居るかといふに、僅か十歳ばかりの人が世嗣になつて居る。井伊其人は此節柄江戸近海の防備がなか〳〵油斷がなりませんから、江戸を離れられませんといつて、其代理として間部下總守を上京せしめた。然し御讓位といふ御決心なんだから、そんな事で收まりやうがない。其場合にだ、井伊は續々無勅許の條約締結に及んだ。七月十日には露西亞のプーチヤンが登城し、十一日に日露條約に記名調印して居る。其前日の七月十日には和蘭も調印して居る。十八日にはロード、エルヂンが英國のに調印して居る。九月になつては佛蘭西のバロン、グルーが又調印をしたといふやうな譯だから打繼ぎ〳〵居ッ放しの宿次奉書の報告が京都に來た。井伊の積りでは、元來國政は大小となく關東に御委任になつて居る。開鎖一件てあつても、一々京都に伺ひ奉る必要が無いといふ。京都の方では今の言葉でいへば無論京都に條約の批准權があるといふ譯でありませう。それを幕府の方は自分の方にあるといふのだ。之は餘程重大な爭てある。王政復古の關鍵であるが、其鍵に手を懸るのは、京都の方で兎も角も機先を制してある。そして先帝が此時讓位の御決心をなされたといふのも、詰り批準權といふ大切な皇權が無くなつたから讓位するといふ御主意に相違ない。いよ〳〵國權の問題が皇權の問題と結び着いた。が此場合では皇權の方が主となつた。井伊は其れを知つたか知らぬか。無論知つて居つたでせう。其頃は九條の家來の何某に井伊の家來の長野主膳を附けて始終京都の狀況を報告させてゐたから分らぬ譯がない。が暗闇に黑牛の暴れたやうな井伊だから、頓着しなかつたんでせう。

恰度其時だ。水戸に密勅の出たのは。勿論密勅が出

るについては公卿達の詮議ばかりでなく、其れに出入する諸國の有志家連などが水戸の烈公への密書を勸めたかも知れない。けれども其主もなる人は近衛、鷹司、三條などであつたさうだ。岩倉公はそれに反對された。其時は岩倉は一侍從だから無論其議に與る位置でない。岩倉公は此事を聞いて、近衛公の所へ行つて、其議は宜しくあるまいといつて居る。其理由はどうかといふに、水戸の前中納言は今は蟄居して居らるゝ。其人に密勅を賜はつた所で、其人は何の働きをも爲し得ない。手も足も出なからうと思ふ。只幕府の内閣を激動させるばかりである。幕府はまだ總ての主權が自分にあると思ふて居るから、總ての詔勅に對しても幕府が裏書をしなくては承知しない事は分り切つて居る。それよりも表向きに關東へ勅使を下して、三家か一門の中て技倆もあり人望もある人を選り拔いて幕府の老中と協議して國事を定めるやうにとの勅使を出すがよろしい。此意見は極めて平凡だが幕府を激動させぬ丈けてもよいといつた。サア此あたりにも岩倉は奸物である、幕府の廻はし者であるといふ嫌疑を受けた因縁が籠つて居ませう。要するに岩倉の井伊に對する腹の中が一寸分らない。井伊と京都と既に極端と極端になつてる事は承知の筈だのに……。但岩倉のため辯護すれば、岩倉は諸大藩に對してまだ疑がある。下手にすると第二の徳川を出す。先づ〳〵徳川を使つた方がよいといふ考があつたから、井伊に對して却つて斷念しないで猶話が出來ると思うて居た譯でも有りますか。これは岩倉の一生を通じてあることだが、岩倉は何時でも調和論だ。水と油のやうなものでも調和することが出來ると思ふて居る。これは主として自分の勢力を過信する所から起る。もういかぬとなれば剛毅果斷でやるが、そこまで行かぬ中は調和だ。この傾きはずつと岩倉の一生を通じた事で、已に此時からも見えて居る。是は岩倉の癖だ。が然し、それは外の公卿達にはさうは見えぬ。又諸國の浪士仲間にもさうは見えぬ。だから極めて誤解され易い。此密勅反對の事は浪士仲間には知られなかつたかも知れぬが、そして又密勅の結果

は矢張り岩倉の意見通りて直接に何の効果も無かつたが、しかし此事も矢張り岩倉は悉皆徳川に買收されて居るといふ嫌疑を孕む可き一件に違ひない。そこへ以て來て和宮御降嫁の事について骨を折つた。それは井伊がやられた年、——即ち萬延元年の翌年である。

(次號完結)

與桂公爵勸政黨組織書

南海狂夫(寄)

桂公爵閣下、清國の政局は急轉直下して底止する所を知らず終に將に君主政治より共和政治に一變せんとす我金甌無缺の國體を有する國民を以て此の劇變に對する殆ど寒心に堪えざるものあり、閣下が卓拔の材幹と隆重の威望を以て我政局に當たり自ら對清政策を行ふ能はざりしは獨り帝國の不幸のみならず亦實に東亞の不幸なり、僕既に閣下の引退を以て其時機を得ざるものと確信し當時先輩知己の間に於て反覆之を切言せり然も既往は追ふべからず今日内外形勢に鑑みて將來の劃策を爲さんには最も宜く愼重遠慮すべし、決して苟安姑息を許すべきにあらず、僕熟ら考ふるに清國今回の政變は未だ其結果の如何を確むるに及ばずして早くも一種の波動を我政海に及ぼし來たるものあるべし、往昔北米合衆國の獨立を企圖するや歐洲諸國の有志者は自ら奮て米國に赴きて其獨立を援助し就中佛國人士の活動は最も見るべきものありしが米國獨立の結果佛國政界は其の波動を被むること甚しく爲めに革命の氣焔をして一層劇烈ならしめたるは閣下の熟知せらるゝ所路易王朝の悲慘なる末路を回想すれば今日尚畏怖の念を惹起するを免れず、而して現今の清廷を以て

路易王朝に比するに亦殆んど伯仲の間に在り特に清國革命の擧を援助するに於て日本人士の與りて功あるは寧ろ佛國人士に讓らんや、其の事情と境遇の相似たる如此何ぞ其の結果を同ふするの虞れ無きを保せんや、僕謂へらく我邦は萬世一系の皇室を戴き金甌無缺の國體を有するものなれば清國革命の波動が延て以て我皇室に危害を及ぼすが如きこと無きは明かなりと雖も滅滿興漢の旗幟は必ず我が政客志士に依り滅閥興黨の意味に轉用せられ清國に於て成功せし集團の勢力は行々必らず我國に於て一種の威力を結成せしむるの虞れ無しとせず、閣下夙に明敏神算を有せらる、今にして機を察し時に乘じて善後策を講ぜらるべきは疑ひを容れざる所なり

公爵閣下々々は既に政黨は必至の勢にして立憲政治の運用機關として若干の價値あることを認められたるならん、今や西園寺侯は政友會を率て臺閣に立ち閣下は貴族院の同志を糾合して之れが監視の地位に立てり、天下の政治を談ずるもの彼れに往かずんば必ず此れに來たらん、形勢分明嚮背の機自ら備はる、然るに閣下天下の輿望を負ひつゝ尚彼等をして敢て下風に趨る能はざらしむるものは何ぞや、曰く閣下自ら起て政黨を組織せざればなり貴族院に於ける閣下の同志者は明白に一種の政團たるを表示す、然るに閣下尚未だ天下の同志を招致して公黨を組織せざるは何ぞや蓋し時機の未だ熟せざるが故なる乎抑も亦別に見る所ありて然る乎、今や政友會内閣に反對するもの皆竊に意を閣下に屬し閣下が自ら起て政黨を組織すること故伊藤公の如くならんことを切望せり、彼の國民黨の如き多年逆境に處して累次の選擧に失敗困頓せる結果今や閣下に向て全黨を捧げ其の指導を請はんとするに至れり、閣下にして起つあらんか大多數の國民黨及び中央俱樂部の全部は固より政友會の一半も亦必らず來り投ぜん、是れ一擧にして大政黨を作るもの彼等の進退は一に懸て閣下の方寸に存ず、是れ豈に天の與ふる所にあらずや、天の與ふる所取らずんば却て禍を受く、國民黨が閣下に囑望するは多年の經歷上實に忍びざる所な

れ共尙且忍んで之を爲すは畢竟自衛上已むを得ざるものあればなり、故に閣下にして終に起たずんば彼等は絶望の極自暴自棄となり一切を擧げて犧牲に供し政友會に投降して以て閣下等一派に報復するに至らんこと必せり、是れ即ち滅滿興漢の滅閥興黨に轉化せるもの其の結果の畏るべき豫め察せざるべけんや、

夫れ貴族院に於ける閣下の同志は其勢力の博大に基礎の鞏固なる言を待たずと雖も之をして直接に政黨と折衝せしむるは政治上甚だ得策にあらざることは閣下の既に看取せらるゝ所ならん此故に閣下の爲めに計れば貴族院の勢力は牙城の地位にして衆議院の同志は其の外廓たらしめざるべからず而して政黨の勢力は天下に敷て國民を指導するものなれば閣下にして一旦政黨を組織せられん乎是れ即ち永久不敗の地位に立つもの實に萬全の長策と云はざるべからず

政黨組織の困難は先進有力者既に具に嘗めたる所なれば閣下も亦宜に殷鑑する所あらん、然も機會は人力を省き成功を容易ならしむ況んや政黨組織の難易は事業に在らずして寧ろ人物の如何に在り閣下の材幹と聲望を以て時機の好熟に投ずれば天下の事一擧にして定まらんのみ、閣下自ら大政黨を組織し之を訓練陶冶して以て一種の新機軸を出さんか乃ち憲政有終の美は自ら閣下の占有に歸し軍國の名宰相は又憲政の擁護者として長へに汗靑を照さんこと疑ふべからず、僕夙に斯に見る所あり陰に政局の開展に斡旋す其果して閣下の眞意と合致するや否やを知らずと雖も情理素と然らざるべからざるものあり閣下の神算恐らく違錯無きを信ずればなり、家に主たるもの尙子孫の計を爲す國家の元老たるもの亦豈後世の計を思はざるべけんや、自ら妄言の多罪を知ると雖も衷心一片耿々已む能はざるものあり敢て言を進む伏て希くは之を裁度せよ

頓首再拜

京都大學々生氣風

京都大學々生監　山本良吉

其一

自分の家風を問はれて、直ちに此く〳〵であると明に答へ得るものは恐らくあるまい。氣風は外部から批判的に觀て始めて明るものて、其氣風の中にあるものが捉へ得るものてはない。されば自分は本問題について彼是論議するには不適當の位置にあるものてある夫を敢てせよとの「公論」記者の需に應じたのは、之を論議するよりは、寧ろ世上には眞に知られて居ない此問題について攻究材料を提供するのを面白いと感じたからてある。

學生の氣風を造るに大きな影響あるものは主として三てある、曰く周圍の空氣、曰く教授の人格、曰く學生自身。今京都大學に於ける此三者について少しく考へて見たい。まづ周圍の空氣について考へて見やう。

京都大學の周圍は言ふまでもなく京都其物てある。京都の自然京都の人間がどういふものかは今更此に論ずるまでもなく、世上にいか程知れ亘つて居る。特に故藤岡博士が其「平安朝文學史」の始のクラシカルになつたともいふべき有名な章に於て詳述せられた事柄は、獨り平安朝の事實てあるのみならず、又確に現在京都の事實てある。京都大學が如何なる周圍の中にあるかを知らうとするならば、まづあの處に寫された京都の、南端には汽車が走り、京中には電鐵が通り、町々には種々の電線がかゝつて居るものを眼中に描いて見れば、重要な點は想像がつく。大體京都の天然は極めて靜的てある。四方の山は傾斜からいふと必ずしも緩くはないが、形に於ては頗る穩てある。其麓を洗ふ水は、色は極めて淸くて、夫が少しの波を起すのをも

恐れるかの如くに徐々に流れ行く。三方山で圍まれて居る勢か、風らしい風は殆どなく、雨も時々降るが、多くは霏々たる細雨で、自然を美化する力はあつても、人意を快にするともいふべき豪壯なのは極めて稀である。中春三月學年試驗の頃、其監督をしながら、窓から顏を出して、三十六峯或は近く或は遠く夢の如くに去來するのを見て、自ら四條派畫中の人となつた樣な氣持がしたことも往々あつた。此靜な自然の間にあつて、唯一つの變調とも見るべきものは雷鳴である。雷は京都では歷史的又は神話的になつて居り、今でも時々其暴威を此平穩な都の眞中に振ふが、其性質が通過的である上に、其時頃も概ね限られて居て、此唯一の除外例も大した影響を及ぼしさうにもない。

此靜な自然の間に生長した京都人は其氣象も亦極めて靜で、その嗜好する所も亦一體に平靜な調子を帶びて居る。今日は一般に殆ど普通紳士淑女の必須修養とも看做されて居る茶の湯も生花も共に此自然と同一調である。一枝一葉、一擧一動、シンメトリーとバランスとで以て固いスタビリチーを保つ方法の研究に至つては實に微妙の極に達して居る。もし外部から或る不可抗力的のものが來て其平靜を破壞すれば、或は其住民の釣合とか調和とかを思ふ念に影響したかも知れぬが、幸か不幸か、京都には餘り、さういふ力も加はらなかつたので、住民が此等美的性質を感ずる力が頗る強く、一寸坐るにも立つにも、花一本投げ込むにも、決して法に會はぬ事はしない。しないではない、出來ない。實に美的趣味の豐富なことは京都の特徵であつて、東京などの遙に及ばぬ所であらう。一寸市街を步いても家々の看板の大きさ色字の工合などが能く家の構造と釣合ふ樣に出來て居る。東京の本通りの亂雜を極めたものと同日に觀るべきではない。一寸使ふ道具でも、東京にはブリキの覺束ない蚊遣の道具が一つ十錢か十二錢位で賣つて居るが、京都の人は陶器の體裁のよいもので、坐敷へ出しても一寸可笑しくないものしか使はない。其價が東京のものの二倍であつてもかまはない。一般住居と調和したものを使ふか又は全く

使はぬか、此二者の間に京都人の選擇は常に往來するのである。

此修養を經るから、京都人は一種の美的品性を具へて居る。美的品性とはたゞ美術品を好むの義ではない。其擧動態度に於て如何にも整つた美的の所が多い。立居振舞に決して形のスタビリチーを失はない、又失ふまいと努める。餘りに夫を努める結果は活動せやうとの努力を減じ、新らしき或物を求めやうとの熱心を弱くし、よし夫等を求めても、只過去と釣合を失はない範圍に止める。特に久しく首府の名はありながら、常に政治の實際とは懸け離れ、山河襟帶の中に安居して天下の風雲とは風馬牛の關係を取つて居り、夫に對して何等加働的態度を取つた事はないから、一體に活動加働といふ教育は歴史的に出來て居ない。いつも過去に對し調和的釣合の取れた平靜な空氣中に生活する。從つて道德思想に於ても、亦活動の必然から來た清新の要素は寧ろ缺乏して居る。例へば其男女の關係の如きも或は千年の昔の有樣を其儘進歩せしめたものではあるまいか。京を環つて皆娼家なりと美文家が言つても非常の間違はない。夫に出入するものが獨り無教育無資産のものばかりではないが、なじみの賤業婦の一人や二人なければ紳士の體面に關係するといふ、虛言の樣な事實は獨り京都に於て見ることが出來る。中學校の教員の宴會に、公然賤業婦を揚げてもよいと考へる人は主に土着の人のみてある。此間の思想は根本的に他地方の教育ある階級と異つて居る。賤業婦との關係が既に一種正業的となつて居るから、賤業者が其顧客に對するにも亦賤業的趣味を脫して居る。御客にはなるべく安く遊ばせ、なるたけ金のかゝらぬ樣に細く長く續く樣にと心配するに至つては、眞に「盜路の門にも仁義存す」である。賤業婦が正業的關係を得ると同時に、正業者が亦賤業的關係少くも賤業的思想を抱くに至るは勿論想像し難くはない。

其二

形のスタビリチーを重んじ過ぎて非活動的習慣を養つた形跡は種々な方面に現れる。講釋師は上方の人が

煮豆を食はない理由をも此習慣に附けやうとする。今は大分煮豆賣も出來たので、此解釋法は幾分か嚴密の度を減ぜねばならぬ。尤も煮豆は今でも京都では相當の御馳走であつて、朝食などにムヤミに食ふべきものではない。煮豆を食はないと同じ理由は市民の歩き方にも現はれる。東京から來た學生はいつた、京都へ來て始一週間だけは東京風に歩いたが、夫を過ぎると自分も矢張京都化して別に向先見ずに歩かうとはしなくなつたと。電車に乘るのも活動の爲よりも寧ろ此非活動的習慣の結果てある。京都電車ののろい事は譬喩的になつたが、近頃大分速くなつた。併し之を要求するものは京都人ではなくて、田舍者で(?)あることは、京都人の乘降が今に譬喩の滿足（ファルフィルメント）たらざらんことをこれ恐れる樣なのでも明てある。非活動的習慣の最も明なのは新聞配達てある。何處の地方に新聞配達夫が下駄ばきで歩くものがあらう。京都では夫が左程珍らしくもない。走つて歩くのが偶（たま）にあると犬が吠えるかも知れぬ。配達の時間など殆ど當にはならぬ。今日は朝起きない中に來て居るかと思ふと、明日は朝食がすんでもまだ來ない。時には學校から歸ると來て居る。時間については何等の安心が出來ない。夫は牛乳の配達にも同樣である。新聞は一二時早くても晩くても自分等には大差はないが、牛乳になると明に迷惑を感ずるが、夫が新聞配達より激しくとも規則正しくはない。自分が始めて東京に行つて泊つたのは森川町一番地の下宿屋であつた。翌朝まだ起きもせぬ中から、煮豆！昆布卷！御花！切り立て！の叫聲と新聞配達のチンチンとが初夏の櫻の青葉繁き間を突きさいて耳を破つた愉快さは、二十年の今日、尚憶ひ出しても好い氣持である。平靜で調和を保つことを主とする京都人はあゝいふ突飛な、騷がしい、安眠を妨害する音は決して許容しない。安眠で思ひ付くのは、東京では午前七時前の電車には勞働者が滿載てあるが、京都では七時前には電車の數さへ少い。偶來れば空席が多い。邊りを見ても別に職人人足らしいものも歩いて居ない。大工を雇ふと、九時半頃のそ〳〵やつて來る、丁度局長位の

格てある。

九時半頃來た大工は、物の一時間計り煙草をのんで話をして居る。二時間足らずも仕事をすれば、もう午である。午休、お八つ（と京都でいふかどうかは知らぬが）、あれこれといつて一日の正味の仕事はまづ六時間には上るまい。官吏が八時間仕事をするのが多いとか少いとかいふ事は京都の職人には通用しない。之は自分が雇つた京都大工の實例である。東京よりは京都の建築の方が二割方高いといふが、何の事はない、京都の勞働力が二割方低いといふことである。尤も東京と比べて二割方高いものは建築の外にもいくらもある、其原因が單に勞働力にあるかどうかは分らないが、少くも勞働心の二割方低いことは疑はれまい。

見渡した處、仕事を力一パイまじめにしないのは京都一般の空氣であるが、此空氣は恐ろしい感化力をもつて居る。東京の樣な激しい中に生活したものでも、一度足を京都へ入れると直ぐ最少勞力主義となる。之は京都の雇主自身が認めて居ることであるが、京都で著しく東京に劣つて居るもの――之れはいくつもあるが、其手本として取り出すべきもの――は洋館と印刷とである。どんな京都ビイキの人も此二つに於ては京都の劣等を認めない譯には行くまいが、雇主の中には東京から相當な職人を呼び寄せたものもあるさうであるが、夫が京都へ來てものの一ヶ月もたつと全く京都式になつて、決して東京の樣なまじめな働き方をしないさうである。夫は雇主自身の心得も惡からう、同輩も惡からう、惡い原因を探せばいくらもあらうが、歸する所京都の空氣が惡い、そして其惡い空氣が、恐ろしい感化力といはうか腐敗力といはうかを有つて居ることになる。或學者が、もし京都人がまじめに働くならば、今京都人が總係りでして居る仕事は其半數で出來るといつたが、之は確に事實である、或は事實はもつとひどいかも知れぬ。此なまける不まじめな風は獨り下等の職工のみに止まるか、夫とも今少し高い處まで波及する力をもつて居るか。

とに角最少勞力で最大利益を――與へるのでない――

ー自分て得やうといふ工學的原理は京都商工業の根本主義てある。數てこなす、損して得する氣前は、あるかないか分らない。辻車を呼んても、餘程有利な條件てなければ決して立たない。客を乘せて走れば腹がへる。同じへらすには、割の合はぬへらし方は出來ない、午后途中て、「おい車、行かないか」といつても、間々「私はもう仕事はすんだのてす」といふ。一定以上の勞力は出す必要を感じない。如何なる場合ても、勞力と收入との經濟的最上限を失ふまいと計算する。勿論此に最大利益といふのは、自分を標準としたのてあるから、他人の利害乃至迷惑は左程考の中には入れる必要はない。各自が社會の一分子だなどいふ六ケしい新思想は深く注意を拂ふべきものてはない。正月の二日の晩は車夫の休てある。常得意の家て、旅行をするからといつて呼びにやつても決して來ない。大きなカバンなどある時には、別に人足を雇うて、主人は歩行しなければならぬ。電車に休日のないのは寧ろ不調和てある。商人にも組合が出來て居る。其規約が比較的正直に守られて居るらしい。一寸聞くと不思議の現象だが、其規約は多くは商人自己の利益を標準としたものてあるから、守られるのは當然てある。牛乳配達が惡い乳を配達する又は時間を正確に守らないから、別の者に配達を命ずると、組合の規約に反くそうてある。八百屋が不正直てあるから、他の方へ命じ、又は甚だしいのは、電話がなくて不便だから電話のある方へ變へやうとしても、夫が組合の規約上出來ないらしい。世の中には不正競爭防止法が入用てあると言はれるに、京都ては公正競爭妨害者處分法が欲しい。車夫が客を乘せて走るのに、前の車夫を走り越すことが出來ない。一體の商品についても、どうも價が生產費に比して高過ぎる。之も少勞多益主義から來たことてはあるまいか。下宿屋が三人か五人の客を置いて、夫て生活の出來るのも、恐らく同一の理によるのてあらう。下宿の序に一言するが、下宿屋の制度は矢張り東京風に十人二十人置いて堂々と專門的にやつた方が、萬事便利もよく又風儀上からも弊害が少い。三人五人家族とも客

とも分らぬ者が家の者と一集に長火鉢の脇にごろ〳〵して居るのは決して見よいものでもなく、又學生らしい事とも言はれない。學生には矢張り下宿屋のものなどは遙か眼下に見下して相手にもしない氣韻が欲しい。

競爭が激しくないから從つて貧富の差がひどくない。京都の最下級の民は車夫である。立ン坊もなければ、東京で見る樣な不體裁な紙屑拾ひも居ない。貧民窟はないではないが、夫を貧民窟と名づけるのは東京大阪などと比べた義理合上つけるので、實は此名をつけるべきものではない。小兒を學校へも出せば、保險にも入つて居る、正月になれば雜煮も食べる。よし財源は分らぬにしても、時々は其娘子が縮緬の被物をかぶることも見える。どうして貧民窟などとは勿體ない。出來るだけ競爭を避ける、最少勞力で最大報酬を得る時には、資本、健康、能力の大小は比較的其効力を少くする。個人的差別を去つて一般的安寧を計る、こゝに京都生活の難有い處が存する。

其三

競爭を罪として否認すると、一般に勵みがよくなる。進んで客の爲になる樣にしたつて別に金が多くまうかる譯でもない。こゝにも例の工學の原則を發揮して、なるべく自分の方から出す力の少くなる樣にする。客から注文を受けても、店の方で都合のよい時機を見計らつて製作に取りかゝる。客との約束などはどうでもよい。紺屋の明後日は舊い諺語であるが、京都では明後日主義は決して紺屋のみではない。寧ろ注文した品物はすべて期限通りには出來ないものと思ひ切つた方が安心である。本を注文しても、洋服を命じても、期限通に出來ることよりは出來ないことの方が多い。洗濯屋に日を定めて取りに來いといつても、どうしても夫が守れない。時間といふ觀念はどうも市中に行き亘つて居ない。小學校で式を行ふのに、何時出頭と生徒に命令する。生徒は其通りに出ても大抵は時間通りに始まらぬ。夫が學務委員とかいふ者の出頭を待つ爲だとは、教育を何と考へて居るのか。學校さへ時間を勵

行せぬ中に、不思議な事は、諺語的になつた紺屋の中には存外期限を嚴守するものもある。之は紺屋の名譽の爲に特書する必要がある。勿論夫が多數だとは言はぬ。自分は靴を京都人が非常に輕蔑して居る一階級のものにいつも注文するが、十五年間曾て期限を誤つた事はない。何だか道德の標準が一般の地方とは全く轉倒しては居らぬかと怪まれる。

此最小勞力主義と美的趣味とが婦人に於て合すると被物大事主義となる。春花秋葉に俄雨が降り出すと、湯卷を出して年頃の婦人が三々五々群衆の眞中を通り過ぐるの奇觀は、正しく此主義の結果を誇大的に示すもの、品性の美を損じても、被物の美觀だけはチャンと保つ所に面白い精神が溢れ出る樣な氣持がする。又此最少勞力主義が實生活の上に見られると、勞少うして報酬の多きを求めることゝなり、其風が激しくなると、道德上非難すべき所まで陷らぬとは限らない。不思議な事には、クリスチャンといへば他地方では大抵品行方正の異名位に見られて居るが、京都へ來ると其

ういふ印象は一般市民は持つて居ない。クリスチャンの首領が社長である一會社が莫大な逋税をしたのは言はずもがなであるが、其外クリスト教に屬して居る而も其内で相當の位置の人の中には、隨分如何はしい心事行爲を暴露する者があるとの噂を耳にする。夫等の人々が、京都人の中で比較的潔白な方かどうかは知らぬが、もし過を見て仁を知ることが出來るものならば、獨り此等のみを罪人にするのは殘酷かも知れない。京都の電車は區數で車賃が違ふ。町の曲り角で、誰でも其處まで來て乘降する必要があると思ふ處では、其角から一町計り先か手前かを一區の境とし、其乘降の必要な角まで來ると、僅一町計て一區分の賃金を拂はねばならぬ樣に出來て居る。自分等の鄕里では此る事をするものを非人根性として、非常に賤しむのであるが、京都では之が普通の利巧な方法として歡迎でもせられて居るのか、其後に出來る區間にも矢張り同樣の制度が行はれる。新聞が嘗て大に電鐵を非難した時にも、此點は餘り强くは書いてなかつたと記憶する。今少し

立派な考て公衆の便利を計り、曲り角までを一區とした方が、よし收入は少くとも、品位をば上げるてあらうに、最小勞力主義は品位などに注意することを許さない。不日出來るべき市設電鐵は、之と違つて眞に立派な京都精神を發揮する豫定てあらうが、夫が如何なる程度まて出來るものか。市費て下水溝を浚へる規定になつて居る。大きい町だけは浚へるが、小さい町は手もつけない。夫を責めると、小さい路次は公然の町てないから、溝も公然のものてないとやら。溝に公然と私設とあるのが既に妙てあるが、まさか市民の衞生には公然私設の區別もあるまい。同じ衞生費を取りながら、一部は浚へて一部は捨てゝ置く、之も少勞主義の結果と見れば見えるが、此る事を許してある市の事務て、私設の非人的電鐵とどれ程違つた電鐵が出來るかは見物てある。

此る不合理の事が行はれても、夫を市民は決してやかましく言はない。偶々夫を言ふと、さも氣違てでもある樣に看做される。市民の正義の觀念が決して鈍いわけてはない、正義の觀念をどこまても主張しやうとはしない、之が例の非活動性の結果てある。活動を非とすると、何ても大抵の事は良い加減にして置くこととなる。そんな事をやかましく言ひ立てたつて何程の利益が――自分に！――あるか。既に何程の利益といふ處に標準を取れば、大抵の事はまあ〳〵しない方が得てある。一の物事をするにも考へるにも終局的の處までは入らない、大抵の處て良い加減にして置く。善く言へば滿足し易い、惡しく言へばゴマカシの性質は、自我を何處までも押し立てないて、自然に打ち克つよりも滿足を自心の内に求める東洋人の通有性て、物質的文明不進の一原因とも見られ得るが、東洋の文明の一大貯藏地たる京都も固より此氣象に富んて居る。是が非てもやり通すといふ發動的勇猛力は、どちらかといへば京都の特徴とは言はれない。内的滿足とか思切りがよいとかいへば立派に聞えるが、其思ひ切りのよいのは、思ひ切つて外部に發動することとは反對てある。思ひ切りのよい人は執着心が少い、事物の奥の底

まで突き込む様な激しい事はなるべく避ける、深さが乏しくて、表面を塗抹する傾向をもつて來る。之は京都の藝術の上にも能く見られる樣な氣持がする。一寸言つても、團十郎の腹藝は有名なものであるが、京都てはそんなものは大禁物、泣くならば眼ぶちの膨れるまで泣かねば氣がすまぬ。東京の能樂の大きい型は京都人には餘りに大味と思はれて快感を減ずる。寶生流の腹の底から出る聲は、京都ては居合の稽古かと怪まれる。難方の掛聲ても、東京てはャーヲーと腹の底から迸出するが、京都ては咽喉の邊てやさしく輕く鳴る。小ジンマリと品よいと言はゞ言れるかも知れぬ。其代り狂言は流石は京都の附き物、山本東次郎の重くるしい說教調子は、茂山忠三郎の傍へもよられない。

仕事をする方面ても、藝術ても、道德ても、京都の特徵は先づ上述の性質を帶びて居る。自分の書き方は幾分誇大になつたかも知れぬが、あれが過敏な自分の神經に映じた其儘てある。もし少し誇大てあるとすれば、夫を縮少したものが即ち過去現在の京都と見てよい。其間に、否其儘の方に聳えて、其氣風に對し嚴然敵國の姿を有して居るものが即ち京都大學てある。京都大學は。京都からいへば千年の都に新空氣を入れる任務を帶びて居るもの。京都大學が過去に於て京都に影響した所は決して少くないが、將來に於ては益感化を與へるべき筈てあると同時に、京都も亦京都大學に對して少からぬ好意と少からぬ影響をもつて居ることは恐らく否認は出來まい。京都と京都大學とはかく相互感化助力して居るが、京都大學々生の氣風は決して京都ばかりによつて造られるものてはない、寧ろ直接に之に關係あるものは教授の人格思想てある。教授は實に大學々生氣風の根本力とも見るべきてある。

其四

教授か學生の氣風に對して有する力は種々てあるが、其研究の態度か最大の力を有することは明てある。研究の態度の强弱は教授の個人的性質によることが極めて多いから、一概に論ずることは出來まいが、さる個人的要素は自分の知る所てない、自分はたゞ京都の

地が研究に如何なる便宜を與へるかを見やう。

一、研究の便宜は研究の材料を得るの難易を第一に意味する。其點に於ては京都の有する便利は或は東京に劣るかも知れない。法律でいへば、種々の社會上の出來事が京都に起ることは少い爲に、實際問題に際會する必要が自然に少くなる。醫科で言へば、珍らしい病氣が京都に入り込むことが、どうしても他の都會、特に貧富の差のひどい種々の階級が雜處する處程には多くない。他の分科についても同樣の事が言へる。併しよく考へて見れば、此る材料は研究者の考如何によつては得るに左程六ヶしくはない。特に交通機關の自由な世の中に於て、決して左程困難を感ずる譯はない。其證據には、例へば京都醫科が毎年發表する研究事項は他の同科に比して優るとも少しも劣る所はない。便利の多少が主觀的努力でどうでも變じ得ることは、日常の生活とても同じである。(現在社會の出來事を對象としない科にあつては、此不便は——もしありとしても——全く感じない事は別に說くにも及ばない。)之に反して京都大學には非常に研究に都合のよい事情がいくらもある。

二、帝國活動の中心と離れて居る爲に、實社會との交涉が少い、即ち實社會から教授に向つて種々研究以外の事を要求して來ることが少い。之は研究の爲には非常に結構な事で東京當りに生活する學者の恐らく夢想し得ない所であらう。

三、社會の刺戟が少くて研究者の注意を外へ向けることが少い。如何に學問專門のものといつても、餘りに窓外がやかましいと、思はず其方を向く氣になる。一度向き、二度向く。之が研究の大妨害である。騷々しい社會には切れ〳〵の間に合ふ仕事はいくらも出來やうが、眞の深い研究は其産物ではありにくい。京都大學々生は此點に於ても非常に幸な位置に居る、眞にまじめな教授の研究態度に接することが出來る。まじめならぬ態度とは何か。研究を全く疏外にするのも夫であるが、更にまじめならぬのは、學問以外の或目的の爲に研究し其爲に學說を建設することである。之は

まずく行くと研究者其人の人格を破壊するのみならず、就いて學ぶ所の學生をして、自己義務に不忠實ならしめ、利害の爲には本務を捨てるをも辭さない輕薄な風を養ふ事となる。教授は種々の點に於て學生に影響すべく期待されて居るが、其中最も當り前の事として望まれるのは其講義である。講義の背景には深い研究の山が高く聳えるのを必要とする。若し研究の態度がまじめであるならば、夫程學生を影響するものはない。研究に對するまじめな態度は、學生の眼には人生に對する至誠の精神として映ずる。京都大學々生の氣風が京都の一偶に孤立した明星として、少くも全京都文明區域に對して輝かねばならぬ理由は之て以て明てあらう。

しかし學生の氣風は他人が造り得るものではない、學生の氣風を造る者はたゞ學生自身である。こゝて最終に學生に述べ及ばねばならぬ。

其　五

一、學生の研究心　學生の研究心の起り易くなつて居るのは實に京都大學の一特徴であらう。何によつて然らうか。其一は試問制度である。之は分科によつて多少の差異はあるが、大體に於て、一科の成績不成績によつて原級に止める方針を取らない、在學三年又は四年の中て既終學科全部の試驗さへ通過すれば、夫て卒業の資格がつく。學生は自分て好きな樣に計畫を立てゝ、自分に最も有利である樣に勉强することが出來る。何年の何の學科の試問を受けねばならぬといふ强制は少しもない。學生は單に規則に合ふ樣にと勉强はしないで、自分の目的に合つた樣にすることが出來る。努力の源が外から來ないて内から起る、研究したいから研究する。學生として此程高尚な者はあるまい。

此制度は一見樂な樣であるが、實は非常な困難がある。(第一)試驗制度であると、一科二科力の少し弱い學科があつても、大體の平均を見て夫を救ふことも、すれば出來なくはないが、試問制度ては大體といふことが全くない。各教授は銘々に朱點する、何等統一する必要がないから、各學科共に適當の點數がなければ

卒業の資格が得られない。之は内部の事情であるが、(第二)試驗制度の樣に試驗を受けねばならぬといふ規定上の强迫がないから、學生自身に於て非常に强い意志がないと、所定年限の終りに於て當り前の卒業が出來なくなる。不斷の勤怠は一年の末には現はれないで、三年四年の終を待つことゝなる。此困難を豫知して、始から規則正しく勉强するのは實に意志の好鍛錬である。尤も此制度を利用して、自由に其精神上研究上の利益を受ける學生の多いと同時に、此制度を利用し得ないものも亦あり得るわけである。

二、實地的學習　學生の數の少いのも一の原因であらうが、一體に研究の方法が實地的である。單に講義を聽いてノートを筆記暗誦するといふよりも、實地につき、實物を手にして其上で學習する。眼底の檢査が出來ないで卒業する者は一人もないとは往々醫科學生の誇稱する所であるか、醫科だけではない、此氣風は大學一般に行き亘つて居る。

三、統一の方法　學問研究以外、學生も諸についていへば、學内にはすべての點に於て統一が出來て居る。學生には京都大學の一員であるといふ觀念が常に起り又起り得る樣に出來て居る。之は一は學生の數の少いからでもあらうが、學生も各自其統一機關の要部となつて働き、其爲に盡すのを分とする。現今各分科の會の外に、全大會を通じて運動會もあれば、以文會といふ文的會合もある。運動會には七部あり、臨時に八部となることもある。以文會では一年二回大茶話會を開き、學内一同會合する外、時々小茶話會をも開く。其他雜誌を發刊して諸種の報告により學内各部の消息を互に相通知することゝなる。之等は皆學生の委員が九分通り擔當するのであつて、會其ものが學内の統一機關たるは勿論、學生が代る〳〵其委員となつて働くによつて益々統一的思想を深くする。追つて卒業生も右等の會の會員となることでもならば、縱にも在學者の關係がついて益々其統一を深くする譯である。寄宿舍の存在が此學内の統一上主な力であることは別に說くまでもない。今や其改築の事に定まつて居る。

四、學内の親和　右に述べた以文會の大茶話會は大仕掛の親和の組織であるが、各分科各教室共に研究、報告、及び和樂を兼ねた會合がある。多くは其會合がすんでから、或は敎室で、或は學生集會場で、敎官學生相集まつて茶菓を用ひ、又は輕い西洋料理を食つて接近親和する。集會場の階上には樂器もあればピンポンもあり、又簡易な新聞雜誌閲覽室もある。敎官學生でテンニスコートをもつて居る分科もあれば、運動部で學生と競技する敎官もある。土地に、接すべき人物の多くない京都では、學内に向つて夫々方法が人爲的に及び自然に講ぜられて居る。實に京都では大學々生の注意を引き得るものはたゞ大學敎授のみである、大學敎授が學生の一切の知識の注入者指導者である。そして大學敎授がすべての點に於て俗といふ字と反對であることは、此關係に於て特に注意する價値があらうと思ふ。

其　六

以上三要素の記述によつて、如何なる氣風が京都大學に出來て居るか又出來るべきであるかは想像し得らるゝことであらうと思ふ。京都は帝都を去ること十數時間、少い樣ではあるが、文明の傳達上には非常な距離である。中央で知り得べき天下の形勢ともいふべきものは、どうしても大分遲れて耳に入る。從つて點數の爲に熱狂し、順番をば立身の最大要件と考へ、鵜の目鷹の目で以て少しでもよい肉があらば飛び附かうといふ物騷な調子は京都學生の必要視する所ではなく、自由な制度の下に、靜に自分の氣に向いた勉強をするのをば學生の本務と心得る。社會からの刺戟は餘り强くない、從つて學生の自我を破壞する樣な力は外部からは來ない。學生は靜に其自我を保ち、其意向に從つて自分の生活をも方針をも定めることが出來る。學問の爲めに學問し、學問をば直ちに處世の方便視する偏狹なる考へ方を排斥するのは、學生の一理想でなくてはならぬ。數年前或制度が變へられやうとした時、其分科大學の學生が正々堂々反對の意見を發表したのは、全く其爲であつたのである。勿論一度出來た學風

は一部制度の改革の爲に變るものではなく、今も昨昔の氣風は事實として存在して居る。京都の下宿屋では、學生が音曲を弄しても之を斷ることになつて居ないので、他地方から來た人は先づ所謂自由な、氣に向いた勉强の程度を怪むが、夫は京都には下宿屋といふ專門業が少く、多くは一軒に三人か五人かを置く小規模のまね下宿屋であるから、そう多勢の學生が雜處することが少いからであらう。下宿屋も進化し、下宿人の種類も定まつて來れば、其中に音曲御斷り位の規約の出來るのは受合である。或分科の卒業生が卒業後奉職口を求める標準が、東京の同じ分科に比べると大分高い。これも矢張學問の爲に學問する精神の發表と見るべきものであらう。少しの金を取つて忙しく働くよりも、寧ろ靜に勉强して其蘊蓄を深くしたい、即ち應用を後にして根抵の培養を先にする。之は少し前に述べた研究の方針と其趣を一にする。よし少しは天下の形勢とやらに遲れることがあつても、小さな問題に局蹐し、自家修養又は國本の培養の樣な重大事件には關係もない諸小事件に氣を取られ、其爲に力み廻る如き陋習が此學生の間に全くないことは、誰にも推察は出來やう。

中央と十數時間の距離は、まと其最新傾向の感染を遲らすとは或はあるかも知れぬ。雜誌や新聞を通して夫に接する時は、勢、良きにせよ惡しきにせよ大分蒸溜したものとなつて來る。學内には夫をも常に氣にする人もなくはないが、夫は左樣氣にすべきものでもあるまい。大學は眞を研究する處である。眞は必ずしも新にあるとは限らない、寧ろ眞でこそ新であるとも云はれる。中央はいつも新を鼓吹する、夫に對して地方は多くは眞を主張する。兩力のレザルタントが即ち一國の文明とか國運とかいふべきものであらう。京都が新に接する度は遲い、間接である。其代り時代の通過的な一時的の傾向、又は根もない西洋輸入の氣風を尤らしく崇拜し、注意するに足りない事まで狂氣の樣に飛び附いて研究しなくてはならぬ樣な必要は少しもない。眞は何處にてもある、新らしい處にもあれば古い部分に

もある、文藝にもあれば歴史にもある。京都はどこまでも靜である、學生も亦靜に眞の眞に向つて研究することが出來る。時代といふ薄皮を取り去つた眞の意味の眞、之は騒がしい忙がしい刺戟多い處では恐らくは見る事は出來まい。

なる程京都には刺戟の少ない代りに一種の感化力はある。其中には善いのもあれば惡いのもある。どちらが多いかは各自の態度によつて違ふ。外部の感化は内部の受感性を豫想する。其感化に抵抗し、もし出來べくば其源を一部分なりとも涸らす方に盡力し、そして誠實に眞を研究し、其眞を背負つて社會に號叫する勇猛至誠の心、夫が出來て始めて京都大學の存在が定まるのであり、そして夫が幾分かづゝは實現せられて居る。國家が一大學で滿足しないものを、單に入學志望生の數に歸するのは餘りに淺薄である。社會の一時的狂熱から獨立し、加動的に考へ、加動的に研究し、自然の間に眞正の一集合個性を形成する、かくてこそ一以上の大學の存在が必要である。此覺識は確に京都帝國大學々生の心臟の中に鼓動して居る。

日本の利益を主眼として見たる支那問題

少くも滿洲問題の解決

玄黄子

國といふものゝ目的は私をしやう、大きな私をしやう、大きな私利私益を計らう、と斯ういふものであるならば、そりや支那の今度のやうな大騒動について投機的にエライ仕事をするといふやうな事を目論まれぬものでも無いかも知れない。けれども下手をやると大

變な事を仕出來す。利益が取られないばかりでなく大變な損害を惹き起す。獨り自分が損害を蒙るばかりでなく、人にも大迷惑をかけることになる。そこで單純に國の私を目的として利益を計るといふわけにはどうしても行かない。矢張り公平に自分も利益する、人も利益する、又今日問題となつて居る支那並びに支那人をも利益するといふ解決をつけなくてはならぬと私は思ふ。

處でどう解決をつけるか。こいつは餘程の大問題、且つ難問題だ。こんな大難問題にぶつつかつた事は近來の日本でも餘り澤山はないと私は思ふ。日本の地位として、どう旨く解決をつけるか、私はどうもつけられやうがないやうに思ふ。先づ無難に大損害が無い位の仕事は出來るかも知れない。處で今迄見た中で日本ばかりでない、外の國でも同樣である。支那の今度の變動について、初まりから終りまで見透しをつけて、確かな見解をつけた國は一つもないやうである。見解をつけると片つ端から打ち毀されて行く。手をつければ失敗する。もう手のつけやうがない。氣の毒な事には日本の當局者も少々失敗をやつたやうに見える。さればといつて英吉利は成功して居るかといへば、之も少しも成功してゐない。外の國々を見てもどこもどこも成功してゐない。只露西亞が少しやりかゝつた。多分蒙古は露西亞の中に入つて了ひませう。どうも支那人自らが支那を分割しやうといふやうな形勢が今日は見えて居る。南北に分割する、といふやうな話がある。北京が弱いから、多分南北分割でなく、革命軍が北京を追ひまくつて一時は支那を統一するかも知れない。然し多分清朝が統一して居つただけに統一することは六つかしくはないか。第一蒙古などが露西亞に入つて了ふことはないか。蒙古が露西亞に入れば多分西藏は英國に入つて了ひませう。つまり分割だ。それから革命黨の人達も理想はなか〳〵いろ〳〵あるやうである、けれども失敬ながら矢張り支那人風である。革命軍の兵隊が給料を貰ふて戰ふやうな有樣である。そんな革命はどこの國にだつてありやしない。其點からし

ても本當の革命かどうか疑はしい。詰る所主權の爭だ。主權の爭といふ事になると、今度は出來上つた共和政府に對しても爭ふものが出るかも知れない。つまり分割して割據する。さうなると一度は勝つても又毀れることになる。又そんな歷史は支那歷代を通じて澤山にある。統一が破れた曉には何時も群雄割據だ。周の破れた後には七國の割據、漢の破れた後には三國だ。晋の破れた後には五胡の亂だ。支那人と胡人と支那を分割して滅茶〳〵だ。そして隨分長い間爭うた。唐が之を統一して此統一は可なり大きく統一が出來た。けれども其後は又滅茶〳〵で、外は突厥、吐蕃、回紇などが起つて隨分端々を喰ひ嚙つた。內では藩鎭が謀叛をして、あつちにも獨立、こつちにも獨立といふ有樣であつた。其後の五代も亦分割だ。宋の統一のあとも又あの通りだ。金とか元とか遼とか、とう〳〵元の大豪傑が支那を併呑して了つたといふやうな譯である。統一の破れた後は何時も分割だ。群雄割據だ。矢張り支那はどこまでも支那的であらうと思ふ。今度も支那的に分割の端緒、群雄割據の端緒が開けはしないかと私は思ふ。支那大陸全部がグチャ〳〵になるといふ事を免れなからうと思ふ。只問題は革命黨にエライ豪傑が居るか居らんか。あの國を立憲君主制にしやうが、共和制にしやうが、名義や形式は兎に角、本當に統一して行くにはどうしてもデクテートアシップでなければならぬ。鐵腕で以てグイ〳〵締め附けなくてはならぬ。若し力が弱ければ隅々を喰ひ取られる。のみならず各所に豪傑が割據して、分割の勢を作り出す。それを抑へ附ける程の豪傑が革命黨にゐるかどうか。孫逸仙にしろ、黃興にしろ、まだそれ程の豪傑といふ見込がつかない。尤も三ケ月間にこれ程の事をしたんだからエライにはエライに違ひない。がそれ程の豪傑であるや否やは今迄の所まだ證據がない。矢張り支那的に見て統一が破れた時は、群雄割據、分割と見た方がよいんぢやないかと私は思ふ、もう已に其勢に乘じて、外の國は自分の利益を取り初めた。今迄は日本でも、ヤレ北京贔負だとか、上海贔負だとかいふて、人の角力を取

るのを桟敷から聲を立てゝ居るやうな有樣であつたけれども、さうして當局者がしくじつて贔負相撲をどつちつかずにして了つた、お抱へ力士を抱へ損つたと非難して居つたけれども——此時代はもう長くは續くまい。外國で利益を取り初めたからは、日本でも利益を取らねばならぬ。日本の當局は何をして居るかといふ非難が起るかも知れない。けれども日本の利益をどうするかといふ問題の道順は已に分つて居る。滿洲問題の決着でせう。

處でこゝで日本の外交方針の樞軸に大變動が起るといふ事がありはしまいか。日本ばかりでなく、外の國でも對支那の政策に大變動を起しはしまいか。從來の對支那の政策方針はどこの國でも保全、開放、機會均等といふ旗印で、つまり商賣本位であつた。處が今度の騷亂で商賣は滅茶〳〵だ。日本ばかりでも三月の間に二千萬圓ばかりも減じて居る。今年はもつと大きく減ずるに極つて居る。もう何處の國でも商賣ではいけなくなつて居る。そこで商賣目的の保全、開放、機會均等では仕樣がなくなつて居る。第一保全といつた所で、支那人自ら保全をしないとなると、外から保全のしやうがない、開放といつた所で、内でゴタ〳〵してゐては開放のしやうがない。又機會均等といつても今の有樣では利益の取りやうがない。多分從來の此方針は長くは持てなからうと思ふ。いよ〳〵爭がつゞいて支那がグヂヤ〳〵になるとすれば、日英同盟といふものがどうなるか。一體日英同盟はいふまでもなく、保全、開放、機會均等を基礎として成立つものである。此同盟がどうなるか。英吉利の政治家などはどう考へて居るか。勿論日英協議の上で支那問題を決めやうといふ考は兩方の政治家の頭に殘りませう。けれども今度はどういふ方針、どういふ政策で以て支那に對するか。といふ考よりも先きに先づ以て分割の端緒を開きはしないか。油斷をすると、機敏な獨逸などが、日露の間を橋渡しをして、例のオネスト、ブローカーを初めて、日露共同して滿洲分割を行はせて、英吉利の政治家に鼻をあかせるやうな事をしはしないか。

そこで此頃では成るべく最初にいつた通り、自分も利益する、他國も利益する、支那及び支那人も利益するといふ方針でやらねばならぬことは勿論だが、どうかすると暫らく支那及び支那人が問題外になつて、他國よりも自國の利益を主とするといふやうな事にはなりはしないか。氣の毒な事だ。若しさうなつたら、總て北京政府が結んで居つた條約類、協約類、それを革命政府がどういふ風に引受けるか。又引受けさせるか。多分列國が自分の利益の方丈けを主張して、不利益な方は成るべく認めぬやうにしはしまいか。さうなれば國際關係が益々複雜して、益々分割臭い方向に進んで行くことになる。結局大變亂だ。日本はどういふ利益をどういふ風にして取るか。一寸見當がつかない。が滿洲は間違なからう。それを取りはぐる位だと丸でゼロだ。外務省は閉店した方がよろしい。(完)

日本の利益を本としたる對支那革命策

伯爵 大隈重信

日本の利益を土臺として?、宜しい、何としても自分の利益を土臺とせねばならぬ。人間は元來利己的の動物である。最初は銘々自己本位で、自己の慾望を達し自己の利益を獲んが爲に互に爭奪したものに相違ない、がそれでは初中終不安で、何時他から不意に襲はれるか知れぬ、夜も碌々枕を高うして眠る譯に行かぬ。て此不安の念を去るには少くも隣保相和せなくては行かぬ、和するには自己の慾望を達せんとすると同時に又他人の慾望をも達せしめ、自己の利益を獲んとすると同時に、又他人の利益をも得しめてやらなくてはならぬ、此處で一部落一郷黨の團結が出來たが、尙ほその團結の力を以て更に他の部落、郷黨に當つて來た。干戈を執つて相鬪いて來た。が是では矢張り不安であ

る、て後には段々に輪廓を擴げて更に大なる團結を爲し、遂に一國を形成して其間には成るべく相殺し相奪うといふ樣な慘劇を演ぜぬ事に勉める。此の如く是も利己を本として居るのであるけれども個人道德なるものが出來、遂に國家道德なるものも出來るに至つたのだ、が今日では此國家と國家との間の結合がまだ十分でなく、從つて國際的道德なるものは左迄に發達して居らぬ。道德は國家内に限られて國際間には圓滿に行はるゝに至らぬ。國家内には訟が起れば直に裁判官が有つて公平なる判決を與へて呉れるけれども國際間には猶ほ此の如き權威を持つて曲直を裁斷して呉れるものがなく、爲に遺憾乍ら往々不祥な出來事を見るのである。が何も自己の慾望利益を棄てるでない、自己の慾望を達せんとするには他人の慾望をも達せしめ自己の利益を得んとすれば他人の利益をも得しむるが得策とすれば、所詮は世界の目的は平和にある、人類は相親しまなければならぬものである、是れが根本義である。

支那の内亂に對するとて別に變つた事はない、矢張り此根本義に於てせなければならぬ。日本の利益を土臺とするなら支那を助けなくてはいけぬ。支那を助くるは即ち日本を助くる所以である、此度の内亂の如きは頗る我國に損失を與へた。第一には商業の道が杜絶された、第二には軍艦を派し軍隊を送るなどに少からぬ費用を要する。損失たるや決して少くはないが、據ないから暫く是は忍ばねばならぬ。忍んで扨て徐ろに此間に處するの道を講ずれば今日の損失は或は轉じて他日の利益と爲らぬとは限らぬ。否左樣せなくてはならぬ。要するに支那の今日は凡てに於て後れて居る。其思想に於て。其政治に於て。皆後れて居る。現代的になつて居らぬ。是が進んで現代的に爲らぬ限りは列强對峙の中に競爭に堪へて行くことは出來ぬ。今の儘では折々飢饉があり、絶へず騷動が起る。是れ皆政治の不完全に本づく。凡てに於て改善せなくてはいけぬ。差當り港灣も築かねばならぬ、水利も起さねばならぬ。道路も開かねばならぬ。交通運輸の利便が得られればそ

れ丈運賃が省けて貨物も安くなる、すれば外國品も安値に入り内國品も安直に出せる、商業が振ひ貿易が盛になれば從つて國内の產業も盛になる。元々外からばかり買つて居る譯にはいかぬ、買ふには賣らねばならぬ。賣つて大に儲けて、其得た所で買はねばならぬ。それで國内の產業も商業繁盛の結果として又繁盛になるのだ。即ち農產物天產物が多くならねばならぬ。從つて又工業が續いて起らう、支那に此工業が大に起るといふ事は、一寸個人の利益本位で考へれば餘り日本に取つて喜ばしくない樣である。支那を重なる市場と賴む我國からすれば成るべく地を耕して農產物を富まし、山を堀つて天產物を裕にせしめ、それ等を原料品の儘に我國に持ち來り、それに加工して製造品として逆輸入をする方が利益であらう、が其樣なケチな事を企てたとて行はれぬ、進むべきものは進まなくては已まぬ。商業にして振ひ農業にして振へば所詮は二三十年にして工業も亦大に振はざるを得ぬ、それ故其樣な點に下らぬ神經を痛めずに、寧ろ進んで其運を助け、現在幼稚な彼を助け彼と提携し、共に商業もやれば農業もやる、そして更に大に工業に於ても協同し合體して大規模に企業を試むるが宜い。此くすれば支那人を啓發し善導し行く所以のものが即日本の利益となつて、我が商工業も爲に大に振ふ事となるのである。大慾は小慾に似たりといふ諺がある、高が二三十年ばかりの眼前の小利を貪つて彼等の感情を沮害し、永久の利益を失ふ樣な事をしてはならぬ。經濟の要は少しく勞して多く得るに在るといふ。若し此旋を錯濫して極端に至らしめるなら、泥棒ほど其理に合つたものはなかろう。人の每日額に汗して粒々貯蓄し得た富を、僅か一夜の勞力を以て奪い去つて仕舞う。これほど結構な商賣はない。それが見附かりさへしなければよい、が天網恢々疎にして洩さず、遂に見附かる。見附かると牢に入れられる。一晩で假に三百圓を盜んだとすると、一寸考へれば結構な樣だけれど、その爲に三年も牢に入れられるとすると、一月に割れば只七圓か八圓の所得で其上に一身の自由を奪はれて窮屈な生活をせねば

ならぬ。此度の騷ぎでも左樣である、僅か三圓ばかりの古い鐵砲を、日本の或る商人連は十五六圓にも賣込み、眼前の小利を貪るのに對して、獨逸あたりでは新しい鐵砲を安くしてドン／＼賣込んだ相だ。それで我國の或る一二の商人達は追拂はれたどの事だが、此の如きは實に大慾に似て甚だ無慾のもの、眼前の小利を射るに急にして、支那人に與ふる感觸、それが今後の我商業上に於ける影響等に對して甚だ愛へぬものである。

政體などは何でも宜しい、支那に君主政が施かれやうと共和政が施かれ樣と何でも宜しい、大した差はない、要は政體に在らずして政治の局に當る人の如何にある。君主政でも局に當る人その者が宜ければ其民は治まり其國は强大を致すが、それに反して好しや共和政であつたとしても局に當る人その者か惡ければ、其民は亂れ其國は弱小を來す。共和政必ずしも最善最良の政體ではない。實に共和政は十八世紀頃に盛に歐羅巴に唱へられた一種の狂熱に過ぎぬもので、之を實際に徵しては如何であろう、歐羅巴に於て佛蘭西の如きは共和政であつたけれども、君主政の英國の方が遙に國運は向上し、個人の自由は進められ民權は發達し、ビユーロークラシーの弊も少いでないが、ビユーロークラシーの弊は却て佛國の方が多きに堪へぬ。左樣な譯で政體などは如何だとて構つた事はないが、只支那の實際の政治は今迄通りでは迚もいかぬから、之を近代的に改めなくてはならぬ。中央行政より地方行政に至る迄大小の機關が凡て揃つて居らず、監獄もなければ裁判所もなく、警察も無いといふ有樣である、是では行かぬ、是より鋭意百政を釐革せねばならぬ、監獄でも裁判所でも將た警察でも、初は先づ日本から誰かが行つて指導せなければなるまい。其他軍隊に於ても左樣であろうし、財政に於ても亦左樣である、それには先づ金が要る。今色々外國からも金を貸さうと騷いで居る樣だが如何なるか、如何も旨く行き相もない。結局是も我國の力を借らずばなるまい。日本の歲計は特別會計を迄合せれば八九億圓にもなるが、彼の境土の大を以てしても僅か二億圓ほかない、それでは仕方も

ない、併し準備金でも作り紙幣でも發行して金融を通じ、徐々に財政を整理し課税も十分に行ひ得る樣になれば、大國の事だから十分の歲入が得らるゝてあろう。我國は最も近接の關係ある事とて色々肝入つてやらねばなるまい。支那と我國とは只同種同文などといふ空な字面の關係でなく、全く脣齒輔車といふ間柄である。それ故その一變一動は我國に取つては最早や對岸の火災處てはなく、實に焦眉の急である譯、東洋の平和を永遠に持續し、我國運を泰山の安きに置くには如何しても支那の保全を勉めなければならぬ、從つて其間に野心ある列國をば飽く迄日英同盟の力を以て阻止し、分割などいふ不祥の事の起らぬ樣にせねばならぬ、支那保全は實に日英同盟の楔子ともなつて居るのだから、其條約を空文たらしめまいとするなら、日英大に努力して、列國をして一指をも支那に染めさせぬ樣にせなければならぬ。平和が支那に於て保たれ、列國の野心を互に長ぜしむる事なきを得れば是が即ち世界の平和に與つて大なる力あるものである。軈て人類終局の目的とも吻合するものである。そして是が我日本に取つて一番の利益である。孔子は己を達せんとすれば先づ人を達すといふが是はいかぬ。何としても人は自己を忘れ得ぬ動物である。然るに自己を忘れて人に益すとせば是れ自然の性情に悖るものである僞善となる、僞善は宜くない。日本の支那を救ふは此僞善からてはいけぬ、自己の利益を忘れず、そして之を思ふが爲に、其處に支那を救はざるべからざる譯と爲るのである。

露國が野心を包藏し、外蒙古を獨立せしめて自分の保護國とし樣などとの風說が頻に傳へられて居るが、それは出來まい。尤も外蒙古から伊犂、新疆の背後は露國の勢力の及ぶ所で天山一路其最高頂の邊に迄達する、それから先はダラ〳〵下りて直に印度の平野となり上るには困難だが下るには甚だ容易な所だ、それは英國の領土に屬し、其ダージリンといふ地は氣候淸涼にしてカルカッタの大官連の避暑地として別莊などの多くある處になつて居る、即ち其邊は英國の繩張地內

てある、それと境を接しては西藏がある、斯くの如く英露兩國の繩張地が接觸して居るので、其處て各々勢力保全を勉むるべく色々の政策を行ふ。西藏の達賴喇嘛は支那政府の壓迫の下に印度に遁れて行つて居るが、英國は之を助けて又西藏に返し、法權、政權を再び其手に收めしめて支那人を其處より追出す位の事はするてあらう。伊犂、新疆も今より四十年前清露の間に十一年の交渉を重ねて漸く淸の領土に定まつた處、一時は干戈を動かさんとして長髮賊を平定した英雄の左宗棠が馳せ向ひ、軈ては支那の大政治家曾國藩が赴いて自ら談判の衝に當つたが、當時は支那の國力が尙外部に暴露せられず、支那の示威運動が露國に對して功を奏し、首尾好くも露國より讓歩することとなつたのである。それ故或は此機に乘じて何とかしたいといふ野心が露國にあるかも知れぬが、到底公然割有するといふ譯にはいくまい、矢張り商業なり、鐵道なり、炭山なりの利權を得て已むに止まるてあらう、外蒙古も克倫の喇嘛が獨立を宣言し、露國に據らんとするなどいふけれど、それに乘じて露國が直ちに自己の保護國とするといふ譯には行くまい。それが爲には日露協商があり、英露協商もある、更に日英同盟條約もある。單獨に勝手な處置は到底出來る事てない。

革命軍は只今の處ては略ぼ物になつて居る。病氣にも五期があつて第一には初期、第二には進期第三には極期、第四には退期、第五には回復期てあるが、革命軍は今は正に第二の進期に在る。是から第三の極期に入るのだが、それから後が如何なるものか、次第に頽潮を追うて回復期となるか、或は其間に又幾變動を生じて容易に治まり兼ねるかは豫め卜し難い、滿州朝廷は今の處ては甚だ危險てある。國運に四期あり、第一が安期、第二が衰期、第三が危期、第四が亡期だが、見受くる處ては今は第三の危期にあり、軈ては亡期に入らうとして居るとして宜い。最早や殆んど脉が無い樣だ。滿州八旗などといつて、一時は武力を以て雄を稱したものてあつたけれども、これも今は早や往日の俤がない。先づ革命軍が志を得るとして、其極期に至れ

ば、それより或は各省互に利を爭ひ相軋る事ともなるやも知れず、列國は又漸く是迄の借金の利子の催促などに掛りもしやうし、國歩は決して安穩ではない、頗る艱難を見るであらうと思ふ。が此際に列國で禍心を包藏し暴露する樣な事があつてはならぬ。支那の歴史を案ずるに、漢の武帝唐の大宗の如き皆兵を四境に出したものの、何れも自ら好んで他を侵略したものではなく、匈奴や、契丹や、突厥や、吐蕃や、此等の諸外國から四境に迫つたから國際上已むを得ず兵を出した迄である、支那國民は何らかといば平和な國民である。日本の如き其最も平和的國民であつて、廿七八年役に於ける、卅七八年役に於ける、皆自ら進んで干才を執つた譯でなく、前には支那の跋扈後には露西亞の跳梁に堪えずして已むなく自衛の結果に出た丈けでほかない、此の如く皆平和的國民であるから列國にして其心を心とするなら無事であるが、併し他の釁に乘じて强壓を加へる如き事をするとすれば、支那とても決して反噬しないものではあるまい。而して漢の武帝や唐の大宗の如き英雄兒の或は出て大いに反撥しないとも限らぬ。兎に角我の今日の計を爲すものは、飽く迄支那の保全でなくてはならぬ。

何方が如何でも宜い、平和にさへなれば

大倉喜八郎

政治などの事は私どもには分りません。刻々に變化し行く政治の局面などは分るもんでありませんわ。好しんば革命軍が勝つて共和政治にならうと、滿洲軍が勝つて現皇帝が位に居ろうと、我々には構がないぢやありませんか、私ども商人にすれば何の道でも早く型が着いて平和になれば宜いと思ふ丈ですよ。へい。列國政府でも其考で、それで互に相約して滿洲軍にも革命軍にも何れにも金を貸すまいといふ事にしてありまさあ。戰爭といつても金ですから、處が今何ちらも金が

無いのですて。金が無ければ戰爭がしたいにも出來ぬが、何ちらかに金を貢ぐとなると其方で戰爭を續ける、すると容易に平和にはならぬ理屈ですて、それで戰爭を早く止めさせたい計りに列國共に貸さぬ相談を決めて居るのでさあ。日本の政府の態度ですか、矢張り列國と步調を揃へる必要がある處から、政府としては金で何ちらを助けるといふ樣な事はしませぬて。互に大事を取つて向ふから何か要求でもあれば通知し合つて相談するといふ風ですの。併し個人としてする分には政府だつて仕方がありませんわ。それに干涉する譯はないから、個人の自由は奪はれませんからの、杭甬鐵道問題ですか、其借款に二百五十萬兩、此方の金で三百萬圓ばかり言ふて來てますが如何なる事ですやら、まだ分りやしません、私等や安田銀行とか言へば個人の經營だけに話も手つ取り早く定まるが株式組織の所は駄目ですわい。やれ株主會議だ何だといつて兎角石橋叩かねば渡らぬ方ですからの、損になるものか得になるものか分るものでない、だから此樣な場合になると皆が臆病になる。割合に意氣地がないですて。私どもは何だか此樣な場合には思ひ切つて出してやりたいですて。もつと金持つてるなら一人でもやりたいんですが。

戰爭で受けた商業の實際の打擊ですか、左樣なでもありませんの、矢張り仕送るものは仕送つて居ます、左樣なに危險といふ事もありませんわ、何しろ支那は大國だから衣服の料のキャラコ一反賣るにしても四億萬人あつて見れば大したもの、一圓と見積つても四億圓ですからの。獨逸の戰爭前後に於ける支那市場の受けは如何つていふんですか、大した變りはありませんの。獨逸の政府が如何樣な政略を用ゐたからつてそれは政治だけの事ですて。商人としては矢張り儲けなければなりませんわい、誰とでも組んで儲ける算段するんですわい。獨逸人は日本の市場ばかりでない、英吉利、佛蘭西、亞米利加の嫌ひなく、何處の市場でも蠶食し廻ります、ドン／＼安い品を作つて賣り込みますからの、それに模造品も澤山作る、此頃は珈琲迄模造

しますからの、珈琲といへば御承知の通り木から實を採つて煎り碎いて作るのだがそれを獨逸では大根で造ります、此れ程の大きさ(二尺程)のものを細かく切つて釜で煎り焦がして粉にすると、丁度本物の樣になる、それを何とも別な名を付けず、默つて珈琲として賣込むんですからの。何しろ値段が安いんだから支那の下等民は皆用ひますで。今は鐵砲を盛に賣込んで居ますの。が遠の親類近間の他人とやらいふから、支那人としては矢張り日本人と組む方が利益でさあ、それに同種同文で、支那人といつても日本人といつても一つの樣なもんですからの。私は十月の一日から四日迄北京へいつて居つて、それから安東縣の方へ廻つた時に早や革命軍の起つた騷を聞いたのでしたが、まだ起つたばかりで海の者とも山のものとも勿論見分けの付から樣のない時ですのに、不思議な事には至る處支那人が皆革命軍に謳歌して其勝利を喜び祈るといふ風でした。朝鮮へ廻つて歸つて來ましたが朝鮮に居るもの迄左樣でしたて、それで略ぼ形勢を考へました。何といつても最早や今日の戰爭は武器の良い惡い一つで定まります。一千ヤルドに屆く大砲と一千五百ヤルドに屆く大砲とで戰爭すれば屹度後の方のものが勝つに定まつたものです、が好い武器を買ふとあれば矢張り金だ、金が即ち戰爭の勝敗を定めるのですから何方にでも金のある方が勝ちまさあ。列國では早く平和にしたいといふので金を貸さぬ約束して居るが、併し大勢が定まつたとすれば其定まつた方に金を作つてやる事は尙ほ平和を早める事にもなる譯でさあ。中華銀行ですか、頻に民國政府の方では工夫して居るらしいがまだ物になりませぬ樣ですて、私等の處へは何も沙汰はありません。軍票が出來ましたて、彼方の支店から此伍元ののが送つて來ました、銀行でも作り紙幣でも出さなけあなりますまいが、併し今度の革命軍は大分考へて居る樣ですて。濫發などいふ滅多な事はせぬ樣ですの、商人の面白いのは斯ういふ時局の變り時だが、併し今は世界の商人が皆一處に注目して利を爭つて居るから大した旨い事も見當りませんが、それでもぼかんとして

居るてはなく、斯ういふ際に靜に色々の事を考へて觀て居ると面白いもんてすて。

小地主とならんよりも大なる商工業の顧客を作れ

福本日南

「日本の利益を主眼として見たる支那問題」は國人の攻究して、將來の成行に對し、豫め決定を與へて置かねばならぬ所てある。革命の紛亂以來種々の議論が續出する。第一に頭を擡げたものは分割論てある。此分割は我國に取つて利益てあるか、不利益てあるか。自分は之に對しては「支那は分割すべからず」と喝破するものてある。聞くが如くなれば露西亞は外蒙古中の諸汗等を懷柔して、此方面に手を著けやうとするらしい。又傳ふる所によれば英國は葱嶺の雪溶けを待つて、達賴喇嘛を西藏に送り込み、此の方面に大活動を初めやうとするかに見える。怖るべき分割の勢は此等の方面から開始せられはせぬかの恐がある。從つて日本は南北滿洲を割取して分割の利益に均霑せねばならぬなどゝいふ議論が一部に行はれる。果して之が利益てあらうか。若し之にして實現するとすれば、支那本部の分割問題が其後へに伴ふことが免れ難い。斯かる出來事を迎へて日本將來の立場を如何にせんとする。國策を知らぬも亦實に甚しといはねばならぬ。

抑も日英同盟は何が爲めに締結せられたか。以上の議論を正當とすれば、日英同盟は愚策てあつたといはねばならぬ。さりながらそれが愚策てない以上は同盟の精神を何處までも維持するに勗めねばならぬといふ事も分り切つた話てはないか。第一日本の利益は能ふ丈け列强の勢力を東洋に集中せざるにある。而して日英同盟は支那の領土を保全するを以て其目的とするが故に、列國勢力の緩衝は自ら此中に包含する。現在支那の領土は西は英國に、北は露西亞に接續するは接續

する。されども西方には亞細亞の天井に對し、西藏といふ障壁を周らして居る。又北はゴビの砂漠を中にして內外蒙古を以て萬里長城に代へてゐる。從つて支那本部は此等の障壁長城のお蔭によつて其安全を保せられてゐるではないか。今此西藏、蒙古を取り除けて英露の二强に與へるとすれば、二强の勢力は直接に支那本部を壓するに至る。本部の危殆は之より一層甚しきを加ふるのはいふまでもない。所謂支那分割即ち本部分割の大勢は一歩も二歩も進め來るではないか。此際日本は滿洲全部を割讓するとして當面何程の利益を收めるか。如何にも大陸の新地主となることは景氣よくは見える。然し今の時代に其廣漠たる大部面をロハで經營し得るものはなからう。前年來我國土に收めた朝鮮は何よりも餘師である。彼人口一千三百萬の一國である。之を經營するに今日約五千萬圓の國費を投じてゐるではないか。すれば人口一千六百萬の滿洲に對しては之より以上の國費を費さねばならぬといふ事は知れ切つた話である。之を費して此地方から幾何の利益を擧ぐるを得るか。之からして已に問題である。而して其傍らには大衆四億の漢人をして日本を敵視せしめ、よつて以て支那本部に對する我貿易の利益を失ふといふ事は何れが得、何れが失であらう。加之事茲に至れば英露以外の列强も手を拱して見てはゐない。各々先を爭うて支那の分割を企てるであらう。斯くなる時は我本國に於ける海陸軍備の如きも今日の儘では不足を感ずるに至るであらう。それで日本は實利を收むることは極く／＼僅少にして、爲めに國費を要することは無限となつて來る。現在の國費ですら國は持てぬといつて困んでゐるではないか。年來機嫌よく積極主義を唱へ來つた政友會の諸豪傑すら俄かに消極主義に傾いた今日、如何にして此廣大なる國費の要求に應ぜんとするか。之からして自分等には諒解することが出來ぬのである。

　次には支那の南北分立論がある。當局の一部の人までも、止むことなければ分立を認めるの外はないなどいうて居る。此等は眼前にある支那の狀勢乃至亂先

以來讀み來つた支那の歷史を忘れてゐる話である。滿といひ漢というて對立すればこそ違つた民族かの如き感があれど、其實をいへば今日は最早や分つべからざる同族である。全體蒙漢の混合せられた事は已に千餘年である。遼から金、金から元、元から淸に至るまで常に漢族と同居して其間の結婚が代々行はれる。今日に至つては名けて漢人滿人といへど、其面魂何處に相違があるか。同じ孔孟釋老の敎義を奉じ、同じ形象文字を用ひ、同じ習慣趣味に生活してゐる人民ではないか。之をして分立せしめやうとするのは一の空想に過ぎぬ。成る程長き歷史の間には彼漢族の間でも時には三國鼎立の時代をあらはしたり又は南北朝の對立を見た事もある。されどそれは一時の現象にして短かきは數年、長きも數十年にして皆再び一國に合する。尙詳しく之をいへば鼎立したり對立したりする其日から早く已に混一の準備をし來つたのである。加之あの平坦なる大陸の上に於て何處に分立の境域があるか。獨り之のみでない。南方一帶の物産饒かなるに反し、北方は概ね瘦地で、住民の常食とする米麥さへも大部分は南方に仰いで居る。分立しやうとしても如何にして出來やうか。尙又昨今の形勢に於て北京政府の僅かに保つ所は山東、山西、直隷と東三省である。それに河南の一部を加へた位に過ぎぬ。强いて此六省を以て國を成さうとするも成し得ざる證據を擧げて見やうか。現在支那の貿易市場は三十八ヶ所を數へる。其輸出入の貿易額は九億圓以上に達するのである。然るに以上六省に屬する貿易市場は幾何ありやと顧れば僅かに天津、秦皇島、牛莊、芝罘、安東縣、大東溝の六港に過ぎぬ。此六港の貿易額は合せて七千萬圓內外である。一方に八億三千餘萬圓の貿易を讓つて、殘る僅々七千萬圓に過ぎぬ貿易を以て一國を成さうといふ事は、今の時代に於て不可能の事である。これ丈けでも北帝國の存在すべからざる事は明瞭であらう。且つ此位の貿易を以て立つ所の北帝國は、內外蒙古をも兼轄せねばならぬ。到底出來るものではない。勢ひ蒙古の地方を擧げて露西亞に附するに至るべきは火を見るよりも明

かてある。尙進んて之をいへば豈たゞ蒙古のみならんや、其北帝國自身も自力にては存在すべからざるが故に、强いて其分立を長くせんと欲すれば南方勢力の薄弱なる地方、或は陝西或は甘肅等に向つて是非共領土を擴めねばならぬ。而して他の南方共和國は已に域内の十六省を有するが故に之も亦其勢力を以て次第に北帝國の併合を計るといふ事も亦勢である。すれば南北を分立せしめるとも、分立の當日より最早や再び戰爭にとりかゝる。從つて南北分立といふことは戰爭狀態の繼續で、之を言ひ換ふれば長期の休戰に過ぎぬ。其狀態が三年五年繼續すれば其期間東洋の平和を絕えず脅やかさるゝではないか。到底論にならぬ話である。て斯樣な議論は三文の値打もない。

今や日本は極めて不利益の地位に立たんとするのである。否立ちつゝあるのである。而して國を此狀態に導き入れたものは何人であるか。といへば問ふまでもなく官僚黨の長老連である。彼等の事理を解せざるや一日にあらず。此國を擧げて法治國とし、立憲國として以來二十餘年を經れども、彼等の頑頭は今に至つて法治國の何物たる、立憲國の何物たるを解しないのである。今其證據を御覽に入れやう。法治國の名譽は其下に來住する人民を安全に保護し、何人と雖も法治の樂を享有せしめる所にある。それて例へば英國の倫敦とか佛國の巴里とか或は瑞西のゼネーブとかに行つて御覽なさい。各國の革命黨は相携へて何時ても此等の都會に來集してゐるのである。露西亞の專制時代に於て此國の革命黨は常に揚言した。專制黨の都は聖彼斯堡てあれども、露西亞の自由の都は倫敦、巴里、ゼネーブであるというてゐるのても分る。此等の都會の中、巴里の如きは切つても切れぬ露佛同盟の其佛國の都てはないか。然るに露西亞政府の政策に全然反對する、其國からいへば叛賊叛民てあるものをドシ／＼入れて顧みぬのてある。蓋し此等英佛等の當局者は思惟するのてあらう。革命黨の逃亡者は其國の國事犯人てある。決して破廉恥なる常事犯人てはない。此等の奴輩が我國の法治に信賴して來住するのてあるから、其れにし

て我國內に於て我法律を犯さゞる限りは當然保護を與へねばならぬといふのである。若しも與國たる露國政府から何が故に斯の如き亡命者を收容し保護するかと詰責したらば、常事犯人にあらざる限りは何れの國人に對しても同一に取扱ふ、若しも一朝貴國に政變あつて、貴當局の人々が不幸の地位に立たれる場合には又何時にても御出下され、同じく充分の保護を與ふるてあらうといふのであらう。此處に法治國の名譽も進んていへば立憲國の名譽もあるのである。處が我日本政府のやり方は實に窮屈極つた、無法治國、非立憲國の政府の政策てある。之まて支那の革命黨に對する壓迫は如何てあつたか。孫逸仙ても黃興ても又は康有爲の一派ても、折角日本に信賴して投じ來つた連中を悉く國外に追拂つたてはないか。獨り之のみでなく、張之洞の世に在る時には、之と約束して支那學生にして法學を修めやうといふものは一切斥けて我國官私の諸學校に入校をせぬ方針を採つた。それは法學を修めさすれば權利の思想を生ずる。權利の思想を生ずれば革命の動機を作るといふのにある。隨分古ぼけた政見てはないか。而して此協約以後は如何にせしよと見れば、在東京の支那公使が保證する人物てなければ學校に入れぬ。其學科は理科や工科乃至は陸軍位に限つたのてある。爲めに一時は二萬以上に達した在京の支那學生は大いに憤慨して此國を去り、減じて五六千に落ちたのである。箇樣な無政策を以て漢人に對し來つたのであるから、根本からして支那南方の大衆は日本政府を敵視してゐるのである。お負けに今回變亂の初めに當つて日本政府は主として北京政府を助け、其上古いも古い、千七百年代の末葉に歐洲の世界に於て笑柄の歷史を留めた神聖同盟的の政策を排つて君主政體論を主張し、之を以て南方革命黨を壓服しやうとした根跡も亦歷々として掩ふべからざる所てある。其後に至つて俄かに先きの政策を引込め、今てこそ自由不干涉の態度を裝ひ、又決して最初より政體論などを用ひ出したことはないと口を極めて辯疏して居れども、天知る地

知るて、南方一帶の革命黨は日本政府の此等の擧を皆知つてゐるのである。聞くが如くなれば、上海に於て南北の講和委員が講和談判の開始中袁世凱からは唐紹怡に向つて日々電報を發して日本政府の北京朝廷を後援することを報じたのである。其中には政體論を以て何處までも北廷を助け、南方にして聞かざれば兵力を用ひて威力干渉をも辭せぬといつてゐるといふ事が頻々通知したといふ事である。從つて南方の諸領袖等は少からぬ憂惧を抱いた。即ち我々は當面に北京政府を敵とし、之を斃した以上更らに之よりも勢力十倍する日本政府と戰はねばならぬかといふ憂惧を抱いたのである。而して以上の通知を載せたる會議日誌は日々長江一帶に亘る南方諸領袖の間に印刷物として廻附されたのである。漢族の大衆が日本に對して不滿の念を抱くのも亦無理ならぬ處である。只幸ひに日本國民の多數は南方に同情し、或は本國にあり、或は彼國に渡つて陰に陽に革命軍を補助した此同情は彼等も深く感謝してゐるが故に、之によつて彼我の關係は維持せられてゐるのである。之に至つて「日本の利益を主眼として見たる支那問題」の前に於て、日本政府の愚政策を排斥せざるを得ないのである。

抑々日本將來の國策は商工立國にあることは今日一國の通論として何人も疑はざる所である。さらば其商工業を將來無限に發達せしめやうといふには、如何なる手段を採るべきかである。今日謂ふ所の工業なるものは、日本古來から在來の工業ではない。歐米と交通以來新たに學び得て起した所の工業である。之について一考を要するのは、已に歐米より學び得たのであるから、申さば此等の工業については歐米は寧ろ先生にして我國は弟子である。弟子の製造物と師匠の製造物とは何れが精、何れが粗であらう。一概にもいへぬけれども、先づ弟子の製作物の大部分は師匠に於て買ひさうな事でもない。そこで日本たるものは、自分以下の需要者を見出して其製作物を需要せしめるより外はない。何れの國民に其製作物を需要せしめるかといつたなら、幸に隣國に四億といふ大衆の需要者が控へて

ゐる。今日及び今後の國策は主として之を得意とする
にある。然るに今や日本政府は其得意となるべき大衆
の惡感を挑發して迎ふるてはないか。國策を知らぬこ
と之より甚しきはない。日本國土の位置が位置丈けに
今日までの日清貿易額は早く已に一億二千萬圓に上つ
てゐる。爾今南方に更始一新したる國家が現出しや
うとするのを御覧なさい。之を單に政治的革命と見る
のは斷見の至りである。今回一擧の併發は彼國に於て
は政治的革命と同時に社會的革命である。論より證據
は、政治其物とは何等の關係なき頭の毛を續々切り落
して、芥子坊主であつたチャン〳〵が、ザンギリ頭と
變化しつゝあるてはないか。之についても面白き話が
ある。革命戰爭の開始以來、我國の貿易品中綿糸の如
きは多少の影響を受けたに相違ない。さりながら其傍
らに鳥打帽子の彼國に輸入せらるゝ事は實に非常てあ
る。日頃對清貿易は大阪の一手販賣であるといふ有樣
てあつたが如何に大阪の工業地が鳥打帽子を製造して
も彼の需要に周給するに足らぬ。そこて名古屋から横
濱、東京に亘つて日々十萬個の帽子を製造して送り出
した。それても尚足らんどいふ事てある。此等の帽子
たる國内に於ては一個四十錢位のものらしい。それが
高價に賣れた時には二圓五十錢位まて上つたといふ事
てある。思ふに彼國の輸入は獨り我國よりするのみて
はないから帽子の獨占といふ譯にも參るまいが、四億
の生靈の一半は男子とすれば鳥打だけでも二億個は要
るわけではないか。其れの大部分が日本から供給さる
ゝならば、之れ丈けでも三四億圓の利益は國人の手に
落ちる譯である。彼國民を外らして他に向くべからざ
る所は此處にある。況んや革命政府は幾何か世界自由
の空氣を吸ひ來つた。そして今こそ南方丈けてあれど
も兎にも角にも從來ある所の支那の最惡税たる釐税を
廢したといふてはないか。即ち之は内地關税の廢止て
ある。從つて南軍が南北を統一して茲に有力なる政府
を創立するに至れば支那と列強との貿易は今日に倍蓰
し來るべきは疑ふべくもあらぬ。されば今日の日清貿
易は一億二千萬圓を稱すれども、彼我の感情にして衝

実せざる限りは、一億二千萬圓が二億四千萬圓に上り來るべきことは遠き未來の事ではない。國政の局に當るものは之を忘れてはならぬぢやないか。且つ一度平和克復の日に至れば、列强の資本は續々として彼國に入り來るであらう。現に其端緒は今日已に開かれてゐる。四國シンヂケートを初めとして未だ統一に至らざる南方の政府に向つて資本の放下を開始しやうとしてゐるのである。況んや平和克復後に於てをや、是に至れば資本に乏しき我國は勢ひ列强の人後に落ちねばならぬ。此事も亦深く我當局の慮るべき所である。幸にして日本國民と彼國人民との感情は今日最も親密てある。要は之を利用するのである。今日から能ふ丈け漢人多數の希望を助けてそれを必達せしめるに勗めれば情誼上日本を疎外することの出來ざるは又豫想に難からぬてはないか。此處が資本の少いながらも他の列强と將來彼の方面に於て馳逐すべき所てある。

今や我國政府の當局も昨非を悔いて、どうやら對清方針を一變したらしい。それ丈けは遲しと雖も尙可なりといはねばならぬ。已に精神を一變した以上は今後は如何に働くかである。聞くが如くなれば、孫逸仙は本國に歸來する前に、歐洲の列國に周遊し、其國政府の意嚮を豫め問ひ訊したさうな。列國中にて最も好意を以て之を迎えたのは佛國といふ事である。孫逸仙は同國大統領と會見の際、支那を統一して共和政府を創立したならば貴國は如何にするかと問うた際に、大統領は其場合に至れば我佛國は眞先きがけて中華民國を公認するてあらうと請合つたといふ事てある。孫は深く之を得としてゐるらしい。さりながら孫の希望は日漢兩國は人種上乃至國際上古來親善の間柄てある。我等は日本政府の迫害にこそ逢つたれ、日本國民多數の深厚なる同情は深く〳〵心裏に感銘してゐるものてある。從つて中華民國にして成立せば佛國の厚意は深く多とすれども願はくば日本政府から第一に成立を認めて貰ひたいものであると公言して居るといふ事てある。此邊も亦我當局の一考を要する所てあらう。由來尻込の名人は我當局てはないか。思ふに彼國が假令新

らしき意味に於て成立した曉にも、尙列強の意嚮を窺つて容易に公認しさうもないのは我當局である。列國の意嚮も固より尊敬すべきではあるが、國誼のある所乃至國策のある所は何よりも先きに商量せねばならぬ。我々が「日本の利益を主眼として見たる所の支那問題」は此邊にある。(完)

行政整理と稅制整理

行政整理と稅制整理

男爵 澁澤榮一

突然の御尋でもあり、組織立てての御話は出來ません、又委しい事は時間を要しますから、此處には只大體の考丈を簡單に申述べませう。行政整理稅制整理は今日の場合是非ともやらねばならぬ急に迫られて居りますのである。何も山本藏相になつて、俄に我國の財政を悲觀されたといふではない、實際整理をせなければならぬのは疾くより極まつて居るのであります。それ故此整理は藏相御一人でなさるではなく內閣の責任として宜しい、又內閣が一致して爲さるんでなくては到底行ひ難き事であります。然るに是までは色々の事情から思ふ樣に運び兼ね、今年迄は出來ずに居つたと思ふ、それが今度山本藏相の御盡力で出來るとすれば先づ結構な事であります。日露戰爭以來國民の負擔は非常に重くなつて居ります、有體に言へば其以前の稅制とても民力に適當したものか分りませぬ、細密に調べましたら甲に薄くして乙に厚いとか、又內に重くして丁に輕いとか。負擔の均衡を得ないものも少くありますまい。左樣いふものも發見次第に追々改良して行かねばなりますまいが、就中日露戰爭當時に定めた戰

時税なるものがあつてそれが一番不均衡のものである何ても其總計が一億六七千萬圓てしたか、精密な數字は忘れました、此戰時税が今以て創痍となつて國民を苦めて居ります。國難を前に控へた咄嗟の間に定めたものてすから、其税目中には頗る不都合なものが多い、鹽專賣の如きものもそれてある、下級のものに向つて、必要品から高い税を取り立てるといふは經濟上實に考慮すべきものてあります。斯樣な失體の甚しいものだから早く何とかせなくてはなりますまい、税目の全體に就て餘りハッキリとは申し兼ねますけれども、左樣いふ廉々を整理をして行きますならば大に國民の負擔を輕減し得られやうと思ひます、故に今日の税制整理は勿論輕減的整理てなければならぬ、整理をして却て税を加重するといふのてはありません、而して其整理によりて何程迄輕減出來るか。大なる減却を見ること出來ぬとしても、數千萬圓は減じ得られませうと思ふ。左樣して、それに對し、他に財源が無いとすれば、勢ひ、行政整理を以てこれに充つる外はありますまい。

其處て税制整理と行政整理とは相關聯し相提携した問題となるのてある、税制整理を行ふ結果は是非行政整理に落ち込まなければなりません。此方法によつて幾ら費用を減じ得ますか知れませぬけれども、相當の高は減じたいと思ひます。素よりそれぞれの方法を以て行ふべきは當然てありますが、私は其方法に迄立入つて言ふ事は躊躇するのてあります。詰り税制整理に於て歳入の減ずる所は是非その財源を行政整理に求めなければなりません、其事は必ずしも困難とは思ひませぬ断然奮發して大鉈をさへ揮へば、大きな官廳の廢合、局課の合併等も出來るものてある、諸官省共年一年に隨分繁文褥禮の弊を爲して居ますが、今日の職務をもつと眞率にすれば手輕くなる、手輕くなれば人員を減じ得ます。地方とても同樣餘地は幾らもありませう、市町とか郡村とかの分合等も出來ませう、我々は局外者だから微細に亘つては分りもせず亦申されもしませぬ。併し多少説の無いてもありませぬが、深く立入つて申すことは如何てありませうとも思ひますから大體

斯うすればと思ふ丈を言ふのであります。國債償還基金ですか。あれは減ずることは出來ません。私は絶對に減却してはいけぬと思ふ、其樣な事をすれば直に內外に向つて政府の信用を害するのであります。之を要するに、稅制整理行政整理といふ事は難事には相違ないが併し斷じて行へば出來ぬといふ事ではありません、行はぬのは能はぬのでなく、爲さぬのだと思ひます、孟子に此能はぬと爲さぬとの別が論じてあります。「泰山を挾んで北海を越ゆ。人に語つて曰く我れ能はずと。是れ實に能はざるなり。長者の爲に枝を折る。人に語つて曰く我れ能はずと、是れ能はざるに非ず、爲さゞるなり」とあります、如何にも其通りで、私は之を移して今日の場合にも言へると思ひます。稅制整理行政整理は決して泰山を挾んで北海を越ゆるといふ樣な絶對に出來ない事では無く、長者の爲に枝を折るの類であると信じます。

　此問題とは少し離れますけれども、今一つ序に添へて申して置きたいことがあります。それは先年桂公爵や大浦子爵其他の大臣方にも度々申上げたのでありますが、目今國家の富を增さねばならぬと申して居乍ら、其基を爲す處の生產上の事に就いては、上下共に深い精神が入つて居らぬのであります。日本は只富さへ增せば宜い、他の事は如何でも宜いとはいへませぬけれども、他の事物に比べると實業方面即ち生產事業に對しては依然一般の注意が薄くなつて居ると思ひます。形の上から見れば成る程一通りの機關は備はつて居るけれども、之に貫通して居る精神が乏しい樣であります。事業そのもののみではなく、それに從事する人に對しても、まだ一般に輕視して居るらしい。即ち他の政事軍事等に於る勤勞に重きを置くも、此生產事業に於る勤勞を輕く見て居る。富を致す事を勉める者に對しては如何も重要視せぬ樣に見える、只私が之を强く論ずると我田引水らしく聞え、公平と聞かれぬ恐がありますから困ります。

　昨年の冬頃財政上經濟上に付て、我々に多少の考があつて屢々當時の當局者に面會し、同志打揃つて切に

進言した事もあつたけれども、其時には成程と御同意の態度はあつたが今日迄未だ充分に實行を見ぬのであります。私はそれを甚だ遺憾に思つて居ります。今日の國家は上下擧つて國運の進歩に力を盡すのでなくては迚も滿足な結果を見る事難いのでありますが、從來の習慣からして兎角に官尊民卑の弊風の强いのは慨かはしい事であります。

王政維新より已に四十餘年の歳月を經て居るのでありますけれども、矢張り古來の陋習が失せず。商人は駄目である。武人は强い者だ。文官は貴い者だ。何でも役人でなければならぬといふ有樣が殘つて居る。これが官尊民卑であります。口に丈は四民平等だと誰もいふけれども、只口だけの形式に流れて眞實は商人を重んぜず、從つて事實にも現はれぬのであります。將來は是非これを改正して民業を尊崇し、商工業家を敬重して一國の生産を增すことに全力を用ふるでなくては國家の實力の增殖は期し難いのである。是は獨り政府の人にのみ望むのは間違ふてせう商工業者中にも智慧も足らず人情も劣等なものが有るてせう。がそれだからとて之を輕視するといふ事は間違つて居る。輕んぜられ疎んぜられるために益々自己の天職の尊さを自覺せず、卑しき品性を高めんともせず、狹き智惠を廣くせんともせぬ事となるといつまでも向上は出來ぬものてある、それ故當局者は實業家の欠點のみを探さずに極力之を我物として庇護し愛護し行かなくてはならぬ。然るに實際を見ると如何も只缺點をのみ拾ひ立てして引立てては呉れられぬ樣に思ひます。

兎角政府萬能て事物は官業に走り易く、甚しきに至つて鐵道院が旅宿業もする、大藏省も預金部が樣々な事をする、政府の力を以て金融をすれば保險業をも營むといふ說がある。其他製鐵業でも製絨業でも將た製紙業でも皆官業になつて居る。大きなものてはまだ造船業が政府の仕事になつて居らぬ位のものて。製糖業なども官業にするといふ風聞もある。此等の仕事は何も特に政府がせなければならぬ仕事てはないのてあります。而して製絨業ても製紙業ても之を民間に賣渡す

ならば相當の値を以て買ひ受くるてせう。それを強いて政府て經營して民業を妨害するのは宜くありませぬ。それに政府の氣息のかゝるものは如何しても特殊の保護があるから自然と繁昌の位地を占めます。銀行ても中央銀行とか勸業銀行とかいふものは榮えて行く。其定欵の如きも何時の間にか銀行の營業に便なる樣に改正するから此等特種の銀行が政府の機關となつて色々民業に迷惑を與へぬと限られませぬから、斯ういふ點を十分に改めて貰はなくてはなりません。(四十四年十二月)

行政整理と税制整理

松山忠次郎

行政整理の必要は今初めてあらはれたのてはなくして、何時ても其必要があつたのてある。最も近來に至つては特に屢々其必要が唱へられ來つたのてあるが、何れの內閣ても多少行政整理の話の出なかつた事はなかつた。然るに現內閣は、今度行政整理て絞つた金を以て第一に海軍を擴張し、第二に税制整理をしやうといふ事を言ひ出したのてある。第二の方はどうなつて居るか知らないが第一の方は先達て內閣豫算會議て殆んど非公式的に豫約したらしい。そこて益々行政整理が必要になつて來たのてある。然し私の見る所ては此二つの爲めよりも、もつと根本的の問題の爲めに行政整理が必要であると思ふ。それは歲出入の平均を保つ爲めに必要があるのてある。今日の財政は歲出入が平均してゐないのてある。來年度の豫算によれば千六百萬圓程不足をする計算てあるが、來年度は兎に角前年度の剩餘金といふものがあるからして、其れて埋合せをつけて行くことが出來る。そこて來年度は歲出入が辛やく平均するが、此剩餘金といふものは何時もあるといふ譯には行かない。一年度限りのものといはなくてはならぬ。然るに右の歲入不足は來年度ばかりでなしに、當分繼續することになる。政府が先きに議會の豫算委員會に示した參考書によれば明治四十八年迄は

毎年不足が繼續する筈になつて居る。だからしてそれ丈けは何は兎もあれ、平衡を維持することが最も必要である。海軍擴張よりも税制整理よりも歳出入の均衡を保つことが第一に必要と思ふ。それで歳出入の平衡を保つた上で餘裕があれば海軍擴張最も可なり、税制整理も亦結構である。此點に於て政府側の言つて居る所と私の見る所と少し違ふ。勿論行政整理をウンとやつて歳出入の均衡が保つことが出來、其上海軍擴張も税制整理も出來るとなれば、それは申分ないが、然し之は餘程六づかしくはないかと思はれる。勿論それ丈け整理する餘地がないといふのではないが、それ丈け理想通りの整理が出來るや否やは餘程懸念する、然らば來年度以後についてどれ丈け金を絞り出すことが出來れば充分であるかといふのに、先づ第一既定の歳出入を比較して見て不足になる分が千五六百萬圓で之は毎年あるのである。之は前に申した通り第一に埋めなくてはならぬ。第二に海軍擴張費である。之は四億八千萬圓を十ケ年間程に支出するといふ希望といふ話であるが、さうすれば一年に四千八百萬圓になる、がそれ丈け毎年財源がなくてはならぬといふ譯ではないのである。既定の繼續費といふものは五年八年先きになれば段々減じて來る。さうして既定の歳入は減らないのみならず幾分か自然的に增加する筈である。從つて先きになるに從つて財政に餘裕がつくメドがある。それだから初め少しづゝの擴張費を要求して財政に餘裕がつくに從つて擴張の年度割を增加することにすれば、一年に四五千萬圓の財源がなくても出來る譯である。之は海軍當局者の計畫の立てやう次第であるが兎に角十ケ年間に前記の如き大事業、やらうとするについては毎年二千萬圓位の財源がなくてはならぬと思ふ。第三には今後當然起つて來る必要なる新事業がある。例へば電話擴張費の如き其一例である。政府は電話事業を獨占しながら民間の需要に應ずることが出來ないで、其加入權に二三百圓のプレミアムがつくといふのは實は申譯のない話である。之は是非共擴張してプレミアムの無くなる所までやる政府に義務がある。

處が其政府の擴張計畫は來年度で一段落を附けるのであるから來々年度即ち明治四十六年度からは其擴張費の要求の出るのは當然であるし、大藏省も之を拒むことが出來ない譯である。況んや相當に利益のある事業であるから、之は來年の秋になれば必らず起る問題と思ふ。其外にいろ〳〵必要なる新事業の要求が來年になれば續々出て來ると思ふ。現に昨年の秋、各省から出た新要求額を總計すれば其一年の支出額が五千萬圓にも達する筈であつたと聞いて居る。其中には不急の事業があるかも知れない。又不當の要求があるかも知れないが、多くは相當の理由を備へたものに違ひない。で其要求は、昨年は例の消極主義で以て抑へられたが、今年秋に出る時には更らに新らしい要求も加つて、もつと大きくなるかも知れない。第四に税制整理である。之は今迄少しづゝ手をつけたが殆んど目的を達してゐない。何とかしなくてはならんことは世人の認める所であつて、且つ今の政友會內閣では税制整理をやらうといふ事を言ひ出した。是非共來年迄にはどうかしなくてはならんと思ふ。勿論税制整理といへば租税の負擔を公平にするといふ意味であつて、必らずしも租税輕減の意味が無いかも知れんが、年來問題になつてゐるのは負擔輕減を意味する税制整理である。租税の重い所は輕くするが、輕い所は決して重くしないといふ主義である。從つて此税制整理の目的を達するのには又相當の財源がなくてはならぬ。之は程度問題であるけれども先づ一千萬圓位必要と見て差支がなからうと思ふ。さうすれば以上の四つを合計した所で約五千萬圓になる。之れ丈け金がなければ歳出入の平均が取れない、又政府が標榜した海軍擴張、税制整理も出來ない。殊に今後新規に起つて來る必要なる新事業を企てることが出來ない。而して此目的を達する方法は行政整理只一つである。西園寺內閣が果して五千萬圓丈け絞り出せば、初めて財政は極めて裕かになる譯であるが、それ丈け絞り得るや否や餘程疑問である。又それ丈け絞る餘地があるや否やも少し懸念である。勿論前にもいふた通り行政整理の餘地は今餘程あるのであ

る。五千萬圓までないにしても三千萬圓位は優に絞り出す餘地があると思ふ。

然らばどういふ所にあるかといふに、固より細かいものは今擧ぐる譯に行かないが、大體の事をいふてもそれ位の見當はつくのである。其二三の例をいへば一般會計では陸海軍兩省に要する費用である。其他にもあるかも知れぬが一般會計では之が一番大きいものと思ふ。元來陸海軍の費用は日清戰爭に引續いて日露戰爭の爲めに非常に膨大してゐるのである。殊に戰爭中は其支出の性質を深く吟味する暇なくして其要求するが儘に支出したのである。從つて支出が餘程放漫に流れて居るといふ事は想像がつくのである。只陸海軍の費用は稍々專問的に屬するが爲めに素人に分り兼ねるといふ事があり、又要求の豫算に於ても細かく分類せずして一口に巨額の金額を計上してあるが爲めに、議會の監督も行屆きかねるのである。又世間からアラを探すのにも探しにくい。要するに支出が放漫に流れて居ることは爭はれまいと思ふ。

第二は臺灣の特別會計である。一般會計では近來時々行政整理の聲もあり又世論の監督も行屆くので、陸海軍の外は甚しい事はないかも知れないが特別會計、殊に臺灣のやうに距つて居る所の仕事については監督が不行屆であるから、餘程整理する必要があると思ふ。現に内地では相應に切り詰めた計算をしてゐるにも拘らず臺灣の財政は頗る裕かである。夫れ故に臺灣の歳入の幾分を一般會計へ今少し繰り込んでもよからうと思ふ。元來臺灣の財政は獨立してゐるといふ事を、時々當局者もいふけれども、其實はさうでないのである。砂糖税の協定に於て臺灣は大變利益してゐるのである。それ丈け一般會計から補助して貰つたといふ理屈になるのである。又臺灣に多數の守備隊があるが、其費用は皆内地から支出してゐるのである。之は少からぬ金である。而して之亦臺灣の財政の獨立してゐないといふ一つの理由である。勿論其外に臺灣は關税收入の半分を内地の一般會計に繰り込むことにしてあるけれども、其額は極めて少くて、兎ても守備隊の費用の

半分にも足りないのである。從つて臺灣の財政を本當に獨立せしめるまで其費用を切り詰めて、之を一般會計に繰り入れて然るべしと思ふ。

第三には朝鮮の特別會計の如きも餘程整理する餘地がある。一例をいへば朝鮮の官吏は俸給も旅費手當も其他概して内地官吏の五割増である。之は第一入らない事である。朝鮮と内地との間は交通が極めて便利であつて、氣候も朝鮮は内地よりも確かによいのである。從つて朝鮮に行くが爲めに特に月給を増し手當を増す必要がない。殊に生活の費用に至つては朝鮮の方が内地よりもずつと少いのである。朝鮮は米も安ければ家賃も安い。殊に關税が低いから總ての物價が内地よりも餘程安い。酒や煙草の如きは著しく安い。からして特別に待遇をよくしなくても朝鮮の官吏は利益してゐるのである。だから其特別加俸、特別手當は削つてもよい。其結果朝鮮の財政は餘程裕かになる。而して内地から補助する金額を餘程減らすことが出來る。

以上は二三の著しき例であるが、之を見ても三千萬圓内外の餘裕を出す丈けの行政整理はする餘地があると思ふ。尚一般會計には關係がないが、整理する必要のあるのは鐵道特別會計である。現今の制度では特別會計は自分で歳出入の都合をつけるといふ事になつてあるから鐵道の利益が少くても一般會計から補助することが入らない代りに、鐵道の利益が多いとても一般會計に繰り込むことがないのである。從つて鐵道の行政が經濟的に行はれ居るや否やといふ事は動もすれば不問にさるゝ傾がある。こいつも大いに整理する必要があると思ふ。假令之が爲めに一般會計の財政が裕かにならないとしても、同じ政府の官吏であつて、鐵道院の官吏が裕かに待遇されて、種々特別の利益を得て居るとすれば、他の官吏は不平を言ふことになるのである。從つて官吏の待遇の平均を保つ上からいうても鐵道院の財政は今少し整理する必要がある。而して鐵道院に餘裕があれば、其餘裕を以て不必要な、不利益なる新線を増築するに使はなくてはならぬといふ理屈がない。元來鐵道特別會計は餘程缺點がある。現在の

制度を根本から改正する必要があると信ずるが、之は問題外てあるから委しくは話さないが、矢張り行政整理の一端てあらうと思ふ。

行政整理と財政整理

武富時敏

先づ行政整理の方からいへば、第一各省割據の弊を矯めるといふ事が、行政整理の眼目てなければならぬ。各省割據して政府の統一を缺いて居ることは今日何人も認めて居る所てあつて、之は先づ第一に改めなくてはならぬ。之を事實についていへば、農商務省の山林局は只山林を多く出して收入を多くすることばかりを計る。其結果山林の濫伐となつて、忽ち水害を惹き起し、內務省の土木局ては莫大の治水費を出さねばならぬことになる。即ち農商務省の山林局と內務省の土木局とは互ひに其目的を異にして國民に損害を蒙らすことになる。之は是非共系統を正して統一を圖らなくてはならぬ。それから郵便貯金の如きも遞信省ては成るべく之を多くしやうとして、全國の各地方から中央の預金部に集中せしめる。然るに內務省の方ては地方の事業を起すについて地方の資金が乏しい時は、成るべく低利に貸附ける方針をとつて、中央に集つた預金から之を出して貰ふ事にする。即ち二重の仕事をすることになる。地方の零碎な資金を郵便貯金事業として態々中央に集めて、それを內務省の意見によつて又地方に貸附けて居る。然るに全國の各地方から低利資金を願出るものは澤山にある。それを內務省ては多くの役人を使つて縣とか郡とか或は町村とかの願出を調査せしめる。業山な書類を集めて非常に面倒な調査をする。さうしてやつと貸すとか貸さぬとか極める。之なども丸て一つの政府のやる仕事とは思はれない。こんな事をやめて了つて、例へば何縣の集めたものの幾割は其縣の郵便局長——郵便局長がよくないとすれば其土地の確實な銀行をして、地方事業に貸附けさせる。さうすれば郡役所や縣廳に問合せる面倒が入らない。又中央

て澤山の役人が調べる手數も省ける。以上は僅かに一二の例であるが、さういふ類の事は實に枚擧に遑がない。其れが爲めに役所も澤山に作らなければならぬ、役人も澤山に置かなくてはならぬ。行政の冗費の多いのは固より其處である。又今各省には建築部を銘々に持つて居る。之も一つに集めてやつて差支ない。何も銘々建築部を設けて、技師を雇つて置く必要がない。此等は單に各省が自分の分前を多く取らうといふ所から出來たつまらぬ事である。もつと甚しい例を擧げて見れば甲の省で土地を有して居るとする。例へば陸軍省などでは全國に亘つて澤山の土地を有して居る。之が不用であるからといふて二束三文に拂下げる。處で直ぐ鐵道を敷く爲めに政府では其土地が必要であるといふので、今度は高い金を出して買上げる。實に馬鹿氣た話で、どうしても一つの政府の仕事とは思はれない。左の手で安く賣つて右の手で高く買ふ。之は何の爲めかといへば各省別々に官有財產を有するが爲めである。それで此官有財產の管理を一の官局に集中して一官廳の管理に屬せしめなくてはならぬ。それから又官廳に要する物品の買入だ。之も亦各省別にやつて居る。之が甚だ宜しくない。別々にやるから例へば不用品が出來たとする。甲の省で椅子が百脚不用だとする。すると之を薪同樣に拂下げにする。乙の省では椅子が必要だ。そして高い金を出して之を買ふ。土地拂下と同じ事でどうしても一つの政府の仕事とは思はれない。之は甚だよろしくない。官廳所要の物品の買入は矢張り一つの官廳にやらせなくてはいけぬ。甲の省に不用品が出來たならば之を引上げて保管し、乙の省で入用の時は之を其儘渡せば金を遣はずに濟む譯である、さうしていよ〳〵不用の時は拂下げにしてもよいのである。それは一例であるが萬事が此調子である。それを統一して一官廳でやることにすれば國庫金の儉約が餘程多きな高にならうと思ふ。それから又會計である。會計も各官廳で別々にやつて居る。之も亦甚だよろしくない。矢張り一つの官廳に集中しなくてはならぬと思ふ。尤も遠隔の地方にあるものは地方に委任

しなくてはならぬが、東京の各官廳即ち各省のものは一局に集中せしめて、各省から請求し、そして官廳が支拂命令に應ずるやうにしなくてはいけぬ。さうすれば人も減じ仕事も減ずるのみならず、會計の事前の檢査といふ事が行はれることになる。會計檢査院の檢査といふものは、いはゞ事後の檢査てあつて割合に効能がない。只違法の支出をした爲めに小役人などが譴責を喰ふとか罰法を喰ふとかいふ話てあつて、要するに後の祭てある。會計を一局に集中して、豫算に照し、事の實際に考へてやれば事前の檢査といふ事にもなる。役人を減じ仕事を減すばかりでなく會計の爲めにも大いによろしい。一體各省が定額を貪ぼり取つて、豫算丈けは是非年度内に遣つて了はうといふ弊がある。年度末になれば官吏の出張や買物が大變に殖える。之は誰でも氣が附く所てある。會計を集中して獨立の官廳て各省の會計を取扱ふことになれば、さういふ事は餘程やりにくゝなる。何の爲めに出張させるか、何の爲めに買物をするか。豫算はまだ餘つて居るが無用の支出はいけぬと小言をいへば容易に出來ぬ事になる。それて財政の上から見れば今日ては各省自から其定額の殘らぬやう／＼と餘程骨を折つて遣つて居る。年度末に不用の品物を買つたり、不用の出張をさせたりするのも其爲めてある。然しそれても尙餘つて居る。各省の不用額は毎年夥しいものてある。或は千五百萬圓乃至二千萬圓、少くも六百萬か七百萬はある。各省皆を折つて遣はうとし、會計官が苦心して支出をしても尙さうてある。先年或省ては翌年一ぱい使つても使ひ切れない丈けの品物を買つた事があるといふ。之は豫算が殘らぬやうにする爲めてある。さういふ無駄遣の出來ぬやうにすれば歲出不用額は隨分大きな高になるに違ひない。買物も會計も一つになつて冗費を省くことにすれば、こゝから餘程の節約が出來るものと思ふ。

それから又事務の簡捷といふ事も大いに心懸けなくてはならぬ。今日のやうに事務が繁雜ては役人を減ずるといふ譯に行かない。矢張り相當の數が入るのである。之てはいけぬ。どうしても政府の仕事を簡易にし

て事務を早く決して了ふやうにしなくてはならぬ。中央ては各局、各課に相當の權限を與へ、委任を大にして其成績を責めるより外はない。又中央から地方に充分に權限を與へて、之も成績て責めるやうにしなくてはならぬ。今のやうに課から局、局から大臣官房と、順次に澤山の書附を取つたり遣つたりしてゐては相當の役人が入る。大概の事は課、局に委せ、大臣は只其成績を責めるといふ事にすれば大いに簡便になる。又地方の方もさういふやうにする。さうすれば中央と地方の間に澤山の書類を送つたり取つたりする必要が無くなる。今日のやうなやり方ては役人が澤山に入るばかりてなく、責任の讓り合になる。何も彼も大臣の判て出來ることになり、仕事に少しも氣が入らない。さういふ事てはいくら役人が居つても、事務が荒廢する許りてある。やはり充分の權限を與へて長官は其成績を責めるといふ事にするのが一番てあると思ふ。大體所謂官僚政治の弊て、下級の官廳や人民の仕事に、監督を名として下らぬ干渉をする。例へば民間の會社に對しても、會社の事業はどうとか、商賈や經濟に見識も經驗もない奴が、調査したり、書附を取つたり、面倒な事ばかり遣つて居る。何の事か丸て譯が分らぬ。監督を名として民間の仕事や下級官廳に對して干渉の弊を止めねばならぬ。そこになると役人の心を入り更へねばならぬから餘程六つかしい。六つかしくはあるが、重大の事てあるからして内閣を統一する總理大臣が訓令を發して、官吏の心を入れ更へねばならぬ。

財政の整理は一口にいへば遣繰の政略を根本から改めるといふ事が第一の眼目て無ければならぬ。今日の財政の困難、經濟の困難は政府の遣繰の爲めてある。昨年末――といつてもつひ廿日ばかり前に日本銀行の兌換券の發行高が四億三千五百萬圓に上つて、空前の大膨脹となつた。之は何のためてあるか。財界の必要に應じてやつたかといふに、さうてはない。普通に斯くの如く兌換券の膨脹を來したならば、金利は高くならなければならぬ筈だが、金利は高くなつてゐない。

官報に出て來る週報を見ると、何の爲めかといふとが瞭然と分つて居る。つまり政府の遣り繰政策の爲めに此大膨脹を來して居る。週報にも書いてあるやうに政府の證劵を八千萬圓から日本銀行が抱き込んで居る。之が通貨大膨脹の本となつて居る。何の爲めに政府の證劵を背負ひ込んだかといへば大藏證劵で以て政府に貸上げ金が多くなつた爲めである。其れは何の爲めかといへば第一は鐵道資金、次には國債償還の爲めに借替をしたのが主なるものである。鐵道資金の調達の爲めに何故日本銀行を苦しめたかといへば、桂内閣時代からの非募債といふ看板があるが爲めに、桂内閣では預金部から融通して居つた。預金部でも、一方には地方の治水工事やら、地方低利貸附資金やらに責められるから、どうしても日本銀行にたよらねばならぬ事になつて來た。それ丈け通貨の膨脹を來した。それから公債償還資金、これは倫敦に在る。所謂在外正貨だ。あれを持つて來て國債償還をせねばならぬ豫算面である。處がアレを取つて來て國債償還をすれば在外資金が減る。其れが面白くないといふので大藏證劵をこしらへて償還をする。即ち遣り繰だ。倫敦の丶を引出しては信用に關するといふので、借金をして借金を返すといふ遣繰の爲めに通貨の膨脹を來たしたのである。其影響はどうかといふに、通貨の膨脹は物價の騰貴を惹き起して國民の生活を困難ならしめる。其結果は延いて輸出の減少、輸入の增加となるのは經濟自然の原則である。それは目下の事を一例として話す丈けであるが、今迄がずつとさういふ遣り方である。國債を償還するといつて、或は外國から金を借りて內國債を拂つたり、外國債を拂つたりする。一體在外正貨は用途を指定してある。自由の金ではない。元來軍事費の殘りであつて、それはちやんと事業も極り豫算も極つて居る。事業が進むに從つて其金を遣はなくてはならぬ。又滿鐵の社債の金、之も滿鐵の事業が進めば遣はなくてはならぬ。又今一つは一昨年五分利を四分利に借換の時の丶が剩つて居る。それは今年中には拂はなくてはならぬことに今年の議會で極つて居る。今年の國債

は倫敦から持つて來て拂はねばならぬのに、それを取らずに、遣繰をして居るので、益々通貨の膨脹を來たすのである。其結果物價騰貴、輸出減少、輸入增加を來たして居るのである。これで以て日本の經濟は立つかどうか。外國債の利子ばかりでも今日は七千萬圓を外國に拂はなくてはならぬ。其他軍艦などの買物。陸軍の需要品の買入等政府の外國に拂ふ金はなか〳〵大きなものである。お負けに先年以來輸入超過で、其爲めに外國に拂ふ金も少からぬ額である。之も現金で決濟しなくてはならぬ。そこで正貨は減る一方であつて、今日の勢ではどうしても永きを保つことが出來ぬ。それで政府でも非常に怖ろしがつて、在外正貨の減ることを氣にして居るが、それは元々遣繰政策の爲めであるといふ事が分つて居るかどうか。先づ其根本を改革することに心を用ひずに末の方で心配して、只正貨準備の維持にのみ心配して居る。一口にいへば借金の利拂に借金をすることにのみ苦心して居る。之では永く保てぬ。日本銀行の兌換券が早晩其活動をやめねばならぬことは分り切つた話である。そこで當局の考はどうかといふに、彼等はもう乘り掛つた舟であるから仕方がない。外債を募集して、正貨準備を持つて居る中には、輸出も追々增加し、產業も發展して來るから、何とか切り拔けて行けやうといふのである。そこで一生懸命になつて輸出の奬勵をやる。產業の保護をすれば貿易が發達し輸出が超過して來るといふ考である。處が其考が根本から間違つて居ると思ふ。今のやうな遣繰策をやつて居れば通貨が膨脹し、物價が騰貴し、輸入增加、輸出減少となるのは經濟の原理である。商賣を御奉公にする商人といふものは一人もあるものでない。高いものを仕入れて、安く賣る商人は一人もあるものでない。物價騰貴があれば製作品が高くなる。さうすれば輸出の出來やう筈がない。今の政略は益々輸出を減少して輸入を增加することになる。何ぼ輸出を奬勵しても行けるものでない。斯ういふ風で行けば正貨準備の維持出來ぬのは誰が見ても明白であらうと思ふ。然るに政府の當局者は當分借金をしてやつてゐ

れば四五年の内には產業が發達すると、丸て雲を摑むやうな空想て以て、輸出獎勵と反對の政策を行つて居る。此勢て進めば日本銀行の兌換制度の毀れることは斷言し得る。數の上に於て疑がない。之を改める、根本から改めるより外途はない。遣繰は一切せぬ。在外正貨が無くなつても仕方がない、日本銀行が取付に會つても仕方がない。其結果一時は財界が沈衰して、產業の不振、人心の萎靡を來たすやうな事があるかも知れない。けれども之は仕方がない。今迄間違つた筋途を踏んで歩いて來たのを、正しい道に返す爲めてあるから、之を忍ぶより外仕方がないのてある。一時を辛抱して、財政を正常な途に進めるより外策がないのてある。財政整理の大眼目はそこてある。それが出來れば其先きの區々たることは殆ど論ずるに足らぬ。それがもう財政整理の大根本、其他いくらもあるが、一口にいつて見れば根本の改革を斷行するについては政費の節減が必要てある。行政整理をやつて政費の節減を計らねばならぬ。又今日の有樣ては大藏省の證券が多過ぎる。之を改めるには今日の徵稅法を改めねばならぬ。さればといつて租稅の納期を早くするとすれば、納稅者の困難が一方てない。それて一つの方法は會計年度の改正をすることてある。今日は會計年度割は四月に始つて翌年の三月に終つて居る。之を七月から初めて六月に終ることにする。さうすると租稅の收入が年度の半ばから澤山入ることになる。然るに此會計年度の改正も過渡の一年は非常に困難な事になる。今年改正をするとすれば四月に初つて來年に三ヶ月を延長しなければならぬ。然るに此三、四、五の三ヶ月は收入が無くて支出の多い月てあるから之を切拔ける方法を講じなくてはならぬ。が之は餘程困難な事てある。此方法を案出して、其處を切拔けると、あとは大變樂になる。七月から初まつて七、八、九はいろ〳〵收入のある月てある。それだから今のやうに澤山の大藏省券を發行する必要がなくなる。今日ては前に話した通り遣繰りの爲めに大藏證券を發行するのを除いても、此年度割のわるい爲めに一時澤山の大藏證券を發行す

ることになつて居る。之は甚だよろしくない。民間の生産的の金を引上げて、政府の不生産の仕事の爲めに使つて居る。之を改める爲めには大藏證劵を多くせぬやうにしなくてはならぬ。之も固より必要であるが、然し前の根本的改革に比すれば區々たる小問題に過ぎない。根本の大改革を斷行しなければ、到底も持てない。經濟が立ち行かない。從つて國家を危險に陷れる。之は一日も晏然として居られぬ筈である。それを今の大藏大臣は就職の當時は稍々其邊に考へ及んて居つたやうてあるが、又世間でも山本藏相は根本から改革するかのやうに歡迎して居つたのてあるが、段々近頃の樣子を見れば、甚だ不安になつて來た。只前內閣のやつた通りの事を今日まて繼續して居る。電車市營の外債募集も山本藏相の就職後の事て、外國駐在の財務官をして周旋せしめて居る。つまり借金の利子を拂ふ爲めに借金をする政略をやめない。又在外正貨も取るべきものを取らずに大藏證劵て以て遣繰をして桂內閣と同じ事をやつて居る。やつた通りの事をして居るから財政經濟の狀態が、桂內閣時代と同じてある。同じなら尙忍ぶべし。實は一層甚しい、わるい狀態を呈して來た。即ち昨年末の通貨大膨脹といふ事が現に眼前にあらはれて來た。斯ういふ事をやつて一體財政が持てるものか。持てぬものか。持てないといふ事が分り切つて居る。然るに當局は晏然として居る。當局のみならず民間の人共も餘り騷がぬといふのは、實に我々の深憂とする所てある。



淪落の女

東京朝日新聞記者　松崎天民

「淪落の女」は、牧師綱島佳吉君足下に宛たる「さまよひ」、小說家正宗白鳥君足下に宛たる「捨ばち」、女子教育家宮田脩君足下に宛たる「お小夜」、新俳優喜多村緑郎君足下に宛たる「黒縮緬」、救世軍將校山室軍平君足下に宛たる「十二階下」の五篇より成る一種の通信なり。これを或る階級に屬する婦人研究の未成品と見るも宜く、また予が人生研究に於ける備忘錄の一と見るも妨げず。（一月十五日夜）

一、黒縮緬

一、小村侯爵終焉の夜

喜多村緑郎君　足下。

大阪の道頓堀で、芝居を演つて居る君へ、葉山に來た僕から、此の通信を送る事を、先づ何よりも興味有ることに思ふ。本鄕座の樂屋で逢つた以來、最う彼れ是れ一年餘も不沙汰して居るが、君の動靜は、時折の演藝だよりで承知して居る。僕は相變らず、東京朝日新聞の三面――社會部――の一員と

して、其の日その日のお茶を濁して居る。お茶を濁して居ると云ふより他に、僕の思想やら生活やらに就いて、君に報ずる何等の新聞も持つて居ない事を、僕は別に恥しく思はない、反つて泰平無事で宜い位に心得て居る。

葉山に來たのは、前の外務大臣侯爵小村壽太郎氏の病氣の經過やら、薨去の模樣やらを新聞社に通信すべき要務を帶びてゞある。ここへ來た三日目の朝、侯爵は終に薨去されたが、此の一大外交家の死と、僕との生涯の上には、相通じた何ものも無いけれど、僕は曉の星やら松吹く風の聲やら、寄せては返す男波女波の音やらを大道具小道具に使つて、一段半九十行の悲し氣な記事を電話で送つた。可笑くも無いのに笑つて見せたり、悲くも無いのに泣い見せたりするのは、俳優たる君の上にも、新聞記者たる僕の上にも、同じ程度て共通して居る。或る男や或る女に扮して、性格やら動作やらを活演する所に、君の「藝術」が有るならば、時と場合と事件の性質に依つて、讀者の同感を強る樣な記事を書くのも、僕等の「芝居」と云ひたい。

今日は、其の一芝居を演つて、ホッと胸を撫で下した所である。舞臺に立つて、何千人かの看客を前にしては、舞臺に人と爲つた君と雖も、種々の意味に於いて、多少の不安を感ぜずには居られまい。社長なり、編輯長なり、社會部長なり、同僚なりの他に、十何萬と云ふ多數の讀者を前にして、日毎夜毎に何等かの事件を探訪し、何等かの雜報を書く僕等の上にも、實際、人知れぬ苦勞も有れば煩悶もある。殊に、或る重大な事件を通信するために、東京市外の地に特派される場合には、不安の度も一層强くて激しい。事實そのものを事實有りの儘に見聞したか何うか、事件そのものを正當に理解し、公平に觀察したか何うか。その上、他社の新聞と對照して、優越なる成績を領したか何うか社に歸つてから、「何社のが一番佳かつた、君のは何うも……」などゝ云はれはすまいか何うか。斯う數へ立て來れば、全く特派員ほど心配の多いものは無い。幸にして豫定の旅費が少しは殘つて、敷島がロンドレス

となり、お刺身が鰹の蒲燒となり、田舍の惡酒が瓶詰の櫻正宗になる樣な事が有つても、此の心配と差引すれば、殘る所は九牛の一毛たるに過ぎない、蒼海の一粟たるに過ぎない。

喜多村君足下、今夜は其の「九牛の一毛」を、各社の特派員が持寄つて、何所かで一杯飲まうと云ふ事になつた。長者園か、かぎ屋か、日蔭の茶屋か、料理兼御宿の褞衣に羽織を重ねて、鳥打帽目深の連中には、曖昧屋か蕎麥屋位が相應して居る。薄月夜の寒い十時過ぎ、五丁も十丁もある遠方へ行かずとも、「宿の近所に何か有り相なものだ」との動議も出た。但し宿の女中や亭主に就いて、夫れと明ら樣に尋ねべき事ならず、兎に角出かけやうぢやないか、と土地不案內の三人は郵便局前の宿屋を出た。

小村侯別莊の大混雜を忍へば、眞に不謹愼の誹を免れないが、事實はさう注文通りに行かない。御用邸の前を步きながら、一人が「仕事も今夜で一段落だ、少しは飮んだつて宜いだらう」と云ふと、「隨分、活動したからねえ」と、一人が冷笑する樣に云ふ。

東京より五度高いと云つても、夜の葉山に吹く風は、冷たくて手足に泌む。

二、亞鉛屋の二階にて

此の邊から逗子へ出る男女も、逗子驛から葉山、一色、三崎街道の村々へ歸る老若も、多くは乘合馬車の便に依つて居る。ピープー、ピープーと、一呼吸毎に細く長く響き渡る喇叭の音を聞くと、僅に半日程の土地でありながら、泌み〲と旅の心持がする。

僕等の上つた家は、そのガタ馬車の終點、御用邸の間を流るゝ一色川に沿つて、左へ入つた左側の亞鉛屋根である。「御料理三崎屋」と云ふ屋號は有つても、屋根が亞鉛、廂が亞鉛、外圍も垣も亞鉛造りである所から、土地の者は亞鉛屋、亞鉛屋と呼て居る。蕎麥が出來るで無く、天麩羅を食はせるでも無いに、亞鉛屋には女が居ると見えて、三崎節か何かを唄つて居る。

「三人……、宜いだらう」
「おや、入つしやい、なんて、間が……、何うぞ、此方へ……」
上り口には、長火鉢が一つ、瓶詰の酒が十四五本、長いのや四角な帳面が三五冊かけてある。天井も黒く疊も黒く椅子も黒い中に、手拭が一つ際立つて白く見える。帳場の傍には、村の百性らしい者が三人、海苔か何かで、チビリ〳〵とやつて居た。
案内されたは二階の六疊である。階下の恐しく煤氣て居るに反して、こゝは天井も障子も襖も新しく、十燭光の電燈さへ輝いて居る。襖の模樣が卵色の紅葉散して、壁が濃鼠色、床の間には草花を投げ差しにしてあるが、額面も無いし軸物も懸けて無い。「春如海」とか、「豪氣堂々」などの文句を、宜く斯うした飲食店で見掛けるものだが、こゝの家は心持が好いほど何も無い。三つ出した座蒲團も、黄八丈擬の木綿物で、三人の間に置かれたチャブ臺も、一枚板の何とかでは無い唯、十燭光だけが、不調和に振つて居る。

座蒲團が出て、チャブ臺が出て、莨盆が出るまでに、交る〳〵四人の女が顔を見せた。齡三十に近いのは縮れ毛の赤肥滿で、銀杏返しの根が崩れて居る。紡績絣の綿入にメリンスの地味な帶、半分木綿の入つたお召の前垂を掛けて、いやに氣取る癖がある。
「お誂へは？」
「何も入らない、酒、海苔か、林檎で……」
「他には、別に！あの……」
「他に何が出來る？」
「さうね、鷄卵、おさし、牛、とり……」
「卵でも持つておいて、半熟にしてね」
「かしこまりました」
喜多村君足下、僕等のチャブ臺に、櫻正宗の二合瓶が立ち、林檎やら海苔やらが並べられたのは、夫れから二十分も經て後である。ここの娘分だと云ふ十八九の、廂に結つた丸顔の背の低い女が、主として僕等のお酌をしたが、白粉をコテ〳〵塗つて居る上に、大きな井桁絣の綿入を着て、鐵色繻子の腹合せ帶の間から

眞紅な帯揚を出して居る所は、可憐に見えるべき筈であるに、少しも僕等の同情を惹かない。初めて逢つた客人てありながら、半年も一年も馴染になつて居る男の様に心得て、蓮葉な身のこなしをする所など、「この家の娘分」が聞いて呆れる。

「お唄いなさいよ、何かに貴郎がた東京?、横濱?、さうね、何商賣の方か知ら……」

「電信の技手か、工夫の親方か……はゝゝ」

「御戯談もんてせう。官吏か會社員、月給ならば二十五圓以上の方……て、せう」

「馬鹿、これても皆、年俸千圓以上の奏任官の同等官の待遇官様々なんだよ」

「かん、かん、かんの、のゥえてすか」

こんなつまらない問答をしながら、盃を乾すのは眞に詰らない。兩髪は「何か唄ひませう、ね」と品をつくつて、眼を細くして、

「千葉て生れェて、東京て迷ひイ……、今ぢや葉山て酌婦すうる、ばッぱッ」

と小聲で唄ふ。齢よりは老けた濁音が、際立つて耳に障る。夫れても本人は平氣て、

「ちよいと、巧いてせう」

最う、逗子通いの馬車の音聞えず、階下てサノサ節を唄つて居た客も歸つたと見えて、騒の聲が聞えなくなつた。小村さんの別莊ては、夫れ電話、それ電報と騒いて居るだらうに、と、何かにつけて未だ「小村」の事が頭を去らない。

三、東京研究の新方法

事實を白状すると、僕はこんな所へ來たく無かつた。單に酒を飲み美味い物を食はんとするには、亞鉛屋は餘に貧弱てある。綺麗な座敷て、より美しい女を相手にして、より美味い酒、より美味い物を食はうとするには、長者園あり、日蔭の茶屋あり、何を好んてか、亞鉛屋などへ來る必要があらうぞ。

然し、こゝへ來たに就ては、他の人達は知らず、僕一人にとつては、夫れ相應の理由がある。忘れもしな

い今年の夏、社の同僚渡邊鶴峰君が、埼玉、群馬、千葉地方を巡遊して歸社するや、一夕、南鍋町の喜仙て晩飯を食つた事がある。僕等親しい同僚の間にあつては、社用を帶びて地方へ出張し、三日なり五日なり滯在して歸京すると、取敢ず手近の何所かて會食するのを例として居る。そして、新聞に書れない旅中の見聞大きな聲ては云はれない旅中の珍談を、互に語つたり聽いたりして、興じ合ふのを常として居る。その日も鶴峰は例の調子て、ズボンの隱嚢へ兩手を突込だ儘、直立不動の姿勢になつて、

「おい、松崎、飲まう、珍談があるぞ」

と、腭を一二度突き出して誘ふ。凡そ飲むことゝ食ふことに於いては、誘はれて否むべき僕に非ず。殊に「珍談」の一句に心動いて、喜仙は便所の上の四疊半に、二人相對して、しやもの鍋をつゝき初めた。

渡邊君の珍談は、眞に面白い珍談てあるが、新聞に書かれないと同じ様に、これも明ら樣に云ふ事の出來ないを殘念に思ふ。彼は珍談の始終を語つた後、その珍談の女主人公とも云ふべき、田舍の宿屋の女中、地方の飲食店の酌婦に依つて、現代の東京を側面から研究して見ては何うか、と言葉を改めた。

「全體、東京と云ふ都會は君、地方人の集合なんだから。地方人の東京が、地方から出て來る弱い女を苛責めて、散々墮落させた揚句は、トットと前の地方へ放り出して了う。實に不都合ぢやないか、不都合だよ……。田舍へ落魄して居る女の話を聽いて見ると、なか〳〵面白い事がある。妾は麴町の何々家に奉公して居ました、と云ふ奴があるかと思ふと、妾は公園て樓を取つて居ました、と云ふ婆が居る。それが君、皆、變な宿屋の女中になつたり、飲食店の達磨に落魄たりして、五十錢か一圓なら大威張なんだらう、實に驚いて了うよ。こんな女の話を聞て、其のまゝ書いても、立派な一つの文章になる。東京と云ふ大きな都會の暗黑面が、常に何う云ふ事をして居るか、東京に居て調ぶるよりは、地方へ出て、宿屋の二階の夕暮の窓の下か何かて、女の話をジッ

ト聞いて居る方が、反つて東京の一面を明瞭と浮み出させる。俺ア、此奴を君が書くと面白いと思ふがなア」

「面白い、好い事を聞いた。社の新聞に續物としては少し何だけれど、書き樣一つては物になるよ。全體、女は嘘を云ふ事が上手だが、殊に田舍何かて、妾は東京に居た事があるよと、「東京」を鼻の尖にぶら下げて居る類の……白粉の女などと來ては、小說家以上に創作的技倆を持つて居る。自分て自分の經歷に、色彩を施す畫家の術も心得て居れば、自分て自分の過ぎ來し方を批評する批評家の態度も辨明へて居る。要するに女は一種の藝術家?て、語ること總てを信用する譯には行かないが、東京研究の新方法として、頗る面白い思ひ付だと思ふ。書かう、乾度、書く、新聞か、雜誌へ」

喜多村君足下、僕が此の亞鉛屋に來たのは、實に斯うしたヒントを得て居たのに因る。何時か機會が有つたならば、斯る類の女を訪問するために、二三の地方を旅行して見たいとも思つて居たが、果さずして今年も暮れなんとする際、偶々小村侯の危篤は、久しく旅行に渇して居た僕をして此の地に急行せしむるに至つた。東京から半日程の東京臭い葉山に來て、この腹中の未定稿を滿足させるだけの材料を得やうとは、先刻まで豫期しなかつたが、「赤肥滿」のすまし方と云ひ、「庇髮」のばッば節と云ひ、何うやら此家の女には、「東京の影」が讀めさうな氣持がする。

問ふ勿れ、海苔や林檎や牛などて、酒ばかり飲ませる家ては無い。何の女も髮がほつれて、何の女も襟の白粉が剝げて居る——。

四、新朝顏日記のお鶴

お銚子のお代を持つて、また一人の女が上つて來た。黑襟のかゝつた双子縞の筒袖を着て、銘仙絣の前掛した二十六七の束ね髮。

「皆さん、すまアして居らッしやるのね、今の唄はお時さん?。漸と歸して了つたから、ゆつくり召し上

れよ、閣下并に諸君……」

束ね髪の女は一寸右手を上げて、「失敬」の形をしたかと思ふと、直ぐトン／＼と下りて行く。大分醉つて居ると見えて、裾さばきもだらしなや。

　三人の髭男が、五本の櫻正宗を倒しても、醉はなかなかに發しない。入交り立交り來る女も手傳つて、隨分飲んだ樣であるが、レッテルだけの「攝州灘」では、宛然水を飲む樣で、落花狼籍など思も寄らず。

　齡よりはませて居る庇髮を捉へて、

「君達は、全體、何をする人なんだ」

と、わざと奇問を發して見ると、女は平氣で、

「酌婦、姪賣ぢやなくてよ」

と、兩手を膝の上にのせて、突き襟をする。

　この時、貰盃を持つて出た以來、一度も顏を見せなかつた、他の女が上つて來た。

「厭になつて了うよ、お時さん。人を犬か猫の樣に思ひあがつて、三十錢なんするから、云ふことを聞けと云ふのよ。妾最う腹が立つて、腹が立つて……何うして遣らうかと思つたけれど、やつぱり弱い商賣だわねえ。誤間化して歸した事は歸したんですが、妾つく／＼厭になッちまう」

　お時と呼ばれた庇髮は、「御馳走樣」と云つた限り、頭から相手にしない。そして、

「お秋さん、お酌でもおしよ。ねえ、皆さん」

と、妙に媚びる樣な態度をした。

　根の低い銀杏返しに、狹い額の生え際濃く、稍ケンの有る眼に潤を帶びて、小い引締つた口許に、淋しさが漂つて居る。色の白いのが上氣して、憔けた兩頰に髮の毛の亂れかゝつた風情は、愛嬌にこそ乏しけれ、男の心を引付ける力は充分ある。紺色がゝつた絣の銘仙を着て、色の褪めた黑縮緬の羽織を重ね、左の藥指には、赤石の入つた金色の指環を箝めて居る。二十三か、四か、六とは老つて居まい。

　喜多村君足下、これが僕の眼に映じたお秋の容貌と風姿である。――口を利かしては、いけぞんざいな風があつて、うき世の荒波に漂ふこと五年を出ずして、

早く既に身を捨ばちに持崩した女の様にも思へるが、――默つて伏し目勝に座つて居る所を見ると、何となく「物を思はせる女」てある。何所かて其の顏を見た女――何所かて其の聲を聞いた女――何所かて一所に泣いた事の有る女――の様な氣持もする。僕は最近三五年間、新聞記者として探訪し訪問した世間の各方面に、此のお秋に似た女を求めて、其の一を去年の秋、上野の文部省展覽會に出て居た、なにがしの油繪「白粉の女」に得た。その二を三年前の夏、新富座に於て演じた伊井蓉峰君と君の「新朝顏日記」に得た。「新朝顏日記」の女主人公とも云ふべき、君の扮した「お鶴」に得たことを、特に君に向つて、感謝したいと思ふ。

「白粉の女」は、白粉をコテ／＼塗つた女が、顏だけを正面に向けて居た樣に記臆する。繪の巧拙、色が何うて形が何うとか、氣分が何うて描想が何うとか云ふ樣な事は、僕の闘り知る所てないが、僕は一も二もなく彼の顏が氣に入つた。白粉に荒んだ皮膚の色、男に疲労れた眼の表情を見て、僕は何となく「人生の痛苦」を讀む樣な氣持がした。「白粉の女」かお秋か、お秋が「白粉の女」か、此の二個の間には、「空想」と「實任」の差別こそあれ、神秘の糸あつて、彼と是とを不即不離の間に、繰つて居る樣な氣持もした。

若し夫れ、君の「お鶴」に至つては、お秋と交渉することの何ぞ淺からざる。僕が、何所かて其の聲を聞いた女、何處かて一所に泣いた女、と思つたは、實に、君の「お鶴」に於てである。畫面に見えた「白粉の女」よりも、より現在的に、より實感的に、「お鶴」は僕の心を刺戟した。そこが「繪畫」と「劇」との藝術的生命、藝術的價値に、長短、大小の差有る所以などと言ふ可からず。僕は僕一人の趣味性を以てして、君の「お鶴」とお秋との間に、共通した「人生」を讀まんとするものである。

此の愚なる一文を、先づ俳優たる君に向つて送るの旨意も、愚ならざる君の合點し、寛容して呉れる所だと信ずる。

五、只事で無い女の願

喜多村君足下、其の夜に於ける光景は、最う此の上細叙する必要が無い。同行の特派員達は、お秋が座席に侍つてから間もなく、皆、宿屋へ引揚げた。僕も一所に立歸るべきを、此の通信を完結したい爲ばかりに、夜更くるまで二階にとゞまつた。

實を云ふと、此の通信は、序幕も無く大詰も無く、山も無く正念場も無い。芝居の生活に一生を捧げて居る君が見ては、眞に物足りない單純なものかも知れぬ。然し、「お鶴」とお秋との間に、免れぬ因縁が有る樣に、君と僕とも十年の知己である。「何だ、芝居にもならない女の話なんかして。最少し愉快な話でも聞かせ給へ」と云つても、忙しい僕の境涯に在つては、此の位の事を書くのでも並大抵の仕事ではない。夫れに、明日は何うあつても東京へ歸らねばならぬ。急いで、後を續けやう。

お秋に於ける第一印象は、云ふまでもなく「お鶴」である。新富座の東桟敷で、初めて彼の「新朝顔日記」を見てより、今日まで忘れ得ぬ感銘を刻まれたのは、伊井君の扮した青年が、君の「お鶴」の許へ尋ねて來る條てある。伊井君は洋服に麥藁帽(?)、窶れた姿をして「お鶴」に逢ひ、樣々の事を云つた樣であるが、頭に殘つて居るのは、彼の時に於ける「お鶴」の態度だけである。——銀杏返しに結つた二十二四(?)、左手を突いて身を斜に横へ、羽織の襟の半分すべつて居るのも頓着せず、伊井君の顔を左の横手から窺き上げる樣にして、右手に敷島か何かの吸ひかけを持つて居た。——彼の刹那の態度だけは、今も尚、明瞭に憶ひ起す事が出來る。或る意味に於けるお秋との初對面は、其の時を以て手帖の一ページとしたい。

君の「お鶴」は、種々の意味に於て、樣々の事を思はせる女であつた。世路幾變轉、流れ〱て「白粉の群」に墮ちた女性の代表的描寫としても、意義あり生命あるものであつた。身を捨ばちに持くづすには、未だ三五年の苦い經驗を要すべき齡ごろで有りながら、彼の

女は、身分も、富貴も、名譽も、權も、凡ての榮ある「過去」を葬つて居た。伊原青々園君の「新朝顏日記」一篇は、何んな事件を描いたものか、其の筋の一端さへも覺えて居ないけれど、「お鶴」の彼の時の活きた態度だけは、今に至るも忘れる事が出來ない。彼の時幕が閉るや否、僕は樂屋に君の部屋を訪ひ、唐突に君の手を握つて、二三度振り、

「佳かつた、佳かつた、實に佳かつた」

と云ふと、君は鬘を脫らせながら、笑つて

「彼の捲貰がねえ、考へたてせう」

と云つた事を覺えて居るであらう。苦心の果の產物か、不用意の間の所得か、藝談に豐富な君から、彼の描寫に就ての由來を聞かなかつた事は、僕の甚だ遺憾とする所である。藝妓や、娼妓や、女中などを舞臺に見ることは、進步遲々たる新派の劇界に於て、別に珍しい事でも何でもないが、斯うした女——銘酒屋の女——達磨屋の女——揚弓店の女——新聞縱覽所の女——を活躍せる舞臺に見たことは、世間は知らず、僕一人に於ては、彼の當時少からず異色とした所である。

お秋が異に夫れてある。他の人達が歸ると、彼の女は二階に上つて來て、チャブ臺を中央にして、僕と相對して座つた。他の女は、氣を利かした積てゞもあるのか、それからは一度も顏を見せなんだ。角火鉢の火は半灰になつて、寒さが室の四隅から迫る。

「小村さんが、お隱れ遊ばしたんてすッて、ね。貴郞がた、その御用て入した新聞屋さんなんてせう。階下ては橫濱から入した電信の方と思つてる樣てすが、妾、眼があつてよ、チャンと、ね、さうてせう」

女は突然、斯う云つて、淋しく笑いながら、僕の顏を見詰めた。僕は微醉に紛らして、

「新聞記者なものか、二十五圓以上の官員樣なんださうな、新聞屋なものかい」

と答へたけれど、實際、お秋の烱眼には驚いた。

「嘘、嘘、嘘、新聞屋さんだつて宜いぢやありませんか。貴郞が東京の新聞社の方ならば、妾、折入つてお願する事がありますの。……」

お秋は斯う云つて、居ずまゐを正した。彼が願と云ふのは、別れた情人の行方を搜すのか、四散した父母兄妹の所在を求めるのか、何れにしても只事で無い。お秋も、只事で無い樣な顏をして居る。

六、記者探訪者通信員

聞いて見ると、お秋の願と云ふのは、戀人の行方を搜す樣な、浮いた沙汰でも無いし、また親同腹の所在を求める程の單純な事柄でも無い。彼の女が、色の褪めた黑縮緬の羽織寒む氣に、小一時間も物語つたのは、浮沈幾轉極り無い其の半生の身の上であつた。

喜多村君足下、これを感慨的の言葉で記せば、葉山の曉に星一つ飛んで、侯爵小村永久の眠に就いた其の夜、所も同じ葉山の飲食店の二階で、斯うした女の過ぎ來し方を聞くとは、何と云ふ廻り合せ、何と云ふ對照であらう。女は始終伏し目勝に、しんみりとした低い聲で、自分の身の上から自分の周圍、その身の上に生じた波瀾曲折、その周圍に起つた樣々の事件を、書けば其のまゝ文章にでもなる樣に、順序正しく物語つた。そして最後に、

「今の話ね、何も彼も詳しく續物か小說かに書いて下さいな。それで最う妾思ひ殘すこと無いのです」

と云つて、左の肩を淋しく落した。

僕は一寸考へた。考へるまでも無く、新聞記者は、何所までも新聞記者であるべき筈である。そして、新聞記者に閑散な月日は無い――こんな女の身の上話なんか聞いて、小說の眞似見たいなものを書く樣な、――そんな閑散な月日は無い。それも、新聞の三面材料になる樣に、面白い人物と複雜した事件だけを拾つて、他は捨てられても悔いないだけの覺悟があれば、書き樣一つでものになる場合もあるが、唯、女の一生を細々と書いたつて、其處に何の興味があらう、其所に何の生命があらう。それだのに女は、「殘らず書いて下さい」と云ふ。「俺はお前の推察通り、東京の新聞記者だ」と、未だ白狀もしないのに、女は新聞記者と看破して了つて、平氣な面付をしながら、

「貴郎は記者？探訪者？通信者？」と、世にも小生意氣な質問を浴せ掛ける。

記者であらうが、探訪者であらうが、通信員であらうが、嚴密に云つて其所に何の差別があらう。僕は明治三十三年の夏、齡二十三歲にして、初めて大阪で記者と爲つた當時より、探訪＝即＝記者論を主張した一人である。當時、文藝雜誌「小天地」に、僕は「新聞社の探訪」と題して、僕が記者になつた經路やら、初めて探訪に從事した所感やらを書いたが、其の中にこんな一節がある。

日本の新聞事業は未だ幼稚なもので、探訪員の取つて來た材料を、內勤記者が筆の尖で事を誇大にしたり、又は其の材料の生命とも云ふべき所を抹殺して了ふ事がある。自分は密に思ふ、今後三年五年と追々新聞事業の發達するに連れて、今までの無學な探訪員は陶汰されて了ひ、更に內勤記者が探訪に出掛けて、自分で材料を取り自分で文章を書く樣になるに違ひない、と。

其の後十年の星霜を經て、新聞界、殊に昔の三面記事――今の社會記事――は、實に驚くべき長足の進歩をした。取材の範圍も擴張されて來たし、觀察の方法も警拔になつて來たし、描寫の樣式も嶄新になつて來たし、報道の速度も急劇になつて來た。此の他活字使用上の苦心、繪畫、寫眞版の應用、二十二字詰の六段が十九字詰の七段となり、十九字詰の七段が十八字詰の八段となつたなど、編輯の體裁上にも大革命があつた。一部の新聞批評家は、最近新聞界の傾向を見て、黃色新聞の色調を帶びて來た悲しむべき現象の樣に論ずるさうだが、僕等當事者の側から見れば、强ち左樣とのみ云へない。兎に角、新聞界多事多忙の十年間を、最も多事多忙な社會部に、最も多事多忙に送つて來た僕は、此の進歩發達の歷史を憶ふ每に、一種快心の微笑を禁ずる事が出來ない。

そこへ其の「貴郎は記者、探訪者、通信者」と來た。お人の好い僕と雖も、多少面食はざるを得ない。

「記者もする、探訪もする、通信もする、編輯もする、

僕はエラい新聞屋なんだ」
笑ひながら斯う答へて遣ると、お秋は如何にも安心した様な顔をして、
「だから、貴郎をお見掛けしてお願したんです。東京へお歸りてしたら、屹度書いて遣つて下さいな」
と、まるて他人の事ても頼む様に云ふ。
色香の衰退を見るには、未だ早い齢ごろながら、「淪落の影」は深く濃く、既に其の全身に沁みて居るやう。お秋はさうした女てある。

七、平凡な女の墮落史

お秋の話は長かつた。上州の大百姓に三女と生れて、今年二十四歳の秋の暮、葉山の亞鉛屋に酌婦となるまて、二十四年間の日記のペーヂは、一枚〳〵生命がある。或る所は血て彩られ、或る所は涙てにじみ、或る所は戀の甘酒、或る所は苦悶の叫び、拙い活動寫眞を見るよりは、面白くて興趣がある。

三歳の夏から繼母の膝に育てられて、鰕茶の袴を穿いた十六の春、何うしたはづみてあつたらう、男の肌の溫味を知つた。それからと云ふものは、家に居ても面白くなし、狹い村中に評判は立つ、何處へ行つても日は照ると、一人旅に立つたが十七歲。十八、十九と三年の間は眞面目になり、東京の然る大家にお小間使に上つたが、旦那樣と云ふのが變な方て、何時しかお手がついて大騷ぎ、何も彼も女自身が惡いとは知つて居ても、思へば東京は恐しい都會てある。宿屋の女中にもなり、待合の女中にもなり、果は「蠣殼町」から「濱町」の夜に、「暗黒の花」と咲いて、男を欺す氣にもなつた。――と、お秋は眼をかゞやかした。

今は最う衰へ行く身の末を案じるばかりて、新しい戀に泣いて見たい望もなく、人妻になつて手鍋提げやうとの願も無い。人の顔の見えない山奥にても入つて、死ぬるを待つが定命の樣な氣持もする。然し女は何處までも女てある、道に外れた快樂に娘盛りを送つた悔恨、人妻にもなり得ずして二十四歳を送る懊惱は、人一倍心を苦しめる。蠣殼町て「ハイカラお秋」の名を謳

はれて居た頃には、代議士のなにがし、小説家のそれがし、歌舞伎座のそれがしなどゝも馴染になつた。相場師の然る旦那には、特別の恩顧を受け、面白可笑しい月日を送つたが、今から思へば、能くも身體が續いたことゝ驚かれる。相手が八さんや熊さんの印袢纏でなく、金縁眼鏡、髭、洋服、横文字の新聞や雜誌など讀む人達とて、女の方でも好い氣になり、自分の境涯の悲慘さは反省る暇もなく、幾年かを夢に過した。泣いたつて叫いたつて、その幾年は最う取返す事が出來ない。――と、お秋は唇を嚙みしめた。

喜多村君足下、女子大學が出來て、女の敎育も盛になつて來たさうな。婦人に關する種々の研究家が出て、婦人に關する樣々の本や雜誌も出版されるさうな。耶蘇敎の會堂では、日曜毎に女の讃美歌が聞えるし、救世軍では鐘や太鼓を鳴らして、墮落した女を救つて居るさうな。けれども「濱町」は救はれない、「蠣殼町」は祝福されない。况して東京を一歩出た埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉、神奈川の村々に、「酌婦」となり「達磨」となつて居る女達に、何の交渉する所があらう。婦人矯風會とか公娼制度廢止何とか會とか、名前だけは立派なものがあつて、一通りは神妙な運動を遣つて居る樣であるが、斯うした女の存在は、其の根ざす所極めて深く且つ極めて遠い。崇高なる宗敎、權威ある敎育の力を以てするも、これを根絶するは容易の業で無い。僕はお秋の過ぎ來し方を見て、今更の樣に、世上、神を傳て道を說く者の云ふ所、眞に易々たる風あるに驚く。『其處へ來ると君の描寫した「お鶴」の如きは、人をして直ちに此の種女の運命を瞑想せしめ、其の生涯を想像させる所に、言外無量の味がある。やはり、說敎よりは芝居の方が、人情に觸れて居ると見える、人の心を動かすと見える。

東京を一歩離れた土地で、東京に居た人と逢ひ、「東京」の事を話し合ふと、東京に居て東京を見るよりは、より純正な客觀的の態度で、東京を觀る事が出來る。東京に居て活動して居る日夜の僕までが、大きな舞臺の仕出し役者然たる姿に見えて來る。お秋の話はお秋

自身を中心とした經歷談に過ぎないが、東京と云ふ暗黒面に富んだ大都會が、こんな類の女を吞吐して、常に何んな事をして居るか。彼の女の身の上話を通して、僕は東京の現代相に觸れた樣な氣持がした。東京に居ては左樣でもないが、一歩、旅へでも出て顧眄ると、東京は實に「恐い都」である。

お秋の話は、要するに、平凡なる女の墮落史であつた。書けば――小說的に書けば――三十ページにも及び相であるが、僕にはさうした根氣が無い。書いた所で、小說や芝居以上の面白味が有る譯でもないに、下手の長談議は最う止めやう。

八、「そら大きな石が」

多喜村君足下、こゝまで書いて來たら、洋燈の石油が盡きさうになつた。――亞鉛屋の二階は電氣でも、宿屋は別宅になつて居るので、未だ洋燈を使つて居る。――何と云ふ不景氣な事だらう。夫れに眠くもなつた、今まで何を書いたやら、自分でも判らない。

亞鉛屋を出る時、お秋は寒くて暗いのも厭はず、御用邸の門前まで送つて來た。

「遲くなッたわねえ。他の方が、變に疑るかも知れませんよ。惚れ合つた仲でも何でも無いけれど、何だか變ですこと。葉山なんか、當分入來しやることと無いでせう、入つしやらなくても好いから、書くだけは是非何かに書いて下さいな。黒縮緬の女、黒縮緬日記、黒き女、題は何とでも……」

「あゝ、書けたら書かう、黒縮緬が好いねえ。色の褪めた黒縮緬の羽織、これは少し長過ぎる。葉山の女、お秋、これは露骨過ぎる、まア僕に任しとくさ。君の身の上だけを書かずに、君に逢つて別れるまでの事を、面白く書くのも一つの方法だ」

「さうでせうか、何とても宜いから、屹度お願してよ。それを妾拜見して、他人の事の樣に讀んで、泣いたり笑つたりして見たいと思つて居ますの……、變な道樂ねえ」

門の前で、二人は何人かに憚る樣に、冷たい手を握り

変した。暗き葉山の夜にも、神見そなはすかと思つたので無い。唯、何となく憚られたのである。

「左様なら、御機嫌よろしく。お氣をお付けなさいまし、そら大きな石が、ほゝゝ左様なら」

先づ姿が隠れて、其の聲も闇に消えた。殿下在させる御用邸は寂として、唯、松吹く風と波の音のみ、葉山の夜に響き渡る。（終）

君の「お鶴」は、様々の事を思はせる女であつた、と云つたが、お秋も斯うして別れて見れば、逢ひ見て語る時よりも、しんみりとした女である。男でも女でも、眼の前相見て相語つては、何等の感銘も殘さないのに、別れると妙に心をそゝる類の者がある。僕はこの種の人を常に「思ひ出の人々」と呼び居るが、お秋も確に「思ひ出の女」である。思ひ出にだけても宜い、一度逢つた限りて、その人に深い印象を殘す者は、男にしろ女にしろ、何所かに鋭い所があるに違ひない。殊に日々夜々、各種各方面の男女に接して、新聞の材料を取つて居る僕等多忙な新聞記者に、場合は違ふが、僅半夜の初對面て、忘れ難い或るものを殘したお秋の如きは、一種人をチャームする異常の力を持つて居たに違ひない。彼の女も亦、一種の魔物か。

君の芝居、君の女形、君の「お鶴」は、君が健在てある限り、何時でもこれを舞臺に見る事が出來るけれど、お秋には最う逢ふ機會があるまい。「貴郎に、これだけのお話したから、妾最うこゝには居ません、居られなくなるかも知れません」と云つた樣に覺えて居る。「思ひ出の女」として、お秋は此の後幾年の間、僕の頭に浮ぶてあらう、僕の物語の種になるてあらう。別れ際に云つた頓興な、「そら大きな石が……」が、彼の女を記臆するに宜い最後の言葉となつた。あゝ「そら大きな石が……」僕等の前にも、君の前にも、常に大きな石が轉んで居る——。

いよ／＼石油が盡きて來た。未だ書きたいことも澤山あるが、これて止めやう。變なものになつて了つたが、君だけは多少の興味を以て、君と僕とに共通した特種の興味を以て、讀んでくれる事だと信ずる。

終に臨んて、遥に、君の健康を祈る。

其二週間（中）

倫敦 漱石生

八月十二日

此日は、宿の近處の田舍家(コテエヂ)に滯在中の有志者と、コオチを一臺傭ふて、ボスカスルから南方八哩餘のロオ、トルといふ山へ登つて見ることにした。コオチの御者は宿の主婦の弟だ。同勢十人のうち、男はブリマスの商人だといふ五十恰好のと僕と二人きり。十時に村を出た。

馬は二頭だが、車が重いので、道が捗らぬ。カメルフオオドの停車場までは、二度も通つた道だから珍しくも無い。僕は今朝着いた倫敦新聞を、揺られ〳〵ながら、讀んでるうち、停車場近くまで運ばれてしまつた。

「あれがロオ、トルといふ山ですよ」と孃がいふ。停車場附近は高原になつて居るのだ。その高原の遥か東南に蜿蜒たる連丘が見える。その中一番高いのがそれだといふ。空は一點の雲も無く晴れて居る。地平線近く夏霞が淡く棚びいて居る。

馬車は、牧場や畑地の中の田舍道を、山に向つて進む。少しは下り坂の處もあるが、麓まで上りが多い。十二時頃麓まで着いた。

四時にコオチへ歸ることにして銘々勝手な道をとつて山登を始めた。山は富士山形(なり)の芝山だ。頂上が少し鋸山みた風になつて居る。別に道といふ道は無いので、芝草の中を絕頂みかけて進む。勾配は左して急では無

いが、日中のことて暑いのに弱る。同勢のうち、靴の僕のよりは一寸も大きいのを着いてた、身長六尺近い大女があつたが、これが先登になつてずん〳〵行く。またゝく間に僕等よりは十丁も先になつてしまう。到頭僕等が――否な僕が最後になつてしまつた。言ひ忘れたが、馬車を下りる時、僕は二人前の辨當携帶方を命ぜられた。柳の枝に似た木の枝の心で組んだ手籠で、持つた時からして、これや重いと思つた。何が入つてるかと尋ねて見たら、宿の主婦につくつて貰つた、コンヲル名物のパスティと、バナナが八房と、エエルが二本はいつてるといふ。三分の一も登らぬうちに僕は休憇を歎願した。そしてバナナを二房づゝ食つて煙草も一本ふかした。更に勇氣を皷して登る。先頭はと見ると、僕等が半分道行かぬ間に、はや絶頂で休んで居るのであつた。

一時過にやつとの事て頂上に達した。麓からは幾丁か知らぬが、地圖に依ると、海拔千二百九十六呎とある。低くからぬ山なのだ。海岸へは遠いし、途中に丘陵もあるので、海は少ししか見えぬが、眺望は頗る曠濶だ。妙なことは、絶頂までは少しも石が無いし、此邊一帶に石板石の地層だのに、此山に限つて、頂上だけに玄武岩に似た質の石がある。それも唯だ露出して居るのぢや無くて、幾疊敷の扁平な大きな石が、五つも六つも、積み重ねたやうになつて、方々にある。人間の力で他から運搬し來つたもののやうに見えるが、今の處、氷河の持ち來つたものと解釋されて居るのださうな。

僕は途中から、上衣だけ脱いて登つたのだが、絶頂は寒い程涼しいので、すぐ上衣を着けた。

先登の連中は、はや晝食を終つて、そこいら歩るき廻つて居る。詩を吟じて居る聲がする。

僕等は、風があまり涼過ぎるので、岩の風下の芝草の上に新聞を敷いて、手籠を披いた。パスティ(ぺと發音せずにパと發音する)の中には牛肉の刻んだのの入つたのと、味をつけた馬鈴薯の細切りの入つてるのと二種あつた。珍らしいし、腹も減つてたので旨かつ

た。エヱルの旨かつたとは言ふ迄も無い。渇いてたと見えて、譲一人で一本の四分の三は平らげた。

食後、僕等も絶頂の平地を歩るき廻つて見た。山巓の北側は二三哩平方、低い木柵を廻ぐらして牧場が見える。幾十百の馬が、或は臥し、或は歩ゆみ、或は走つて居るのが、豆粒ほどに見える。西側は、コオチの待たしてある邊から、沼地になつて、蘭らしいものが茂つて居る。その先は、芝草ばかりの丘陵が大波の如く起伏して居て、遠くに何處かの村落が點綴して見える。南側も同様だ。東側は、大きな谷――芝草許りの谷を距てゝブラウン、キリイと稱する平凡な連丘が横はつて居る。ブラウン、キリイの連丘の右に盡きた處と、その南に高まるロオランドといふ山との間に、低地がある。その低地の遙か遠くに、池がある。五十錢銀貨ほどの大きさに見える。是がアアサア物語にある、ビデヸアが名劍エキスカリバアを投じた湖水だと傳へられて居る池である。名をドスメリイ、ブウルといふ。

三時過、下山の途に就いた。途中、ヘザアが叢を爲して爲えて居る處を通つた。犬蓼のやうな、紅い花を着けて居て美しい。嬢は、ツト横へ外れて、切りとそのヘザアの中を何か探し廻つて居る。暫くすると、呼吸せき追ついて、

「これを發見しましたよ」

といふ。白い花を着けたヘザアの小枝を五六本手にして居る。白花のヘザアは幸福の記號で、且つ滅多に見あたらぬ物だ、と言つて嬉しがつて居つた。倫敦ぢや高價な品で、しかも贋物が多いといふ。

一同がコオチへ歸つたのは四時だつた。往路とは別な道を採つて五時頃カメルフオオドの本村へ着いて、茶店で茶を喫んだ。倫敦ぢや殆んど蠅といふものを見られぬが、日本の田舍同様、此の茶店には蠅が非常に居る。店頭に出してあるケエキの切口など黑くなる程蠅が取付いて居た。

六時半に宿へ歸つた。

八月十三日

今日は此村へ來てからの二度目の日曜日だ。

朝食後、望樓に近い、小山の上に建つてるフオラペリイ、チヤアチといふお寺の朝の勤行に參詣した。

寺は、アイルは北側丈けに、トランセプトは南側丈けにある、コチエヂ式の小さい建物だが、建物に不似合な大きな鐘樓がある。此の鐘樓には鐘が一箇しか無い。ピイルをなすべき他の鐘は、此處へ運ぶ途中、其船が難破した爲め、沈沒してしまつたのだと言傳へられて居る。ホオカアの詩に『サイレント、タワア、ヲヴ、ボツトロオ』といふのがあるが、あれは正しく此の寺の鐘のことを詠んだものだと、孃が講釋して吳れた。

孃は今日は上下とも、白に黑の荒い縦縞のある衣物を着て居る。昨日倫敦から小包が屆いたが、是が入つて居たのであらう。手袋は手頸までの黑皮のをして居る。帽子の紫がゝつた黑天鵞絨のトオクは、いさゝか衣物と對照が惡るいと思つた。

勤行に出る僧も、クワイアに立つてる子供も、此間ミンスタア、チヤアチて見たのと同じだ。聞けば、ある週は、朝の勤行を此の寺でして、夕方の勤行を彼の寺、その次の週は朝の勤行を彼の寺でして、夕方の勤行を此の寺と、交互にやるのださうな。

勤行がすんでから、望樓のある山邊まで散步した。寺の直ぐ後ろに、麥畑がある。穗はもう黃ばんで居る。その麥畑の小徑を行く。二人は並んで通れぬ狹さだ。其處を通りぬけると、苜蓿の畑がある。肥料を與へたものと見えて、莖が一尺以上の長さだ。花も日本の三倍は大きい。此の畑を通り拔けると、望樓まで、例の靑芝ばかりだ。處々、窪みに羊齒の生えて居る處がある。

今日も日本晴だ。然し風がないので非常に暑い。晝のヂンナにエエルを飲む氣になれぬ。買置のレモンがあつたから、それでレモン水を造つて貰つて飲んだ。プデンも食ふ氣になれぬので、ジヤンケツトを造つて貰つて、之をセコンド、コオスに食つた。

如何な孃も、今日ほどは午食後に散步しやうとは言

はぬ。御免蒙つて居間のカウチの上で晝寢をした。

夕方、やゝ涼しくなつてから、ヴレンシイ谿へ散步した。

坂下の石橋を渡つて右へ曲る。半丁許り行くと、右手の石垣に門がある。門をはいると、右は川縁まで、左は松の繁つた小山の麓まで、廣からぬ牧場がある。牛が十匹許り、それに交つて羊が三十匹許り居る。この牧場を通りぬけると、谷は急に縮まつて、帶ほどの平地が川の左側に續く。山毛欅と黑苺とが繁つてゝ殆んど路といふ路が無くなる。川を右へ渡る筈だがと思ひながら進むと、「ミンスタア道は右」と立札があるのが見付つた。橋は無い。川といつても、此邊は飛び越えらるゝ幅だ。中程に大きな石の露出してる處を擇んで、それを中繼に飛び渡つた。向側の水際は、少し許り、野芹の生えた泥地だつた、嬢は飛び損ねて、片足其れへ踏み入れた。靴が淺いので、靴足袋まで泥にした。ヲオタ、ラレイが女王に御供して何處かへ行つた折、泥濘の路に出くはした。その時ラレイは徐ろに上衣を脱いでその路に敷いて女王に踏み渡らしたと聞いて居る。今、此際、どうしたものかと思つても、妙案が浮ばぬ。

『オヤ〳〵。之れで拭いて上げやう』

と、ポケットからハンケチを出したら、無雜作に靴を道草でこすつて、

『なに、今直ぐ乾くわ』

と、片手で裾を少しからげながら、平氣で居る。そして、

『あら、あんなに熟れたのがあるよ』

と、丈長より高い黑苺の木の下にしやがんで實を探しはじめた。すぐ掌に餘るほど採つた。

『これが旨さうよ』

と、その中擇つて呉れる。僕は木苺はいゝが、黑苺は好かぬ。然し『いやだ』とも言へぬので、嚙んでも堅い種が口の中に殘るのを堪えて、

『イエエス。ヹリ、ナイス、インディド』

なんどゝ御愛想を言ふ。嬢は

『ルック、ゼア』

と、熟した實を見つけては、それからそれへと、苺の木を追ふて進む。そのうち、到頭道を失つてしまつた、日は暮れてしまつた。後返りするのもつまらぬ。山を右へ右へと上つてさへ行けば、ミンノタア、チヤアチ道へ出れるだらうと、とある谷間を小山の頂みかけて登る。山には空が見えぬほど松の木が茂つてゝ、下草は膝を没する高さの羊歯だ。足下が見えぬ程に暗くなる。

『日本ぢや、よく斯んなやうな處に蝮が居るんだが』

と、立止つて汗を拭きながら言ふと、

『おゝいや。そんなと言つて下さるな』

と、後から跟いて來る娘が、涙聲で喘ぎ〳〵言ふのは可哀相だつた。

到頭、その小山の頂上へ登りつき、海岸の望樓に方角を宗見めて、村への本道まで辿り出た時は、僕もホッと呼吸をついた。宿へ歸つて燈火て見ると、娘のスカアトの——今日下立てのスカアトの裾には、草の實がくつついて居り、跳泥も揚つて居る。少し氣の毒だつた。

八月十四日

午前は海岸望樓附近まで散歩。

午後は、いつか行つた裏山の栗の並木の下へ行つて寢轉んで本を讀んだ。昨日に劣らず暑い。空は眞青だ。

茶に歸つて、夕方望樓對岸の突端まで行つて見た。海は疊の如く平らだ。地平線に近い處だけ、刷毛で塗つたやうに、淡く横雲がある。日は次第に白いてその横雲へと沈み出す。脚下の水際まで一條の銀路が輝く。突端近くの、大小幾つの岩礁には、海鷗が止つては飛びあがり、止つては飛びあがりして、啼き叫んで居た。美しかつた。

夕食後、僕一人、宿の門の低い石段に腰かけて門納涼をして居ると、向側の百姓家の三つ四つの女の子がちよろ〳〵と出て來た。毎日顔を見合はせるので、慣れてよく僕の傍へやつて來るのだ。初の內は、僕の一間位まで來て、じつと顔を見つめて立つて居るのであ

つたが、此頃は直ぐ傍まてやつて來る。膝までのフロックを着て、その上へ油屋さんを着せられて居る。髮は金色の縮毛だ。くる〳〵した、眞靑な眼玉をして居る。

今夜も、はじめは僕の腰かけてる石段へ來て、二尺許り離れて同じ向きに腰かけた。どうするかと、僕は素知らぬ顏して居ると、段々僕の方へ寄つて來る。しまひには僕の膝と自分の膝と接するまでに寄つて來た。まだ僕は知らぬ顏をして居る。すると、その小さな片手を僕の股の上へ置いて、下から僕の顏を覗き上げるやうにして、につこと笑つた。可愛らしくてたまらなかつた。僕は故意と、

「お、吃驚した。何時此處へ來たの? おゝいゝ靴だこと」

と、玩具のやうな小さひ、リボンて結んだ片方の赤靴を觸ると、

「フフ」

と言つて片方をひつこめる。

「ヱリ、プリチイ」

と他方のを觸ると、

「フフ」

と喜び笑をして、それをひつこめる。然し、さう言つて貰ひたいのて、さつきひつこめた足を出すのは面白かつた。

暫くして、又も顏をのぞき上げて、もとらぬ口て

「イズ、ザツト、ヨア、ライデイ?」

と、娘のとを尋ねたのは殊に面白かつた。

人物評論（二十五）

伊集院公使論



△伊集院彦吉氏

文學博士　三宅雄二郎

薩摩は維新前他藩に先んじて外國と交通した爲、明治になつて外交官を出した事が多い、吉田なり、鮫島なり、森なり、上野なり、色々ある。後政治上に長州に壓倒され、藩閥の薩長兩本位が殆ど長閥單本位と爲つたが、外交官にも今は伊集院氏が支那に公使と爲つた位である。薩摩人とて一概に言へぬが、何處となく人に長たるに適すると見えるのがある。實力有つても無くても高き位を占め、少くも人に看板にせられる。押

出しの好い處が與つて居るのであつて、單に押出して濟む場合に持つて來いとすべきなのがある。大膽らしく、親切らしく、樸實ながら如才なく、人と相談して物事が滑に極まつて行く。誠に都合の好い處があるが、併し事が面倒と僞ると分別に困る、其場合丈が見えて其先が分らぬ。若し側に傳役となつて知慧を假すものがあれば、隨分旨く遣り切り大手柄を現はすことあるが、左も無ければ分り切つた樣な事にも下手をする。薩摩出身者には參謀を得る事が肝腎である、人を得る丈それだけ宜い。西郷大久保等の存命であつた頃、人が勝海舟を訪問した。海舟の言ふには、此頃で誰が一番人傑であると思ふかと。西郷とか大久保とかいふ人だらうと答へたら、海舟のいふに、何故左樣思ふかと。御一新の働から左樣思はずに居れぬと言つた所が、海舟は左樣いふ事であるか、それなら皆おれが敎へてやつたのだと笑つた。海舟は大久保に就いては兎も角、西郷に就いて蓋世の雄と稱するを吝まなんだ。殆んど褒め得られる丈褒めて居る。が之を褒むるには別に意義がある。維新頃の働が如何である斷らであるでは別段褒むる程の事が無いとして居つたのである。

西郷は決斷があつたとしても他から智慧を假るの必要があつた。大久保にしても人の智慧を假り、自らは之を斷行する上に力を現はしたのである。薩摩人で單獨に働けるのが少い、單獨になると身じめの目を見たりする。黒田伯が辨理大臣として朝鮮に使した時も、井上侯及び其他が伴つて居つた。伊集院氏は是等と比較するの位置に進んで居らぬ。いはば青二才である、併しつまり薩摩人の御多分に洩れぬ方である。薩摩人としては先づ有能である。物が分り、事務が取れる。そして外交官といへば通譯するか夜會に出るかを知り居れば宜い樣に考へられて居る處で、多少東洋の形勢に趣味を持ち、手腕を發揮しやうとの抱負もあり、稍々毛色の違つた所があるかに思はれた。が外交機關は假に膨脹し、急に昇進したのが多いので、中に働き手もあるが、如何はしいものもある、知事もヤツトといふ樣な手合で大使となつたのもある。多少辭令に嫻つた丈で、頭も手も腰も出來ないのがある。從つて伊集院氏を以て他の大使、公使に比して劣るといふ譯にゆかぬ。何れかといへば好い方である。歐洲の或る國に大使になつても無難に勤るであらう。是れまで支那でも無難であり、實に良公使と認めらるべきであつたが、思はぬ大動亂に出合ひ、不首尾を世間に示す樣になつたといふも、無理はない、現在の大使、公使の多くは支那に公使として同樣の態度に出たであらう。或は伊集院氏の方が優つて居つたかも知れぬ。今の外交官で今回の動亂を見抜いたのは殆んど有るか無いかである。要地を占め居るもので先づ無かつたとすべきである。

伊集院氏は曩に天津に總領事として公使館の仕事の三分の一若くは二分の一をも擔任する形があつた。支那に公使が二人ありと謂はれ、或は伊集院が實際の公使だと謂はれた、事實に於てそれ程の仕事をしたのである。が果して氏の自らの力があるかと言へば、速斷は出來ぬ。氏の力の著れたのは直隷總督袁世凱と與にしたといふ所がある。當時の直隷總

實は外交の主なる部分を占めた。從つて袁と與にするは何よりの便利であつた。袁は兎角の批評があるが、所謂海山千年、大抵の者を手玉に取る。伊集院を丸める位は何の造作も無い。伊集院氏も其邊の事を氣付かぬではない、袁の老獪を知つて居る、喰へぬ爺と思つて居る。が喰へぬにして勢力あれば、之と共にし、逆に利用するの利便あるをも思つた。果して之と與にして幅が利いた。其處迄は成功であらう。が其れから氏の眼には兎に角袁は一廉の腕前の人物に映じて居り、動亂があつて袁が召し出され、全權を授けらるゝとなると、周圍の勢、袁が中心と爲つて權力が集ると見た。袁が愈よ權力を握れば革命派なんか何でも無いと考へた。妙に北京に居る連中は革命派を以て甚だ力無いものとした。滿朝政府に出入する公使伊集院ばかりでない、公使館に出入する支那通連も革命派の爲すあるに足らざるを認めた。滿朝政府は如何に困難なるも高の知れた革命派を鎭壓するに堪ふるとした。袁が召し出されて困難を感じつゝある所に何等かの便利を與へ與れればそれ相應の事があるらしい。袁が老獪でなくて正直一方であつても、左樣いふ邊に考へ及ぶ、況して確かの老猾と來ては之を助けるに限る樣に思はされる、思はずに居れぬ樣になる。革命派が今日ほどの勢力を得るとは人の多く豫期せぬ所で、革命派の中にも意外に感ずるのがある。が今度起れば必ず物になると認めたのもある、南方の消息に通じて居たものは早く之を見通して居つた、が外務省は門戸を鎖し、眞に消息を知り居るものと何等の緣故がない。夢にも意見を聞かうとせぬ、意見を開陳する者もない。本省が此調子だから北京公使館も自分丈で事足ると信じて居た。本省に通知する所は滿朝を助けて相互に得る所あらうといふのである。英國公使に從つて見れば同じく何等か調停を試るが宜いといふ氣振である、此處て一働き現はすべき處と勇みもし、既に鬼の首を取つたかに叺したのもある。が事は固より左程容易でない、極り文句の遣り取り、普通の儀式の宴會ならば思ふ通りに運ぶにしても、支那の事情は單純でない、お坊さん連の理解するに少し複雜過ぎた。流石英國は多年の經驗で、公使に別段の手腕無しとするも、自づと見當の當く所がある、呼吸の合ふ所がある。政府に宜しく、革命派にも宜しくない方でない、こだはつて取返しの着かぬことなどせぬ。日本では正直といはうか、淺薄といはうか、御目出度いといはうか、變に乘り出した。本省に於ては見當の着かなんだ丈深味に入らず、官軍が勝ち相であつてそれに肩を入れて見やうとしたが、革命派も案外勢が宜い樣であり、其の感情を損ねてはならぬと後れ馳せに感附いたりした。後には革命派に同情を持ち居るかの意を示し、手加減が餘り巧でない。支那の動亂は分り惜く、強ち外務當局者の目の利かぬを咎むべきでないが、尋常よりも稍々目の利きさうに思はれたのが、尋常の上に出でず、時として其以下に落つると疑はれるに至つた。若し今少し南方の事情に通じて居たものが伊集院氏に助言したならば、もつと面白く事が運んだであらう。双方の事情に通じ、以て袁に臨み以て革命派に臨んだならば、南北を調和するにより多く與り得たらう。

外交官中支那の難局に當り得るは甚だ少く、中に伊集院氏は東洋向と

見られた丈都合の好い筈であつたに、その都合の好い筈であつたのが、都合の好くなかつたのである。單獨で面と向つての腕比べには薩摩出身者に不向きである。我國で眞と太刀打し得るものは色々居るが、此類のものは全く外交と掛け離れて居る、國際法の國の字も知らぬ。外交官といふ外交官は概ね眞の手の中に丸めらるゝ連中である。中に伊集院氏は何程か呼吸を吞み込み居らうと思はれたが、其處迄に至らなかつたと見える。大抵の處で思ひ止まつた爲に多く怪我しなかつたが、すんでの事に危かつた、多く怪我しなかつたにしても、恥を掻いた、得べき所の事を得なんだ、惜しい事をした。不思議な事には、革命の勢の盛になるべき事は、支那に滯在し居るものも日本の內地に止まり居るものゝ方に見拔いた所がある。公使館なんか誠に顏色ない次第である、もつと注意の上に注意し、勉强の上に勉强しなくてはならぬ。明治の初に公使と爲つたものは重に薩摩よりしたが、中に別段功績らしい功績を殘したのは無い。極まり通りの事をしたのが精々である、巴里で火事場に出掛け、喞筒の手傳ひを命ぜられ、新聞に嘲られたものもある。薩摩出身の外交官としても伊集院氏は大に奮發すべきである。國家の爲、薩摩の爲、自らの爲、出來る丈の努力せよかし。

△只東洋流のサルーンヂプロマチスト―

横議處士

伊集院は廿二年の帝大卒業生で、原嘉道や柴田家門や秋山雅之助や石井菊次郎や李家隆介等も皆其時一所であつた。其中一番金持に爲つたのが原嘉道で、一番官海で榮達したのが柴田家門だらう。其級で外交官に爲つたのは石井菊次郎、秋山雅之助、伊集院彥吉の三人だつたが、中で一番將來のあり相なのは秋山だつた、が不幸中道にして酒の爲に病に罹り、今では全然學者方面の人間と爲り了つた。朝鮮總督府の勅任參事官をして居るのが彼の男子の事だ。二六新聞社長であつた、秋山定輔も矢張彼と同期の法學士である。て今では外交官は只石井と伊集院だけである。石井は才子の小刀の利く人。伊集院は重々しく、鹿兒島的で物を言はぬ。けれど遲鈍である。物に鈍い男だ。が東洋人は一種妙な人種で、物數を言はず、ドツシリ尻を落ち着けて、折々アハ〳〵と大笑をする風のものを偉いと思ふ。支那流の文章では深沈大度有りなどといふ。結句伊集院見た樣な人物が大きい人物と見られる。

彼は歐羅巴へは英國へ二度行つた丈だ、一度は書記官一度は參事官かて行つた。後は多く朝鮮や支那へのみ行つて居た。元來が彼は東洋向である。伊集院が總領事で天津に居つた時分には丁度內田は支那公使で北

京に行つて居り、其時日本政府は大に袁を利用せよと云ふ考であつたが彼れは當時直隷總督であつた爲めに、此袁にたよるべき事を頻に政府に說いたのは伊集院であつた、伊集院の意見が當時專ら我外務省に行はれて居たので、爲に內田よりも伊集院の方が偉い、働があると思はれた。けれど其實彼は鈍い、にも拘らず世間より尊敬を受けると僕に自分を偉いと思ふ。智慧の無いものは得て左樣爲りたがるものだ。昨今今度の問題で內田と言ひ合つたとやら言ふ事だが、それも其總領事時代から、自分の方を內田よりも偉いと思つたが爲であらう。

平和の時のサルーンヂプロマチスト。即ち御座敷外交家といへば、眉目秀麗にして踊が踊れる、奧さん御孃さん達に對して御世辭が言へるといふのもそれだけれど、尚ほ東洋流に重々しく構へ、沈默で威張り物を言はず、時々はアヘ〱と腹の底からせり上げて馬鹿笑ひをするといふのも矢張り一種のサルーンヂプロマチストである。野郎は此中の第二の方だ、東洋流の方だ。只それ丈で彼には才略はない。所詮は袁世凱のプッペットに終らぬかとの杞憂がある。迚も時々刻々に變化し行く支那に處して政略の出來る男ぢやない。無策で極鈍い。

學問も大して偉い男でない。幼年の時海軍兵學校に志し、それから攻玉社に入つて理化學などを研究した。由來薩摩人は人種學から云へば「隼人」と云ふて臺灣の「ヘツカ」マダガスカルの「ホバス」抔と同人種だから數理抔の樣な緻密の學問の出來る筈がない。夫れゆへ泰西の文物を輸入しても漸く農學とか林學とか若くは戰爭をする兵學位が關の山で、農學を志すものゝ薩人に多きは此の故である。押川則吉や、玉利喜造、本田幸助、今井吉平等の農學士は皆薩人だ彼れも札幌農學校の入學試驗を受けに行つたけれど、それに落第したので、已むなく東京に歸り、志を法學に轉じて帝大に入り、遂に今日に至つたのだが、彼の時札幌へ入學が出來たら今頃は農學者になつて居り、それで一生を終つたのであらう。札幌出身の學士には大分毛色の變たものも出たが、彼れの樣な遲鈍の奴には志賀重昂や、新渡部稻造や、早川鐵治抔の樣に專門の學を打捨て方角違いの方面に向つても兎に角世間に頭出の出來る丈の働きの出來る筈がない。無論大した人物ではない。が藩閥に生れ、大久保利通の娘を貰ひなどした爲に兎に角もやつて居る。大久保といへば藩閥でも大西郷に讓らぬ勢家である。彼れは兎に角金紋挾箱の家柄である。然しながら此處らの男が支那の公使と爲り今日の難局に當るかと思へば、日本の前途迄も如何にも心淋しく感ぜられてならぬ。

△伊集院公使論

田川大吉郎

◎三十三年の夏、僕が天津領事館に入込んだ時分は、各國の聯合軍が既に居留地を擁し、天津城は未だ落ちないでも、既に落ちんとする間際の極めて騷がしい時分であつた、其際僕は頻りに領事鄭氏の夫人の英にし

て又健闘なる評判を聞いた、而して領事鄭君に就ては、落莫として殆んど聞く所が無つた、而して當時の天津領事館には、所謂支那豪傑連が紛々として落合つて居た。

◎其鄭氏は有名なる支那通で、特に支那語の上手な、其方の伎倆から言へば、日本人中の第一は、どうだか知らぬが、確な所は第一流の中の上位を占むる人で、而して其人柄は温良て、衒氣の無い、やさ形の質であつた、而して氏は當時にも既に聞へなかつたが、其後は一層聞へぬ人と爲つた、此様な人は到底支那に向かぬものと見える、特に戰爭中の支那に全く向かなかつた人と見える。

◎鄭氏の後、今の伊集院氏が、天津の領事と爲つた時は、頗る素晴らしいものであつた、一天津領事の盛名は、殆んど歴代の支那公使を壓する程で、日本の支那に對する國策は、或は天津領事に由つて決せらるゝでは無いかと中外に思はるゝ位ゐに、天津領事の評判は中外に喧しかつた、而して氏は此間早くも未來の薩摩大臣の稱を得た、薩摩大臣と呼ばるゝことはチト氣に障るけれど、それでも結構だ、氏の得意想ふべしてあつた。

◎其顏には重さうな所がある、其辯も莊重てある、惜しい事には身長が少し低い、特に胴以下が短い、若し胴以下がモー一二寸も長かつたら、堂々たる風采、一段と見榮がするであろう、それにしても、何をしたか、何をして、若くば何を考へて、氏は此の如き盛名を一時に博したか、僕は寡聞にして未だ聞く所が無い、それだけ僕に取つては疑問である、僕は氏の談話（若くは演說）に於て、格別の才氣を認めない、一寸、何か考への有り相な容子だけは認めた場合も無いでは無いが、成程、こゝが氏の利刄、大器、英雄たる所以だと合點したことは未だ無い、勿論、それ程氏に近く繁く接した譯でも無いが、凡そ人は凡倉て無い限りは、必らず何等かの印象を人に與ふるものである、而して僕は此といふ印象を、未だ氏に由つて與へられたることが無い、それだけ僕は氏を知ること未だ深からざる者である。

◎此際支那の騷ぎが起つた、南北二朝が立つか、二百七十年の宗社が全滅するか、氏の使ひしてる朝廷に取り、國家に取り、正に前古未曾有の變、而して人の一生に取り、復たと逢ふべからざるの大機である、公使として此間に在る、得意の境か、不得意の境かは別とし、果して大才あらば、之を揮ふべき絕好の機會である、氏に取つては、未來の大臣どころか、若くば宰相どころか、既に現實の大臣、宰相として、支那日本に跨げての榮辱、盛衰の鍵を握つた大切の場合である、而して氏は何を爲さんとしたか、果して何を爲したか。

◎僕は、氏が内田外相と衝突したとだけの噂を聞いて居る、其何で衝突したかの內容は全く知らない、既にして氏が歸る、喚び返さるゝとの噂を聞いた、多分氏は遠からず歸朝するてあろう、衝突の噂眞だつたと見える、此に至つてはいよ〳〵其衝突の內容如何を知らなければならぬ、それを知らなければ、氏の評論は眞を得られない、而るに僕はそれを知らないのだから、其評論をも之を控へるの外は無い。

◎唯だ此様な事は言へる、氏も支那通の代りに、内田外相も支那通てある、内田外相は其支那通たるに於て、一歩をも氏に輸せずと信じて居る人である、それだけ天狗揃ひてある、天狗の鼻の突き合せである、衝突の内容は之を知らないけれど、こゝにも衝突を起すべき手近の原因はある、但、それとした所が、そんな事で、此大機を滅茶々々にして仕舞ふとすれば、内田外相も外相だが、氏も亦氏である、要するに大した切れ物では無い。

◎こゝで言ふのも變だが、一體、帝國の政府には、對清の政策に裏表がある、對清とのみ言はない、對東洋と言へやう例を二十七八年の役に取ると、朝鮮の公使は有名な大鳥圭介氏て、當時の和戰の決は確に氏の手に在つたのだが、然も氏は當時の外相陸奥氏から、戰ひに決してもいゝとの訓令は受けて居なかつた、寧ろ戰つてはならぬ、勉めてそれを避くべしの訓令を受けて居た、而して事の實際は、動もすれば外相陸奥氏の口から、大鳥氏が氣が利かないとの批評が漏れた、外相陸奥氏は幾度か之を其左右に語り、足摺踏んで居たのである、而して遂に戰ひに爲つた、而して氏は褒められた、夫れ戰ふなとの訓令を受けて居て、戰ひに決したから褒められるとは、何といふ辻褄の合はない沙汰てあらう、而して曰くこれが外交だ、更に曰くこれが帝國の國策だ、僕は敢て曰ふ、帝國の朝鮮に對し、支那に對して執れる態度には裏表がある、此間に使臣たる極めて難しと。

◎それも先づこゝらで舍くとして、お人好しの鄕氏三十三年の役に傷づいた、而して豪傑肌の氏も亦今に於て全功を收め得ない、兩人の性行は全然反對である、而して双方とも不適應の誹りを免れずとせば、支那なる舞臺の役者たる性格は、之を如何すれば可なるか、實に問題では無いか。

◎聞けば政府は、伊集院氏を呼び還した上は、山座圓次郎氏を氏に代らするとの評判である、山座氏も好評の人である、少くとも酒の上の豪傑である、酒て英雄を羅致し得る人である、先づ支那豪傑を駕馭するには、氏も亦伊集院氏と同等の伎倆或は性格を具有して居る、それでも、山座氏ならば、支那の事、善處し得べしと信ずる理由は何處に在るか、僕は帝國に於る人物の、新聞上の評判を一切空に見るものである、從つて未だ山座氏の眞價を其新聞の評判通りと見ることが出來ない、それだけそれをも問題だと思ふ者である。

◎曾て矢野文雄氏も支那公使たりしことがあつた、而して氏は歷代の中、一番不評の公使であつたかも知れない、然しながら酒の豪傑評は別だ、所謂支那浪人の人物觀は別だ、それを拔きにして、冷かに、眞面目に、眞劍に、人物の能否、高下、大小を比較して見よ、此人は果して無能者として支那公使の班から見下さるべき人であつたか、寧ろ此人を更に數年支那に置いたら、帝國の爲にモット多く劃策し、周旋し、何ものかを捕捉し、擴張し、日本の品位眞價を發揚し得たらうではあるまいか、人の毀譽進退は一時の事である、帝國の榮辱進止は百年の事である、支那に對する到底の見込如何、特に東海に卓立する帝國の大策如何、支

那に使臣たる者の見識は、此點が大事である、通辯の人固より宜しくない、單純の事務家亦非、所謂洒の豪傑、豪傑振るもの亦又ヘケ、而して遂に支那に使ひすべき人を如何と観る。

◎伊集院公使一人の成敗は、どうでも宜しい、僕は只其成敗の跡を見て、帝國の支那に對する國策如何を疑ふものである、而して國策如何が定まらざれば、誰ゝ滿足の公使たることは出來ない、此の如くにして濟廷に使ひせしむるは、是れ唯人を殺す者である、想ふに帝國は既に幾何の使臣を濟廷に殺した、此上、更に幾人を殺さんとするか、僕の帝國の政府に問はんとする所である、意見は、大分横道にそれたが、僕は此不謹愼な貴誌の編輯局が恕し、又大方の讀者の恕せらるべきことを信じ希ふものである。

△伊集院公使

伯爵　大隈重信

薩摩人では先つ働のある方だ。薩摩の雛形で風采は極粗朴な、外交官といふよりも何方かといへば先づ武人氣質の、態度の落付いた人だ。支那に長く居るから支那語に通ずるであろう。話位はかつ〳〵出來るであろう。彼地の事情にも通じて居るだろう、實直だから支那人の信用は餘程多い樣だ。又幾らか歐羅巴迄て相應の學問をなして居るから、それ程上手で無い迄も先つ必要な用向を辯ずる位の英語は出來る。支那へは全權公使と爲つて行く前、即ち日清役前に天津邊に領事位で行つて居つた。それ以來袁世凱とも親しくなつたのであるし、其の他の大官にも何しろ駐任年限の長い爲に知人が多いのだ、溫和の人である丈に一番北京に於ける信用が厚く、歐米の外交官仲間にも善く思はれて居たのである。何方かといへば、北京に居る公使としては適任である。

が非常の時に臨んで臨機應變の才は如何であろう、是は長所であろうか如何であろうか、手固いには相違ない、物には驚かぬ、度胸は好い。が今度の樣な驚くべき突然の大變動に處しては如何であつたろう、是は常に起る可きの事でなく、そして事の前には將に起らんとする如き徴兆が甚だ少く、事起つて後に、是程迄ではなかろうと思つたといふ有樣である。尤も其前に起つた四川の暴動が其徴兆であつたのだけれど先づ意外であつた、十月十日に突發して忽ち支那全國に擴がり、僅か三週間以内で、全く北京政府の無力なことを中外に暴露した。此ういふ際には餘程機變の才に富むものでなくては旨く行かぬ。伊集院公使の才の其際如何に働いたかは分らぬけれど長所では無かつたらしい。併し好くは分らぬ、或は意外の働の有つたかも知れぬ。事變が起れば此の如き急激の變化を見ることを豫想し居たかも知らぬ。けれど是迄の處からして氏の手腕を評すれば只手固いだけの人だと思ふ。

が中央の外交と關係があるから、中央の方が旨く行かねば北京に於ても旨く行かぬのかも知れぬ、今日は全權といつても昔とは事變り、電信

で通信が出來るから獨斷て行けぬも知れぬ、十分に中央から命令が行くから公使が縱横に働く餘地が無いかも知れぬ、即ち北京の働は伊集院一人ては行けず、中央の命令で動くのだから、旨く行くが多少の過があるかといふ時に當つて、北京の公使一人が其責任を取るといふ譯に行かぬかも知れぬ。今度の事變は多分支那に於ける凡ての觀察家を惑はしたてあろう。歐米の機敏なる觀察家も如何てあつたか、或は旨く分つたかも知れぬが、多くは事件の進行中に度々考が變つた行つたのてないかと思ふ。そして日本もそれ等と一般に矢張り變つて行つたてないかと思ふ。外國ては、如何樣な態度を取るか、外部は現はれた處ては列國て友誼的忠告書を與へ不得要領に了つたといふ丈てある。內部に隱れた働は如何てあるか、能く現れん。現に角國際間に起り易いのは猜疑心てある。多少猜疑心が今列國の間にあるか如何か知らぬが、大きな國の働丈を見ると大した競爭も無いらしい。それにしては何としても日と英てある。日英同盟が主力と爲つて此際に働かねばならぬ。主力と爲るべき地位を有して居る、又有せざるべからざる關係を結んて居る。即ち商業上よりいつても、地を接し居る點よりも、日英人の共に行つて働き居る點よりも、日英同盟のある上よりも、如何しても支那の事には日英が世話してやる義務を持つて居るからである、支那も亦日英を重しとするに相違ない、英國の代表者は多分北京外交官中の耆宿あろうと思ふ。そして日本の公使も決して新しい公使てない、外交官中に居つて共に重んせらるゝべきである、すれば從つて責任も重いが、それ丈働き易くなる、支那に對しても亦自づと重きを爲す譯だから、革命軍と言はず、官軍といはず、十分に又敬意を拂ひ信用を置くに相違ない。兩國の同盟は支那の最も利益とする所だ、何となれば支那を平和に安全に保つには、日英同盟は與つて大に力あるものだからである。此事に任ずるに伊集院公使は決して不適當なる人物とは思はれぬ、先づ今日は適任者を得たと言つて置いて宜いだろう。

△固にして愚

超然子

○伊集院といふ男を一口に評すれば固にして愚なりす。

○あの男のエライと見られたのは天津領事をして居る時で、當時袁世凱のお陰でいる〳〵日本に都合のよい事をやつて貰つた爲めに、彼の名聲が實價以上に昂がつたのである。處が今度は袁世凱にだまされて、さん〳〵やりしくじつて大いに男を下げることになつた。袁に男を上げて貰つたんだから、又男を下げらるゝのも仕方があるまい。つまり因果應報であらう。

○伊集院の人物は要するに、固にして愚なりの一句に盡きて居る。

△伊集院君

江陰眞宰

伊集院君を支那に送つたのは前外相の小村侯だ。わざ〳〵倫敦から呼び寄せて北京に送つた。其考の元は伊集院君は袁世凱に懇意であるといふのが第一の理由であつたてせう。處が伊集院が倫敦を引上げると間もなく袁世凱は北京から引込むとになつた。伊集院はマゴツイた。殊に小村は大マゴツキにマゴツイた。滿洲問題を伊集院に着けさせやうとした小村の計畫がガラリと當てが外れた。然し兎に角何とか形をつけた、之は小村の働きは無論であらうが、又伊集院の働きてもありませう。處がアレには伊集院も餘程苦しかつたらしい。小村も可なり苦んだ。唯僅かに那桐か何かを相手にしてやつて居つたのかも知れません。

處て今度は革命大明神のお蔭で袁は北京へ出て來た。アノ奴どうするかと伊集院も餘程疑つて見て居つたてせう。けれども伊集院が大體見當をつけた以上に袁世凱は旨く働いた。十二月二十七日に漢陽を征め落した。あの勢で武昌を取れば案外早く革命をやつつけて了ふとが出來たかも知れない。處が餘り早く革命軍をやつつけて了へば、元來袁世凱を嫌つて居る所の滿人が復跋扈するとになる。それ々袁世凱は怖がつた。だから袁と滿朝とは一寸一致しない所がある。寧ろ大不一致がある。今日になつて見れば伊集院は其關係を見誤つたといはなくてはなりますまい。伊集院はもう失敗だ。英吉利と一所に干渉をやらうとした。所が英吉利は動かない。然し其事の失敗は伊集院の失敗ぢやない。伊集院も失敗の手傳をしたらうが、どつちかといへば内田の失敗だ。内田の失敗といふよりも寧ろ前内閣系―桂の失敗だ。まア其失敗と同時に北京の朝廷も無くなるてせうから、伊集院も引上げて來ることになりませう。さて伊集院が引上げてから日本は支那てどう働くか。實は伊集院は支那に對しては有望の外交家てあつた。之をしくじらしたのは氣の毒な事だ。此後は誰がやるか。阿部守太郎ても、本田熊太郎でも、まだ六つかしい。此兩人などに比べれば伊集院の方は無論大きい。

人物を一口にいへば薩摩外交家だ、純粹の薩摩人を外交家にしたものと思へば間違はない。機略はある。大膽でもある。然し識見が通らないといふ事があるかも知れない。殊に氣の毒なのは交際が下手だ。外國人などゝは最いけない。今度の事件でも英國の外交家と意志が疏通しなかつたといふ話がある。之も畢竟交際が下手なからでせう。あの人は支那にでも働かなくては働き場所のない人だから、これから先きは一寸困るてせう。

△伊集院と我對淸政策

望月小太郎

只今新聞を讀み昨日の議會の演說を見て、外交問題に對する議論の甚

だ寂莫たるを感じた。それに據ると第一に外務大臣は、清國問題に對して、同國に利害關係ある諸國と意見を交換し、禍害の甚大ならざるに先ち平和の解決を爲すに盡力し、英國と共に官革兩軍の協商に對し好意的幹旋の勞を取り、更に又英米露佛獨の五ケ國と共に官革の代表者に對して平和回復の必要に關し注意を喚起する所あつたと言つた迄でゐる。甚だ要領を得ない。是が歐米の天地であるなら質問又質問、攻撃又攻撃、殆んど議場の引繰り反る樣な騷になるであらう。然るに我議會は甚だ寂莫である、特に大石正巳君の質問の如きは殆んど質問の形をだに備へて居ぬと言つて宜しい。衝くべき急所を一寸も衝いてない。それに酬ゆる外務大臣の答辯に、清國の事態は清國人をして治定せしむべしとあるが、それでは我調停の目的は何に據つて居るか、清國の事は清國の事といふなら即ちチャイナ、フチア、チャイニーズであるから、初から只袖手傍觀より外に爲すべき事がない譯である、然らばそれに對して我帝國の好意的幹旋なるものには何處に目的が存在するのか、更に事實に於て我帝國は立憲君主政體を基礎とし、滿朝の帝室を中心として其所謂好意的幹旋を試みたのではないか。而して其目的の叶はなくなつて今日の所謂傍觀政策と一變したとすれば當初より上述我對清方針は極めて不確定で趣意が一貫して居らなかつた樣に感ぜざるを得ないのである。

抑も日本の對亞細亞政策は言ふ迄もなく東洋の平和にあり、そして其東洋の平和なる者は、支那の領土保全と其主權の統一とに由つて得られるので、更にそれの上に日本は日本の經濟的利益を植ゑ付なければならぬ、今回の支那騷動に對しても日本は當然此考に依て行動し將來又行動せなければならぬであらう、さすれば支那の事は支那に任すとして打棄る事は成らぬ譯ではあるまいか、否、日本政府は當初より支那の事は支那に一任せずして、所謂「好意的調停」（ベネボーラントアッシスタンス）の名義の下に日本の意見を或る程度迄發表し官革兩軍に向つて單に口舌の力を以て調停の効果を收めんと試みたのである即ち帝國政府は當初より立憲君主を基礎として其上に官革兩軍に對し好意的幹旋を爲したものと信ぜざるを得ぬ事實がある。是が抑も根本的政策の誤りである。何となれば凡そ國民の心理狀態に根ぜざる革命は元と兵力を以て如何とも爲すべからざる事は十八世紀の佛蘭西革命が能く之を證して居る。現に獨逸の如き有ゆる手段を以て社會主義者を壓伏せんとしたが、社會主義者は是が爲に衰へずして次第に勢力を爲しつゝ今回の總選擧にも大多數を當撰さして居る、露西亞の如きも虛無黨に對して軍隊の力を用ひ。其一家一族迄迫害して居るが、それにも拘らず處在に潛匿して容易に亡ぶべくもない、日本政府が此度の支那事變に對し、官革兩軍に調停を試るに當つては須く此形勢に着眼し、それが一時的の暴動であるか、抑も深く人々の心理狀態に根ざせるものかを見極めなければならぬでないか。西大后の死後には何事かの持上るべきは眼ある者の早く豫想し得た所である、果せる哉革命の武昌に突發以來直に漢陽を取り、それが取り返されて又一方に南京を取つた、革命の思想は深く支那國民の心理狀態に萌し、今や支那十八省の主部に普く行き亙つて居るもの、之に對して今立憲君主政體を主義とするならば無論

支那の政府を助くる事となり其結果兵財二力の何れかを以て之を援けなくては奏効せぬ、が假に之を假し與へて一時は革命軍を壓迫し得たとしても、それで能く平和を克復し得へきとするてあらうか、長江一帶の陳勝呉廣は或は我兵、財の力を以て一時は鎭壓すべし、而かも十八省に瀰漫せる陳勝呉廣は遂に能く鎭壓するを得べきか。十八世紀の佛國革命は普く歐州全土に恐慌を與へ、普魯西でも、墺太利でも、巴爾幹諸國でも、スカンヂナビア諸國でも、伊太利でも、其革命思想に因る人心の動搖を恐れて極力之を防がうと勉めた。が遂に防ぎ切れず爾來各國何れも立憲君主政體に改むるの已むを得ざるに至つた。之と同樣に支那の革命思想は石油の染んだ布片に火の付いた如く、一たび燃え立つては手の着け樣もない。我當局者に果して此事が具體的に分つて居つたか。今は『支那の爲の支那』と稱し居り乍ら、立憲君主思想を中心として官革兩軍に一度び調停を試みた事が事實ならば、外交上に一定の政策ある者とはいふべからざるものでないか。況んや之に假する兵、財、二力の中何ものをも以てせずして單に口舌上の斡旋を以て此目的を達せようとは餘り形式的である。果せる哉袁の如きは日英兩國が立憲君主政體を基礎として調停するといふ事を言明したのである。是は決して爲にする所ある袁の辟言のみに止まると言ふを許さぬ。然るに不思議なるは袁の態度である。漢陽陷つて革命軍の足並亂れた時に何故直に挾隔武昌を陷れ、南京を救ふ事をせなかつたか。彼の計此に出てずして漢陽の官軍の手に歸した後に兵を斂め、南京をば革命軍に渡して居る。之を以て官革兩軍の勢力を互角に保つて居る。其心根が分らない。それ故袁の立憲君主政に對する精神は此時に亡びたと見るべきであるてはないか。英國政府の態度は、少くも其形式に於て政體に關係せずして只兩者の調停を謀つたものらしい。斯くして其調停は遂に破れたが、扨て今と爲つては何人が局に當らうと容易に手の下すべきではないが此處が見識てある即ち革命思想は遂に亡ぼし得ぬ。革命軍の勢力は此の如くであるか、日本に一定の外交方針あるものなら、何故此際又進んで北京朝廷に忠言を試みないか。北京朝廷の運命は最早や知れて居る。其滅亡が最早や五日後れるか十日後れるかといふ時の問題に屬して居るのだから、恰かも我維新の時に、勝海舟が幕府と官軍との間に處した如くに我政府は北京朝廷に對して、其有形無形上の名譽、財産、生命等の安全を計る樣盡力しますから、大勢の已むなきを察して溫和しく退讓し、國民をして干戈の慘劇より免れさせなさつたが宜からうと誠實なる忠言を與へ一方には革命軍をして以上北京皇室に對する退讓條件を成るべく承諾せしむる樣に居中調停を試むる時機ではなからうか、又進んで支那の借款問題には日本が斡旋して必要なる外資を周旋する等、施すべき手段は多々枚擧に遑あらずと思ふ然るに今日尙ほチヤイナ、フチア、チヤイニスの傍觀主義が果して策の得たものであらうか、已に第一に於て立憲君主政體を基礎として調停を試みたのが誤、第二に今の際に當つて何等北京政府に忠言を與へず退嬰一方になり居るのが誤てはなからうか、帝國外交は此の如く方針確立せず今は唯自衞的消極的態度の他に何等の策もないのではあるまいか、以上の想像

誤りなりとなさば結局我對淸外交は當初より見識の立たざる所謂境遇の變化に追隨する外交方針である、斯かる政府の下に立ち、其一局面の使臣と爲り居るもの程非常の不利益な地位に立つものはない。換言すれば手足が全く縛られて居るのに何て働き得やう。曾て英國でスエス運河株を買收するに當つて獨斷で所見を遂行し、事後に及んで其承諾を議會に求めたが、此の如きは思ひ切つた遣り方で自己の地位を抛つて能く所信に忠實なる者である、けれども我日本の外交官にして此ビーコンスフヰルドの如き識と膽とを持つならば兎も角も、然らざれば今日の外務省の訓練に養成された我外交官で、斯樣な局面に立つて能く好成績の擧げ得られぬ事は、第一に先づ考ふべきである。現に今の英國大使の加藤高明男すらも此對淸外交を評して日本には幾多の外務省ありと公言せられた即ち外交方針の適從する所を知らぬといつて居るでないか、云ふまでもなく我對淸外交は內田子の對淸方針でもなければ西園寺侯の對淸方針でもない。外務省が幾らもあり、如何なる外務省から如何なる方針意見が授けられるか分りはせぬ。然らば此度の支那事件に於ても、其公使は自己の意見を行はんとするも第一、第二、第三の本省よりの訓令がある。然らば其訓令に從はんとすれば一貫の方針がない、是では何が出來るか、それ故我對淸外交に對して伊集院公使の手腕の優劣を論評する前に、先づ日本の淸國問題硏究機關の設備如何を批評するを要する。想ふに其近接なる關係上、世界中、支那の事情に精通するものは日本でなければならぬ、然るに日本では一向官軍、革命軍の趨勢に不通の樣であつた。先づ第一に昨年十月以來北京政府の兵力を買ひ冠つたに相違ない、第二には革命軍の範圍を一小部分に止まるものと思つて居たに相違ない。加ふるに日本の相談相手たる英國は自國の海軍問題、社會問題、財政問題等の爲に忙殺されて力を十分支那に注ぐことが出來ぬが、又其外務省は矢張り支那の情勢に通じて居らぬらしい。北京に居るジョルダン公使の如きは唯英國の公使といふ丈で重きを爲して居るので、其實倫敦の町に立つても其方角が分らぬといつた樣な仙人的好人物である。支那の狀勢に通ぜぬからとて無理もない。日本は正に支那問題に就ては英國を導き、それをして日本と同一の行動を取る爲に、十分な責任を荷うて一定の方針を立てなければならぬ位地に立ち居るのであるに、それが此始末である、伊集院公使を彼是れいつても、伊集院公使は水の如きもので、器の大い處に入れられると器の小い處に入れられると、唯入れられ處によつて動く、水は方圓の器に從つて動いて居なければならぬのである。

伊集院公使は英國公使と意思が疏通せなかつたといふが、兎に角ジョルダン氏は日英共同して官、革兩軍の平和に對し、ベネヴナーラント、アッシスタンスを與へる主義には同意したのである、が一方には暗默の間に北京政府に好意を持ち、それを助けて革命軍と平和を結ばしめんとするかに見せながら、一方には漢口筋で革命軍に對し、有らゆる便宜を與へて居た。英國の對淸政策は巧に双方の歡心を繫ぎ居るかに見える、之に反して我伊集院公使は北京政府には好意を持つものの漢口方面に迄は力が及ばぬ樣であつたと言はれるが、是も已むを得ぬ事であらう。何

となれば日本に幾他の外務省があり、公使の獨りの力で自由に働くことが出來ぬからである。

伊集院が英國公使と意思の疏通を缺いたとすれば、その不十分なる英語の御蔭であろう。それは假に紐育の總領事水野幸吉氏を抽んで、一等書記官とし、北京に呼寄せた事でも分る。

伊集院は有力な人で、少年以來百二都城の薩摩、即ちアゼンス、スパルタ的の外交的郷土に成長し、大學卒業以後引續いて外交官と爲つて居る、温厚にして思慮あり、沈勇にして圭角なく、善く謀り又善く容るゝ人である。此伊集院公使にして我外交方針の原動力と爲つて行くなら格別、原動力の命ずる儘に、一方面の戰闘員として立つんでは其器が餘りに不圭角である、惟ふに將來北京政府が退讓して共和政府が成立し、列國も之を認めて、茲に平和的經濟的發展を爲さんとする際に、彼を出して其間に力を盡さしめたなら遁れ人後には落ちぬであらう、支那人にも評判が宜く、北京に於ける外交官仲間にも評判が宜いのであるから、外交官としては適才の人であるが、如何せん我霞ヶ關の外務省及び其他外務省の、當初の對濟方針が一定せなかつた爲に、我國は今何等の爲すなく袖手傍觀して居る有樣と爲つたのである。が誰か此極に至らしめしと、其責任者を探すに至れば、憐むべし此無辜の伊集院公使が告朔の餼羊に供せられる位置と爲つて居る、羅馬の多頭政治は遂に羅馬の帝政を亡したが我多頭外務省は遂に我帝國の對濟方針を亡し了つた者である。噫！（談話）

編輯だより

○渡邊吉太郎氏の「岩倉公を論ず」はいよ〳〵次號を以て完結いたすべく、和宮降嫁についての公の働きぶり、落飾して巖倉村に蟄居せる一場の悲劇及び王政復古について再び大活動を初めて終に明治政府の柱石となる一生の經歷、且つ叙し且つ論じて興味盡くる所を知らず候。

○陸軍二等軍醫正稻葉良太郎氏の「勞働者の生活問題」は頁數超過の爲め次號に割愛いたし候。

○島崎藤村氏は病氣の爲め終に本號にも執筆し能はざりしが病氣全快次第苦心の作を寄せらるゝ筈に御座候。

○正宗白鳥氏の脚本「白壁」は一幕物として出來上り印刷にまで附し候ひしも、氏の脚本の處女作なれば今少し意に滿ちるやうにしたしとて、全部三幕物に書き改めつゝあり。脫稿次第三月號若くは四月號（春期附錄號）の誌上にあらはるべく候。

○谷崎潤一郎氏は時日切迫の爲め本號所載小說の結末を急ぎ、多少不滿を感ずるを以て、久しく腹案として秘藏せし「刺靑」を脫稿して次號の本誌に寄せんと申し居られ候。

和歌

尾上柴舟選

天野謙二郎

○

渚邊におとせるわれのかげを踏みひとりしづかに物を思ひぬ

岩かげにうづくまりつゝ物思へばさびしき海の聲はきこえず

岩の上に生ひし松の樹めじるしに渚をつたひわれのきにけり

浪くゞる鳥のつばさの光るにも心のもだえわりなかりける

松生ひし砂山かげのしづかなるまひるをひとりわれの歩みぬ

きりぎしの夕べの海にうす黒くうつせるかげをみてかなしみぬ

うたがへばかぎりもしらずうたがはれくるにぞわれはすゝりなかるる

藤見さよ子

○

たはむれに流す涙と思はるるこのくち惜しさ何にたぐへん

霧ふる夜眼に見えぬいとあたゝかき思ひの切に湧き來るかな

いたましう見るものもなきにび色の冬枯山に來て泣きぬれし

忌まれなばいのち絶ゆべしかよわなるみづからをふとあはれむこゝろ

潮近く父とわび住む少女子にうらやましうもうつる君が家

とばかりのことに泣くかとうちとはれ強いて笑むさへ悲しき初冬

入歯せしそのおん唇のつゝましさ思はず母と呼びてみまほし

かにかくに君生みませし母刀自と思ふもうれし夜のあたたかさ

君にまねて母よと低うさゝやきし夜のうれしさまた思ひ出る

汝がためにすさみにすさむいのちぞと云はるゝ毎に泣かれけるかな

細々とこの淋しさがいつまでかつゝきてあるやまた涙湧く

○　中川一政

枯れし藻の白き海べに泣きぬれて人をおもへば波のよせくる

青潮のながれの方に翔りつゝゆきてかへらぬ鳥となるべき

遠方のうすき山脈うつすらむ林を渡る鳥のひとみも

落葉たく畑のいろのとろとろと晝のひかりに哀しかりけり

燈臺かけぶる潮(うしほ)のをちにして夕べとなれば灯のにじめるは

軟かき落葉の上に君とみし蒼波けぶるをちなる岬

けもの來て我と暫く泣き吳れよ明るき光ながるる林

つぶらなるけものの眸さへなつかしや落葉にいねて光うくれば

○　安井竹美

しみじみとよわきいのちをあはれみてうすぐれがたの風にむかへり

いや清く月すむ海の底にしもしづかに泳ぐうろくず思ふ

このふたりいつとはなしにうつりゆく心にだきて別れすみせり

光りつゝ絲ひく蜘蛛を大いなる不思議のやうに見つむる女

茶の花の冷たき色をみてあれば心しづかにひきしまりきぬ

うすけぶり落葉松の葉に霜消ゆるやはらかさにもさしぐむこゝろ

うらわかみ人にしられて死にてゆく汝のいのちのたふとくもあるか(ある人の死に)

いさゝかの言葉のはしに遠ざかるわが友情のうすかりしかな

ちさきとき曾祖母とゆきしお十夜を思はせて霙重くふるかな

身にしみて人のまことを思ふとき時雨くるらし夜ぞしづかなる

○　捫垣青花

いかなればかくは悲しき性もちて生れきにけん

夜の雨きく

やはらかう胸をおほひて花の散る春のゆふべにおぼゆる涙

いさゝかのことにも涙ぐまれたる過ぎて來し日のなつかしき哉

とこしへにきよきこゝろをつゞけなむなど思ふときこぼるゝ涙

思ひあぐみよるべなき身を投げいだし生きわぶる夕落葉するなり

何がかく寂しきや心おち葉する落日の林去りもかねつる

○　　訥鴎軒

目さむれば必ず泣きし子なりきときゝしをさめて思ふ朝かな

世の隅にころがり居ればみづからを磁力の失せし鐵とあはれむ

輸入書を買ひて歸りぬさて誰にやらんとなりしふと忘れたり

餘裕なき生活をするわれかなと苦笑(にがわらひ)する時もありけり

佛蘭西の言葉を話しおもしろく小鳥のごとく君は世をふる

放心を强ひて集むる一點の次第に君がおもかげとなる

修身を教ふる聲のわれながらよくたつ朝の第一時かな

○　　氏名不詳

いづくまでわか漂泊はつづくらむ友おほかたは妻をめとりぬ

母ひとり寂しく待てるわが家にいさやかへらむ日も早やくれぬ

待つ妻のあらぬをふつとおもひ出て野良のかへりの足おもくなる

鍬の柄にあごのせしまゝいつ知らずおもいにふけるわれに夕日す

繭かひの後よりくだる夕暮のだらだら坂の白きくさばな

○　　湘江人

わづらひは青く息づき萎びたるわれの顔をば泪もて塗る

神經のにぶりしものかはてはまた尖りしわざかめくるめくわれ

あさあけのねざめのかほにひやひやと川風のよく心よさかな

女らしう友染などに手をふれてさびしき心わすれむとする

○　小川流葉

淡雪のしづかにくだる天地をながめてありぬ何も思はず

どこやらて時計の音が三つなりぬまたチラ〳〵と雪が降りきぬ

あゝ雪よ彼のぬかるみに一つ落ちて我が足もとに黄昏は來ぬ

いつまでも此の淋しさは續くべき物飽きやすき父に似たれば

○　安藤白流

灰色の空の中なる裸木にたわ〳〵雪のつもる明け方

春の雪大河端のやゝ濁る水に溶け入る淡き果敢なさ

雪の夜は火鉢につどひまづさきに祖母に聞くなり昔談しを

○　大地夕春

夜のまへに小鳥は音をもひそめぬるあはれや一縷さえぬかなしみ

この思ひはなちやるにもわりなくて獨りさびしむ冬の夜の雨

遠き山あかるく晴るゝ夕まぐれいたくも心うち沈みたる

河口に浪ある夜は佐渡の空うち眺めつゝあるといふ人

○　石引夢男

母が家に歸るがごとく我が船は港に入りぬ灯のともる頃

やるせなき心この頃ふる郷の君へはしりぬ父母へ走りぬ

銀盤の水は波紋を畫きけり靜かにちれる水仙の花

○　井田葉歌

年は去ること少年が眼瞠らきて何も得ざりし年は去りゆく

あてどなく電車下るれば濠端の柳に匂ふ夕霧の露

夜具の襟稍々に冷たしなゐ終るそのつかの間に

死思ひし心
煤煙の淡く障子に映りきて靜かなるかなこの午さがり

○　山本春久

寂びしさを忘れんがため夏虫の灯を戀ふごとく淺草へ行く
淺草と云ふところこそ嬉しけれ樂隊と灯と人の匂ひと
美はしき歌を欲りせし古への歌人といへるものゝあはれさ

○　内山久夢

冬の日がうすくつめたくさせる日に待つ人もなく待ちてありしよ
硝子戸に指ふれてつとつめたきが嬉しくありて又ふれて見し
冬空に三角の月がこほりつくそんな日なりき悲しかりしも
川の洲に黒くなやめる砂の色日くれて水のすこし光れる

○　松井綠水

母のなき子がもち遊ぶあはれなるおもちやの鈴のなるが悲しき
草籍きて投げいだしたる足うらにしらじらとして秋の遊べり
大川の岸の草生に吾がぬればそこはかとなく匂ふ枯草

○　若木花次郎

マチ擦りて枯草焚きし少年の日をなつかしみ川添ひをゆく
わが二十僧となりしを悲みて冬の夕日と黄の落葉見る

○　齋藤微花

春にふる雪のましろさそぼ濡れて歸れる猫の瞳(め)の哀れなる
日の落つるひとゝき棄てし煙草の火けむりにまじり見ゆる哀れさ
時計いぢる男のそばのちさき鉢哀れをふくみすみれ咲くあり

○　德島杜の子

廿年親なく生ひしわが街の冬のポプラのけぶる夕暮
什祖父の國あはれなる物語りありたる阿波の德

鳥戀し

○　藤田瀧雄

終電車過ぎにし音の絶え〴〵に億れしレール白く光れる

○　島津浩宇

くぼみたる老のまたこのさらにまた病にふけて見ゆるがあはれ

かた馬車に搖られながらに落葉せし山のふもとをまた繞るかな

○　尾川夕秋

何故かしらねど空のにごりゆく夕となればさしぐむ心

○　前田黄昏

夕暮を岡に君待つ目に見ゆる木立の中の白壁の家

さら〴〵と秋の木の葉の音たてゝ散るを哀しくなける鶺鴒

○　須賀紫浪

ほそ〴〵と薬燒く煙紫に立ち昇る野に冬の氣を吸ふ

○　米田菊

ゆふまぐれ教會堂の大理石に熱きひたいをおしあてゝ泣く

水漲りすべて散りすぐ白樺のかげ落ちてあり雨后の朝あけ

○　藤川萍郎

冬の聲枯れつくしたる野の林夕しづかにさまよいて聞く

○　鮎の人

大空の一つ一つの星を數へ十三になりやめたりしかな

尚一つ鳴ると思ひて聞き居たる夜の鐘やみぬものたらぬかな

○　栗林桂花

なげやれど忘れ得がたく何時しかに拾ひて思ひわびぬる心

○　福島蘇雲

神の如生れし時に泣きしわれ今泣くことのなにかかなしき

○　池永蒼桐

偏狹の貴さしらぬ故郷の人々に背くわがたよりかな

謂かれと指を三本折りしとき君はきたれり君も一人よ
〇　中里　富
夕暮をつばさかへして白々と大野をとほくゆき消えし鳥
〇　松島落果
寝まきのまゝほろ〳〵落葉するなかにみあげし星はつめたかりけり
しぐれの音やがて月夜となるころをねざめさびしくいてし酔かな
〇　津端　修
思ひ屈し寝床に入ればひいやりと素足にふるゝ冬の悲しさ
〇　宮村哲雄
天地に息してあるを悲しめる夕べの空に雲のうきたる

和歌應募の注意

〇東京市小石川區原町百十五尾上柴舟氏宛
〇用紙は半紙又は半紙大の原稿紙に限る
〇封筒の表面には必「中央公論歌稿」と朱書すべし
〇氏名住所明記の事

口繪の説明

本號の口繪「ハムレットとホラチヨ」は佛國ロマンチック派の巨擘ドラクロア氏（1798——1863）の筆に成る。ド氏の傑作としては「ダンテとヴァージル」「十字軍のゼルサレム侵入」等を擧ぐべし。今一般讀者に興味多からんを欲して、本圖を選みたり。氏の筆致は此繪によりても、充分に窺ふことを得べしと信ず。

俳句

千鳥

高田蝶衣選

書窓上る雁朶の月千鳥なき初むる　月精
壁の詩を辿り讀む灯を千鳥淋しうす　同
粗鹽菓つる灯や死凪を千鳥なく　同
鳥ぶりの麥菓子や千鳥印したる　同
千鳥夜々羞しき家の湯に呼ばる　同
避難人よべの千鳥をも言ひ忌めり　同
澪筋を烟る月千鳥諸騷ぐ　同
亡妹の歌書もあり千鳥きく燈下　同
千鳥夕べ狂歌師に酒犒ひて　鎮西郎
千鳥飛ぶや荷揚げ場の石潮耗りに　同
千鳥飛ぶ浦づたひ砦裏へ出し　同
私刑果てし夕凪を千鳥鳴き澄ます　同
落首漁長に讃めそにもなきを千鳥なく　同
千鳥なくやかゝる調度をぞんざいに　同
渦よけも小舟のみ千鳥島陰に　同

平家蟹は見ず惣嫁話を鳴く千鳥（馬關にて）　同
鳥渡りの舳に月暈を鳴く千鳥　花畝史
俗事汝には聞かさじ千鳥寒き宿　同
潟へ明けを閃かす千鳥島數樹　同
逆カ汐は昆布枯ると灘を啼く千鳥　同
舟が流す燻り木や千鳥洛蹴る　同
爐座埃暗きが千鳥午を聞く　同
瀬戸ぬけし暮るゝ帆よりぞ千鳥飛ぶ　同
飛ぶ千鳥荷積督す棧橋の畫　波月
群千鳥蒸湯疲れを欄に倚る　同
幣投げて漁區祭る舟や飛ぶ千鳥　同
類忌籠る夜を川千鳥瀬音澄む　同
千鳥咏むや岬宮へ神酒棒げ來て　同
千鳥聞き名殘る夜や任地去る舌禍　同
千鳥聞く漁家泊り海苔場視察來て　同
針失せて詠む歌のあり小夜千鳥　柳子
徹宵の議や乗燭をなく千鳥　同
髮搖れに藻が延びる夜を千鳥なく　同
紅箋に鎮して燈下千鳥來る　同
擱筆に猶ある情緒千鳥なく　同
千鳥めぐれば人買船と誰か囃す　同

砧納めを洗ふ日や川千鳥なく　同
旗亭詩會散ずるを鳴く千鳥哉　愛
史疑を泊れば千鳥に宿の婆子解けり　同
殘る不平千鳥鳴くより思ひ換ゆ　同
千鳥御獄を嘆く浦女の哀訴あり　同
琴の亂れの責を千鳥に負はせけり　同
血見ずおさめし太刀の恨を鳴く千鳥　同
句短信客舍の千鳥佗しさを　同
滾に通ふなる水路立つ湖千鳥　聲耳
倉庫閉ぢて舟行く日なし川千鳥　同
島司缺く日の大濤や飛ぶ千鳥　同
鰮舟の數讀めば沖へ飛ぶ千鳥　同
寒さ言はて舸夫の心をなく千鳥　同
蜜柑船立つ日頃飛ぶ沖千鳥　同
驀奴とも見られし流離なく千鳥　里雪
囚徒渡せし舟穢れ晝の千鳥なく　同
灯熄れば夜着の淡色鳴く千鳥　同
徒らの主張きく千鳥淋しみて　同
茶店疊まざりしが千鳥晴の客　同
石に爪を破りし血鳴く千鳥かな　茶の門
未明よりの川工事千鳥鳴き下る　同

川上の千鳥鄰居に聞き明けぬ　同
魔よけ木を受け來し夜千鳥戸に鳴ける　同
山越に船場案內や千鳥見つ　同
千鳥鳴く七船持てば浦長者　朱雀
燈臺守の足らぬ調度を鳴く千鳥　同
寒行の提灯の灯尻なく千鳥　同
千鳥飛ぶや樓中に浪衍して　同
浦過分の大船を廻り鳴く千鳥　同
妬婦が歸寧を千鳥に寂し丸屋住　翠郭
碇泊すよすがもなし只千鳥なく　同
袖の塵拂へば千鳥なく夜さや　同
神加護に明るさを得し船千鳥なく　同
千鳥啼く夜島代官の斬られけり　骨舟
船女郎が情死の通夜を千鳥なく　同
船人は寐て千鳥居る舳の月　同
賊船を圍みて騷ぐ千鳥かな　同
島灯せば潮ふくらみて千鳥なく　都月
貿易船の訴事に出張りを千鳥とぶ　同
飛ぶ千鳥水仙の影風もあり　同
葺き急ぎて灯す頃なく千鳥かな　同
粗朶に結ぶ破船も淋し千鳥飛ぶ　青柃

浦千鳥隻船に絃歌寂ぶありて　同
海に瀕する庭尻土手やとぶ千鳥　同
千鳥岬の湯も殿に倚る宿淋し　同
鰤漁の區々の歸舟や千鳥なく　綠羊
艪痺れも年脣になん濱千鳥　同
千鳥夜の岩山に木根が光るもの　同
灸の皮剝ぐ夜波聲も凪ぐ千鳥　同
遂に藝を賣りてしが千鳥我に鳴く　寢覺草
千鳥文字を紡ぐかの悲詩に題しけり　同
夕日輪に映ゑ千鳥なく梶難所　同
練武廢れし磯廣の洲や群千鳥　同
情に因む懺悔など千鳥なく宵を　白青
浦千鳥船住めば計の後れ着く　同
千鳥浦に死せしとか鳥眼唳き居て　同
要塞地寫せし咎を鳴く千鳥　松葉
蜒の子のなまじ學問を鳴く千鳥　同
川千鳥勸化の僧と相乘りす　同
水門の樋固め松や鳴く千鳥　笑尊
斑乾きの染網の木香や飛ぶ千鳥　同
烏帽子岩に幣祭る夜や鳴く千鳥　同
釜試めす日の鹽田晴とぶ千鳥　杜父魚

千鳥湖に水溢る山の荒れ日和　同
千鳥寄せて潮嵩に生贄死魚のあり　同
汐濁に澪標早腐つむら千鳥　竹茶
千鳥射て酌みぬ此浦ぎりの旅　同
一河市を貫いて棹歌和す千鳥　同
樹に物を干し慣れの民や島千鳥　楚丘
小夜千鳥雪光に矢を矧き居れり　同
歸朝雄著古らず千鳥あり祖家滅せり　同
染屋磧とも布染め干せり千鳥晴　柿紅葉
舍利濟の舍利寄ると千鳥啼く浪か　同
鮑採らて酒に日送る浪千鳥　同
我諜者千鳥に夜毎肝寒し　をがは
夕日落つ凪渦や千鳥群れ舞へる　同
千鳥啼くと寐惜めど酒醒きてあり　琴星
千鳥鳴くや俄船出も狂晴　同
送宴に妓の無理乞ひ歌や千鳥なく　更二
書法一意訪ね來し濱家千鳥なく　同
使命帶びて灯皆消す船千鳥啼く　不寢庵
遠千鳥博多小女郎の寢覺寒む　同
千鳥なくや賀事に灯明き鳥司　紫浪
蝦夷船と互市開く浦千鳥飛ぶ　同

松廊に波迫る冷かさ樓に千鳥來る　國郎
千鳥波縫ふ青松庵の韻事かな　同
破約かく情實よりす晝千鳥聞く　三石
茶粥啜る終道場夕千鳥きく　同
公務なれば寄島はならず飛ぶ千鳥　胡鬼子
この閭裡に詩名知られて浦千鳥　同
出船あとの濱の女やとぶ千鳥　霽柿
海士の戸に千鳥落ち來ぬ夜半の冴え　同
鳴く千鳥濃霧の潮の二た流れ　美田
千鳥なく聲の曇や移民船　同
秘め文のいつか失せしを鳴く千鳥　錦糸鳳
とぶ白帆追ひかけ千鳥沖の島凪ぎて　同
千鳥悲し夜葬の灯冴ゆ磧道　詩樓
養鯉場や千鳥稀れ來て淋しうす　同
河に掃く座敷の塵や千鳥の夕　象眼
御船戻す灯にもや千鳥啼き連れて　同
關守の哀語るやなく千鳥　芳葩
潜女の歌どころ千鳥遠鳴きに　羊子
午報旗や千鳥の濱の波紆曲　神風
潮烟る灘曉望や千鳥寒む　紫倉
千鳥鳴く居に衆望を負ひ獨居る　青栗

友千鳥思潮とそむく自我もなし　錦樓
森近き舟歌木靈す浦千鳥　子膺
漂流の異人に碑あり浦千鳥　百里草
死馬賣りて歸る渡舟や川千鳥　稻塢
とぶ千鳥逆潮に二船趨趄として　愛子
覺り在るも句品拙き夜を千鳥　丁字
三昧かけて千鳥の襖艶に見たり　桂仙
網浸し瀧汐に千鳥投ぐるよに　白面郎
死人洗はん水汲みを千鳥なかず飛ぶ　一山

課題　椿　二月十日締切
踏青（野遊）　三月十日締切

規定　△一人三十句限△用紙は半紙
△淡路假屋在釜口高田蝶衣宛

評論

獨逸の政局

（最近に於ける總選擧）

一

一月擧行の獨逸總選擧は明かに社會黨の勝利に歸したりき。蓋し總計三百九十七の議員數を有する帝國議會に於て、百名內外の員數を占むればとて、なか〳〵以て勢力を院內に振ふ能はざると勿論也。然らば則ち吾人は何故に勝利と言ふ歟。他無し、形式は兎も角も、精神に於て然りと見る可きものあれば也。

抑も今回の總選擧に當りて、維廉二世の政府が仇敵視し、飽く迄壓服、起つ能はざらしめんと力めたるは、社會黨にてありき。保守、中央、自由諸黨は宰相ベートマン、ホルウエヒ氏の內命の下に、平素の行懸りと情實とを拋棄して、一致以て社會黨に當りたりき。換言すれば今回の爭鬪は非社會黨同盟對社會黨の爭鬪なりき。然るに其結果は如何なりしぞ。

一九〇七年の總選擧に僅かに四十三名を選出し得たる社會黨は第一回投票に於て業に已に八十二名の多數を選擧したり。是已に異常なる大發展なり。況んや又決選投票に參加する權利ある候補六十名を數へ、結局少くとも百名以上の議員を有す可きと瞭々昭々たるに於てをや。

嗚呼諸黨聯合の力を以てして、一社會黨を壓服する能はず、却て其議員數を二倍せしむ、誰か勝利の語を以て社會黨に附するも、過當となすものぞや。

二

吾人は敢て獨逸の社會黨（嚴密に言へば社會民主黨）に對して尊敬を拂ふものにあらず。又之に味方せんとするものにあらず。其勢力增進が獨逸國家の利益なりやにつきては、幾分疑念を抱懷するものなると斷言して憚らず。然れども事實をして事實たらしめよ。社

會黨の勢力增加は近年に於ける獨逸政界の一般的趨向也。

試みに見よ、最近帝國議會總選擧は、間斷なき社會黨の勢力發展を示しつゝあり。人或は一九〇七年の總選擧に於て社會黨議員數減小せるを指摘するものあれども、是皮相の見のみ。過去三回總選擧に於ける同黨の得票數を檢せよ、

一八九八年　二百十萬七千〇七十六票
一九〇三年　三百〇一萬七百七十一票
一九〇七年　三百二十五萬九千〇二十票

即ち知る可し、社會黨の得票は減退せずして增進しつゝあるものなるを。而して更らに注意す可きは、獨逸政府は社會黨の勢力增進を欲せざるの極、奇怪なる選擧區制を維持し、爲めに國民間に於ける社會黨の勢力は議會に於て滿足に代表せられ居らざると是也、試みに下記の比較表を見よ、

一九〇七年總選擧各黨得票數及議席數、

	得票數	議員數
保守黨	一、〇六〇、二〇九	六〇
中央黨	二、一七九、七四三	一〇五
社會黨	三、二五九、〇二〇	四三

即ち僅かに社會黨の得票の三分一を得たる保守黨は却て之より五割丈け多數の議員を選出し、又社會黨の得票の三分二を得たるに過ぎざる中央黨は却て之が二倍半に當る議員を選出するを得たり。此選擧區配附の狀態にして變改せんか、議院に於ける社會黨の勢力は決して今日位に止らざる可し。次ぎに注意す可きは、社會黨議員數は一九〇七年後、補缺選擧ある每に、益々增進し、昨年頃には五十二名を數ふるに至れること是也。

更らに又讀者の注意を乞ひ度きは、一九〇九年度に於ける獨逸諸州選擧（地方議會の選擧にて帝國議會の分にあらず）が示せる現象是也。巴丁、索遜、普魯西等皆社會黨の勢力撲滅に力めたりしに係らず、同年の選擧に於て、巴丁議會の社會黨議員數は十二名より二十名に增加し、索遜議會の同黨議員數は僅かに一名より二十五名に激增加せり、又同年伯林市の普魯西議會代議士選擧の如きに至りては、社會黨の得票前回に倍し、議員數亦三名を增加せり。大勢の向ふ所、斯くの如し、何ぞ俄かに社會黨今日の成功を怪まん哉。

三

然らば則ち今回社會黨の成功が、獨逸政治に及ぼす

所果して如何。

吾人は直接に大なる可しと思惟せず。何となれば其議員數は、未だ議會の大勢を動かすに足らざれば也。而して宰相ベートマン、ホルウエヒ氏が次期議會に提出す可しと言ふ建艦數增加案（即ち一九〇七年海軍法を修正するか若くは其解釋を變更して大に海軍擴張の程度を進むる案）は、目下の處、保守、中央、自由諸黨の齊しく賛同する所なれば也。能く各黨の一致を謀つて之に當らんか、社會黨と雖も、恐らくは無効力の論辯以外、何等成す所無くして終る可き也。

然れども吾人は亦全然無影響とも斷言するを得ず。何ぞや。海軍擴張問題が增稅問題を挑發する曉に至らば、自由黨は社會黨に地盤を荒らされんことを恐懼して、選擧區民に對しても、平素の間接稅反對論を固守せざるを得ざる可く、從つて茲に他の非社會黨諸派との調和困難となるの憂あるを奈何。

蓋し現下に於ける獨逸の財政は、決して帆を順風に揚げつゝある者にあらず。二億五千萬圓を收めんとせる一九〇九年度の新增稅は、一九一〇年度に於て一億五千六百萬圓を收め得たるに過ぎず、一九一一年度と雖も恐らくは一億九千萬圓を越えざる可し。兎も角今日以上に海軍擴張の速力を早めんと欲せば、財源を增稅に待つの外あらざる也。然かも增稅は何れに於てす可き乎。軍備費は如何なる稅目より來る可き乎。

中央黨、保守黨は共に農民富豪に味方して、遺產稅其他一切の直接稅に反對すると、今猶一九〇九年と相同じ。然るに自由諸派は都會及商工の代表者として間接稅に反對し、直接稅を主張す。知らず同派、軍備擴張に賛成するの極、保守、中央兩黨の主張を迎合するの勇ある乎。是頗る難事也。何となれば自由派が都會に於て着々社會黨に擊破せられ來れる所以も、重に財政問題に關して選擧區民の信用を失ひたるに依る、然るに此上農民派に讓步せんか、同黨は選擧區民の信を失ひ、遂に益其地盤を社會黨に奪はる可きを以て也。

知らず此間に在りて、維廉二世の政府は如何なる妙策を以て急激なる軍備擴張を遂げんとする乎。其政黨操縱は如何。是恐らくは新議會に於ける興味深き問題なる可し。

佛國內閣更迭

一月中旬カイヨウ內閣仆れ、ポアンカレー內閣成立す。之を歡迎するもの、何ぞ獨り佛國民のみなりとせ

ん哉。

蓋しカイヨウ内閣は不統一極る内閣なりき。薄弱なる内閣なりき。然かも其飛行器椿事の爲めに瓦解したるモニー内閣の後を承け、俄かに組織せるものとしては、猶推賞を値ゐする所無きにあらざりき。摩洛哥問題を解決し得たる如き則ち其一例也。

然かも薄弱なる内閣の永續は、邦家の利益にあらず、今新内閣を見るに、首相兼外相ポアンカレー氏は正に五十二歳、二たび文相として靈腕の聞えあり、閣員には急進派の領袖として重きを成す前首相ブルジョア氏の勞働卿となり、又昨春迄首相たりしブリアン氏の司法卿となるあり、デルカッセ氏の依然海軍卿に留任するあり、陸軍卿としては雄辯家ミルラン氏あり、前内閣の人材に缺如たるに比すれば、優に第一流内閣の稱を値ゐするもの無しとせず、恐らくは猶殘留する佛國西班牙間の摩洛哥問題交渉の如き、容易に落着を見る、に至らんか。然かも吾人は猶疑惑を挾まざるを得ざる一事あり。同國の宿題たる選擧法改正案は、又々閑却せらるゝこと之無きか是也。夫れブルジョア氏とブリアン氏は選擧法問題に關して正反對の立場を有す。此二人を拉し來りたるポ君の心中、略ぼ察知し得可きを覺ゆる也。

孫逸仙の左右

吾人は清國革命を説かざる可し。唯一言を加へざるを得ざるは、孫逸仙氏の左右是也。

世上盛んに傳へて曰く孫文の參謀長に米國陸軍少將ホーマー、リー氏ありと、知らずホーマー、リー氏とは如何なる人ぞ。

彼は陸軍少將にあらざる也。「ゼネラル」にあらざる也。否な米國陸軍の佐官中にもあらざる也。彼や曾つて福建省の一學校の敎師たり、歸米後カリフオルニヤ州ロスアンゼル市に在留せる僅少の支那人革命派義勇兵の訓練をなしたる男也。其孫逸仙氏と相識れるは、此ロスアンゼルス時代に在りき。彼にして日米戰爭てふ著述をなさゞりせば、天下恐らくは彼を識るものあらざりしならん。而してハーパース誌上、自ら「將軍」の稱號を附し、天下を欺きたるが如きは、略ぼ其人格を想見せしむるもの無しとせざる也。

吾人は斯くの如き人物を其左右に置くこと、斷じて孫文先生の名譽なりと信ずる能はず。然かも是何ぞ獨りホーマー、リー氏に就て言ふのみならん哉。其左右

に在る日本人の如きも、亦往々然るものあるを見る、是所謂中華民國大總統の威嚴にあらざる也。

ラフオレットの遊説

米國大統領選擧、今秋に迫れるに當り、共和黨一揆派(改革派)の雄將上院議員ラフォレット氏、盛んに四方に遊説す。壯なりと謂ふ可し。

雖然、其吐露する所の意見に至ては、餘りに過激無鐵砲を極め、共和黨と言はんよりは、寧ろ民主黨と言ふの可なるを覺えしむ。知らず彼、斯くの如くにして能く共和派全部の人心を收攬し得可しと信ずる乎。

三國同盟弱し

獨逸外相キデルレン、ウエヒテル氏、一月二十日羅馬に往く。何の故ぞや。

說を成すもの曰く、是伊土戰爭調停の爲めなりと、眞に然る乎。

それ或は然らん。左れど吾人は寧ろ其三國同盟を鞏固にするの必要に迫られたるもの、亦太甚だ多きを疑はずんばあらず。何ぞや。墺伊の反感は墺洪外相エー

レンタール伯の辭職問題を發生せる程深且つ大なるものあれば也。

玖巴の騒擾

玖巴の小共和國亦擾々たり。在野政事家盛んに革命を說く。

如何に革命が流行の世なればとて、玖巴人民は宜しく暫らく「革命」の語を封じ込むを可とす。小邦の革命は大國(米國)の併呑を促すの階段なれば也。(懷沙隱客



金棒秘記

饒舌子

◉「革命黨で中華民國を建設して、孫逸仙を大統領に押立てると、直ぐに其官舍をペンキで白く塗り代へた。多分米國大統領のホワイト、ハウスに倣つたものであらう。革命黨連のハイカラがつてゐることは之でも分る。處が可笑しい事には、支那には白屋荒村とか朱門白屋とかいふ熟語があつて、白屋といふのは貧乏人の住居を指すことになつて居る。それで白屋といへば外觀はアメリカ式だが、其實際はお家流に文無しの邸宅である」と福本日南氏は笑つてゐた。

◉又仝氏が清藤幸七郎氏の結婚式に臨んだ時に面白い話がある。當時清藤氏は上海東亞同文會の支部長かで渡清することになつてゐたが、其新婚披露會の席上で來客一同五分演說のやうなものをやることにした。所謂浪人組の連中がいろ／＼奇拔な演說をやつたが、日南氏の順番に當るや否や氏は起つて、こんな事を言つた。「清藤幸七郎といへばなか／＼嚴めしい名で恰度惡七兵衞景淸といふやうに恐ろしく强さうな名に聞える。處が之を今の支那音で讀めばチントンカンチーラウとなつて、やさしい、恰度音樂でも聞くやうな名になる。そこで私に一つの希望がある。支那に對して、又外に對しては日本音の淸藤幸七郎で惡七兵衞景淸流に强くやつて貰ひたい。が花嫁に對して、又內に對してはチントンカンチーラウの方で極くやさしく大人しくやつて貰ひたい」とやつて除けたので滿場拍手喝采したさうだ。

◉早川鐵冶といへば人皆一世の快男子を想像するが、壯年時代からなかなかの變り者いたづら者で、氏が獨逸公使館で青木周藏の下に働いて居る時にこんな事があつた。青木氏は人も知つてゐる如く獨逸婦人を妻君にした。此妻君はフォン某の娘であつて、子は華族の娘を妻にするといふので頗る得意であつたのを、早川氏は公使館の日記に「青木公使卒某の娘と結婚す」と書いた。青木子は火のやうに怒つて、之を書いた奴は何物だ。卒某とは失敬千萬だとひどくいきまいた。然し早川氏は平然たるもので、獨逸にはフォン附のものは四萬人からゐる。四萬人から華族があつて堪るものか、日本でいへばフォンは卒位なものですといつて、空嘯いてゐたさうだ。

◉青山博士程誤診する人はない。といふと青山博士の價値がないやうに聞えるが、博士に、いはせると之には面白い理屈がある。外の醫者は全く

診斷しないのである。それだから誤診の仕樣がない。自分はとにかく診斷をする。それだから誤診があるのだといふて居る相だ。

◉故井上毅子は非常に身體が弱かつたが之には一つの原因がある。よく田舍にはある例で、子供が餘り多過ぎると墮胎をする。肥後では殊にそれが甚しい。井上子は確か八番目かの子であるが、お母さんが墮胎劑を飲んだけれども、それに打勝つて生れて來た子だ相だ。それで骨組が非常に丈夫だけれども、始終病氣に惱まされてゐたさうだ。

◉井上子といへばなか／＼の學者で、殊に漢學の造詣は最も深い。子が宋以後の學者などを譏つた文章などは非常の氣焰だ。此井上子が嘗つて火災に罹つて愛藏の書物を燒いて了つた事がある。其時伊藤公は大いに喜んで「お蔭で井上も少しは理屈を捏れなくなるだらう」といつた相だ。

◉井上子の議論好きは有名なもので、どんな病中でも、どんな醫生をも相手にして議論を戰はせる。夜が深更に及んでも、咳に血が絡まつて出てもなか／＼やめない。池邊三山氏なども若い頃によく訪問しては深更まで議論をしたものださうだ。然し面白い事には奥さんが出て止めれば、之れ丈けには大人しく服從したさうだ。

◉宮本武藏といへば劍術使ひの名人といふ事は誰でも知つて居るが、この人は又畫の名人で、殊に動物を畫くことには妙を得て居た。細川家にある何枚屛風かの雁の繪などは天下の絶品で、中村不折氏なども推奬措かぬものださうだ。

◉紅葉館で開かれた一月四日の「讀賣」主催の文藝家大會には六十餘名の文士が集つたが、中で一番に注意人物となつたは谷崎潤一郎氏で、あつちからも、こちからも盃をさされてゐたが、會の終る頃には紅葉館の女中が氏の廻りに集つて「こちらはちよいと六代目さんに似てゐるわね」といふのをキツカケに「横顏なんかソツクリよ」といふのもあれば「ちよいと六代目さんお酌」などとしなだれかゝるのもあつて女中にも大モテ。それから若い連中が第二次會とあつて某所に流れ込むと、氏は盛んに歌澤や、橘家の假聲(こわいろ)をやつてここでも大モテにモテた。「小説でモテ、女にモテ、歌でモテ、はイヤだよ」と連中は大いに羨しがつたさうだ。

◉醸造法研究家として全國に有名な村木乙彦氏は今回醇素といふものを發見した。之れは酒の主成分をコンデンスしたもので、之を一滴酒に注入すれば酒の腐敗を防ぎ且つ酒が濃厚にして味をよくする。そしてサルチリサンなどゝは違つて人體に無害で、警視廳の認可も得たといふ。一般の酒造家、飲酒家に向つては一大福音といつてよからう。

◉秋元子爵は庭園術のオーソリチーであるが、子の話に、「日本でも追々庭園税といふものを取るやうになるだらう。之れは大體に於て私も贊成だ。が餘り高い税を取るのはよくない。何故かといふに、都會では庭園といふものがある爲めにどの位人間の健康を助けて居るか知れない。先日私は新婚旅行といふやうな譯で河内の國の舊領に往つて、其處の七十歳以上の高齢者に杯を呉れた。處が僅かの面積の所に八十名ばかりの高齢者がゐたが、直徑二三里しか離れてゐない大阪には其割合からいへば十分の一も高齢者がゐない。之を防ぐにはどうしても庭園をいくらか存

してかかねばならぬから餘り高い税を課するのはよろしくないといふてゐる。

新刊批評

△無學の聲　野依秀一著　實業之世界社發行

「無學の聲」といふ題名を見ても首肯される。現代此種の書物も多い中に、これ程特色の際立つたものはない。一巻百餘の文章は、學説でもなく、議論でもなく、又指針でもない。凡てが野依秀一といふ人自身であるかのやうに見える。此書が單なる一形式に非ずして、やがて現代に於ける、參考書乃至研究資料の凡てである所以である。こゝに現代青年の一風格が、露骨に表現されて居る。その内容の價値如何は、此の本能的に正直な、装飾のない、旺盛なそして廣々とした態度の爲めに壓し下されてゐる。桃介式と共に、野依式は何處から見ても、現代必在のものであつて、又現代希有なものであらざるを得ない。（金一圓二十錢）

△演劇新聲　小山内薫著　東雲堂發行

一見して此書は、從來此の著者が演劇に對して持つた態度のクライマクスであるやうに見える。それは、此書に集錄された三十餘篇の文章の配列に見ても、卷頭の自序に見ても解る事である。此著者が今、此處まで達したといふ事がやがて一般の吾が劇壇にとつての幸福であると思ふ。著者の所謂「腹中の泥」とは、面白い言葉である。「ハアエイの俳優論」「ゴオドン・クレイグの第二對話」等は、特に興味の深いものである。（金八十錢）

△最近新二萬句　柏浦昭不折著　博文館發行

凡て子規系統に出てた句の更に精選された集錄である。今日の傾向に至るまで、明治俳壇の變遷を示さうとしたもの、新年春夏秋冬、之を各七類に細別してある。（金一圓）

△春のゆめ　福田夕咲著　文星堂發行

「おぼろ夜」「逸脱時」「らくがき」の三編に分けられた、約百二十篇の詩の集である。殊に短いものに捨て難いのがある。味の餘り濃厚でない、イキな、磨かれた洒脱を素足で行くやうな感である。朗誦して見るものといふよりも、此詩人の心持を味ふ程のものである。（金七十五錢）

△テーベの勃興　箕作元八著　博文館發行

西洋史新話の第二册である。スパアタ大敗以后偉傑エパミノンダスの出現までを、例の面白く話し聞かされてある。（金八十五錢）

△海外行脚　坪谷水哉著　博文館發行

露領北清から朝鮮、南清、北米の西海岸、地中海、南歐北歐、これに附錄世界探道中記がある。漫遊の時節をまで取入れての風物描寫が特に面白い。（金七十錢）

△東京年中行事（下）　若月紫蘭著　春陽堂發行

五月から年末までの現在してゐる年中行事は、可なり洩れなく並べてある。一種の詳しい暦である。唯その觀察の如何にも表面だけで、此…

多の行事又は風俗が、尤もらしく思へない場合が、多いのは遺憾である。昔の「砂子」とか「紫昌記」とか「行事」とかいふものを見ても、すぐ解る事である。

△和譯墨子列子　田岡嶺雲著　玄黄社發行

和譯漢文叢書第九編、例によつて親切である。墨子、列子もよい取合せである。(金一圓十錢)

△人生の妙味　久津見蕨村著　丙午出版社發行

もと「超人教」と名けられたもので、内容に於ける著者が自信はその邊にあるのである。著者は自ら高士を以て居るもの、その聲は斷々乎として憚る所がない。一快著といはるべきものであらう。(金八十錢)

△第二快傑傳　伊藤痴遊著　東亞堂發行

南洲、象山、松陰、江藤、副島、海舟、大久保、伊藤、井上、中江、山本、福澤、西園寺、又は望東尼、國定忠次、來島恒喜、皆それ〴〵に面白い。(金一圓)

△血烟　安川隆治著　東亞堂發行

三十七八年役實戰の記憶である。芝居を見るやうな戰場に於ける日本人の行動が描かれて居る。(金一圓)

△後の西郷南洲　伊藤痴遊著　東亞堂發行

南洲傳の終篇として西南役の本末を話したものである。四百頁の完結である。(金一圓二十錢)

△獨逸殖民新論　廣中佐兵衛著　巖松堂發行

「殖民法制の發達」「殖民地の自然的要素」「保護領の組織」「殖民地現行實體法」及附錄として、獨逸帝國殖民地の現勢、歐米殖民地現勢統計が添えてある。(金一圓)

△現代文藝叢書(金二十五錢)春陽堂發行
○草あやめ(後藤宙外著)
○巣鴨の女(野上臼川著)

△園藝叢書(金一圓)寶文館發行
○第一編苗の育て方(田中牧吉編)

△經濟學教科書(福田德三著)大倉書店發行(金五十錢)

△新譯國史略(大町桂月譯評)至誠堂發行(金一圓十錢)

△健康と性慾(小松武治譯)日本基督教青年會發行(金二十五錢)

△克己座右銘(瀧川忠雄著)至誠堂發行(金二十錢)

△學生文庫(金三十錢)至誠堂發行
○日本外史下卷
○謠曲全集中卷
○西遊記下卷
○太閤記第一
○百人一首一夕話

△和英商業辭典(金五十錢)寶文館發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

王堂 田中喜一先生著

哲人主義

(愈々發賣)

クロース綴函入 金椽頗美本

全二卷

正價貳圓五拾錢 送料金拾貳錢

上卷目次

下卷目次

三版 **書齋より街頭に** 全一册 正價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

再版 **二宮尊德の新研究** 全一册 正價金九十錢 送料金八錢

發兌 東京市京橋南槇町十八番地 振替東京四六八四 電話京橋二四六三 廣文堂

(中付の一)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文部省通俗教育調査委員
讀賣新聞主筆・法學士 笹川潔先生著

最新刊 通俗教育 眼前小景

製本頗美本
定價金七十五錢
送料金八錢

近來通俗教育に關する出版物中嶄然として頭角を一頭抜ける新著

良藥口に苦かしといふはまだ開けぬ時代の事、今日は口に甘くして而して良藥たらずんば面白くない、澁面を作つて道徳を說くのは昔の人の爲たことで、當世はそんな譯ではカラ駄目である、眼前小景は面白い、而して面白いうちに、思想上の營養が取れる、精心上の自覺が起る、全編四十八章、悉く是れ達人の大觀である。

内容

動物園の象、都市の美觀、球乘角兵獅子金盃銀盃、醫師と辯護士、粗製濫造、非左側通行論、倫敦より抗議、雛妓禁ずべし、夜の電車此ちら通る可からず、質屋の店頭、宗廟の地、宿屋改良の先驅、勘定の立替、手拭と猪口、和洋兩樣の生活、電車内の心得、下女の濫用、時間の勵行、汎く村歌を擧すべし、書物の値段、先輩と後進、待合禁止論、隱居新論、墓地の均一製、關東關西の温泉、天長節、夫婦本意の社交、犬の取締、趣味教育の不健全、西の市、三助に就て、カーキ色、經濟的觀察、何事も間捷なれ、英國銀行、停車場一、停車場二、三面記事、未婚既婚、獨身生活、掛金の滯り、日曜日見料忍返し、養子新說、通俗教育調査委員會雜感一、

大山元帥題字 山上大尉著 好評第二十版
天覽 **鐵蹄夜話** 定價九十五錢 送料金八錢

文學士 白河鯉洋先生著 菊版函入美本
三版 **諸葛孔明** 定價金一圓 送料金八錢

山路愛山先生著
再版 **書齊獨語** 定價六十五錢 送料金八錢

文學士 横山健堂先生著 菊版函入美本
三版 **新人國記** 定價貳圓廿錢 送料金拾二錢

文學士 横山健堂先生著 菊版函入美本
再版 **舊藩と新人物** 定價二圓五十錢 送料金拾六錢

圖南生選 永治裝幀
再版 **お國自慢** 定價六十錢 送料金六錢

(中付の二)

發行所 東京市神田區小川町一 振替一二三三六番 敬文館

祖國の爲に開城の最後まで旅順を死守せし若き士官の俘虜日記

露國海軍武官 レンガード君原著

高須梅溪君
加島汀月君 共譯

旅順籠城 劍と戀

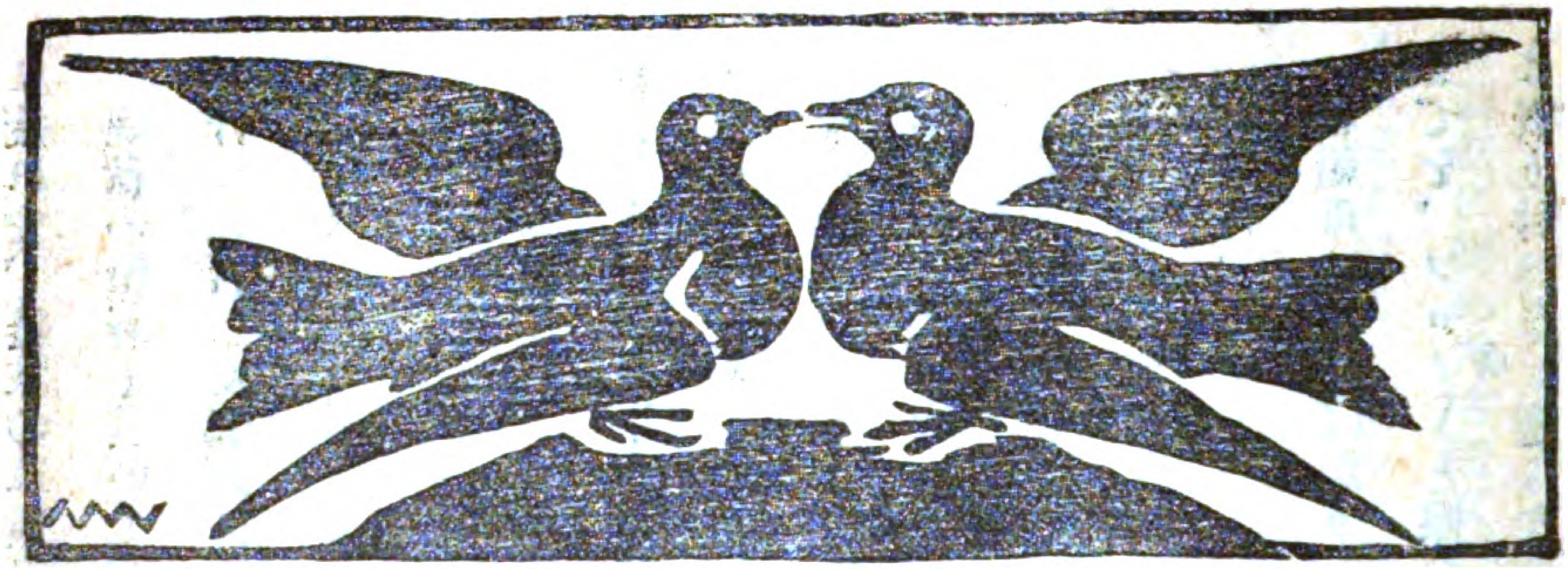
日露戰爭は近世史上の一大事件にして之が記述は所在に出版せられたりしと雖も露國海軍に屬する若き武官の告白は未だ公にせられず本書上編「戰塵」は武人として珍らしき詞藻を有する著者が旅順籠城中の日記に基き二百八十餘日に亘る屈せざる抵抗中の悲壯事を細大洩さず收む多大の犧牲を拂ひたる我攻圍軍の威力が如何に猛烈を極め又千古の快事として嘖稱せられたる閉塞隊の行動が如何に敵の心膽を寒からしめたるかを知るには屈竟の資料たり下篇の「お花さん」は旅順開城後俘虜として我國に滯在中端なくも日本の一少女を戀ふに至りし艶物語にして青春燃ゆるが如き情緒を寫すに絢爛措くなきの筆致を以てす正に是れ活きたる小說にして日本の全勝を最も趣味ある方法に傳ふべき不朽の戰史也

菊判上製約四百頁
箱入寫眞版數葉入
正價一圓三十錢
送料內地金八錢
臺灣樺太二十錢
清國朝鮮三十錢

株式會社 啓成社

東京日本橋區本銀町
振替口座一二〇五五

(中付の三)



屋敷

眞山青果

一

鐵道は二里先きの村、中田村まで來て居た。高等三年四年の敎師等は、授業を一日休んで、その工事を見物に生徒を連れ出した。

亘はこの日、初めて草鞋と云ふものを穿いた。背中が痛いほど袴を上に結ひ付つて、その堅い狹い懷の中に、從前風な駒引錢の角巾着、アカリシヤウジと云ふ地合の貝殼藥、塵紙、乾かした手拭、年寄が細々しく氣を付けてる間でも、亘の體は些時も凝つとして居なかつた。下女にまで笑はれて、友達の待つてる方へ馳出して行つた。

十月の下旬。深き青空は彈き返す如き光を見せた。そして、一夏の塵埃

に疲れた、農家の草屋根を、秋蜻蛉が蒔くやうに飛んだ。

晩秋の田野を貫いて、線路は丁度或る河岸まで來て居た。生徒どもは廣々とした河原の堤に腰掛けて、發汗に乾付いた咽頭に握飯を嚥下した。そのうち何の一人からか初つて、生徒どもは皆淺い河の瀬を漕ぎ歩いた。亘も遠くから教師の背後を見つゝ、草鞋掛けの足をわざ〳〵水に濡らした。

蕎枕が溫つて、その晩、亘は妙に眠れなかつた。七十六と云ふ曾祖母に――この舊るい屋敷より外には、目も向けまいと生涯を誓つて來たやうな曾祖母に、例へば起重機とかガアドとかトロッコとか云ふ、今日見て來た新しい物の名を會得させるには、もどかしい程に言葉が足りなかつた。亘自身にしては又言葉に出ないやうな心持も受取つて居た。

年寄の手は、時々沈んで行くやうにお留守になつた。

「曾祖母さんてば。」

亘は蒲團を蹴つて、詰るやうにその鈍い心を呼び覺した。

「おッと、おッと。……七十二、七十三、七十ゥ四とな。」

曾祖母は其時ばかりシッカリした。枯れて乾いた年寄の掌が、窪の深かい亘の背筋から固く伸した顳までを、ソロ〳〵と擦つて下りた。斯うして毎晩百近い數を聞いて、體中が快く汗含んで來ないと、亘は眠り付けない癖になつて居た。

重い杉戸が開いた。火の裸な蠟燭を隅に立てゝ、祖母は鐵金具の重い箪笥の抽斗を拔出した。一束づゝ澁紙に纏めた古證文が、幾束もそこに取出された。亘は目を開いた。祖母の方に大膽に待つて居た。斯う云ふ時は、叱られる方がまだ好つた。灯を吹消して、寒い暗さに生蠟から白く立上る匂を揺はして、祖母は納戸を出て行つた。

多く喰つて多く約めろ、好く寢ろ、曾祖母は自分の一生を手本に、屋敷中を終日斯う見廻つて居るだけの人であつた。斯の無頓着な人でさへ、近頃は妙に祖母の機嫌を追つて居た。あの寒々しい祖母の顔色に近付くと、亘の弱い心は今にも覆つて來る何者かを待つてるやう、理由なく怖やかされた。

熱灰に煙管の脂を燒く音が、杉戸を隔てゝ聞えた。凝つと視線を一所に据ゑて、目の裏に映る者でも見詰めてるやうな、祖母の額が亘の心に見えた。鐵道の停車場がこの邊にかゝると云ふ噂が、石礫の多いこの町の人心を泡立した頃から、祖母の斯の憂欝が日に激しくなつた。

油紙に定紋を書いた、不細工な草履袋を振廻して、亘は學校から退つて來た。青苔の生いた土間に、見馴れない下駄が脫亂してあつた。頼母子講には家がヒッソリしてる。襟のかゝつた短かい絆纏に黑前垂をした、町組の零落した士族が肩を丸くして居た。頽れた土塀の家から出て、町内の屋根を眺め廻して通る、癇性な機織場の老人も隱和しく隅の方に居た。亘は算盤をソッと置いて、廣い臺所の方から茶の間へ入つた。

この茶の間は高い屋根板を見せて、太い棟木が背骨のやうに棟を貫いて居た。それから煤竹の自在が

縁に吊下げてあつた。無尻に細紐して髮毛を振り頽した女が、爐に覆つて耳の下を焙りながら、品物の歸るを待つて居た。噂は大きくとも女手の商賣。日に二度づゝ品物を親賀の三丁目へ上下するのは、土臓の無い要愼ばかりては無つた。出窓の濡椽に腰掛けて、後齒を土に鳴らしてる若い女もあつた。

「未だ、餘ッ程暇がかゝりますてせうかね。奥樣。」

若い女はこの頃流行る黄縞の袖を掻合せて、顳を蒼白くして、顫えた。

亘は曾祖母を探しに、痒い霜燒の足袋を脱ぎ棄てゝ表の方へ出た。

「倘一ッ、來ないか。倘一。」

釣瓶竿に縋り付きながら、旋て斯う門長屋の方へ呼んだ時、亘は赤く彩つたものを氣長く口に啜つて居た。青空を被た小さな頭が、深かい井戸の底に、揺られながらカッキリ映つた。

倘一は肩に糠埃を被つて、家鴨を追ひ廻はしながら駈つて來た。

二

地面に擴げた枯草は、爽かに蒸れた。亘と二人は、頭の中まで滲み入るやうなこの爽かさに裹まれつゝ、腹這になつて背中を暖めてた。冬の前に通る薄い白雲が、頭の上を送られた。

直ぐ前には、杉皮て葺いた屋根に風拔のある、秣小屋が建つて居た。日受を選んだので、裏隣の垣根に並んて居た。番頭の役をして居る東吉が、今度田舎の方を仕舞つて來るに就いて、祖母はその夫婦の

活計を考へなければならなかつた。幸ひ、座敷には若かい陸軍の士官を――當時は一般に、官員様と呼ばれた、――世話して居た。祖母は馬持ちの士官達を頼み歩いて、飼秣屋の株を新規に東吉に持たせた。そしてこの春、尙一は町に連れられて來た。

この尙一は、口では誰にも負ける奴ではなかつた。そして、不思議なほど作り話が巧者てあつた。

「尙一、又嘘を話せや。」

亘は日和を飛ぶ小さな羽虫にも倦きて、相手の尖つた耳朶を引張つた。

「嘘か、ウン。然うさな。」

尙一は大人のやうに頸を拈つて、自分の頰の肉をグイと後に引いた。唯然うしたゞけても、その手付が馬を斫つて出る官員様に見えた。

「又、笠神の舘の嘘が好いな」。

「好し、聞いて居ろ」。

尙一は、年寄が居ないと、何時も斯うゾンザイな口を利いた。年は一つ上ても、亘より背も低くかつた。學校を移す時に又一級下つて、亘に二級後れた。それても、誰も平氣てあつた。

尙一の話と云へば、大抵武者修業者が出た。大蛇が出た、虎が出た。今日はそれに、罌子の種を箱の底から道傍にこぼしつゝ、山へ埋められに行くお姫様が出た。聞く方がヒヤ〳〵するやうな話を大膽に繕ひ合せて、然も實際に見て來た樣に云張つた。

「駄目だ。貴樣は笑つてる。」

亘は家來の兒を突倒して、頭から秣を振り掛けた。すると尙一は、麻緒の付いた粗末な手帖を出して擴げた。口の傍がムツ〱動く自分を怺えて、仔細らしく雲の動くのを見て居た。

「好いかな、こゝが笠神の舘の山だ。崖だ。池が斯うあるんだ。此方の方から俺が馬に乘つて、具足を着て、ハイ――バカ、バカ、バカ〱。駈つて行くんだ。」

尙一は濡れた鉛筆を縱橫に手帖へ走らせた。この熱心と大膽とが、到頭そこに片葉の葦と云ふ不思議な植物の繁茂して居る、古沼の水面が見える迄に、相手の心を導いて行つた。罅の走つた土壁の家から明るく響く梭の音も聞えさせた。薄い亘の頰は赤くなつた。

尙一の意匠の足りない所を遠くから、繼ぎ足すやうにしてまで、その話を巧に作り上げさせた。

急に日が無くなつた。畑の土が濡れて居た。亘は疲れて悲しい目を上げた。それから湧き立つやうに蒼い霧につゝまれて行く、樹木の多い屋敷うちを見廻して居た。

秣小屋の中から東吉が、竹の鎌を手に持つて來て、枯草を一抱づゝ取込んだ。その顏まで小さく見えた。

厩つゞきの部屋に寢起きする馬丁は、燈火の下に晩飯を濟して、湯殿の方へカンテラを持つて行つた。

祖母の氣配が少しでも緩むのは、一日にたゞこの一時であつた。寒い臺所の方から響いて來る洗物の指

音を聞きながら、ホッとするやうに煙管を取上げた。白髯と云つて、客には出せないほど强い煙草であつた。

「今日さの、嫁御。源作が來て話す事だ。何うもこの頃は、半產と女子の病氣が餘計になつた、誰もだ誰もだとあれが算ひ立てる事よ。」

爐端に轉んで寢てた曾祖母は、ムックリ起きから縱穗もなく話した。昨日も同じ事を聞いた。晩飯が濟むと、何所の隅ても着たまゝ一寢する人であつた。

祖母は吸口の跡を唇に固く捺して、火を見て居た。

「私は、然う云つた事だ。これは他所者が入つて來た爲めだ。何うしても、女子の血が荒れます。こんな事は昔は無い事だつた。嫁御は何う思はつしやるかな。この町内だけでも、他所者は何軒あるかと。――先づ上から算ひた所でもさ。」

祖母は苦しく笑つた。そして、膝を鳴らして立上つた。

亘は、柄の長い提灯を下げて、先に步いた。祖母が何日も鬱積した思案を持つて行く所は、兎に角亘の父より外なかつた。亘には母、自分には娘でも、女の話では烈霜を凌いて來たやうな、激しい自分を動かす張合にならなかつた。亘の父は寧ろ祖母と爭ふ方の人であつた。

杉垣の間々から、障子に明るい灯のうつる家が時にはあつた。然う云ふ家は大抵他から來た人達てあつた。四ッ角に來ると、急に寒い風が流れて居た。それだけに、兩側から樹木が暗らい町を覆せて居た。

「何んだ、坐りもしないで。」

斯う叱られて、亘は消した提灯を障子の棧に掛けた。偑んだ手を擦りながら、祖母の膝の傍に固くなつた。珍しい客でも來たやうに、顏の變つた弟妹どもが交る〳〵亘を見に來た。

顏を赤く光らせた母は、口の燒けるやうな素湯を平氣で飮んだ。又最う次が來てると、亘にも氣が付いた。斯う始終ては、小兒にも嬉しくは見えなかつた。

◎ 三

韮を乾した粉末に、松黃と他の藥種を混じ合せた血止藥は、此家の家傳のやうに云はれて居た。今でも稀には、遠い在方から求めに來た。その紙袋を摺つた靑刋は、近年まで見掛けた。

この調製は、一切曾祖母の仕事になつて居た。藥に日を吸はせる爲め、明るい椽側に澁紙が敷かれた。石鉢に溜んだ水が、廂裏にクル〳〵と渦卷いた。

「小兒は來るこッちやない。來ると醉ひますぞ。——これ、尙一、貴樣と云ふ奴は。」

手拭に鼻口を結び付けた曾祖母は、何にしても尙一ばかりを叱つた。この小兒どもの間からして、主家來の作法の頽れて行くのを、曾祖母は防いで居るやうであつた。然し、それに負ける尙一では無かつた。障子の間から尺度など突出した。

◎

日向を追はれた二人は、壁の冷える茶の間の方へ來た。帳場の隅に、新しい木札が箱一杯あつた。嘗つては質札に使ふ、約しい祖母の工夫であつた。尙一はそれを、部屋一面に擴げた。抽斗のドッサリあ

る書屋な塗茶棚を停車場として、長がい線路を臺所まで蜒らせた。倘一は頭に突出した腕を煙筒にして、笛を吹きながら線路の上を這廻つた。亘もその後から眞似て歩いた。

角鍵を下げて、祖母は板藏の方から出て來た。

「此奴め、好く出る智慧だ」。

圓るい倘一の顔を、痛いほどゴス／＼と撫て廻した。小言も云はずに、納戸へ明けて行つた。倘一は未だ、汽車を見た事はなかつた。

「居たのか、何アんだ。」

倘一はヒリヽとして、質札をもと通りに片付けた。

凱歌を擧げるやうに、亘は砲車の號令を掛けた。口惜しくともこの眞似は倘一には出來なかつた。誰に教られたか、「のゝ樣。」と呼ぶだけ、祖母を恐しい人にして居た。

朽ちた木の葉が、朝々、屋根にも土にも張り付いて居た。堅い栗の葉は、音して降つた。屋敷うちの女どもは、ソロ／＼近いて來る、忙しく悲しい冬を知つた。亘でさへも、井戸側の内面に一朝づゝ水霜の深かくなるを見ると、何かしら考へずには居られなかつた。曾祖母はその當分、落葉と戰ふやうな日を送つた。

　近所の士族の兒童どもは、竹杖をもつて大勢集つて來た。燃え付きさうな枯藪を搔探して、拾殘された栗の實を尋ねた。曾祖母にかゝれて焚火をした。

東吉は秣小屋から出て來た。頰被りを取つて、土間口に腰掛けた。

「東吉や、旦那から斯う云ふ返事が來ました。」

祖母は耳の傍に大きな聲を持つて行き、大きな封筒を前に出した。投出してるやうには見えても、矢張り憂欝から遁れて居るのではなかつた。今まで話にも出ない伯父伯母の噂が好く出た。伯父は何時か一度歸つて來た事がある。家をこの年寄どもに任せて、二十年近くも他所を歩いて居る人であつた。

「何うも、これては全るて。」

東吉は祖母の顔色を見て、ハッキリした事を出しかねて居た。巻納めた手紙を頂いてそこへ置いた。

「旦那は何う考へてる、屋敷に離れると云ふ事を、私はそこを云ふのさ。」

祖母は尖つた腮を煙管の上に置いた。氣を鎮めて居る。

「身上が何れだけあるか、旦那は今以つて御存じないと見えます。」

東吉は泣くやうな細い聲になつた。十二て耳を失つた渠は、痲疹前の自分の聲より外に聞いた事がなかつた。調子のアタリが無つた。其時次第の聲で話した。

「身上は何うてもさ、私の云ふのは其所てはないんだ。」

祖母は昂つて手を振つた。東吉はオド〳〵して辭儀をした。

「あれの者だ、皆持つて行くとも、何うても好い。だが、屋敷さ。家が無くなるんだよ。買上げられる

から、別に屋敷を取る。然う云へば、それだけの話だ。私の云ふのは、今更、この年の私を明るい屋敷に住ませる氣かと云ふのさ。」

制し抑へても、祖母は自分の聲に激して來た。この因循な家來を相手に見て、眼瞼の筋肉を痙攣さして居た。東吉は恐れつゝ、頸筋の汗を拭いて居た。

「母の建てた家を見に來ないと云ふ事があるか。お役、お役ッて、お役が何んだ。最う一度働けと云つても、年と云ふものがある。然うだ、倅が生れた年に家を出たのだから、最う十七年だ。それから私は娘どもにも屋敷を一つ宛持たせて嫁に遣つた。屋敷をこの通り倍にも擴げた。」

祖母の聲は沈んで行つた。伯父を憤ると云ふよりも、險しかつた過去の生涯を追憶するやうに沈んで行つた。

「私は最う新しく創めると云ふ氣根が無くなつた。歸らなければ歸るな。私はその賣つた金を徳雄に送つて、あの開墾して置いた在所へでも引込んで了ふ氣だ。」

斯う言掛けて來て、興奮した祖母の感覺は、何者か來るやうに顏の前を袖で追ふた。東吉は犬のやうに周圍に目を立てた。泥足の裏を見せて臺所の板の間を這つて行き、飼馬麥の煮てある土竈の下を吹いた。白い煙が火になつた。

祖母は高い聲に疲れて來た。煙管を疊の上を歩るかせて、自分にも出せない心持を幾様にも傳へた。その生涯は愚か、魂までも女主人に捧げて居る不具な下男は、胸を冷して祖母の顏色ばかり伺つて居た。

渠は、蒲團に粗相する頃から貰はれて來た孤兒であつた。

「長がい事だ。俺も最う倦きたぞよ」。

祖母は終に、癇性な笑ひやうをした。そして、半通り白くなつた東吉の頭を指示して居た。恐らくそれは、この不具な氣弱い下男を表に立てゝ、世間を凌いで來た過去の長さを指示して居るのだらう。祖母が良人に死別れたのは、亘の母は三つ、三十六の年であつた。その良人の死顏を見た朝、決心して締直した固紐を、嘗つて一度緩めた事さへ無つた。

祖母は偶と耳を立てた。玄關に馬の蹄が停つて、劍の鞘が鳴つた。座敷に居る砲兵士官が歸つて來たのである。

「それ、東吉」。

馬丁が後れたのを見て、祖母は聲も輕るく臺所の方へ呼んだ。東吉は恐しさうに馬の轡を取つた。頸を遠くへ伸しながら、馬屋の方へ曳いて行つた。

祖母は又、下女に指圖して、暖めて置いた着物を坐敷に搬ばせた。

四

其邊は水に浸つて、柿の木の下を廻らなければ、家へ入れなかつた。根の光かる菜は、壁下に高く積上げられた。日の無い方は、葉から滴り落つる水滴が、垂氷になつて下つた。

亘の母は最う醜くなつた頰を風に曝して、並べた漬物樽に鹽を量つて歩いた。看守の女房も、大工の

女房も、倘一の母親も、長屋中の女子どもは、膝の下を濡らして、大桶の水に肱まで突込んだ。餅にしてからそれを貧しい親戚中に配るのが、祖母の家の歳暮の習慣であつた。

女どもは時々立上つた。手の裏を腰にあて　體を伸した。

臺所の土竈には、大吊鍋の蓋をはね上げて、糟汁の泡が吹零れた。女どもは手拭を取つて、土間から入つて來た。例令、斃るまで働いた後でも、この暖かいものに滿腹すれば、直ぐ前の疲勞が贖れたと云ふやうに、又勢付いて來た。

「さア、この元氣で一働き。」

齒の大きな大工の女房は、顏から汗を流して立上つた。

亘の母は、爐傍へ來て動かなかつた。そして、外に聞えるやうに、倘一の母へ當擦を云つて居た。曾祖母が取做しても、人を馬鹿にしてると憤つて聞入れなかつた。

亘はそれが悲しくなつて、箸を置いてそこを立つた。

屋敷のを眞中貫いて、燒いた棒杭が立並んで居た。板塀の胴板には赤いペンキで數字を描いてあつた。この線の通りに切ると、竹籔も栗林も、赤い鳥居のある明神様も、果實の畠も、土に影の落ちるやうな所は大抵停車場の方へ奪られて了ふ。

亘は痛むやうな目付を遠く落して、小供らしくない溜息を吐いた。昨日この棒杭を打込みに來た役人

を案内する、痩せて高かい祖母の後姿が目に來たのである。東吉一人に任せて置けなくなつて、役人の前に出て無理に笑つた、興奮した祖母の後姿が目に來たのである。役人が言葉の違ふ他所人であつた事が、祖母をこれほどまで卑屈にした。

それと共に、不思議に寂しい色が目に來た。赤く堀出された土に、滲入るやうに搖らぐ、弱々しい秋日の光であつた。何所で見たか考へた。渠はこの新しい乾いた土を積上げた停車場を、中田の新田に見て居たのだ。堀出された土には、生命がなくなつて居た。

然し、と云つても、日に〳〵近付いて來る鐵道の噂は、好奇らしい少年の心をそゝり立てずには居なかつた。その屋敷に停車場が來ると云ふ事でさへ、朋輩に對する矜となつた。

倘一が遣つて來た。顏を描いて、肩を張つて、紙の鎧を着て遣つて來た。それは坐敷の士官から貰つた、古端書を黒く染めたものだ。斯の奇拔な意匠に壓倒されて、亘はその方へ駈出して行つた。

その端書をやつた若かい砲兵少尉も、笑ひつゝ、日に焦けた額を坐敷から出した。手招きして呼んだ。

「ヤ、ドッコイ、ドッコイ。」

股をひろげて行く歩調に合せて、大工の女房が音頭を取つた。井戸傍に居た女どもは、濡手を下げてゾロ〳〵と後に跟いて來た。

砲兵士官は、眞白な齒並を出して、涙を出して笑つた。

「俺ァ賞められた、官員様に賞められた。東京の官員様に賞められた。」
尙一は斯う唄つて、氣が違つたやうに踊り狂つた。疲れて雨落のシゲ草の上に尻持ついた。投出した足の間に、出ない唾を吐いて居た。見物は又ドッと笑つた。
亘はどうだんの樹の下に口を閉ぢて眺めて居た。
「何んだ、馬鹿。俺なんか何時だつて話して居る。」
斯う嘲笑ひながら、寂しくそこを歩るき出した。

五

冬が來た。薹漬が爐傍に出た。雪にもならない日陰の土を眺めて、女達は顫えた。熱い茶にその日を送つた。寒國の人の冬を恐れる甚しさは、暖かい方から來た人達を不審がらせた。その人達の方が却つて、輕く着て働いた。
亘の生涯を通しても、恐らくこの一冬の經驗ほど、渠に樣々の事を敎へたのはあるまい。全く、想像(かんがへ)の外の事が來た。今まで安心して見ずに居た事でも、急に、慌てゝ、顧なければならないやうになつた。暗い木が倒された。疲弊した士族どもの家が、見窄(みすぼ)らしく日に曝された。茅屋根(くづやね)が剝された。意地の惡るい友達どもは消えるやうに居なくなつた。
その後へ、何所からともなく入つて來た人達は、まるで別な言葉と、習慣と、勤勉とを持つて來た。第一、明快(あかるさ)を持つて來た。新規に建つた家は、明窓(あかりまど)が多くて、柱が白かつた。煙草を喫はない女達が來

た。亘はこの整頓した家々を見て歩るく中に、自分の家の黒く塗つた簞笥、車長持、鐵金具の重い戸棚、然う云ふものが異樣に眺められて來た。學校へ行けば又、頭髮を短かく刈込んだ、發音の軟らかな友達どもが入つて來た。

この新しい移住者は、殆んど葛藤らしい葛藤もなく、舊るい者どもを壓倒して了つた。腐れて居た樹木のやうに、舊るい者は倒れた。亘が變りはてた町の角に立つて、遠く離れて行つた貧しい友達を思出して居る頃には最う、新しい活潑な少年等に心まで支配されて居た。叱咤されて居た。

この間にあつて、最後まで踏止まつて居た屋の棟は、亘の家と、彼の癇癖強い機織場の老人の家とであつた。老人は竹杖を杖いて、終日町に怒號して歩いた。然し、これとても長かい事ではなかつた。

霰の溝に轉がる或る朝、襟に番號を縫付けた四人の一隊が、祖母の家の門を潜つて來た。草鞋を穿いた押丁が、棒て揃えて柿の木の下に列を作らせた。長屋の女どもは、恐れて戸を締めた。鎖に繋がれた人達は、霜の溶けた畠を縱橫に踏歩いて、先づ竹籔の方から屋敷を明るくした。

凄しい音を立てゝ樹は碎けた。土に倒れた。祖母は立つたり居たりして、この光景を眺めた。

「三日ても行つて參ります」。

その晩、祖母は姑の前へ行つて斯う云つた。翌朝の祖母は、蒲團を置いた馱馬の背に搖られて、三四里距れた或る山間の湯場へ送られる人であつた。東吉は祖母に呼付けられても、その傷しい顏を見上げかねて居た。

小石は所々に山を積んだ。平坦にならされた地面に、五六本の樹木と家とが寂しく殘つた。それ等の木には、紙片が貼つてあつた。割殘された細長い屋敷に、せめてもの影をつくるべく、祖母の心を殘したものであつた。

その樹の中に、枝を擴げた板屋の老木があつた。尙一は前をまくつて行つて、その根を濡した。暗らい明神樣の後を覆せて居る頃は、目を開いて居るやうて、晝間てもその下へは行けなかつた。最う、恐れその者が居なくなつた。

物悲しい、然し賑かな正月が來た。壁を拔いた、大きな馬の骸骨のやうな母屋が、數十人の勇ましい木遣に動いて、軋みながら少しづゝ辷つて行つた。選まれた地面に家が据はる迄の間、祖母の家族は長屋の中の一軒に待つた。そこはもと看守の居た家てあつた。間の壁を下して、尙一の家と續くやうにした。

毎春に來る猿が來た。猿曳は面を額に上げて、「ほゝう。」と屋敷うちを見廻した。そして、厩の方へ行つた。そこには、ガラクタ道具が投入られて居た。馬の無い、乾いた厩の中を猿は舞つた。家の出來上るまてと云ふ約束て、快濶な砲兵士官は師團の方に泊つて居た。

斯う近くなつて見ると、尙一は又別な方へも亘の心を導かずに居なかつた。一口に云ふとそれは、「外へ。」とても云ひたかつた。渠は、亘の知らない海も見て居る。蒼々とした野も、山も見て居る。放縱な

田舎の生活も見て來た渠は、男女に關する不思議な理解も持つて居た。それ等の持つてる者を、渠は熱心に亘の心へ注ぎ込んだ。口で云はれないやうな眞似も強いられた。苦しかつた。苦しかつたが、遁れられる事ではなかつた。

とは云つても、尙一は不思議に憂欝な目付を見せる時があつた。嗅いで嗅げない自分の體の匂でも探して居るやうな、苦しさうな目付であつた。

「來い、好い者を見せる。俺はチヤンと見て置いた。」

或る日、尙一は自分の家の二階へ亘を連れて行つた。こゝにも道具類がギツシリ詰つて居た。それは大抵、板藏の中から搬ばれたものどもであつた。

尙一は、勝手にその中の用簞笥を明けて見せた。樟腦の香の鼻を衝く中から、昔通用した貨幣だの、黑く焦げた紅皿だの、匂ひのする兎の足だの、蒔繪のある印籠だの、彩色した繪畫などを出して見せた。

「これは何んだ、鬪ふもんか。」

尙一は逆せた目をして居た。眞田紐を嚴重に括つた袋包の塗簞笥を取上げた。それは、旃檀刻の大黑天と云つて、具足櫃の上に崇められて居たものであつた。亘が遮つて止めるのも聞入れず、尙一は、細かい齒でその緒を切つた。中には奇妙な恰好した物や、繪が入つて居た。

尙一の不思議な興奮を見た亘は、恐れながらその後に跟いて梯子を下りた。店には米俵を積重ねてあつた。この頃の近所の繁昌に引込まれて、尙一の家では酒の小賣と、米屋とを初めた。仁助と云ふ最上

者の米搗も來て居た。

二人は積重ねた米俵の中に頭までかくれた。黄色い日光が、顫えつゝ酒甕の上に搖ふて居た。隣町の貧しい女どもが、風に唇を腫らして入つて來た。小さな桝を量つてる尙一の母と話して、新しく移つて來た人達の節儉な臺所を笑ひ合つた。

亘は、今まで思ひもしなかつた祖母の姿を心に描いて悲しくなつた。殆んど命令するやうに云ふ尙一の言葉を辿つて、種々の醜い祖母を描かせられた。窒息するやうな厭迫が來た。尙一は總ての人を嘲りたくなつて居た。

亘は何う云ふものか、痩せて毛が拔けて、舌を垂れつゝ喘いて居る獸の姿を心に見て居た。

この傍に、亘は又實家の方にも苦勞を馳せなければならぬ人であつた。渠の父は、長い間の肺病であつた。淺慮なる渠の母は、この薄弱な頭腦にも決心を持たせなかつたのかも知れぬ。來る度に、來る度に、「今度は持つまい、持つまい。」と、唄ふやうに云つた。今ては最う馴れて來たが。亘はその度に顫えた、苦しんだ。渠は總領と云ふ言葉に追窮された。

「祖母さん」。

亘の次の妹は、小さいのを負つて、顫えながら夕方臺所口に立つた。爐傍に居る士官の手前を憚つて、祖母は恐い目をしながら閾を出た。氣忙しく聞くだけの事を聞いて、追出すやうに手を振つた。

妹はボンヤリして嶮しい祖母の顔を見つゝ、歸りかねて居た。後には大きな風呂敷包を抱いて、晝間ブラリ〳〵と入つて來るやうになつた。

亘の父は、舊るくはあるが、貧しい小學校教師であつた。

六

北向になるこの中二階の窓障子にも、朝々の鮮かな蒼空が映つて來た。そして、林檎の薄赤かい花が板藏の壁を掩ふて咲いてる間は、暖かく降る雨の音に、この部屋の中まで明るく思はせた。長がい冬は行つて了つた。人々は蛹の眠から覺めたやうに、荒れ切つた掌をこすりながら、蒼い空を見上げた。

寺町の貧窮な部落から出て來る女どもが、白手拭を被つてゾロ〳〵と前を通つて行く。この耻しさを知らぬ女どもは、毎日遠くから送られて來る煉瓦を洗つたり、泥車を押したりして、地を這つて居た。胸に銀の鎖を下げた工夫どもは、殆んど人とは思はないやうに辱しめ苦しめた。蹴返される女を、他の女どもはダラリと笑つて居た。嘗てなかつた、「ヨウイトコラショ。」と云ふ女の職業が出來た。然う掛聲して土突きの綱を引くからである。

斯う云ふ幾萬の手が、亘の屋敷に沿ふて土手を築上げた。枕木を焼いて棚に結つた。砂利が一面に光つた。

「お母さん、私は不思議な夢を見ました。一昨日の晩でした。」

帳場に坐つて帳面を記けて居た祖母は、斯う云つて後の障子を開けた。却つてその方が氣持好い位の風が、板屋の若芽の上を吹いて來た。

「ほゝう。先づ云つて見れば。」

曾祖母は行火の上に寢疲れた顏を乘せた。

「何んても蓮池のやうてした。お堂のやうなものがありました。それて、東京に居ると云ふ譯さね。衞が居ました、此方の方の手にはお葉だらうと思ひました。」

祖母は思ひ出し〳〵味つて考へて云つた。

「衞が云ふには、お婆さん長い〳〵と除けるんてせう。何がそんなに長いと聞いても、唯遁げるんてす。段々考へて見ると、この丸髷が長かつたんてすね。なアに、切つて了ふと私が云ふと、衞はピヨイ〳〵と蝗のやうにそこらを撥廻はりました。私も又——衞は今年幾つだと思つて。」

「本當さ、十七かな、八だつたかさ。」

曾祖母は氣長く笑つた。祖母はこの返事ては張合なさゝうに、帳面の上に頰杖して考へて居た。

祖母はこの頃、目に見えて伯父の方へ考へて居る。先方から來る數も多くなつたが、祖母の方から出す手紙の方が多かつた。何う書き表はしたならば、この母らしい情愛を傳へる事が出來るかと、苦しんて書いて居るらしかつた。居る砲兵士官へ、その母親から搬んて來る親切には始終動かされて居た。

「又初つた、今度は直ぐお近くだ。」

祖母は顏をしかめて立つた。閉めやうとした障子に手を掛けたまゝ、直ぐ頭の上に響く土突きの木遣を聞いて居る。明るさを通して來る女どもの聲は、然し、寂しいものであつた。

曾祖母は又坐つたまゝ行火に眠り陷けた。この願ふ所の無い、あなた任せの寢姿は、矢張り何事かを祖母に思はせた。子の無い女の涼しさ、然う云ふ事も思はれて來た。

「お母さん、寢てばかり御座つては毒だ、些と外の方へ出て見ては何うです。東吉の前の桃が、それは好く咲きました。」

祖母の斯う云つたのは、近頃妙に我性が弱くなつた姑の事が氣になつて來たのだ。

「然うさ、私も大角豆(ささげ)に手蔓をやらうと思つて居ました。」

曾祖母は又目を覺した。

「お母さんも、急に樂隱居と云ふ形になりましたね。」

「然うさ、腰が拔けて、猫だ。」

「猫てしたかね、何うも。」

祖母も一緒になつて笑つた。斯う云ふ事で笑ひ合ふのも、考へて見れば隨分と久し振りであつた。笑つて居られないやうな氣になつた。

東京の新聞はその日の中に來るやうになつた。腰に鈴を鳴して、勇ましく駈つて來る配達人の足音が毎晩この家の重い門の扉を開けた。世間の話にき渇切つてる東吉は、祖母にその贅澤を斷りして、買つ

て讀んだ。

或る晩、湯上りの東吉は、その一枚を持つて入つて來た。

「旦那様は東京まで出て御座ると見えますね。こゝに出て居ります。」

東吉は斯う云つて、或る欄の細かい活字を指した。

「どれ、どれ〳〵。」

祖母は前掛の上から田芹の根をふるひ落して紙の方へ行つた。

「ほゝう、典獄會議とある。」

大きい目鏡をかけた顔を遠くの遠く方へ除けて、短かい記事を讀んだ。

「亘、來て見ろ、伯父樣がこゝに出て御座るぞ、ほら。」

祖母は最う凝つとして居られる人ではなかつた。丁度、亘の父が學事視察と云ふ名で、開設中の博覽會を視察に遣られる所であつた。祖母はこの婿を道連れにして、東京まで遇ひに行く事にした。

五月の初めの或る朝、お高祖頭巾を襟にかけた祖母は、東吉と亘とに送られて、三里先きの停車場へ俥を走らせた。亘はこの時初めて人を載せる滊車を見た。亘の父は未だ來て居なかつた。鈴が鳴つた。

「廣人さん、廣人さん。もし、オイ〳〵。」

祖母は遠くから來る俥を見付けて、泣出すやうな聲で招いた。

亘の父は、丁と汽車の時間を見て居た。肩から吊皮の付いた鞄を横にさげて、車を下りた。痩せた手にシャツの袖が覆つて居た。

亘は父の袖にすがつて、人波の中をキョト付きながら揉れて行く祖母の後姿を見て、云ふに云はれぬ憫と哀愁とをその背中に投げた。三和土の上にせいせいしく軋む、その日和下駄の音が長く忘れられなかつた。

八

亘の實家は、祖母の家から指すと、停車場の向側になつた。そこへ行くには、萬屋の茶畠を抜けると近かつた。その茶畠も停車場になつた。馱々廣い棚について、堤下を殆んど一周するやうな位置になつた。

家の土塀の見える角まで來て、亘は立停つた。迎に來た小さな妹は、不思議さうに兄を見て居る。咽頭の下から鳩尾までを、軟かな鳥の羽毛が通るやうて、吐しさうになつた。妹の手を引いて、又駈出した。

障子を開擴げた臺所には、蒼いやうな風が吹通つて居た。そこには、恐るべき事實を聞かせる人は誰も居なかつた。弟や妹どもは、北口の縁側にかたまつて、顫えて居た。

「靜かに、靜かに。」

妹の泣くやうな目は、斯う語つた。未だ、その事は來て居なかつた。

父の癇疾は、父を東京までさへ到着させなかつた。熱い、鹽湯を求めなければならない狀態になつて、或る停車場に下りた。そこは、醫者を招ぐ事もならぬやうな、邊鄙なる山村であつた。父は祖母を恨み〱そこから一人汽車に乘つて引返して來た。祖母の心は自分の子の方へのみ馳せて居た。

今日迎えが來るまで、亘はなるべく實家へ近寄らないやうにした。父の烈しい氣性は、亘をそのまゝ家へ引留めて置きさうてあつた。

苦しい腹をして、母はツッと座敷を出て來た。母は何う云ふ感情でも、それを受取つたまゝに他に投付けずに居られない人であつた。顫えて居る小兒どもでも、相手になつた。

「見ろ、お前達。今に何う云ふ事になるか、好く見て居ろ。――いつもの事なぞと思つてゝと間違ふぞ。」

小兒どもは、小さくなつて呼吸を殺した。

「お父さんは祖母さんを恨んでる。私も恨む。死んだつて六番丁の世話になるなと云つてる。誰が、誰がなるもんか。六番丁はお父さんの仇敵だ。」

母は激して來る感情を斯う出して見た。六番丁とは、自分の生れた、祖母の家を指して居た。

母は興奮を誘ふ物を探すやうな目をして立上つた。嚴酷な良人と、滿されない生活と、大勢の小さい兒童どもとに虐げられた母は、何所かへその鬱情を洩らすようになつた。小供どもを敵と呼ぶやうになつて居た。

「お母さん、貴方。」

亘の直ぐ下の妹は突然泣出した。この神經質に育つた妹は小兒の時から、母の苦勞を背負れるだけ背負つて來た。

他の小兒どもゝ一緒になつて泣いた。母は譯もなく疊へ頽れて泣いた。この小さい者共の慘しい叫喚も、荒れ壞れた母の心には、寧ろ一種の音樂であつた。斯うしてから、ケロリとなつた。

稀らしい事に、亘は弟妹どもをいたはる氣になつた。情味に饑えて居る小さな者どもは、雀躍して渠を取卷いた。變つた町の姿を眺めに、門に立つた。

停車場の正面になる廣ッ場には、砂利を埋めて重いロールに坦された。その原野のやうな廣場の周圍には、ペンキ塗の三階だの西洋館だのが建築を急いで居た。客待合の建つ邊は、盲座頭源一の家の邊である。

亘の家は、停車場から少し屈折して居た。大勢人の集る所には是非なくてはならぬやうな女どもの種類が、早くも來て居た。白晝、赤行燈の下に立つて、勞働者の方に笑顏を賣つて居た。多くは、土地の娘どもであつた。

亘は父の前に坐らせられた。新聞を讀ませられた。又、小學校を終てからの方向も答へさせられた。

父は笑つて居た。斯う背の伸びた小兒を見るに就けて、自分の病氣を傷んで居る樣子は、明らかに見え

た。

「俺も病氣さへ無つたらばなア。」

父は遠くを見てる目付をした。父の今度の上京は、公用の外に或る期待があつた。父と寢食を共にした友人が英國から歸つて來て、政府の重要なる位置に坐つた。父はそれには是非會つて見る氣で出掛けたのであつた。

「駄目だなア、斯う云ふものを詠むやうでは。」

父は枕頭の手帖を出した。漢字が幾行にも並んで居た。父は自らを嘲るやうに笑つて居た。

そこへ、除隊兵が歸つて來た。もと父の許に居た人で、軍曹になつて越後の方の師團から歸つて來た。

「いそがしくなりましたな。知らずに出て來て、全るで目が眩ふやうだ。」

除隊兵は快濶な大聲を家中に擴げた。

「何うして君、これが海軍士官を望む時代だ。」

父は、亘の方に笑つた顔を振向けた。

「ほう、この亘さんがね。」

正直な除隊兵は驚いたゞけの聲を出した。皆笑つた。

亘が外を思ふやうに、窮屈な軍隊を離されて來たこの人も、矢張り外の自由に憧れて居た。それに、

今度村へ歸れば何うなるか、些いと行先のわからぬ人てあつた。長がい苦しい服務に酬られた金は、その上衣の衣嚢に入つて居た。

伸びるまゝに任せた庭の樹木の中に、そこら中を明るく咲いた辛夷の花を見ながら、渠の心は決つた。父の前に坐つて、その許可も得た。

除隊兵の身體から發する一種の匂を嗅ぎつゝ、亘を抱いて乘つた俥は、老樹に圍まれた或る社殿の下を過ぎた。車の輪が次第に深く堀れて、貝殼を屋根に載せた町並を見た。

「海、海、海。」

亘は車の轅棒が振動するほど、跳り上つた。家と家との間から、眩しさが光つて來た。

燥ぎくたぶれた二人は、或る二階の家に晝食して居た。その欄干の下には、湯氣を洩しつゝ、出帆前の小蒸汽船が碇泊して居た。海を渡つて半島の方へ行く人達は、重い荷物を持つてゾロ〳〵入つて來た。

酒に醉つたやうな顏して、蒼く光かる海の方を眺めて居た除隊兵は、箸を持つたまゝ伸上つてその旅人等の方を眺めて居た。渠の軍隊生活は又、雪に半年を閉ぢられる荒凉たる北國の山河に結付けられてあつた。これから歸つて行く方にも、未だ雪が消えなかつた。

廣い海に汽笛が谺して攅つた。渠は最う考へるに耐えぬ人てあつた。

「遣れ。」

渠は號令するやうに叫んだ。そして、唯明るい海の方へ乘出したい爲めに、目的の無い切符を買つた。

四日目の夕方、明るさに疲れた二人は、グタリとして家へ歸つた。

門の前に、妹が子供を負つて立つて居た。

「兄さん、六番丁へ行かんせ。お父様が大變に憤つてるから。」

「何うした、何んて。」

「亘は親を棄てゝ遊びに行つたと憤つて居ますよ。」

亘は何事とも思はれなかつた。海ばかり見えた。

八

一月も居る氣で行つた祖母は十日ばかりで歸つて來た。其の時は滊車が仙臺まで通じて居た。

「あゝあ、やつと家へ來た。」

祖母は然も草臥れ果てたやうに、歸るなり爐傍へ足を投出して、兩手で膝頭を叩いて居た。

「まだユックリして御座れば好いのに、私はこれでも結構留守をする氣さ。」

曾祖母は日向から入つて來た。

「何うして〳〵。」

祖母は煙草入だけ出して、喫馴れた長がい煙管を取り上げた。そして、前に踣り倒れるやうな、眞似をした。

「耳がコウウなるやうなんです。息が切れて、町をユックリ歩るかれませんでした。」

そこへ亘が歸つて來た。尙一も出て來た。
「尙一、お前、曾祖母さんに喧嘩をしたな。祖母さんは東京に居ても、チヤンとお前等の爲る事を見て居たぞよ。」
尙一は薄笑ひしつゝ、緣側の方へと遁げて來た。
「何うした、尙一。その頸に卷いたものは何んだ。」
尙一は咳嗽が出て、蒼い顏して居た。この冬の間にヒドク元氣が無くなつて、沈んだ目をして居たのは、祖母も前から苦になつて居た。
祖母が東京から持つて來た報告は、亘等に取つては、不安でもあるが、また喜悅でもあつた。それは伯父の長男衞が、今度此方の學校へ來ると決定して居た。亘は、この屋敷に於ける自分の位置を直ぐ思つた。
「今時の十八てすからね。ヤレ〳〵、又このお婿樣と一旅するのかと云つて、笑つて來ました。」
祖母は、何うても好いと云ふやうな笑ひ方てあつた。
「それに、德雄の奴の老狡になつた事、何を云つてもウム〳〵てす。十日目〳〵の返事を聞いて居たのては、何時まて經つても話は乾やしません。まア、好うく考へて御覽ぐらゐの所て、何時もお別れさ、貴方。」

尙一の氣鬱は、最早そのまゝに置けないやうになつた。渠の感傷の烈しい干滿は、親として見る目では、トテも理解の出來ないやうな複雜を持つて居た。渠は些細の事に好く泣いた。夢の裡から泣き續けて、床の中に丸るく俯伏して居るやうな事は稀らしくなかつた。

東吉は或る日草鞋を穿いて出掛けた。そして、白い羽の鏑矢を下げて來た。それを尙一の眠る天井に突き立てた。斯の考は曾祖母から出たのだ。誰よりも甚しく尙一の病氣を憂ふるのは、一番仲の惡るい曾祖母てあつた。曾祖母まて一日〳〵寂しさうになつた。

土の濕りが立つて、物の響が顫えるやうな春の夕方、若葉の懷しい木蔭から、ホヤ貝の寂しい聲が聞えた。あの臭い、腐れたやうの激しい匂の貝を、奧州の女どもは好んて喰べた。齒齦の血が新しくなると云はれて居た。

尙一は寢床から拔出して行つた。爛れたやうな貝の肉を、母の前から摑んで、突然取つて口へ入れた。

「どれ、最う一つやつて見やう。惡るく無いな。」

母親は呆れて見て居た。斯う云ふやうな興奮が時々來た。その後ては、必らず鼻血を出した。

屋敷中を泡立たせて、伯父の家族が東京から來た。

九

伯父の家族が東京から來た。寄つて來る女どもの目は、華美に裝はせた從姉お葉の方に立つた。變つ

た色の裾袘や、常住に穿く白い足袋でさへも、この土地には見られなかつた。お葉の行く所は、長押裏まで明るかつた。

「姉さんも何んの事だ。踊ッ子のやうな眞似をさせて。」

黄色い顔の娘どもを持つ亘の母は、ムキになつて憤つた。故に頽れた髮をして、伯父の前へ坐つた。

伯父は置いて、伯母は十幾年振りに故郷の土を踏む人であつた。そして、その十幾年間をば、旅から旅と送つて來た人であつた。自然に、自分を見せる事に急しい、湯治客のやうな氣分になつて居た。年寄どもの仕上げて置いた事を、ユックリして見て遣ると云ふ人ではなかつた。祖母は斯の不足からも、嘆息した。

伯父の荷の中からは、古るい青銅の器物が出た。桐箱に納めた掛軸が出た。古代の遊女が使用したと云ふ、ゼンマイ仕掛の蜘蛛の盃が出た。斯ふ云ふ者を祖母の前に持出した底には、眩暈性の妻を掩つて遣る苦しい所もあつた。伯父は今でも始終、祖母の方から受取つた。東吉の如きでさへ、その非難を伯母の贅澤に向けて云つた。

「お母さん、一つ如何てす。洒落れて一つ、思ひ差しと云ふ所てす。」

伯父は氣を働かせた冗談を云つて、甲の下にある捩を廻した。蜘蛛は不恰好に足を動かしながら、祖母の膝頭の方へ外れて行つた。

「これが三百圓、あの觀音樣が二百圓。錢の位も無くなつたやうて、私は見て居ても恐しい。」

題の尖つた祖母は、寒むさうな目付して、昔の人のオドケた意匠を見て居た。伯父は母を見て、話を曾祖母の方へ持つて行つた。笑ふ事が出來た。曾祖母は、誰に向つてヾも、氣を損じない事ばかり云つて居た。

亘の母の倦ざる非難にも動いた。或る日祖母を北口へ呼寄せて、自分も固くなつて坐つた。伯母は顳顬(こめかみ)を揉みながら、最後まで聞いて居た。

「私には全く僞方ありません。あの通りの御性分てすから。」

伯母は明らかに云つた。祖母には追詰める所も無くなつた。

「うゝん、お薬さんの用で來たんだ。」

亘は、云出されぬ先に頭を振つた。そして、祖母の居る茶の間を擦り拔けた。この家の中は最う、亘のものては無くなつて居た。事を窮屈に考へる祖母は、伯母の前には、娘から生れた子にそゝぐ愛情を見せたくなかつた。

紫をまぜた芍藥(しやくやく)の芽は、力强さうな頸を土から擡げた。蒼く晴れた空には最う初夏を思はせるやうな白雲が搖ふて居た。

この從姉は、終日琴の前に坐つて居ても倦きなかつた。向いて話して居ると、何所ぞの脆弱な腦皮質に損傷がありさうに思ふほど、智慧の廻らぬ所が見えた。それだけに又、曲折のないなだらかな氣分が

出て、一種柔軟な手觸を他に持たせた。伯父がこの娘を見る目には、美しいが、然し悲しい玩具と云ふ風があつた。

おやうは何時も、戰爭のやうに激しく勞働する寒國の女どもを、不思議さうに見て居た。

「尙一。」

垣根の外を通るのに、お葉は緣側へ立つて行つた。そして、意味も無い笑ひ方をした。

「可笑しいんだもの、昨日のお前のした眞似ッたら。」

尙一は少し赤くなつた。深くなつた目を俯向けた。何うかするとこの頃の尙一は、好く斯う云ふ羞耻の樣子を見せた。口笛吹きながら步いて行つた。

祖母が來て、激しく亘を叱つた。暗らい心になつて、捨てられたやうな、追倒されたやうな暗い心になつて、悄然と停車場の棚の下を家の方へ歸るべき時が來て居た。陰欝に荒れた實家へ入ると、渠は何時もムッとするやうな重苦しさを感じた。

外はそれでも、空に光が殘つて居た。亘は踏切の番小屋の所に立つて、遠く眞直に消えて行く線路の末を見詰めて居た。顏の置きやうて、車輪のあつた所がギラリと光つた。

亘は泣いて居た。渠は今、ズット遠い〳〵所に憧憬を馳せて居る人てあつた。この路が東京まて續いて居ると云ふ考にさへ、渠は泣けた。

袷に着換えて、伯父の家族は東京より二百里も遠い國に歸つて行つた。祖母の寄托(たより)には從兄の衛が殘つた。

從兄は祖母の手から角鍵を借りた。そして、板藏の中を調べに入つた。舊るい地劵面、證文のやうなものを取出した。そして、考へた。舊るい家を見廻した。大人のやうな顔して屋敷の中を歩いた。

この心の堅い青年は、十八になつて居た。總ゆる事を知りたいと云ふ欲望と、舊るい事に滿足しない心とが繩のやうに綯(なひ)合さつた年頃であつた。何時からでも事を新しく創められると信じ得る年頃であつた。

東吉が呼ばれた。東吉は嚴しい訊問の席へでも坐はるやうな氣で、この若い主人の前へ坐つた。

「駄目だぜ、こんな事では。折角苦勞して溜めても、斯う斯ふ拙(へた)な遣方をしてるから、段々喰込んで行くばかりだ。」

從兄の頭には、この家を取卷いて居る、多くの貧しい親戚どもが見えて居た。特に亘の母親と、田舎の警部に嫁付(かたづ)いて居る今一人の顔があつた。

「祖母さんも氣の毒な人だ。斯うして子供どもに遣はれる爲めに、一生働いて來たやうなものだ。」

衛は斯う云つて嘆息した。渠は父の所へさへ、責めるやうな手紙を書いた。渠は父母の茶話に聞いて祖母の財産に過大の期待を持つて歸つて來た人であつた。

板屋の老樹は馬下りの窓の所に移された。枝を拂はれて、木は裸になつたが、それでも季節はその梢に寂しい青葉をさゝせた。新起の土に顫えるやうな影を落した。亘はこの樹を見る毎に、妙に寂しい氣になつた。

午前の涼しい風は、この樹の青葉を鳴して、開放した台所の方へ吹通した。

曾祖母はその窓下へ布屑を持つて行つた。それを膝の周圍に置いたゞけて、最う坐つて眠つて居た。今日の暑さを思はせるやうな、然し又爽かに冷しい朝の日は、淺い青葉の間からチラ〳〵と顔を掠めた。

「最うあれだものな、後生樂になつた。」

祖母は從兄に向つて然う云つたが、妙にそれが恐しいやうにも思はれた。祖母は無理に勵しても曾祖母の身體を動かすやうに勉めるやうになつた。

朝の仕事の鐵漿も乾いた。うまさうに煙草を一吹して、祖母はそこにある履物を穿いた。餘程遠くなつた敷石を渡つて、長屋の方を見に行つた。

尙一が一人、寂しさうに緣側に腹這して、繪のある本を讀んで居た。祖母に聲掛けられて、疲れたやうな目を振上げた。

「氣は廣く持つもんだぞ、尙一。お前は男だぞよ。」

斯う云ふ優しい言葉を、尙一はこの頃になつて祖母から聞いた。

東吉の店でも、大工が來てガラス障子を入れて居た。斯うでもして見なければ釣合が取れぬほど、

近所がひらけて來た。祖母は店の間の上り段に腰掛けて、着物を着換えたやうな町の姿をボンヤリ見て居た。積上げた穀物の土間には、涼しさが匂つて來た。

額の髮を切下げて、束髮を綱につゝんだ蓮葉な娘どもが、話しながら前を通つた。裾の間から赤い靴下を自慢に見せて行く書生もあつた。私どもは眞直に急ぎますと、その人達の樣子を語つた。斯う云ふ激しい世の推移は、祖母の固い心にも一種の不安を持つて來ずには居なかつた。

祖母は又、凝つとして居らない動搖の前兆をその目付に見せた。

亘の家には、田舍から來て居る女書生があつた。斯う云ふ若い人達の胸に鬱した甘い憂鬱を訴へる爲めに、樂器と云ふものが入つて來た。若い人達は啜り泣くやうなヴアヰオリンの弦(いと)に顫えつゝ、前の代の人達の嘗つて知らなかつた、或る不思議な憂鬱を訴へた。

亘は暮れて行く土壁の色を見詰めながら、その女書生の彈く弦(いと)を凝つと聞締めるやうになつた。特に、「螢の光。」と云ふ悲しい顫える調子は、悲哀以上の或る悲しみの種子を植えさせた。

亘は、頭を垂れて、何か探すやうに暗らい家の周圍を歩いた。

「喧しい。終日キユーコ、キユコ、キユーコ、キユコツて。何がそんなに面白いんだ。」

祖母は斯う云つて蚊帳の中に顏を尖らした。この樹木の多い屋敷は、切開かれた六番丁よりは蚊が多かつた。祖母は母の殘つてるうちに蚊帳を吊らせて、行水に涼しくなつた身體をその中へ入れた。眞中

に煙草盆を置いた。

祖母は、亘の家に來て、三日も四日も歸らなかつた。東吉を呼び付けては、家の方の事を聞いた。東吉は間に居て、立ちきれなさゝうな目をした。とは云へ、この頃の祖母の氣軟かさは、小さい小兒どもまでを喜ばせた。亘の直ぐ次の妹でさへ、然う祖母を恐れなくなつた。

「祖母さん、表にチヤリネが來ましたよ。樂屋の方を覗いて見てお出なさい、そりや餘程奇妙だから。」

亘の父は痩せた體の腰に手をあてゝ、ソロ〳〵と庭口の方から歸つて來た。緣側に腰掛けて息を入れて居た。

「廣人さんや、そつちの曲馬よりこつちの曲馬が餘ッ程見せものだ。」

祖母は蚊帳の中から斯う云つて笑つた。

「然雖、それも好いぢやありませんか、衛にしても一生懸命なのですよ。十八やそこらにしては、感心なものですよ。」

父は立つて行つて、薔薇の葉をつまんで捨てた。青い虫がその葉裏を這つて居た。

「貴方達は、妙に若い者の肩を持つ癖があるが、そんなものぢやありませんぜ。」

「では、何んなもンです。」

父は笑つて了つた。この年寄の愚痴話は、相手に冗談を云はせるより外はなかつた。何時ともなく、祖母は慰められる人になつて居た。祖母はそれにも倦足りなかつた。

「あゝあ、最う何も云ひますまい。後になつて氣が付くでせう。」
祖母は又嘆息した。
其所へ母は、新に生れた嬰兒を抱取つて貰ひに來た。
「誰か、他に手がありさうなものだ。」
「又饂飩が煮立つ所ですてば。そんなにお客樣ぶるものぢやありません、ねえ慶三。」
母は頰擦りして、嬰兒を祖母の膝に乘せて行つた。
弟妹どもは女書生を引張つて、曲馬小屋の樂屋を覗きに行つた。亘も粉穴を投出して後から行つた。
曲馬師の一隊は町廻りから歸つて來た所であつた。
「黑奴、黑奴。」
七つになる弟は駈戻つて來て、兄の袖を引張りちらした。
この横町には未だ家の建揃はない空地があつた。曲馬小屋はその中の一つに幕張りをした。
「衞。私は最う一度、質屋の鑑札を下げて見る氣だよ。」
祖母は蚊遣の杉葉を押退けて、申渡すやうに從兄に向つて云つた。この四五日の譯もない興奮を見て居る從兄は、爭ふだけ無駄なのを知つた。
「それに私は、この杉の木を切つて、ズウと土塀の所に總長屋でも建てゝ見やうと思ふ。斯う土を遊ば

せて置くのは勿體ない。」

　祖母には最う材木の切出しから、工事から、建つた後までの設計が出來て居た。

「では何れとも、一應は父の所へも相談してやりませう。」

　從兄はこんな無用な屋敷に長く住んで居る氣はなかつた。それに、噂だけかも知れないが、停車場の設計が模樣換になつて、又々この邊を買上げると云ふ風聞もあつた。

　祖母は自分を損傷(そこ)はれたやうに激して來た。

「何んて、何んて德雄に相談をかけます。あの人はね、お前には父だらうが、母の私を棄てゝ二十幾年も顧なかつた人だ。今頃になつて何を云ふ。皆斯うしたのは私の働きだ。親類どもまで寄つて、お前に任せろと云ふから、私は百日の以上も默つて見てました。何んてす、今の樣子は。」

「然し――。」

「聞きません、聞きません。然しも何もあるものか。私は、誰が何んと云つても、今一働き働いて見ます。」

　若い從兄は、それにも怺えて居る事は出來なかつた。

十一

　祖母の方にソロ〳〵いそがしい日が來て居る時、亘の心は曲馬小屋の天幕(テント)に引付けられて居た。町の人は急激な動搖に渦卷かれて居て、こんな外來の藝人なぞに目を向ける暇が無つた。興行主は次の興行

地を見付けかねて、一月の以上もこゝに滯在して居た。

「ア、タ、ル、さん。被來いな。」

卒鐘に水を貰ひに來て、ジャッケイと云ふ若かい方の印度人は、優しい、女のやうな聲して臺所口から聲を掛けた。母は憎み笑ひながらも、時々米などをくれてやつた。

「喰べるかしら、遣つて見て御覽。」

女どもは斯う云つて笑ひながら、[illegible]の匂などを嗅がせた。印度人はそれを、恐しい虫でもつまむやうな手付して下げて行つた。

他の一人の年老いた方の黒奴は、白い目で人を見詰めながら口を利いた事もなかつた。厩の地面に何時も膝を組んで居た。白人の藝人や興行者が來て鞭つやうな事があつても、この老黒人は默つて唯、敵視するやうな鋭い目を向けた。

ジャッケイは極めて少ない名詞より外、日本語は出せなかつた。それて居て、亘はこの黒奴から何かしら受取らせられる心持があつた。遠く、知らない國。自分には親でもなく、兄弟でもない、全く新しい人種ばかり居る國、少年の激しい憧憬は然う云ふ方に馳けた。そして、悲しくなつた。

熱國から買れて來た人達は、この頃メッキリ明るくなつた日和に出て顫えて居た。そして、線の深かい顏をくもらして、何か物思に耽つて居た。亘には、斯うした出來事のない憂愁の方が、深かい感動を與へられた。

「國へ歸りたい、ジヤツケイ。」

亘は遠く南の方を指示した。

「私、國、カルカツタ。」

若い印度人は涙を流した。亘は斯う子に慕はれてる母は、例令黒奴でも懷しかつた。この者の母の話には泣く事も出來た。それだけに渠は、優しい情味と感情に饑渇いて居た。

或る日渠は、尙一の病氣に就いて、恐しい通知を聞いた。尙一は血を吐きながら、最う病院に擔れて居た。祖母はその病氣の種類を聞いて、小兒どものそれに近付く事を禁じた。東吉は顫えながら、家に働いて居た。

弱々しい日は、停車場の堤にゆらいで居た。亘は最う堪られなくなつた。夕靄が蒼く湧いて來る町を通つて、病院の裏門を入つて行つた。尙一も慕しいが、それよりは悲哀その物に向つて坐りたいやうな氣がした。

尙一は、白い毛布にくるまれて、沈んだ目を向けて居た。煩るさゝうにして、近寄る亘の顔を避けた。

「何故この子は斯う人を厭がるんだ。亘さんぢやないか。」

尙一の母は叱るやうに云つた。病人は泣出しさうになつた。」

「妙な事があるもので、時々夢を見て、お葉さんと遊んで居る譫語を云ふ事があります。ホントに、碌

な口も利かれた事がない癖に。」
亘の母は、今の時勢になつても屋敷うちては家來扱ひにされるのが心外に思つて居た。田舍から見舞に來てる女に向いて斯う云つた。
「嘘だ、嘘だ。」
突然、尙一は泣き出した。
それても、歸る頃には幾らか機嫌が直つて居た。
「亘さん、又來いなア、今度來たら面白い話を聞かせるからな。」
「ウン、明日來る。」
「本當に來いよ。」
尙一は目て見送つた。亘は長い廊下を出て、そこらに脫いて置いた筈の下駄をさがした。

和服を着た砲兵士官は、門の方から入つて來た。
「いよう、大變な事になりますな。長屋てすか。」
習慣は片足を前に投出させて、祖母へ斯う話し掛けた。
「見て下さい、これてすよ。」
祖母は腰を伸して、煤に染つた兩手を擴げた。丁度舊家の賣物があつたので、その煤を洗つて普請の

木組を節しやうと云ふ考であつた。

無尻の上ッ被を脱いで、祖母は手を洗ひに行つた。一向無頓着なこの士官でさへも、この頃になつて又屋敷の中に加へられた、年寄の約しい考案と勞力とを見出さずには居られなかつた。果を實ぶやうな種類の樹木は、明地なく植付けられた。明るいのを耻ぢて來るやうな客の爲めに、出窓の脇に小さな格子戸も明けた。停車場の柵に沿ふては、常盤木の苗木を植えた。

「お母さん、杉山さんが被仰いましたよ。」

祖母は斯う聲を掛けて、爐の火を掻起した。

「最う炬燵ですか、曾祖母さん。」

若かい士官は笑ひながら茶の間の方へ入つて來た。

「おイや、杉山さんだ。」

曾祖母は斯う云つたが、別に話出す事も持たなかつた櫓に顋を載せて眠つて了つた。

士官は、大鍋で煮る祖母の家の味噌汁を忘れかねて、時々斯うして遣つて來た。祖母は然うても云はれるのが悦しさうに、臺所をチタクタ鳴らして、その用意にかゝつた。

「フ、タ、ル、さん、居りますか。」

夏服を着た印度人は、顫へながら尋ねて來た。手に落花生の袋を持つて居た。士官と衛とが出て、覺束ない英語を話し掛けて見たが、それても通じなかつた。

「私、カルカッタ。日本へ來た。長崎、神戶、名古屋、東京……仙臺、寒い。青森、寒い。」

ジョッケイは聲を顫はして、身體をすくめて見せた。士官は手を叩いた。

「然うだ、お別れに來たんだ。寒い青森へ行くと云ふ意味なんだ。――これでも志なんだ。」

士官は笑ひながら黑奴の手から落花生の袋を受取つた。衞は戲れに、その豆を一つ取つて口へ入れた。

「これでもね、矢ッ張りしぃゝゝ、ほらしい所があるんだ。皆、人だからね。」

祖母は斯う云ひながら臺所に立つて行つて、味噌蓋の蓮の葉に冷たい飯など盛つて來た。印度人は悄々として歸つて行つた。跣足に踏む土が然も冷たさうであつた。

晚飯が濟むと、衞は英語の本を懷に入れて、夜學の先生の方へ出掛けて行つた。渠は最う、家の事など忘れたやうにして居た。祖母アさんが貯めたんだ、何うなつても好いと云ふ氣になつた。それよりは先づ自分の事が忙しくなつた。來年の春は、假令何うあらうと東京へ出て、政治科の或る學校へ入る積りで居た。

祖母は寢床へ入つてからも、久しく眠り付けなかつた。時々煙草の火を擦り付けては、屋敷の計畫を根氣好く考へ直して居た。目をつぶつて見ると、自分の長い辛苦になつた屋敷の中は、一木一草の細微まで明らかに心へ浮んで來た。

亘は夜、眠れなくなつた。(完)



惡魔

谷崎潤一郎

眞暗な箱根の山を越すときに、夜汽車の窓で山北の富士紡の灯をちらりと見たが、やがて又佐伯はうと〳〵と眠つてしまつた。其れから再び眼が覺めた時分には、もう短い夜がカラリと明け放れて、靑く晴れた品川の海の方から、爽かな日光が、眞晝のやうにハツキリと室内へさし込み、乘客は總立ちになつて、棚の荷物を取り片附けて居る最中であつた。酒の力で漸く眠り通して來た苦しい夜の世界から、ぱつと一度に明るみへ照らし出された嬉しさのあまり、彼は思はず立ち上つて日輪を合掌したいやうな氣持になつた。

「あゝ、これで己もやうやう、生きながら東京へ來ることが出來た。」

斯う思つて、ほつと一息ついて、胸をさすつた。名古屋から東京へ來る迄の間に、彼は何度途中の停車場で下りたり、泊つたりしたか知れない。今度の旅行に限つて、物の一時間も乘つて居ると、忽ち汽車が恐ろしくなる。さな

から自分の衰弱した魂を脅喝するやうな勢で、轟々と走つて行く車輪の響の凄じさ。グワラ〳〵と消魂しい、狂じみた聲を立てゝ機關車が鐵橋の上だの隧道の中へ駈け込む時は、頭が惱亂して、膽が潰れて、今にも卒倒するやうな氣分に胸をわく〳〵させた。彼は此の夏祖母が脳溢血で頓死したのを見てから、平生大酒を呷る自分の身が急に案じられ、何時やられるかも知れないと云ふ恐怖に始終襲はれ通して居た。一旦汽車の中で其れを想ひ出すと、體中の血が一擧に脳天へ逆上して來て、顏が火のやうにいいほてり出す。

「あッ、もう溜らん。死ぬ、死ぬ。」

かう叫びながら、野を越え山を越えて走つて行く車室の窓枠にしがみ着くこともあつた。いくら心を落ち着かせようと焦つて見ても、强迫觀念が海嘯のやうに頭の中を暴れ廻り、唯わけもなく五體が戰慄し、動悸が高まつて、今にも悶絶するかと危ぶまれた。さうして次の下車驛へ來れば、眞青な顏をして、命から〳〵汽車を飛び下り、プラットホームから一目散に戸外へ駈け出して、始めてはつと我に復つた。

「ほんとうに命拾ひをした。もう五分も乘つて居れば、屹度己は死んだに違ひない。」などゝ腹の中で考へては、停車場附近の旅館で、一時間も二時間も、時としては一晩も休養した後、充分神經の靜まるのを待つて、扨て再びこは〳〵汽車に乘つた。豐橋で泊り、濱松で泊り、昨日の夕方は一旦靜岡へ下車したものゝ、だんだん夜になると、不安と恐怖が宿屋の二階に迄もひたひたと押し寄せて來るので又候其處に居たたまれず、今度はあべこべに夜汽車の中へ逃げ込むや否や、一生懸命酒を呷つて寢てしまつた

のである。

「それてもまあ、よく無事に來られたものだ。」と思つて、彼は新橋驛の構内を歩みながら、今しも自分を放免してくれた列車の姿を、いまいましさうに振り顧つた。靜岡から何十里の山河を、馬鹿氣た速力で闇雲に駈け出して、散々原人を嚇かし、勝手放題に唸り續けて來た怪物が、くたびれて、だらけて、始末の惡い長いからだを横へながら、「水が一杯欲しい。」とでも云ひさうに、鼻の孔からふッふッと地響きのする程ため息をついて居る。何だかパックの繪にあるやうに、機關車が欠伸をしながら大きな意地の惡い眼をむき出して、コソコソ逃げて行く自分の後姿を嘲笑して居るかと思はれた。

人々の右往左往するうす暗い石疊の構内を出て、正面の玄關から俥に乘る時、彼は旅行鞄を兩股の間へ挿みながら、

「おい、幌をかけてくれ。」

かう云つて、停車場前の熱した廣い地面からまともにきらきらと反射する光線の刺戟に堪へかね、まぶしさうに兩眼をおさへた。

漸く九月に入つたばかりの東京は、まだ殘暑が酷しいらしかつた。夏の大都會に溢れて見える自然と人間の旺盛な活力――急行列車の其れよりも更に凄じく、逞しい勢の前に、佐伯はまざまざと面を向けることが出來なかつた。劍のやうな鐵路を走る電車の響、見渡す限り熱氣の充滿した空の輝き、銀色に燃えてもくもくと家並の後ろからせり上る雲の塊、熱く乾いた地面の上を、强烈な日を浴びて火の子の

散るやうに歩いて行く町の群衆、――上を向いても、下を向いても、激しい色と光とが弱い心を壓迫して俥の上の彼は一刻も兩手を眼から放せなかつた。

今迄ひたすら暗黒な夜の魔の手に惱まされて居た自分の神經が、もう白日の威力にさへも堪え難くなつて來たかと思ふと、彼は生きがひのない心地がした。これから大學を卒業する迄四年の間、晝も夜も喧囂の騷ぎの絶えぬ烈しい巷に起き臥しして、小面倒な法律の書物や講義にいらいらした頭を泥ませる事が出來るであらうか。岡山の七高に居た時分と違ひ、本郷の叔母の家へ預けられれば、再び以前のやうな自堕落な生活は送れまい、永らくの放蕩で、腦や體に滲み込んでゐるいろ／＼の惡い病氣を直すにも、人知れず醫者の許に通つて、こつそりと服藥しなければなるまい。事によると、自分は此のまゝ段々頭が腐つて行つて、廢人になるか、死んでしまふか、いづれ近いうちにきまりが着くのだらう。

「ねえあなた、どうせ長生きが出來ない位なら、わたしがうんと可愛がつて上げるから、いつそ二三年も落第して此處に居らつしやいよ。わざ／＼東京へ野たれ死にをしに行かなくてもいゝぢやありませんか。」

岡山で馴染になつた藝者の蔦子が、眞顏で別れ際に説きすゝめた言葉を想ひ出すと、潤ひのない、乾涸らびた悲しみが、胸に充ち充ちて、やる瀨ない惱ましさを覺える。あの色の青褪めた、感じの鋭い、妖婦じみた蔦子が、時々狂人のやうに昂奮する佐伯の顏をまぢまぢと眺めながら、よく將來を見透すやうな事を云つたが、殘酷な都會の刺戟に、肉を啄かれ、骨をさいなまれ、いたいたしく傷けられて斃れ

て居る自分の屍骸を、彼は實際見るやうな氣がした。さうして十本の指の間から、憶病らしい眼つきをして、市街の樣子を垣間見た。

俥はいつか本郷の赤門前を走つて居る。二三年前に來た時とは大分變つて、新しく取り擴げた左側の人道へ、五六人の工夫が、どろ〳〵に煮えた黑い漆のやうなものを流しながら、コンクリートの路普請をして居る。大道に据えてある大きな鐵の桶の中から、赤熱されたコークスが炎天にいきりを上げて、陽炎のやうに燃えて居る。新調の角帽を冠つて、意氣揚々と通つて行く若い學生達の風采には、佐伯のやうな悲慘な影は少しも見えない。

「彼奴等は皆己の競爭者だ。見ろ、色つやのいゝ頰ぺたをして如何にも希望に充ちたやうに往來を濶歩して行くぢやないか。彼奴等は馬鹿だけれども、獸のやうな丈夫さうな骨格を持つて居やがる。己はとても彼奴等に敵ひさうもない。」

そんな事を考へて居るうちに、やがて「林」と肉太に記した、叔母の家の電燈の見える臺町の通りへ出た。門内に敷き詰めた砂礫の上を軋めきながら、俥が玄關の格子先に停ると、彼は漸く兩手を放して、駈け込むやうに土間へ入つた。

「二三日前に立つたと云ふのに、今迄何をして居たのだい。」

元氣の好い聲でから云ひながら、伯母は佐伯を廊下傳ひに、一と先づ八疊ばかりの客間へ案內して、いろ〳〵と故國の樣子を聞いた。五十近い、小太りに太つた、いつ見ても氣の若い女である。

「ふむ、さうかい。……お父さんも今年は大分儲けたつて話ぢやないか。お金が儲かつたら、家の普請でもするがいゝつて、お前様から少つとさう云つておやり。ほんとにお前さん所ぐらゐがらんとして、古ぼけた穢い家はありやしないよ。わたしや名古屋へ行く度毎にさう云つてやるんだけれど、いづれ其のうちにとか何とか、長いことばかり云つて居るんだもの。此の間も博覽會の時に、二三日泊りに來いつて云つて寄越したから、わたしやさう云つてやつたのさ。えゝと、遊びに參り度きは山々に候へども、……兼ねがね御勸め申置き候御普請の儀、いまだ出來かね候うちは、地震が恐ろしくてとても御宅に逗留致し難く候つてね。ほんとうにお前さん冗談ぢやない。少し強い地震が搖つて御覽、あんな家は忽ちぴしやんこになつちまふから。お父さんは頭が禿げて、耄碌爺さんになつて居るから好いが、叔母さんは色氣こそなくなつたものゝ、まだ命は中々惜しいからね。」

佐伯は頓興な話を聞きながら、にや〳〵と優柔不斷の笑ひ顔をして、頻に團扇を動かして居る叔母の、嬰兒のやうにむくんだ手頸を見詰めて居たが、やがて自分も出された團扇を取つて扇ぎ始めた。

家の中へ落ち着いて見ると、暑さは一と入であつた。風通しの好いやうにと、殘らず開け廣げた椽外の庭に、こんもりした、二三本の背の高い楓と青桐が、日を遮つて、其の蔭に南天や躑躅が生ひ茂り、大きな八つ手の葉がそよ〳〵と動いて居る。濃い綠色の反射の爲めに、室内は薄暗くなつて、叔母の圓々した赭ら顔の頬の半面ばかりが、青く光つて居る。戸外の明る味から、急に穴倉のやうな處へ引き擦り込まれた佐伯は、俯向き加減に眼瞼をぱちぱちさせながら、久留米絣の紺が汗に交つて、瘦せた二の

腕を病人のやうに染めて居るのを、いやな氣持て眺めて居た。多少神經が沈まると、俥の上で背負つて來た炎熱が、今一時に發散するかとばかり滿身の皮膚を燃やして、上氣した顏が、眼の昏む程かッと火照り始め、もの靜かな脂汗が頸のまはりにぬるぬると滲み出た。

のべつに獨て喋舌り立てゝ居た叔母は、ふと、誰か唐紙の向うを通る足音を聞き付けて、小首をかしげながら、

「照ちやんかい。」

と呼びかけたが、返事のないのに暫く考へた後、

「照ちやんなら、ちよいと此處へお出てゞないか。謙さんがお前、漸く今頃名古屋からやつて來たんだよ。」

から云つて居るうちに、襖が開いて從妹の照子が入つて來た。

佐伯は重苦しい頭を上げて、さやさやと衣擦れの音のする暗い奥の方を見た。今しがた出先から歸つて來た儘の姿であらう。東京風な粋の庇髪に、茶格子の浴衣の上へ派手な縮緬の夏羽織を着て、半敷の中が狹くなりさうな大柄な、すらりとした體を、窮屈らしくしなやかにかゞめながら、よく都會の處女が田舍出の男に挨拶する時のやうに、安心と誇のほの見える態度で照子　佐伯に會釋をした。

「どうしたい、赤坂の方は。お前で用が足りたのかい。」

「えゝ、彼方樣でさう仰つて下さいますなら、其處はもう　何てございます、ようく解つて居りますか

ら、決して御心配下さいませんやうにッてね。……」

「さうだらう。其の筈なんだもの。一體鈴木があんなへまをやらなければ、元々かうはならなかったんだからね。」

「其れも左様ですけれど、先方（さき）の人も随分だわ。」

「さうだともサ、……孰方（どちら）も孰方だあね。」

親子は暫くこんな問答をした。薄馬鹿と云ふ噂のある、此の家の書生の鈴木が、何か又失策を演じたものらしい。別段今此の場で相談せずともの事だが、叔母は甥の前で、自分の娘の利巧らしい態度や話振を、一應見せて置きたいのであらう。

「お母さんも亦、鈴木なんぞをお頼みなさらなければ好いのに。後で腹を立てたって、仕様がありませんよ。」

照子はませた調子で、年增のやうな口を利いた。少し擦れ枯らしと云ふ所が見える。正面から庭のあかりを受けて、光澤（つや）のない、面長の顔が、ほんのり匂って居る。此の前逢った時には、あどけない乙女の心持と、大きな骨格と、シックリそぐはぬやうであったが、今では其んな所はない。大きいなりに豊艶な肉附きへなよ〳〵と餘裕が付いて、長い長い腕や頂や脚のあたりは柔い曲線を作り、たっぷりした着物迄が、美にして大なる女の四肢を喜ぶやうに、素直に肌へ纏はって居る。重々しい眼瞼の裏に、冴えた大きい眼球のくるくると廻轉するのが見えて、生え揃った睫毛の蔭から、男好きのする瞳が、細く陰

險に光つて居る。蒸し暑い部室の暗がりに、厚味のある高い鼻や、蚯蚓のやうに潤んだ唇や、ゆたかな輪廓の顔と髮とが、まざまざと漂つて、病的な佐伯の官能を昂奮させた。

二三十分立つてから、彼は自分の居間と定められた二階の六疊へ上つて行つた。さうして、行李や鞄を運んでくれた書生の鈴木が下りてしまふと、大の字になつて、眉を顰めながら、庇の外の炎天をぼんやりと視詰めて居た。

正午近い日光は青空に漲つて、欄杆の外に見晴らされる本郷小石川の高臺の、家も森も大地から蒸發する熱氣の中に朦々と打ち煙り、電車や人聲やいろ〳〵の燥音が一つになつて、遠い下の方からガヤガヤと響いて來る。何處へ逃げても、醜婦の如く附き纏ふ夏の恐れと苦しみを、まだ半月も堪へねばならないのかと思ひながら、彼ははんぺんのやうな照子の足の恰好を胸に描いた。何だか自分の居る所が十二階のやうな、高い塔の頂邊にある部室かとも想像された。

東京へは二三度來たこともあるし、學校も未だ始まらないし、何を見に行く氣も起らずに、毎日々々彼は二階でごろ寝をしながら、まづい煙草を吹かして居た。敷島を一本吸ふと、口中が不愉快に乾燥して、直ぐゲロゲロと物を嘔きたくなる。それでも關はず、唇を歪めて、涙をぼろ〳〵とこぼして、剛情に煙を吸ひ込む。

「まあ、えらい吸殻だこと、のべつに兄さんは召し上るのね。」

こんな事を云ひながら、照子は時々上つて來て、煙草盆を眺めて居る。夕方、湯上りなどには、藍の雫のしたゝるやうな生々しい浴衣を着て來る。

「頭が散歩をして居る時には、煙草のステッキが入用ですからね。」

と、佐伯はむづかしい顔をして、何やら解らない文句を並べる。

「だつてお母さんが心配して居ましたよ。謙さんはあんなに煙草を吸つて、頭が惡くならなければ好いがつて。」

「どうせ頭は惡くなつて居るんです。」

「それでも御酒は上らないやうですね。」

「ふむ、……どうですか知らん。……叔母樣には內證だが、まあ此れを御覧なさい。」

かう云つて、錠の下りて居る本箱の抽出しから、彼はヰスキーの罎を取り出して見せる。

「此れが僕の痲睡劑なんです。」

「不眠症なら、お酒よりか睡り藥の方が利きますよ。妾も隨分內證で飲みましたつけ。」

照子はこんな鹽梅に、どうかすると、一二時間も話し込んで下りて行く。

暑さは日增しに薄らいだが、彼の頭は一向爽やかにならなかつた。後腦ががん〳〵痛んで、首から上が一塊の燒石のやうに上氣せ、毎朝顔を洗ふ時には、頭の毛が拔けて、べつとりと濡れた頰へ着く。やけ

になつて、髮を苅ると、いくらてもバラバラ脱落する。腦溢血、心臟麻痺、發狂、……いろ〳〵の恐怖が鳩尾の邊に落ち合つて、激しい動悸が全身に響き渡り、兩手の指先を始終わなわな顫はせて居た。

それても一週間目の朝からは、新調の制服制帽を着けて、彈力のない心を引き立たせ、不承無承に學校へ出掛けたが、三日も續けると、直ぐに飽き飽きしてしまひ、何の興味も起らなかつた。

よく世間の學生達は、あんなに席を爭つて教室へ詰めかけ、無意義な講義を一生懸命筆記して居られたものだ。教師の云ふ事を一言半句も逃すまいと筆を走らせ、默々として機械のやうに働いて居る奴等の顏は、朝から晩迄悲しげに萎縮めて、二た眼と見られたもんぢやない。其れでも彼奴等は、結構得々として、自分達が如何に見すぼらしく、如何にみじめて、如何に不仕合せてあるかと云ふ事を知らないのだらう。講師が講壇に立つて咳一咳、

「……エヽ前回に引き續きまして、……」

とやり出すと、場内に充ち充ちた頭腦が、ハツと机にうつむいて、ペンを持つた數百本の手が、一齊にノートの上を走り出す。講義は人々の心を跳び越して、直ちに手から紙へ傳はる。行儀の惡い、不思議に粗末な、奇怪なのらくらした符號のやうな文字となつて、紙へ傳はる。唯手ばかりが生きて働いて居る。あの廣い教場の中が、水を打つたやうにシンとして、凡べての腦髓が悉く死んて了つて、唯手ばかりが生きて居るのだ。手が恐ろしく馬鹿氣た勢て、盲目的にスタコラと字を書き續けたり、ガチガチ

とインキ壺へペンを衝込んだり、ぴらりと洋紙の頁を捲くつたりする音が聞える。
「さあさあ早く氣狂ひにおなんなさい。誰でも早く氣狂ひになつた者が勝ちだ。可哀さうに皆さん、氣狂ひにさへなつて了へば、其んな苦勞はしないでも濟みます。」
何處かで、こんな蔭口を利いて居る奴の聲も聞える。他人は知らないが、佐伯の耳には、屹度此の蔭口を囁く奴が居るので、憶病な彼はとても怯えて居たゝまれなくなる。
流石に叔母の手前があるから、半日位は已むを得ず圖書館へ入つたり、池の周圍をぶら附いたりした。家へ歸れば、相變らず二階で大の字になつて、岡山の藝者の事や、照子の事や、死の事や、性慾の事や、恐にも附かない種々雜多な問題を、一考へるともなく胸に浮べた。どうかすると、寢ころんだ儘枕元へ鏡を立てゝ、肌理(きめ)の粗い、骨ばつた目鼻立ちをしげしげと眺めながら、自分の運命を判ずるやうな眞似をした。さうして、恐ろしくなると急いで抽出しのヰスキーを飲んだ。
アルコールと一緒に、だんだん惡性の病毒が、腦や體を侵して來るやうであつた。東京へ出たらば、上手な醫者に一度診察して貰ひませうと思つて居たのだが、今更注射をする氣にも、賣藥を飲む氣にもなれなかつた。彼はもう骨を折つて健康を回復する精力さへなくなつて居た。
「譲さん、一緒に歌舞伎へ行かないかね。」
などゝ、叔母はよく日曜に佐伯を誘つた。
「折角ですが、僕は人の出さかる所へ行くと、何だか恐(こは)くなつていけませんから……實は少し頭が惡

いんです。」

から云つて、彼は悩ましさうに頭を抱へて見せる。

「何だね、意久地のない。お前さんも行くだらうと思つて、態々日曜迄待つて居たんだのに、まあ好いから行つて御覧。まあさ、行つて御覧よ。」

「いやだつて云ふのに、無理にお勧めしたつて駄目だわ。お母様は自分ばかり呑氣で、ちつとも人の氣持が解らないんだもの。」

と、傍から照子がたしなめるやうなことを云ふ。

「だけど、彼の人も少し變だね。」

と、叔母は二階へ逃げて行く佐伯の後ろ影を見送りながら、

「猫や鼠ぢやあるまいし、人間が恐いなんて可笑しいぢやないか。」

と、今度は照子に訴へる。

「人の氣持だから、さう理責めには行かないわ。」

「あれて岡山ては大分放蕩をしたんださうだが、もう少し人間が砕けさうなものだね。尤も書生さんの道樂だから、知れて居るけれど、未だからつきし世馴れないぢやないか。」

「謙さんだつて、妾だつて、學生のうちは皆(みんな)子供だわ。」

照子は斯う云つて、皮肉な、人の惡い眼つきをする。結局、親子は女中のお雪を伴れて、書生の鈴木

に留守を頼んで出かけて行く。

鈴木は毎朝佐伯と同じ時刻に、辨當を下げて神田邊の私立大學へ通つて居た。家に居ると玄關脇の四疊半に籠つて、何を讀むのか頻にコツコツ勉強するらしい。眉の迫つた、暗い顔をいつもむつつりさせて、朝晩には風呂を沸かしたり、庭を掃いたり、大儀さうにのそのそ仕事をして居る。少し頭が低能で、不斷何を考へて居るのか要領を得ないが、叔母やお雪に一言叱言を云はれゝば、表情の鈍い面を脹らせ、疑深い、白い眼をぎよろりとさせて怒る事だけは必ず確かである。始終ぶつぶつと不平らしく獨語を云つて居る。

「鈴木を見ると、家の中に魔者が居るやうな氣がしますよ。」

と、叔母の云つたのも無理はない。馬鹿ではあるが、いやに陰險で煮え切らない所がある。あれでも幼い頃には一と角の秀才で、叔父が生前に見込みを付けて家へ置いたのだが、將來立派な者にさへなれば、隨分照子の婿にもしてやると、ウツカリほのめかしたのを執念深く根に持つて、一生懸命勉強して居る間に馬鹿になつて了つたのださうだ。いまだに照子の云ふ事なら、腹を立てずに何でも聽く。乾度彼奴は照子に惚れて、Onanismに沒頭した結果馬鹿になつたのに違ひない、と佐伯は思つた。鈴木ばかりか、自分も照子に接近してから、餘計神經が惱んで、馬鹿になつたやうに思はれる。實際彼の女と對談した後では五體が疲れる。彼の女は男の頭を掻き亂るやうな所があるらしい。……佐伯はそんな事を考へた。

みしり、みしり、と梯子段に重い足音をさせて、ある晩鈴木が二階へ上つて來た。もう九月の末の秋らしい夜で、何處かに蟋蟀がじいじい啼いて居る。叔母を始め、女連は皆出かけて、ひつそりとした階下の柱時計のセコンドが、靜かにコチコチと聞えて居る。

「何か御勉強中ですか。」

と云ひながら、鈴木は其處へ坐つて、部屋の中をじろじろ見廻した。

「いや、」

と云つて、佐伯は居ずまひを直して、けげんさうに鈴木の顏色を窺つた。めつたに自分に挨拶をした事もない、無口な男が、何用あつて、珍しくも二階へ上つて來たのだらう。……

「大分夜が長くなりましたな。」

瞬昧な聞き取りにくい聲で、もぐもぐと物を云つたが、やがて鈴木はうつ向いてしまつた。毒々しく油を塗つた髮の毛が、電燈の下でてかてかして居る。頑丈な、眞黒な、莖我の根のやうな指先を、ピクリピクリ動かしつゝ、默つて膝頭で拍子を取つて居る。何か相談があつて、家族の留守を幸に、やつて來たのだらうが、容易に切り出しさうもない。妙に重々しく壓さへ付けられるやうで、佐伯は氣がいらいらして來た。全體何を云ふ積りで、もぢもぢといつ迄も考へて居るのだらう。話があるならさッさと喋舌るがいゝぢやないか。………と、腹の中で呟きたくなる。

が、鈴木はなか／＼喋舌り出さない。「あなたは其處で勉強して居るがいゝ。私は自分の勝手で此處に

坐つて居るのだ。」と云はんばかりに、疊の目を睨みつゝ、上半身で貧乏搖すりをして居る。……夜は非常に靜かである。からりころりと冴えた下駄の音が聞えて、遙かに本郷通りの電車の軌めきが、鐘の餘韻のやうに殷々と響く。

「甚だ突然ですが、少し其の、あなたに伺ひたい事があつて……」

いよ〳〵何か云ひ始めた。相變らず疊を睨詰めて、貧乏搖すりをして、――

「……他の事でもありませんが、實は照子さんの事に就いてなんです。」

「はあどんな事だか、まあ云つて見給へ。」

佐伯は出來るだけ輕快を裝つて、少し甲高い調子で云つたが、咽喉へ唾吐が溜つて居たものと見えて、ひしやげたやうな聲が出た。

「それからもう一つ伺ひたいんですが、一體あなたが此の家へ入らしつたのは、どう云ふ關係でございませう。」

「どう云ふ關係と云つて、僕と此處とは親類同志だし、學校も近いから、都合が好いと思つたんです。」

「唯其れだけですかなあ。あなたと照子さんとの間に、何か關係でもありはしませんか。親と親とが、結婚の約束を取り極めたとでも云ふやうな。」

「別にそんな約束はありませんがね。」

「さうですかなあ。何卒本當の事を仰しやつて下さい。」

鈴木は胡散臭い眼つきをしながら、歯列びの惡い口元て、にたくと無氣味に笑つて居る。
「いゝや、全くですよ。」
「まあ其れにしても、此れから先になつて、あなたが欲しいと仰しやれば、結婚なさる事も出來さうだと思ひますが、……」
「欲しいと云つたら、叔母は呉れるかも知れないけれど、當人が判りますまい。其れに僕は當分結婚なんかしませんよ。」
佐伯は話をして居るうちに、だんだん癪に觸つて來て、何だか馬鹿が此方へも乘り移りさうな氣分になつた。大聲て怒鳴りつけてくれようかと思ふ程、胸先がムカムカしたが、ぢつと堪へて居る。其れに相手が愚鈍な腦髓を遺憾なく發揮するのを、多少痛快にも感じて居る。
「しかし結婚はどうでも、兎に角あなたは照子さんが御好きでせう。嫌ひと云ふ筈はありませんよ。どうも僕にはさう見えます。」
「別段嫌ひぢやありません。」
「いや好きでせう。或は戀ひして居らつしやりはしませんか。其れが僕は伺ひたいのです。」
かう云つて、鈴木は如何にも根性の惡さうな、佛頂面をして、ばちくりと眼瞬きをしながら、思つて居る事を皆云はせなければ承知しないと云ふやうに、佐伯の一擧手一投足を監視して睨め付けて居る。
「戀ひをしてゐるなんて、そんな事は決して……」

と、佐伯はおづおづ辨解しかけたが、どうした加減か、中途で急に腹が立つて來た。
「一體君は、そんな事をしつくどく根堀り葉堀りしてどうするんだい。戀ひしようと戀ひしまいと僕の勝手ぢやないか。好い加減にし給へ、好い加減に。」
喋舌つて居る間に、心臟がドキドキ鳴つて、かつと一時に血が頭へ上つて行くのが、自分にも判る。嚙み付くやうな怒罵を、不意に眞甲から叩きつけられて、鈴木の脹れッ面はだんだん險惡な相を崩し始め、遂には重苦しい、薄氣味のわるい笑顔になつて行く。
「さうお怒りになつちや困りますなあ。僕は唯あなたに忠告したいと思つたんです。照子さんは中々一と通りの女ぢやありませんよ。不斷は猫を被つて居ますが、腹の中ではまるで男を馬鹿にし切つて居るんです。實は極く秘密の話なんですが、……」
と、鈴木は一段聲をひそめ、膝を乘り出して、さも同感を求めるやうな句調で、
「大概お解りでせうが、彼の女はもう處女ぢやありませんよ。隨分いろいろな男の學生と關係したらしいんです。第一、僕とも以前に關係があつたんですから。……」
さう云つて、暫く相手の返事を待つて居たが、佐伯が何とも云はないので、又話を續ける。
「けれども全く美人には違ひありませんね。僕は彼の女の爲めなら、命を捨てゝもいゝ積りなんです。照子のお父樣が生きて居る時分に、確かに僕に呉れると云つたんです。實は話がさうなつて居たんですが、此の頃になつて、どうも母親の考が變つたらしく思はれるものですから、其れて先刻あんな事をあ

なたに伺つて見ました。——全體母親も良くはありません。男親の極めて置いた約束を、今更反古にするなんて、少し無法ぢやありませんか。先がさう云ふ了見なら、僕の方にも覺悟があります。なあに、照子の氣持は、母親よりも僕の方が能く解つて居る。彼の女は非常に冷酷で、男を弄ぶ氣にはなつても、惚れるなんて事はないのです。だから、うるさく附け廻してやれば、根負けがして、誰とでも結婚するに極まつて居ますよ。」

こんな事を、とぎれ〳〵に、ぶつぶつと繰り返して、いつ迄立つても止みさうもなかつたが、突然戸外の格子がガラガラと開いて、三人の足音がすると、

「何卒今日の話は内分に願ひます。」

から云ひ捨てゝ、鈴木は大急ぎで下へ行つた。

何でも十一時近くてあらう、其れから一時間ばかり立つて、皆寢靜まつた頃に、

「誰さん、まだお休みてないか。」

と云ひながら、叔母がフランネルの寢間着の上へ羽織を引懸けて、上つて來た。

「先刻鈴木が二階へ來やしないかい。」

から云つて、佐伯の凭れて居る机の角へ頬杖を衝いて、片手で懐から煙草入を出した。多少氣がゝりのやうな顏をして居る。

「えゝ來ましたよ。」

「さうだらう。何ても歸つて來た時に、ドヤドヤと二階から下りて來た樣子が變だつたから、行つて聞いて見ろッて、照子が云ふんだよ。めつたにお前さんなんぞには、ろくすつぽう口も利かないのに、可笑しいぢやないか。全體何だつて云ふの。」

「愚にも附かない事ばかり、獨て喋舌つてゐるんですよ。ほんとに彼は大馬鹿だ。」

珍しく佐伯は、機嫌の好い聲て、すら〳〵と物を云つた。

「又私の惡口ぢやないのかい。方々へ行つて、好い加減な事を觸れて歩くんだから、因つちまふよ。あれて、彼の男は馬鹿の癖になかなか小刀細工をするんだからね。――いづれお前さんと照子と、どうだとか云ふんだらう。」

「さうなんてす。」

「そんなら、もう聞かないても、大概わかつて居らあね。若い男がちよいとても照子と知り合ひになると、直ぐに彼奴は聞きに出かけるんだよ。彼奴の癖なんだから、お前さん惡く思はないやうにね。」

「別に何とも思つちや居ません。しかし彼れぢや叔母さんもお困りてせう。」

「お困りにも、何にも……」

と、眉を顰める拍子に、ぽんと灰吹へ煙管を叩いて、叔母は又語り續ける。

「彼奴の爲めには、私は時々魘されますよ。叔父樣が亡つてから、一度暇を出したんだけれど、其の時なんざ、私達親子を恨んて、毎日々々刄物を懷にして、家の周圍をうろついてるッて騷ぎなんだらう。

まあ私達がどんなに酷い事てもしたやうて、世間體が惡いぢやないか。家へ入れてやらなければ、火附け位はしかねないし、仕方がないから、又引き取つてやつたあね。照子はなに鈴木は憶病だから、いつもの小刀細工て人を嚇かしてるんだッて、云ふけれど、私は、滿更さうてもあるまいと思ふ。なあに、あゝ云ふ奴が、今に屹度人殺しなんぞするんてす。……」

ふと、佐伯は、フランネルに包まれた、むくむくした叔母の體が、襟髮か何かをムヅと掴まれて、殘酷にづてんどうと引き擦り倒され、血だらけになつて、キャッと悲鳴を揚げて居る所を想像した。あの懐に見えて居る、象の耳のやうにだらりと垂れた乳房の邊へ、グサッと刄物を突き立てたら、どんなだらう。不恰好に太つた股の肉をヒクヒクさせ、大根のやうな手足を踏ん張つて、ひいひいばたばたと大地を這ひ廻つた揚句、あの仔細らしい表情の中央にある眉間を割られて、キユッと牛鍋の煮詰まつたやうに、息の根の止る所はどんなだらう。……

ぽんと階下て時計が半を打つた。あたりがしんしんと更けて、大分寒さが泌み渡る。叔母は話に夢中になつて、頻に煙草盆の灰の中を、雁首て掻き廻して居る。灰の山がいろいろの形に崩れて、時々螢ほどの炭火がちらちら見えるが、容易に煙草へ燃え移らない。

「……だから私も心配てならない。照子だつて、いづれ其のうち婿を貰はなけりやならないけれど、又あの馬鹿が、何をするかも知れないと思ふと……」

いつの間にか火を付けたと見えて、叔母の鼻の孔から、話と一緒に白い煙の塊がもくもく吐き出され、

二人の間に漂ひながら、はびこつて行く。

「それに照子が、縁談となると嫌な顏をするので、私も弱り切るのさ。謙さんからもちつとさう云つて見ておくれな。そりや私も隨分呑氣だけれど、彼の娘と來たら、又一倍だからね。二十四にもなつて、一體まあどうする氣なんだらう。」

叔氣はいつもの元氣に似合はず、萎れ返つて、散々愚痴をこぼしたが、十二時が鳴ると話を切り上げ、

「さう云ふ譯だから、鈴木が何と云つたつて、取り上げないておくんなさい。あんな奴に掛り合ふと、しまひにはお前さん迄恨まれるからね。——さあ〱遲くなつちまつた。謙さんもモウお休み。」

から云つて、下りて行つた。

明くる日の朝、佐伯は風呂場で顏を洗つて居ると、跣足になつて庭を掃いて居た鈴木が、湯船の脇の木戸口から、のつそり這入つて來た。

「お早う。」

と、佐伯は少しギヨツとして、殊更機嫌を取るやうに聲をかけたが、何か非常に腹を立てゝ居るらしく、暫くは返事もせずに、面を膨らして居る。

「あなたは、昨夜の事をすつかり云附けましたね。——お恍けになつたつていけません。僕はあれから、まんぢりともしないで、樣子を聞いて居たんです。たしかに奥樣が二階へ上つて行つて、十二時過ぎまで話をして居ましたo 僕はもうあなたとも仇同士だから、此れからは決して口を利きませんよ。僕に何

を云ひかけたつて無駄だから、何卒其の積りて居て下さい。」

から云つて、ぷいと風呂場を出て行つたかと思ふと、何喰はぬ顔をして庭を掃いて居る。

「とうたう己にも、魔者が取り付いた。」

佐伯は腹の中で斯う呟いた。彼奴は人が親切にしてやればやる程、仇だと思つて付け狙ふんだ。事に依ると、已が彼奴に殺されるのかも知れない。如何に彼奴の爲めに利益を圖つて、成る可く照子にも近附かないやうにして、眞實を盡せば盡すほど、いよ／＼彼奴は己を恨んで、揚句の果てに殺すのかも知れない。始終殺されまい、殺されまいと氣を配りつゝ、逃げて廻つて居るうちに、だんだん自分が照子と戀に落ちて、矢張殺されなければならないやうな運命に、陥り込みはしないだらうか。……

鈴木はまだ庭を掃いて居る。頑丈な、膂力のありさうな手に箒を握つて、臀端折て庭を掃いて居る。あの體で押さへ付けられたら、己はとても身動きが出來まい。――種々雑多な、取り止めのないもや／＼とした恐怖が、佐伯の頭の中に立ち騒いで居る。

十月も半ばになつて、學校の講義は大分進んだが、彼のノートは一向厚くならなかつた。

「なに毎日出席しなくつてもいゝんです。」

とか、

「今日は少し氣分が勝れない。」

とか、だんだん圖々しい事を云つて、三日に上げず缺席するやうになつた。朝も非常に寢坊をした。

暇さへあれば、蒲團にもぐり込んで、獸のやうな、何かに渇えたやうな眼をぱつちりと開いて、天井を視詰めながら、うとうとと物を考へる。腦を循る血が、ヅャンヅキンと枕へ響き、眼の前に無數の泡粒がちらちらしたり、耳鳴りがしたりして、體の節々のほごれるやうな、慵い、だるい日が續く。ちよいとごろ寢をした間にも、恐ろしく官能的な、奇怪な、荒唐な夢を無數に見る。さうして其れが眼を覺ました後迄も、感覺に殘つて居る。天氣の好い日は、南の窓から癪に觸る程冴え返つた靑空が、濁つた頭を覗き込んで居る。もう再び放蕩をしようと云ふ氣も起らない。こんな衰弱した體で、刺戟の強い、糜爛した歡樂を二日も試みたら、乾度死んでしまふだらうと思はれる。

照子は日に何度となく二階へ上つて來る。あの大柄な女の平(ひら)べつたい足で、寢て居る枕元をみしみし歩かれると、佐伯は自分の體が蹈み付けれるやうに感じた。

「私が梯子段を上る度每に、鈴木が可笑しな眼つきをするから、猶更意地になつてからかつてやるのよ。」

かう云つて、照子は佐伯の眼の前へ坐りながら、

「此の二三日感冒(かぜ)を引いちやつて。」

と、袂から手巾を出して、ちいちいと洟を擤(か)んだ。

「こんな女は、感冒を引くと、餘計 attractive になるものだ。」

と思つて、佐伯は額越しに、照子の目鼻立ちを見上げた。寸の長い、たつぷりした顔が、喰ひ荒らし

た喰べ物のやうに汚れて、唇の上がじめじめと赤く爛れて居る。生暖い活氣と、強い底力のある息が、頭の上へ降つて來るのを、佐伯は惱ましく感じながら、

「ふむ、ふむ」

と、好い加減な返事をして、胸高に締めた鹽瀨の丸帶の、一呼吸毎に顫へるのを、どんよりと眺めて居る。

「兄さん――あなたは鈴木に捕まつてから、私が來るといやに氣色を惡くなさるのね。」

から云つて、照子は腰を下ろして、ぴしやんこに坐り直した。湯へ入らないせゐであらう、膝の上へ投げ出した兩手の指が、稍黑ずんで居る。あの面積の廣い掌が、今にも自分の顏の上を撫で廻しに來やしないかと、佐伯は思つた。

「何だか僕は、彼奴に殺されるやうな氣がする。」

「どうしてなの。何か殺されるやうな覺えがあつて? あなた迄恨まれる因緣はありやしないわ。」

「そりや、何も因緣はないさ。」

佐伯は慌てゝ取り消すやうに云つたが、何だか氣不味い所があるので、照子の顏を見ないやうに話をつゞける。

「けれども彼奴は、因緣なんぞなくつたつて、恨む時には恨むんだから抗はない。――唯譯もなく殺されるやうな氣がするんだ。」

「大丈夫よ、そんな事が出來る位な、ハキハキした人間ぢやないんですもの。――けれども殺すとしたら、先づお母樣だわ。私を殺す氣にはとてもなれないらしい。」

「そいつは判らないな。可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふぢやないか。」

「いゝえ、たしかに殺す筈はないの。いつか家を追ひ出された時だつて、お母樣ばかり嚇かして居るんですよ。私は夜晝平氣で戸外へ出てやつたけれど、てんで傍へも寄り付いて來なかつたわ。……」

照子はこつそりと前の方へ、蓋さるやうに乘り出して來る。

「其れだのに兄さんが殺されるなんて、其んな事がありつこないわ。よしんば、二人の間にどんな事があつたつて……」

佐伯は急に、何か物に怖れるやうな眼つきをして、

「照ちやん僕は頭が痛いんだから、又話しに來てくれないか。」

と、いらいらした調子て、慳貪に云ひ放つた。

間もなく照子と入れ代りに、女中のお雪が上つて來て、何か部屋の中を、こそこそと捜して居る。

「お孃さんが手巾をお忘れになつたさうですが、御存じございませんか知ら。何でも洟を擤んだ穢い物だから、持つて來てくれと仰つしやいますが。……」

「忘れたのなら、其處いらにあるだらう。僕は氣がつかなかつたがね。」

佐伯は無愛想な返事をすると、背中を向けて寢て了つた。それから、お雪が稍暫く捜ねあぐんで下りて行つた頃、又むくむくと起き返つた。さうして梯子段の方へ氣を配りながら、憶病らしく肩をすぼめて、布團の下から其の手巾を引き擦り出し、拇指と人差指て眼の前へ摘み上げた。

四つに疊まれた手巾は、どすどす黑く板のやうに濡れて癒着いて、中を開けると、鼻感冒に特有な臭氣が發散した。水洟が滲み透して、くちやくちやになつた冷めたい布を、彼は兩手の間に挿んでぬるぬると擦つて見たり、ぴしやりと頰ぺたへ叩き付けたり、して居たが、しまひに顰めッ面をして、犬のやうにぺろぺろと舐め始めた。

……此れが洟の味なんだ。何だかむつとした生臭い匂を舐めるやうて、淡い、鹽辛い味が、舌の先に殘るばかりだ。しかし、不思議に辛辣な、怪しからぬ程面白い事を、己は見付け出したものだ。人間の歡樂世界の裏面に、こんな秘密な、奇妙な樂園が潛んて居るんだ。……彼は口中に溜る唾吐を、思ひ切つて滾々と飲み下した。一種搔き毮られるやうな快感が、煙草の醉の如く腦味噌に浸潤して、ハッ卜氣狂ひの谷底へ、突き落されるやうな恐怖に追ひ立てられつゝ、夢中になつて、唯一生懸命ぺろぺろと舐める。

やがて二三分立つと、彼は手巾を再びそつと布團の下へ押し込み、眼が眩くやうに惑亂された頭を抱へながら、憂鬱な暗澹とした物思ひに耽つた。己は斯うやつて、だんだん照子に蹈み躪られて行くのだ。

彼の女は蜥蜴のやうに細長い、しなしなした體で、鈴木と一緒に己の運命の上へ暴雲の如く蔽さつて來るのだ。……

翌朝佐伯は床を離れると、早速手巾を洋服の內隱嚢へ入れて、こそこそと鈴木の前を逃げるやうに學校へ行つた。さうして便所の戶を堅く締めて、其の中でそつと擴げたり、池の汀の雜草の中に埋れて、野獸が人肉をしやぶるやうに、べちやべちやとやる。やがて又何とも名狀し難い、淺ましい、不快な氣分に呪はれつゝ、物凄い靑黑い顏をして、ふらりと家へ戾つて來る。其のうちに手巾は、水洟の痕も殘らず、綺麗に黄色く乾上つて、突張つてしまつた。

「もう好い加減に降參しろ。」と云はんばかりに、照子は相變らず二階へ上つて來ては、チクチクと佐伯の神經をつゝ突く。あの銀の鈴に似た眼元に、媚びるやうな、冷かすやうな微笑を泛べて、ぢりぢりと肉薄されると、佐伯は手巾の一件を見破られるかと思はれて、避けて廻りながらも、存分に翻弄され、惱まされて行く。あの柔かさうに嵩張つた、すべすべと四肢の發達した肉體の下に、魂が押し潰されて、藻搔いても、焦つても、逃げようのない重苦しさに、彼は哀れを乞ふが如き眼つきをしながら、

「照子の淫婦奴！」

と呻るやうな聲で怒號して見たくなるかと思へば

「いくら誘惑したつて、降參なんかするもんか。己には彼奴にも鈴木にも知れないやうな、秘密な樂園があるんだ。」

こんな負け惜しみを云つて、せゝら笑ふ氣持にもなつた。て、又こつそりと、照子の手巾を盜んだり、喰ひかけの菓子を拾つて來たり、しまひには足袋の裏や下駄の臺をぴちや〳〵と甜めたりした。

考へて見れば、彼の所謂「樂園」はなか〳〵豐富だ。足袋でも、下駄でも、手袋でも、まだ其の他に、鼻紙や、洗濯物や、蜜柑の皮の吐き出したのや、苟くも照子の體に觸れた物は、悉く之を樂園に移し植ゑて、舌の爛れる限り、唇の腐るかぎり、其の香氣を貪ることが出來る。だんだん彼は壺中の天地を開拓して、芳烈な甘味をすゝり始め、肝心の照子に對しては、一向直接の壓迫を感じたり、誘惑に襲はれたりしなくなつた。

「鈴木の馬鹿奴、いまだに何も氣が付かないらしい。とうたう己に胡麻化されてしまやがつた。」

かう云ふ安心が出來た時分には、彼はもう完全に、奇妙なる樂園の主人公となつて了つた。一つ近いうちに照子の樣子を伺つて、雪隱へもぐり込んでやらうか、などゝ企んで、大分其れを樂しみにして居る。………

（完）

○改正定價　金貳拾五錢外に郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但清國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但　新年號春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は**本鄉西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京市東片町局**と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず**一割增**の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委托料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十五年一月廿五日印刷納本
明治四十五年二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



時計及附屬品、ダイヤモンド其他寶石
各種貴金屬製美術工藝品和洋服裝飾品
眼鏡類、製作及販賣

東京市京橋區八官町

小林時計店

電話新橋一〇〇三
一一〇四
振替口座七八〇七

宮内省御用

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.